

---

# 時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

琅來

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時と宇宙そらを超えて～分割版～

### 【NZコード】

N7986X

### 【作者名】

琅來

### 【あらすじ】

「あらすじは分割版となります。

長編版 <http://ncode.syosetu.com/n0697p/>

身分が物を言う世界 そこは、今から千年後の、宇宙進出をも果たした、遠い遠い未来だった。そこには、二人の少女がいた。彼女達は身分が違うながらも、仲のよい親友だった。けれど、中学一年生の夏休みから、二人は運命の渦に翻弄されることになる。そうし

て知った、衝撃の事実とは

。

## **序章「総ての始まり」（前書き）**

この話は基本的に友情物ですが、話の都合上恋愛も入ってきます。また、途中で近親相姦も入ってるので、苦手な方はご注意下さい。

## 序章「総ての始まり」

「嗚呼。ここの子は……ここの子はあの時に、産まれて来てしまったのですわね。せめて……せめて、もう少し遅ければ……」

「そのことは、言つた。今は、産まれたてのこの子供に、名を付けなければな」

「それは、考えがあります」

「どのような名だ?」

「はい。それは、今この国にはない、富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによつて心を富ませること、樹木を観てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実つた果実を、単なる食糧として感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育つてきたその生命力と大地の恵みに感謝する心を願つて、と名付けましょう。この子が になつた時の繁栄を願い」

「ああ。それはいい。美しい名だ」

「ところで……」

そう言つと、美しいその女性は、一息置いてから、隣の男性に話しかけた。

「ここの子は、やはり、あちらへ……?」

「その時は、お前の名をつけよう……きつと」

「あの……ここの子に、弟か妹が産まれたら……そして、信頼でき、決して裏切らないような子供がいた時は、その時にはこの子がと言つて、いいですわよね? いくらあんな人でも、まだそのような酷いことをやるとは思わないでしようから」

「ああ。我らはいつまでもいられるとは、限らんのだからな……」  
この一人の間に、なんとも淋しそうな空気が流れた……。

「まあ、なんて可愛い子なんでしょう。ぴったりの名前は何かしら？」

「そうだな。そうだ。古い言葉で、『鶴は千年 龜は万年』と言  
うではないか。だから、鶴はどうだ？」

「そんな名前は嫌よ。なんて言つたつて、この□に相応しい名で  
ないと、絶対にからかわれるはずだわ。それに、古風すぎるわよ。  
絶対に、断固として拒否します」

「しかし、縁起がいいと言つと……」

「じゃあ、この□を取つて、私が好きな音で書きのいい、『□』  
といふ音をつけましょ。そして、この『□』の漢字は、このよ  
う」「△△

女性はそう言つと、手元にあったパネルに一つの漢字を書いた。

「そう、そしてこの一つをくつ付けて、□にしましょうー。貴方。

反対、しないでしようね？」

「も、勿論だ！ 反対する訳がない！ ……それに、書きのいい名  
だしな」

「ええ。本当に……本当に、可愛い子。大きくなつた時、どんな子  
でもいいわ。この子に会つ友達が、沢山できるといいわね……」

「ああ……そうだな……」

先程の一人とは実に対称的に、何とも暖かく、優しい想いが満ち  
溢れた……。

ここは、今からおよそ千と数百年後の、西暦二二四八年、全宇宙共通暦一二一一年の世界。

西暦一七〇〇年頃、地球は他の遠く離れた星から発見されたことを告げられ、しかも文明がこちらの方が大分遅れていることに気付かされ、大混乱に陥った。

だが、ここではもうそんなことは遠く昔の過去の出来事となり、地球は地球連邦となり、日本国はただの日本州となつて、みんなが全宇宙共通語を話す時代となつた。

ここはそんな日本州の、とある街にある公園だ。

季節は夏真っ盛りで、夏休みである。

「由梨亞～！ お待たせつ！」

「あら、遅かつたじゃないの、千紗。呼び出したのはそつちのくせに」

声を掛けられた少女　由梨亞は、背中の中程まで届く、柔らかく波打つ茶色の髪を一つにまとめている、縁がかった黒の瞳の美少女で、声を掛けた少女　千紗は、肩甲骨辺りまでの、長くもなく短くもない長さで、墨を流したかのような、柔らかく光る真つ直ぐな黒髪を一つにまとめ、瞳の色は髪よりは茶色い色をしている。

それだけならいいのだが、今の地球連邦の常識で考えると、この光景は可笑しく見える。

何故なら、由梨亞はいかにもお嬢様に見えるのに対し、千紗は普通の少女なのだ。

もしもここに常識のある、普通の人人がいたら、首を捻つたはずである。

何故ならこの地球連邦は身分社会で、大きな会社を経営し、しかも慈善団体などに寄付するお金を惜しまない、何十代も続く家を貴族と呼び、いくら稼いでも、寄付するお金を惜しむ家や、まだ成つ

て間もない成り上りは富豪と呼ばれ、それ以外の人は庶民と呼ばれる。

また、商売をしていても、老舗と呼ばれるような昔から経営しているお店でも、支店がなかつたり、少なかつたり、手を付けている仕事の幅が狭かつたりすると、いくらお金を稼いでも、寄付しても、ぎりぎり富豪には認められるかもしれないが、貴族として認められない。

そして、この由梨亞は正真正銘大貴族のお嬢様で、千紗は正真正銘の、親戚のどこを捜しても富豪や貴族がいない、立派と言つてもいいほど立派な庶民なのだ。

しかし、この二人は敬語を使わず、しかも相手の名前すら呼び捨てで普通に通している。

なので、珍しくはあるが、二人は身分を越えて友達になつたと考えるのが妥当である。

「あのね、由梨亞。さつき先輩から連絡あつて、あたし達も百不思議に挑戦しろって！」

そう……七不思議ではない。

この一人の通つている学校はかなりの日く付きで、そう言つた怪談物が数限りなくあるのだった。

「本当！ 千紗？」

「勿論！ それで内容は、夕方頃に学校の使われてない備品室に行くことだつて。それで、怪談によれば、そこには、昔自殺した女の子が遺書について遺したノートが、逢魔ヶ時になると現れるんだつて。それを見つけるつていうのが、あたし達が挑戦することだつてさ」

この一人の会話で大体分かつたかも知れないが、一人の所属している部活は、『心霊研究部』という部活である。

だが、その名前の響きとは違い、普段のこの部活は、科学的な根拠を元に心霊現象を解明していくといふ、至つて科学的な部活である。

この一人は、その部活の一年生だ。

だが、年に一度 三年生が引退してしばらく経った夏休みに、何故か一年生が、この学校の百不思議の中から一つを挑戦するという慣習がある。

そしてこの一人も、その順番が回ってきたところだ。

「それで、時間は？」

「今週の水曜日、夜の六時だつて。先生もいいて言つてたよ」

「つてことは、先生からも許可を得ているんだ」

「当たり前でしょ？ あたしはともかく、先輩がそんな手抜かりするはずないよ」

……自分で分かつて言つている所が、特に問題な発言であった。

「まあ、そりやそうよね……それで、場所は？」

「旧校舎三階の北端の、さつきも言つたと思うけど、備品室。だけど、今は使われないから、埃に気を付けないとね」

「ええ。ねえ千紗、今日暇？ 時間あるのなら、うすりで遊ばない？」

「うん、いいよ！」

この一人の名前は、本条由梨亜と彩音千紗。

二人は、とても仲の良い親友だ。

しかし、二人はこの後に起ることを知らなかつた。

知つていれば、断るに違ひなかつた、恐ろしいことを。

丁度、明日初めての任務に挑戦するといつ、火曜日のことだつた。

「千紗」

「何？ 由梨亜？ 明日の確認？」

「違うの。あのね、千紗。明日……行かない方がいいよ」

「どうしてっ！」

「千紗、煩い。ちょっと黙つて」

由梨亜は大声を出した千紗に注意をしてから言つた。

「あのね、私の曾お祖母様は、この学校に通つていらしたらしいの。曾お祖母様は、本家から外れてたから。それで、私が明日、これに挑戦するつていうことを聞いて、注意して下さったの。曾お祖母様はこの、私達が試そうとしているこの怪談で、危険な目に会つたんだって。だから、この怪談は、飛ばされたんだって」

「何それ。由梨亜。それ、ほんとに信じてんの？」

「えっ？」

由梨亜は、きょとんとした表情で言つた。

「あのせ、それって、どの曾お祖母さん？」

「……え～っと、お母様の、お母様の、お母様に当たる曾お祖母様よ

由梨亜は、指を折つて数えた。

「……その人つてさ、前、あたしが由梨亜の家に遊びに行つた時に、私立の超頭がいいので有名な幼稚園から大学までの一貫校出身で、その中でも常にトップクラスだったって、あたしにすつごく自慢してた人だよね？」

「……」

由梨亜は、言葉が出なかつた。

「これはあたしの想像だけどさ……多分、由梨亜の曾お祖母さん、由梨亜を心配して言つただけで、何にも根拠はないと思うよ……？」

千紗が恐る恐る言つた言葉に、由梨亜は頭を抱えてしまった。全く否定できないだけに、とても痛い。

「うん……多分、そうかも……」

「じゃ、明日、予定通りにね？」

「……うん。ごめん……千紗」

「いじつて。ほら、行こ？」

「うん……」

由梨亜は半ば脱力したまま、千紗と共に歩いて行つた。

そして、その夜が来た。

「千紗～！」

「遅い！ 今まで何やつてたの！？」

「えつ……。だつて千紗。今、五時四十分だよ？ 五時五十分集合  
つて言つてなかつたつけ？」

「え……アハツ」

「もう。ボケないでよ」

由梨亜が頬を膨らませて言つた言葉に、千紗は笑いながら答えた。  
「じゃあ行こつか」

「うん！」

「うつわ～！ こんなに薄暗くつて人気もない学校つて怖いね～由  
梨亜。何だか氣味悪いし……。ねつ、由梨亜。あたしはこんなこと  
するの初めてだけど。由梨亜はある？ あつ、そうだ、そういうえば、  
この中にあるノートつて……」

「千紗！」

「はい！」

千紗は、思わず背筋を伸ばして答えてしまった。

ちなみにその叱責は、正直言つて今まで聞いたどの先生や親  
からの叱責よりも迫力があり、逆らいがたい物であった。

「煩い！ ちよつとは静かにしたらつ？ ほんと言つと、私、怖い  
んだから……ちよつとだけだけだけどね」

「ふうん……ちよつと、意外かも……」

「いいから、さつあと行くわよ！」

「は～い……」

二人は、薄暗い廊下を歩いて行つた……。

「由梨亜、着いたよ」

「ええ」

「それじゃあ、行くよ！」

ガラツ、という音を立てて千紗と由梨亜が戸を開けると、使われていない机の上に、何かが一瞬ピカツと光った。

光は一瞬にして消えたが、千紗は構わずにその机へと歩き出した。「ちょ……待つてよ！ 千紗！」

呆気に取られていた由梨亜が、我に返つて千紗を追いかけた。千紗は追つて来た由梨亜を従え、その光つた場所へ行つたが、光つた机の上に置いてあつた物を見るなり、息を呑んだ。

「…………ほんとに、ノートがあつた……」

「千紗……でも……でも、わ。これ……もしかしたら、先輩の悪戯かもよ……？」

「うん……でも、悪戯にしてはちょっと悪質じゃない？」

「うん……まあ、悪質って言えば、悪質だらうけど……ちょっとした、ドッキリかもね」

既に、二人の中では『先輩の悪戯』と確定されてしまつている。

「うん……じゃあさ、これ、先輩に報告した方がいいよね？」

千紗は携帯端末という、地球連邦内ならどこでも繋がり、希望すれば立体映像にできる優れ物であり、大抵はみんな持つていてる物を取り出して言つた。

「じゃ、あたしが柑奈<sup>かんな</sup>先輩に電話掛けるね？」

「ええ。私つて、こいつの持つてないもんねえ……」

由梨亜の溜息じみた言葉に、千紗はにやつと笑つた。

「こいつの時、お嬢様つて不便だねえ」

「もつつー。いいから、わざと先輩に連絡取つたら？」

「はいはー」

千紗は、すぐに柑奈に電話を掛けた。

その時、柑奈は苛々と携帯端末を手に取つたり置いたりと繰り返していた。

と、その時、いきなりコール音が鳴り、ぱっと携帯端末を手に取つた。

「もしもし?」

『もしもし、柑奈先輩ですか？ あたしです。千紗です』

柑奈は、それまでの苛々とした様子を消し、手をぼんと打つた。  
『千紗？ ……ああ、そういえば今日だったね。……それで、どう  
だつた？ 何か、見付かった？』

柑奈の悪戯っぽい言葉にて、千紗が映像に映るよつて、一冊のノー  
トを掲げた。

『はい。こんなノートが置いてありました』

「へえ。こんなのがねえ。中身、見てみた？」

『あ、いえ……まだです』

「じゃあ、見てみなさいよ」

『はい……』

柑奈は、しきりと千紗を急かした。

そのノートをパラパラと捲つていた千紗は、少し怪訝そつな顔になつた。

「ん？ どうした？ 千紗

『あの……これ、普通のノートじゃないんですけど……』

「どんななの？」

『えへっと、何て言つたか……』

『日記帳に見えますね……』

横から、由梨亞が顔を出して言つた。

「ふうん……じゃ、しばらく一人でそれやつとして

『はつ？』

『はいつ？』

一人は、揃つて驚いたような顔になつた。

『え～と……これを、ですか？』

「うん。そう。二人で交互にやつといて？ 一人だつたらずつと一人でやればいいだらうけど、一人だからね。だつたら、二人で交互にやつたらいいんじゃないの？ あ、でも、後で見せて貰うことになるかも知れないから、見せられない内容は書かないこと。いい？」

『はい、先輩』

「それじゃあ、明日ね」

『はい。さよなら、先輩』

千紗と由梨亜はそう返事をすると、端末を切つた。

柑奈はしばらく端末を手に考え込んでいたが、一つの番号を押した。

短いコール音の後に、柑奈と歳の変わらない少女が出る。

『もしもし……柑奈？ もしかして、千紗と由梨亜から連絡來たの？』

『うん。見事に引っ掛かつてくれたわよお～』

柑奈は、にっこりと微笑んで言つた。

そう、これは毎年恒例の肝試し といふか、悪戯なのである。

『じゃあ、どうする？ 千紗と由梨亜で一年は全員終わつたけど……

・ネタばらし、こつやる？』

「うーん……じゃあ、九月入つてからにしょ～ あんま早過ぎても、興醒めでしょ」

『じゃあ、また明日ね、部長さん』

『はいはい、明日絶対遅れないでよ？ 副部長さん』

一人はそう[冗談のような口調で]言つと、それぞれ端末を切つた。

「じゃあ、先輩はああ言つてたけど、順番びつする?」

二人は学校から帰りながら、会話を交わしていた。

「ん~、じゃ、由梨亞からでいいよ」

「ええ。分かつたわ。じゃあ鈴南が早く帰つてって言つてたから、

急ぐわね」

鈴南とは、由梨亞付きの召し使いである。

けれど、その鈴南にしても、実は貴族階級のお嬢様であり、千紗よりも身分が高い。

そんな人間を複数人使用人として抱えている由梨亞は、それこそ正真正銘のお嬢様なのであった。

「うん。じゃ~ね」

「じゃ~ね~!」

「あの由梨亞は、どんなことを書くのかなあ……」

由梨亞が去つていくと千紗は独り言を漏らし、そして角を曲がり、自宅へと帰つて行つた。

由梨亞は、屋敷の扉を潜ると、声を掛けた。

「ただ今戻りました」

すると、すぐに鈴南が出て来る。

どうやら、由梨亞が帰るだらう時間を待つていたようだ。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

由梨亞が頭を下げるとき、その後ろから、由梨亞の母が顔を覗かせた。

「あら、お帰りなさい。由梨亞」

「ただいま。お母様、鈴南」

「それでは奥方様、お嬢様。こちらへ。夕ご飯のお支度が整つております」

「ええ、鈴南」

「お帰りなさい！ お父様！」

その日の翌日、本条家の広い屋敷に、由梨亞の元気な声が響いた。  
「ただいま、由梨亞。お前の誕生日の前までに、シャリート国から  
帰れて良かったよ」

由梨亞の誕生日は、八月十六日。

そして、何の偶然か、千紗も同じ誕生日だった。

今は、八月十四日だ。

「ところで由梨亞、明日は部活あるかい？」

「いいえ。夏休みは木曜の午前中だけなの。明日は金曜だから空いてるわ」

「それでは明日、十八日にするお前の初めてのパーティーの為に、  
ドレスを買って来ようか？」

「ええ。それでは私、着替えて来ます」

由梨亞は部活から帰つて間もなく父親 本条耀（よしひ）太を迎

えたので、制服のままだった。

由梨亞は階段を駆け上がって部屋に駆け込むと、溜息を一つつい  
た。

「ふう～」

（良かつたあ。怪しまれなかつた。お父様もお母様も鈴南も頭固い  
から、もしも見られたら大変なことになつちやうわ。早速書こうつー…）

由梨亞はしばらく日記に何かを書いていたが、五分後、書き終えたのかその手を止めた。

「できた～！」

（これ、明日……は無理だから、明後日渡そう！ あっそだ！  
千紗に、その時一緒に招待状渡そう！ 私のパーティーに。ついで  
に、部活の人全員に、都合がつくなら招待状送ろうかな。ああ、楽  
しみっ！）

由梨亜が楽しげに心を弾ませてごむと、「ハハ」、とこつ音がして、外から鈴南の声がした。

「お嬢様、お食事の時間にいじやります」

「ええ。今行くわ」

その翌日、由梨亜は耀太や母親の本条瑠璃<sup>るり</sup>、他に荷物を運ぶ為と、運転の為と、車の盗難防止の為に車に残つてもらう為に連れてきた召し使い達と共に、本条紳士淑女高級店といつ、本条家が開いている店の本店に、わざわざ四十分も掛けて行つた。

交通網が発達している今、四十分も掛けた移動といつのは大事である。

本来なら屋敷に運び込んでもいいのだが、あまりにも品揃えが豊富だつた為、それもできず、またいい物が揃つているのはやはり本店なので、時間を掛けることにしたのだった。

店に入ると、由梨亜は少し甘えるようにして言つた。

会えない時は、一ヶ月以上も会えない相手でもあるので、自然とそうなつてくるのだ。

「お父様。私、ドレスとか靴とか、青や白で統一したいわ

「ああ。いいとも」

「あつ、このドレス可愛い！ 綺麗な色～。この色も綺麗ね～。ああ、迷つてしまつわ」

「由梨亜。どんなに迷つてもいいから、お前の気に入る物を買ひなさい」

「はい、お父様」

結局由梨亜が買ったのは、裾が南国の海の海底が一段と深くなつ

た所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーションの長袖で膝下丈の、今時珍しいつまり、かなり高価な 本物の絹でできたドレス、少しだけ灰色がかかった白いエナメルの靴、群青色の毛糸のポンポンのような物を真っ白なレースでくるんだ髪留めだった。

「由梨亜。これでいいのか？ 他に買わなくて」

「ええ。だって、これと言えるアクセサリーが見つからなかつたんですもの」

由梨亜は少し唇を尖らせると、すぐに笑顔になり、言つた。

「でも、ドレスとか靴とか、気に入つた物があつて良かつたわ」

「そうだな」

その時、由梨亜は確かに何かの視線を感じたが、振り返ると、何もなかつた。

（まだだわ。また、何もない……この前も、その前も、そして今も、確かに誰かからの視線を感じたのに……）

「どうした？」由梨亜

「いいえ。何でもないわ」

「さあ、お乗り下さいませ。旦那様、奥様、お嬢様」

チャイムが鳴り、千紗がドアを開けると、そこには珍しいことに

由梨亜の姿があった。

「由梨亜！ 来てくれたんだあー。上がつて」

「お邪魔します」

「一々言わなくても別にいって！ ほらほら」

由梨亜は千紗に急き立てられ、玄関を上がつた。

「はい」

コトン、と千紗は、二人の前にお菓子の入った器とジュースを置いて、話しかけた。

「それで、どうしたの？ 由梨亜がうちに来るのって、珍しいよね？ つて言うか、一年振りぐらいじゃない」

千紗は由梨亜に、单刀直入に訊いた。

「あ、うん。そうだね。はい、日記帳。うちだと、鈴南達の目が厳しくて渡せないの」

由梨亜はそう肩を竦めて言いつと、千紗に手渡した。

「ありがと、由梨亜。じゃ、あたしが書き終わつた後も、由梨亜に来て貰うか部活の時の方がいいね」

「ええ、そうね。あと、私の初めてやる誕生日パーティーの招待状。他にも、都合つく部員の人も招待するつもりよ」

「へえ～。あつそつだ！ 由梨亜、あたし、由梨亜に今プレゼントを作つている途中なんだ。楽しみに待つてよね？」

「へ～。何作つてるの？」

「ブレスレットと、あとネックレス！」

「ふ～ん。何色？」

「白とか、水色とか、青とかを組み合わせているの」

「そつなんだ。偶然だね。私も、千紗に薄いピンクや赤紫とかの、ブレスレットとネックレスを作つている最中なの。ちよつとびつくりだわ」

「じゃあ、交換するみたいだね！」

「そつだねえ～」

由梨亜は、日記帳の存在を知られずに千紗に渡せたことをとても喜んでいた。

そして、次に回つて来た時も、上手く出し抜けられるようにと祈つた。

「それは……それは、どうこうことだ。由梨亜！」

耀太の、怒りが燃え上がり、もう手が付けられない状況に陥つた

罵声が、屋敷を揺るがすが如く響いた。

だが、由梨亜はそれに全く動じず、困惑したかのよう、「たつた今言つたばかりのことを言つた。

「何つて……ただ、友達や先輩方を、私の誕生日パーティーに誘いたいって、言つただけじゃないの。これの、どこがいけないの？」

由梨亜が至つて不思議そうに言つた為、耀太も怒りを少し抑え、こう言つた。

「いけないも何も、大量の庶民を屋敷に招待するなぞ、前代未聞の珍事だぞ。過去には庶民の友人を招いたこと也有つたから、千紗はいい。しかし、その他の者を招いたことなど前例がない。いくら年上とはいえ、身分を考えればお前の方が上なんだぞ。本来ならば貴族であるお前が敬語を使われる立場であり、庶民に敬語を遣うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけ」

「……はい」

「分かつたのならばよい。しかし、部活部活と浮かれて勉強をサボるような真似はならぬ。鈴南、由梨亜に家庭教師が来る時間だ。先生をお迎えしろ」「生をお迎えしろ」

「はい。畏りました。お嬢様、お勉強のご用意を」

「分かつていいわよ。鈴南」

「それでは由梨亜、先に行け。私は鈴南に話があるからな」「はい、分かりました。それでは失礼します。お父様」

由梨亜が出て行くと、耀太は声を潜めて言つた。

「鈴南」

「何でしちゃうか」

「由梨亜は、何故あのようになつてしまつたのだろう」

鈴南は額に皺を寄せ、難しい顔で黙つたかと思うと、小さな声で慎重に言つた。

「お部屋にいる時や学校にいる時は、人権侵害に触れる為、監視は不可能です。ですが、その他の時……本条家の者が付き添わずに外出する時は、身の危険を回避する為といつ名目を持って、なるべく

田を離さぬよう』、召し使い達に手を回しておきます

「さすが鈴南。そういう所もしつかりしている」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。それでは、先生を迎えてきます」

鈴南が出て行くと、耀太は半眼を伏せた。

(鈴南に任せたから、大丈夫だと思うがな……)

「こちらも、手を回しておくか。用心はいくつ重ねても足りる物でもないし。私の可愛い由梨亞の為なら、害になる物全てを取り除いておかねば……」

由梨亞は耀太の言葉を扉の陰で聞いていたが、それを聞き遂げる

と足音もなく立ち去った。

千紗は、由梨亞が帰った後、すぐに日記帳の中身を見た。

「へえ～。由梨亞のお父さん、シャリート国から帰ってきたんだ～。そういえば、なんか嬉しそうだったよなあ、あの日。えつ……ゅ、

由梨亞……」

千紗は、思わずその文字を絶句して読み返した。

そこには、

『この日記帳をしてから、出掛けた時に視線を感じるようになつたの。不思議よね。しかも、大勢の人がいても、沢山の車が走つても、そこだけが見えないかのように、存在しないように、人が余裕を持つて立てるくらいの幅の空間が空いているの。その一瞬後には人や車が通つてその空間は埋まるんだけど……ま、気にしそ過ぎなのかもね。やっぱりこれ、どうしても先輩の悪戯としか思えないんだもの』

と書いてあつた。

それに、千紗は思わず吹き出していた。

「全く、由梨亞つたら……ま、ほんとに先輩が監視してたら怖いけ

ゞ。でも……そんなのあり得ないし。やっぱ、気にし過ぎなんだよ、

由梨亜」

そう咳きながらも、親友である由梨亜を心配しているのだろうか、千紗の顔にはあまり笑顔がなかった。

翌日、由梨亜は千紗の家に、勉強道具を抱えて行つた。

一緒に宿題を片付ける為だ。

その途中、昨日のこと思い出した由梨亜は、申し訳なさそうに言つた。

「千紗、ごめんなさい。お父様から、千紗以外は駄目って……」

「何で！ あたしがいいなら、他の人もいいはずじゃあ……」

「それが、大勢の庶民を屋敷に招待するのは、前代未聞の珍事。過去には、庶民の友人を招いたこともあつたから千紗はいいけど、他の人を招いたなんてことはない。いくら年上とはいえ、身分を考えれば、私の方が上。本来ならば、貴族である私が敬語を使われる立場であつて、庶民に敬語を使うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけって……お父様が」

「そつか。じゃあ、しょうがないよね……。でもさあ、由梨亜。何でこうなのかなあ。今のこの世の中、身分制度でガチガチに凝り固められて、階級重視じやん。何も由梨亜を批判するわけでもないけどさ、お嬢様は幼稚園からずっと、あたし達庶民が通えないようなお嬢様学校に通つてるでしょ？ ホテルも、あたし達は一流な物なんていいくらお金を出しても泊まれないし、一流の物はお金持ちの倍取られるし。貴族の人に遠慮して、庶民を近くに寄せないようにしているのかも知れないけど……でも、ここまで差が激しいと嫌になるよ」

「でも、昔から……そう、約四千年近く前の昔から、この制度は続いているのよ。その頃はもっと格差は大きかったけれど、今とはあ

んまり変わらないわね」

由梨亜はそう、溜息をつきながら言ったが、千紗の可笑しな様子に、首を傾げた。

「…………

「千紗？」

「…………

「ちょっと、聞いてるの？ 千紗」

「…………

「ねえ、千紗。千紗つてばー！」

「あのれあ。由梨亜」

由梨亜が煩かったのか、それとも珍しく考え込んでいたのか、千紗はようやく口を開いた。

「あたし達って、今日、十三歳の誕生日だよね？」

「あつ……」

ようやくその事実に気が付いた由梨亜は、今までしていた会話があまりにも誕生日にそぐわないことだとこりこり、やっと気が付いた。

そして千紗は、さつきあんなに長々と現代の格差について熱く語っていたのに気付いて、黙り込んでしまったのだった。

その帰り、千紗は由梨亜に、由梨亜は千紗に、それぞれ青系、赤系で作ったビーズのネックレス、ブレスレットを渡した。

どちらも素晴らしい出来で、手作りの汚さもなく、手作りの良さのみがあった。

そして思わず由梨亜は、

「うわあ。千紗、ありがとうー。丁度着るドレスが青いんだよね」と言って感激したのだった。

「何言ってんのー。お礼を言うのはあたしの方だよー。赤はあたし

の色つて言われるし……本当にありがとうー。」

お互に感激しながらも、別れ道に来てしまった。

「それじゃあ、明後日の私の誕生日パーティーで！」

「うん！ また明後日ー。」

「はい、どうだ。うつむかと食べちゃになさー」

「こつただつきまーす！ うわー やっぱりお母さんのご飯美味しいー！」

「全くもう。千紗つてばお世辞が上手！ …… そういえば、今はもう天国にいるお父さんも、私が作った料理をいつも美味しいって食べててくれたのよね……」

千紗の父は、千紗が五年生の時……つまり、一年前に交通事故で逝つてしまつたのだった。

しんみりしてしまつた空氣を払つように、千紗はことせり明るい声で、母親に話しかけた。

「お母さん、よく覚えてるよね。あたしだつたら、そんな細かいことをまで覚えてらんないよ。…… そう言えれば、明後日に由梨亞の誕生日パーティーがあるのね。それで呼ばれているんだけど、何着ればいいかな？ あたし、そんな余所行きの物、大して持つてないんだけど……」

「うーん…… そうねえ、私が前着ていた、薄い赤紫色のドレスは？ それに千紗。『そんな細かいこと』とは聞き捨てならないわ。貴女、初恋もまだなんだからそんなこと言えるのよ。」

目を不気味にキラッと光らせながら言つ母親に、千紗は苦笑しながら言つた。

「こつちこそ、『初恋もまだ』とは聞き捨てならないよ。初恋ぐらい経験済み！ そんで、ドレスつて、あのドレスのこと？ 濃い目の赤紫色で蔓草模様が刺繡されてるの。あれちょっと大人びてるよ

ねえ～」

「それはそうと、そう言えば千紗、夏休みの宿題は？」  
いきなりの母親の話題転換に、千紗は反応が遅れてしまった。

「…………え、えっとお～。それはあ……そのお……」「つて、いうことは、まだ、全然手を付けてないわね？」

「ぜ、全然じゃあないんだけどお……さつきも由梨亞といょひつよりやつたらしい……」

「千紗！ 下らないこと喋つてないで早く片付けなさい！ そもそもな  
いと……」「…………」

「…………そもそもないと？」

千紗は上目遣いに、そつと母の様子を窺つた。

「宿題持つて学校に行かせるわよ！ 丁度先生がいて、片付けるの  
がさぞ楽でしょうねえ？」

その、あまりにも恐ろしい言葉とこり笑つた笑顔……。  
思わず千紗は身震いしてしまった。

「はい、はい！ すぐ片付けます！」

そう言つと、千紗は急いでご飯を搔つ込み、部屋へと走つていっ  
た。

それを聞いていた母は、思わずクスッと笑つてしまつた。

「あの子は私に遺された、たつた一人の娘……。大事に育てなくつ  
ちゃね……」

つい、そんなことを呟いていた母は、部屋から聞こえる声に、思  
わず破顔してした。

「あつれ～。夏休みの宿題どこ置いたっけ～？ エーつ。ない～！」  
その声が聞こえてくると、千紗の母親は、リビングのテーブルの  
片隅にその宿題があるのを発見し、ふつと吹き出して言つた。

「千紗～！ 宿題ここにあるわよ～！」

「えーーつ！ うつそ～！」

ドタバタと、凄い勢いで部屋から出て来た千紗に、母は思わず笑  
つてしまつた。

「全くもう、千紗つたら  
母親はくすくすと笑うと、千紗に宿題を手渡した。

## 第二章「誕生日パーティー」 1（前書き）

今回、途中でかなり差別的な発言や、敬意が全くないような発言が出て来ます。そういう物が苦手な方は、ご注意下さい。

八月十八日月曜日の午後三時、由梨亜の誕生日パーティーが、本じょう条家本宅にて行われた。

だが、由梨亜はまだ子供なので午後三時から午後八時までの五時間だけだった。

由梨亜の家の門の前に行くと、本条家に仕えている、黒い、揃いのスーツを着た男性達と、薄手の白の長袖、踝丈の清楚な感じのするドレスを着て、髪をこれまた白いレースのリボンで高めの位置に一つ結びに結んだ女性達が、それぞれの招待状を一枚一枚確認していた。

千紗は、緊張しながら、招待状を渡した。

それは、千紗が今まで見たことがない立派な模様と本条家の印章が綺麗に印刷してあり、門にいた召し使い達は、実に丁寧な態度で、招待状と、目の前に置いてある端末機で招待状を出した人の名前が載っているリストを確認し（これは偽の招待状を使って潜り込まれないようにする為と、誰が来てくれたのかを確認する為である）、中の大広間まで案内してくれた。

千紗は、由梨亜の家には何度も行つたことはあったが、そのほとんどが由梨亜の部屋がある棟にしか入ったことがなく、おまけにこの大広間がある棟は由梨亜の部屋があるのとは別の離れている棟にあつたのでこの大広間に入つたのは初めてだった。

そして、この大広間はとても広く、千紗の家が二つ入つてもまだまだ余裕がありそうだ。

天井はとても高く、三階までの吹き抜けになつており、大きな、本物のシャンデリアがいくつも輝いている。

庭から見て一階部分の左半分はダンスフロアに、右半分は立食ができるたり座つて食べたりできるようになつていて。そして一階から三階に掛けて、吹き抜けになつていて。

庭と二階、三階はテーブルやベンチがあり、食べたり話したりができるようになつていた。

千紗は感嘆すると同時に、周りの様子を観察した。

やはり、千紗の年頃と同じような子供はいるが、少女達は千紗の何倍も立派で真新しいドレスを着て、しかも全員一箇所に集まり、談笑をしながら千紗や少年達を……特に、自分達よりもみすぼらしい格好をした千紗の方を、無遠慮にジロジロと眺めていた。

少年達は何人かずつ固まり、談笑しながら少女達の集団をチラチラ見えていて、千紗のことは虫けらほどにも気を留めていなかつた。

まあ、その反応は、千紗にとっては気楽なことだつたが。

大人達は男同士、女同士で固まり、談笑していたり、その固まりから抜け、ダンスの申し込みをしていたりしていた。

しかし、千紗がいくら見渡しても、人混みの中に目を凝らしても、由梨亜の姿はない。

時間は、もう三時三十分になろうとしている。

(こいつ風に時間が過ぎてから主役登場なのが、上流階級風のかな……)

と、千紗は思いながら、到つて大人しく、静かに待つっていた。

「由梨亜お嬢様、準備はお済みですか？」

鈴南の声が、由梨亜の部屋の前で聞こえる。

由梨亜は、ドレスの着付けを

「たまにはいいじゃないのよ。ほつといて。それに、こういうことも今のうちに経験しておいた方が将来困らないと思うし。だから、ねつ、自分でやるから」「

と、理屈になつてゐるのかなつていかないのかよく分からぬ理屈（我儘とも言ひう）をこね、言い張り、その勢いに反論できずに固まつてしまつた召し使い達を尻目に、部屋にドレスと靴を持ち込んでしまつた挙句、内側から施錠してしまつたのだった。

「由梨亜様、髪を結わなくてはなりませんから、お早く……」

「つるさいわねえ、鈴南。まだ三時じゃないの。終わつたから、扉の前を退いて頂戴」

「はい」

鈴南はそう言つて下がり、それを部屋の中から確認した由梨亜は、扉を開け放した。

そこには、この前本条紳士淑女高級店で買った、裾が南国の海の海底が一段と深くなつた所のよつた深い藍色で、上に向かつて少しずつ淡くなつているグラデーションの長袖・膝下丈の絹地のドレス、少しだけ灰色がかつた白いエナメルの靴を身にまとい、そこに千紗のプレゼントした青系のビーズで作つたネックレス・ブレスレットを付けた由梨亜の姿があつた。

ネックレス・ブレスレットは、グラデーションだけの無地のドレスを邪魔せず、すつきりと収まつて、由梨亜の若さ、まだ幼いからの独特的の美しさ、大人びた気品を矛盾せず、それどころか強調して放つていた。

鈴南は、その勢いに呑まれたかのように見えたが、由梨亜のつけているネックレス、ブレスレットに目を留めると

「それは……？」

と、問いかけてきた。

「千紗がプレゼントしてくれたの」

と、由梨亜は茶目つ氣たつぶりに、悪戯っぽく答え、その答えに思わず絶句し、彫像のように固まつてしまつた鈴南を、その場に置いて立ち去り、本来ならそこで着付けをするはずの部屋へと向かつた。

そして、魂がどこかに飛んでいったような鈴南は、一、二秒後慌

ててその後を追つた。

由梨亜がその部屋へ着いたのが三時五分だったが、髪をセットし、メイクを終えたのが三時四十五分だった。

鏡に映つた由梨亜は、普段は少しフワフワと波打つていて髪を真っ直ぐにし、毛先をクルクルと巻いて、それを首の少し上辺りで留め、その先を右肩の方へ垂らしていた。

その髪留めは、この前の買い物で買つてきた物だった。

顔は、睫毛にはマスカラを塗り、唇はほんのりと紅く染まり、目の上は薄い水色で彩られ、美しい美少女に……しかも、余所行きの格好をした大金持ちの家の令嬢となっていた。

いや、普通なら、この格好が普通なのだ。

由梨亜がお嬢様離れしていく、いつも庶民のような格好をしているだけなのだから。

「さあ、お嬢様」

と、促され、由梨亜は部屋を出て耀太<sup>よつた</sup>、瑠璃<sup>るり</sup>と合流し、大広間へと向かつた。

千紗は、大広間で由梨亜がくるのを待つていた。  
そこへ、

「そこの貴女。ちょっとといいかしら?」

と、いかにも上品な声が掛かつた。

「何ですか?」

と、千紗が振り返つて言つと、そこにはさつきからをジロジロと眺めていた少女達の集団があった。

「ちょっと、伺いたいことがあります……お時間、宜しくて?」

「ええ、いいです」

「それでは、少し庭で……」

そう言つと、少女達は千紗をあまり目立たない庭の片隅へと連れ

て行つた。

そして、千紗を片隅に押しやり、少女達は腕を組んで一列の半円形になり、千紗が逃げられないように閉じ込めた。

「お前、私達のような上流階級ではないでしょう？」

と、先程大広間で千紗に声を掛けてきた、一番年上の、少女達のリーダー格だと思われる少女が、氷のように冷ややかな声で千紗に話しかけた。

その言葉には、先程のような、美しい、丁寧な響きはなく、侮蔑や軽蔑するような響きが含まれていた。

「ええ、そうよ」

千紗は多勢に無勢な状況を、聞く人に全く思わせないような言い方で、身分の高い人にとっては不遜に、そして挑発するかのように、相手の顔を、顎を上げ、胸を張つて答えた。

「あたしは、確かに貴女達に言わせればただの一般庶民、中流階級。親戚がそういうのになつたつていう人も、一人もいないわ。でも……それでも、あたしと由梨亞は親友よ。だから何だつて言うの？　何が悪いって言うの？　身分の違いが、何よ。一体何になるつて言うの？　この日本州を治めておられる天皇陛下だつて、貧しく、それ故に泥棒をしたりして、地に這いつくばり、その日を生き永らえている人だつて、みんな同じ人間よ！　同じようにお母さんのお腹で育ち、母子共に痛い思いをして産まれて來た、人の子よ！　気が合えば、友達だつて……いいえ、親友だつてなれる！　だつて、同じ人間よ。そんなの当たり前過ぎるほど当たり前なことじゃない！　だからあたしと由梨亞が親友になつて、なにが悪いと言うのよ！　悪いと思うなら、その理由をあたしが納得するまで述べなさいつ！」

千紗は色々と溜まつていたので、つい途中から声を荒げてしまつた。

だから、すさまじい気迫で少女達に啖呵を切つた千紗は、その気迫に少女達が飲まれたことを感じ、形成が逆転したことを確信した。

しかし、それは早計に過ぎなかつたようだ。

先程の少女達のリーダー格と思われる少女が自分を取り戻して、睨みつけながら言い返してきたのだから。

「んまあ、なんて汚らわしいことを！ あんな野獸以下の下等生物と神にも等しい天皇陛下を同列に並べるだなんて！ 天皇陛下とそのご家族ご一族は神よ。神の子よ！ そして降嫁なされた天皇陛下の姫君とそのご家族、そして私達何代も続く貴族……そう、大商人や上流階級と呼ばれる一族が人間。そういう者だけが人間と呼ばれるのに値するのよ。残念ながら地球連邦の総人口の半分にも満たないのだけれどね。そしてお前達、一般庶民、中流階級と呼ばれる、この地球上に最も多くいる生き物達は半人よ。私達人間と下等生物達との中間。ありがたく思いなさいな。下等生物とも、野獸とも言われても仕方のない生き物を、『半人』と呼んであげているんだから。そして、お前がさつき言つた最下層……あの下等生物達は野獸や溝鼠、そして泥よ。生き物ですらないわ。人間がそういった『物』と親しむのは、言語道断。今からでも遅くはないわ。お前と由梨亞様を今後一切近づけやしないんだから！ さあ、地に這いつくばり額を擦りつけて、許しを、私達の慈悲を請いなさい！ そうすれば、私達は人間ですから、考えてあげなくもないわ。あら、それとも……」

…

と、その少女は含み笑いをし、軽蔑しきつた口調で言い放つた。

「『半人』ですから……言葉も通じませんの？ 私達人間の上品な言葉は。ねえ、皆さん」

少女はそう言つと上品に笑い、周りの少女達もそれに同調し千紗のこととなじりまくつた。

「ほ～らほら。早く謝らないの？」

「さあ、早く頭を下げなさい」

「いえいえ、土下座にすべきよ」

「そうそう。それでは、そのドレスを土で汚しなさい」

「そうね。それにそんな時代遅れのドレスなんて、もう既に汚れま

みれになつていますわ」

「それならば、もう少し汚れても、文句はいえませんわよねえ？」

「いいえ、それだけでは何か物足りませんわ」

「そうね。それだけでは足りませんから、額と顔を泥で汚すことにしてしましよう。ねえ、皆さん？」

「そうよ。異存はありませんよな、この『半人』つ

「いいえ、半人とは、ちょっと……いいえ、大分美化し過ぎではないかしら？」

「ええ、そうですわ。これは奴隸よ」

「それに、奴隸は人間ではないわね」

「私達に使役される為に生まれてきた『物』よ

「人権もないわ」

「口答えも許されなかつたわよね？」

「侮辱も、許されなかつたはずよ」

「直接手を触れることも許されないわ」

「私達『人間』の顔をまともに見詰めるなんて、生き恥もいい所ね」「お前の本当に従順な先祖と比べたら、その先祖が泣くわ」

「それに、天皇陛下とそのご一族のことを口にする時は、地に跪き、額を擦り付け一言『自分のような「物」が貴方様方の御名を口にすることをお許し下さいませ。どうかご慈悲を』と言わなければいけないのでは？」

「ああ、それと最上級の敬語を使わなければならなかつたのではな  
いかしら」「よ

「それどころか、奴隸なんかは、滅多に声を出してはいけないはず  
しているわ」

「それなら、直ぐ様この奴隸を躊躇なればね

「感謝しなさい。公共機関に言い付けないで、私達の手でやるんだ  
から」

「ええ。それと、後で本条家の方々や私達のお父様やお母様にも言い付けなければね」

「それでは話がまとまつた所で、そこの『物』、わざわざおやりなさいな」「

「お前には、拒否権などと言つ権利は……それどころか、生存権に定められている、『生きる』という権利以外は何の権利も持たないのよ」

「さあ、さつさとやりなさい。私達、そんなに長時間待てませんわよ」

「あら、ひょっとして、もしかすると……」

「本当の本当に、上品な人間の言葉が、お前みたいな奴隸には、通じないのかしら?」

以上、ほとんどの少女達の、千紗に対する侮辱であった。そのことに気分を良くしたのか、少女達は勝ち誇り、驕り高ぶつたように笑う。

そんな中、少女達の満足そうな、こちらを蔑む顔に囲まれた千紗の頭のどこかがブツツと音を立てて切れた。

「はあ? あんた達、何言つてんの? 気は確かですか?」

千紗は到つて穏やかに、それでいてどこかふざけているように聞こえる声で、言い放つた。

千紗は、激情したり興奮したりした時は、先程のようにはつきりきつぱり言い放ち、見事に啖呵を切りまくるが、完全に切れてしまふと、ふざけたように、静かに、穏やかに、それでいて言葉の一言一句にすら、實に丹念に丹念に猛毒を仕込んだ毒針を地肌が見えなくなるぐらいにまでまぶし、それを伝えたいと思う人のみに、真冬の北極と南極を足して一で割らないぐらい冷たく、心を凍らせるようにな響く。

それでいて、関係ない人には全くそのようには聞こえない。

「凄いの一言しか……出でこない。

「全く何を言つてゐのかしらねえこの人達は。ほんつとうに全く意

味が解らないわ~。あたしと由梨亞が、由梨亞の両親召し使い共々二年前に完全公認の親友だとも知らないでねえ。あんたらって、そんな頭もない産まれたての小鳥かしら？ それともミジンコ？ ミカヅキモ？ アメーバ？ アオミドロ？ ゾウリムシ？ ヤコウチユウ？

千紗は、小学校の理科で習つた微生物の名前を次々に挙げていったが、少女達は眉を顰めた。

「な、何よそれ。この世に存在しない、ありもしない想像上の名前を挙げ欲しくないわ」

勇気を取り戻した少女のうちの、千紗と同い年の少女がそう言ったが、千紗は皮肉たっぷりに「一口二口笑いながら言った。

「あ～ら。何言つてるの？ この微生物の名前を知らない訳？ おつかしいわねえ。あ～あ……あんた達は受験しなくてもいいし、そのまま黙つても将来は保証されそなうんだけどねえ……最低限、義務教育の中で習つた内容は覚えていて欲しいわねえ。それに、この微生物の種類を学ぶことは必修科目だつたし……。ミカヅキモ、ゾウリムシ、ヤコウチュウ、アオミドロの名前を知らないのは、まあ、馬鹿過ぎだからしじうがないとしても、よ？ ミジンコとアメーバの名前ぐらいなら、ちょっと賢い幼稚園児でも知つていそうだけどなあ？ ああ、それとも今あたしが言つたように微生物程度の頭脳しか持ち合わせていない訳？ それとも、右から聞いたことが左へ抜けて行く竹輪耳？ 三歩歩けば忘れる鶏？」

「この……！」

と、少女達が氣色ばんで大声をあげようとした時、絶妙のタイミングで、その氣を挫くように、後ろから声が掛かつた。

「お嬢様方、どうかなされましたか？」

皆が振り返ると、そこには本条家の、それなりに高い地位で仕えているらしい、呑し使いの中でも立派な服装をした男性が立っていた。

少女達は、千紗の、皇族と貴族を卑下する、あまりにも傍若無人

な態度を告げ口しようと思つたが、生憎相手の名前が分からぬ。

もし自分の家や、自分と同じ階級、または自分より格下の家で使

えている召し使いで名前が分からなくても、

「そこの貴方」

などと、呼びかければいい。

だが、本条家は地球連邦の上流階級のなかではトップクラスである。

様々な分野で活躍し、辺境に当たる地球連邦なのにも拘らず、地球連邦初の他星に支店を出店したほどで、だからといってお金儲けにしか目がない悪徳商売人ではなく、そやつて稼いだお金を地震などの天変地異や自然災害があつた所に全く惜しげもなく送り、世界中にいる貧しい人達の為に医療物資や食料、学業用品を送り、様々なことに寄付をしている。

極め付けが、何十代も続く大貴族である。

なので召し使いとはいえ、本条家に仕えている以上、ただ『貴方』と、軽々しく呼べないのだ。

そういう理由があり躊躇つていた少女の間をすり抜け、千紗はその人の下へと歩み寄つた。

そして、千紗は何と、半ベソをかきながら、その人に訴えたのだった。

「坂本さん。あの人たちが、何だか分からんんですけど、何かあたしに身に覚えのないことを責められているんです……」

それを聞いた少女達は呆れ返つてしまつた。

（あんなに私達を侮辱しておいて、その白々しさは一体何…）

と、全員が思つた。

本気で呆れ返つた。

しかし、そんなことは知らない坂本は、こう慰めた。

「千紗さん、大丈夫ですよ。貴女は分からぬと思いますが、彼女達には、彼女達なりの誇りという物があるのですよ」

「そなんでしょうか？」

それで少女達はようやく千紗の名前を知つたが、それどころではなかつた。

何故かと言えば、千紗はうつすらと涙ぐんでいるだけではなく、声まで涙声になつてしまつてゐるのだ。

少女達は、あまりのことに、今度は膝がへナへナと崩れ、土にのめり込みそうになるのを堪えなくてはならなかつた。

さすがにそれだけは、貴族の誇りに賭けてもできない。

そしてこんな腹芸は、今の自分にはできそうにない、と本氣で思つた。

また、何故一般庶民がこんな技を持つてゐるのか、真剣に考え込んでしまつた。

身分の上下に拘らず、商売をやつていたり政界に身を置いていたりする人間は、思つてもいないことや、物事を有利に運ぶ為の駆け引きを口にする……つまり、腹芸が重要となる。

なので、ある程度は子供のうちからできるし、やらなければならないことだが、今の千紗のように堂々と口論し、啖呵を切り、相手を窮地に追い込みながらもその仕上げとして、召し使いとはいへ、見知つているとはいへ、事情を知らない相手に涙ながらに縋りつき、それを覚られずに丸」と信じさせるなんてことは、まだ幼い彼女らには到底無理な話である。

それどころか、そんなことができる大人もあまりいない。

しかし、一度田になるが、本当に何も知らない坂本は、少女達を追い立てた。

「そうです。まあ皆さん。由梨亞様が来られますよ」

「はい。分かりましたわ」

そういうと、何とか持ち直した少女達はシンとすまして、千紗を睨みつけながら、部屋に戻つていった。

庭から見て、ダンスフロアの一一番左端は、幅が十メートルほどの階段がどつしりと構えている。

そして、その階段を上つて曲がると、それぞれ五メートルほどの幅の通路があり、そこでの使用法は先程も述べた通り、食べたり話したりする場所である。

一階の食事スペースの奥には両開きの扉があり、そこから屋敷の中に出入りができるようになつてゐる。

三階は、大きい階段や扉がないことを除けば、一階とほぼ同じだつた。

千紗が、  
(由梨亞はあそこからくるのかなあ……)

と、待つていたら、階段の横に司会者が立つた。

(いよいよ始まるんだ……)

と思いながら時計を見ると、丁度四時になる所だ。

(上流階級つてのは……)

千紗は頭が痛くなるような思いをしたが、何とかそれを堪え司会者の言葉を聞くことにした。

『長らくお待たせ致しまして、申し訳ございませんでした』  
千紗はこれを聞き、確信した。

このように待たせるのが普通なのだと。

一般的に考えれば、やつぱり時間が掛かつたのかな、と思う所だが、千紗は声の響きから、ただの社交辞令に過ぎないと分かった。

『ただ今より、本条由梨亞様の誕生日パーティーを開催致します。

本日は八時までと、大変短い時間ですが、皆様、どうぞお楽しみください。それでは、本日の主役、由梨亞様とそのご家族が入場されます!』

会場にいた全員は、ぱつと後ろを向いた。

そして、一人の召し使いにより、一階の両開きのドアが開けられ、そこから由梨亜と両親が入ってきた。

会場にいた者は皆、由梨亜の姿を、まるで光の妖精、海の精霊のようだと思った。

何故なら、由梨亜が身に纏っていたのは、まだ中学生という幼さにぴったりの無地のドレスだが、だからこそ放てる威厳という物があつたので、下にいた者達は固唾を呑んで見ているしかなかつた。扉から出でくると、三人は左側の通路を通り、階段で三人並んで下に下りてきた。

下に着くと、司会者は

『皆様、これからパー・ティーを始めますが、その前に、本日の主役、由梨亜様からご挨拶があります。それでは由梨亜様、お願ひ致します』

と言い、由梨亜に簡易拡声器を渡した。

『皆様、本日は私の誕生日パー・ティーにご出席戴きありがとうございます。本日は私の年齢のこともあり時間は短めとなりますが、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい』

由梨亜はそう言い、完璧なまでに見事に貴族の令嬢に相応しい礼儀正しいお辞儀をして、父母の所へ行つた。

『えー、皆様。本日の主役は由梨亜様でござりますが、由梨亜様はまだ婚約者がおられませんので、本日は由梨亜様のご両親、本条ご夫妻が最初に踊られます』

そこで、耀太と瑠璃はお辞儀をして前に進み出た。

ダンスフロアの一階部分の壁は、一面は階段に、もう一面は庭に通じるガラス扉となつていたが、更にもう一面は紅色の垂れ幕に覆われ、こちら側からでは見えなくなつていた。

千紗は今までそこには一体何があるのだろうか、と考えていたが、その時に謎は解けた。

そこには最低で五十人、最高で百人ほどの楽人が控えて、と言うよりは、いつでも楽器を弾いたり吹いたりできるような体勢で待つ

ていた。

そして、指揮者が指揮棒をあげ、ワルツを弾き始めた。全員が見守る中、二人は見惚れてしまつほど優雅に一曲踊り、お辞儀をした。

拍手が一斉に沸き起こつて、司会者は律儀に待つていたが、一分ほど経つた所で、このままでは時間がずれまくつて仕方がないと思つたのか、召し使いとしては失礼ながらも、拍手の途中で拡声器を使つて大声を張り上げた。

『えへ、皆様！ お静かに！ お静かに願います！ 皆様！』

そして、ようやく静まった所で、司会者は司会の仕事を再開した。

『皆様。ただ今、グラスをお配りしておりますので、少々お待ち下さい』

この言葉に千紗が失礼にならない程度に辺りを見回すと、カートを押している召し使い達が、大人にはシャンパンを、未成年やお酒の飲めない人にはジュースを配つていた。

『お飲み物が皆様の手に渡されたら乾杯を致します。それが終わらしたら七時半まで自由でござります。楽人達は、基本的にずっと演奏を続けておりますので踊っていても構いませんし、皆様が今おられる所の後ろや二階や三階、お庭などで飲食をなさつてもかまいません。しかし、七時半までにはここに今のようにお集まり下さい』司会者がそうして話している間に、全ての人々にグラスが渡つた。

『それでは、皆さんにグラスが渡つたようですね。それでは、由梨亜様、お願い致します』

由梨亜が前に出て、左手に司会者から手渡された簡易拡声器、右手にグラスを持つと乾杯の音頭をとつた。

『皆様、今宵は十分に楽しんで下さい。乾杯！』

『乾杯！』

と、皆が復唱し、一斉に飲み物を飲み干した。

そこから、空気は一気に碎けた物になり、それぞれ談笑しながら、食べ物を食べたり、ダンスフロアに出て行つたりした。

樂人達は、先程とは全員入れ替わり、ワルツを演奏し始めた。

千紗は、乾杯が終わってからすぐ由梨亜の元へと向かおうとしたが、先程の少女達がそうさせなかつた。

「生意氣よ」

と、小声で言つと、さりげなく数人ずつ固まつて散らばり、千紗が由梨亜の元に向かうのを阻止したのだった。

千紗は、それのせいだけではなかつたが、由梨亜の元に向かうことを諦めざるを得なかつた。

何故なら、少年達三十人のうち五人が由梨亜にダンスの申し込みをしていたからだ。

残りの二十五人は、そこら中に散らばつた少女達を躊躇みし、ダンスの申し込みをしていた。

ちなみに言うと、千紗にその日を向ける少年はただの一人もいなかつた。

千紗は食事が並べてある所に行くと、食べ物がある程度取り、庭に行つて食べ始めた。

千紗は、なるべくゆっくりと食事を摂り、一番建物から離れて座つて、しかも一、三回ほどお替りましたが、五時半頃にはもう全て食べ終わり、お腹も一杯になつてしまつた。

そこで、仕様がないから、中に入つて優雅な貴族のダンスでも眺めていようと中へ入つた。

そして、ふと

（由梨亜って、まだ踊つてるのかな……？）

と思い、踊つている人の合間を縫つて視線を巡らすと由梨亜がまだ踊つているのが見えた。

だが、相手の少年は先程の五人ではない。

一曲踊る分と、パートナーを変えたり、楽人が変わつたりする為に曲の間に空く時間が、合計でおよそ十分は掛かるを考えると、時間的に見て今はだいたい九曲目なのだから、九人目となる。

千紗には由梨亜のニコニコとした笑顔が見えたが、その笑顔は他

の人が見れば普通に二口二口笑つてゐるなあと思うかも知れないが、千紗には由梨亜が疲れてゐるのが見て取れた。

(由梨亜、よくそんなにできるな……)

と、思いながら、由梨亜が踊るのを眺めていた。

曲が終わると、由梨亜は相手と別れたが、また次の相手が来て踊つた。

(由梨亜の相手をするぐらいの人のが、このパーティーに最低十人……)

千紗はそう思つと目眩がしてきた。

本条家は上流階級の中ではトップクラス。

本条家とほぼ同等の上流階級の家はそれなりにあるが、敵対する家を除くとその半分くらいになる。

その中でも、由梨亜と釣り合つ年齢の子息がいるのは、更に半分……。

それに、いくら初めてとは言え、一人娘とは言え、このパーティーは『本条家の一人娘、本条由梨亜の誕生日パーティー』である。なので、そんなに招いた、由梨亜の父、本条グループの再頂点に立つ本条耀太に対する思いが、感心を通り越して、呆れた物に変わつてしまつた。

由梨亜が踊るのは見ていて飽きず、飲み物を飲みながら一時間ほど見続けてしまった。

そして十五人目と踊り終わつた後、ようやく由梨亜はダンスの相手から解放された。

そして、千紗は今度こそ由梨亜の所へと行った。  
今回は、邪魔する少女達はみんな踊つてしまつていて、邪魔ができなかつた。

ちなみに、その少女達は自分に申し込んで来た少年達と踊つていて、

「しまつた！」

と、思い、すぐに駆け寄つて間に割つて入れないことを悔やんだ

のだ。

「由梨亞ー。」

千紗は、由梨亞が解放されるとすぐに呼びかけた。  
由梨亞もすぐに気が付いて、

「千紗！」

と、返した。

「由梨亞……大丈夫？」

と、千紗は思わず声をかけてしまった。

何故なら由梨亞はとても疲れ切っていて、見ているほうが疲れる  
ような様子だったからだ。

「もう駄目、絶対に踊れないわ。十五人と踊ったんだもの。これ以  
上踊れって言われたつて脚が疲れていて無理だし、お腹もペコペコ  
よ。絶対に踊らなきゃいけない義理や縁のある人とはもう踊り終わ  
ったし、これ以上申し込まれても断れるし私自身断る気でいるから、  
もう大丈夫！ 後はゆっくり休めるのよ！」

「じゃあ、お庭で夕ご飯食べなよ！ あたしはもう食べ終わっちゃ  
ったから飲み物でも飲んでさ！ 丁度いい穴場があるんだ。あんま  
り周りから見えないから、内緒話とかするのにすつこい丁度いいの  
！」

「なんだ。じゃあ、そこで食べたり飲んだりしようか」

そして、由梨亞は一人で食べ切れるのかと思うほど沢山食べ物を  
盛った一皿のお皿が乗ったカート、千紗は大きめのコップを二つに、  
更に大きな入れ物に入った飲み物が一本乗ったカートを押して、千  
紗の言った穴場 つまり、千紗が食事をした所に向かつた。

そして、食事をしながら、他愛のない話をしていた。

つまり、こんなに大きなパーティーを開くと一体どれぐらいお金  
が掛かるのだろうとか。

こんなに人が来ていたら、顔も名前も覚えていられないとか。  
夏休みの宿題が、どれぐらい終わつたとか。  
部活のこととか。

「」の前やつた、百怪談で見つけた、何の変哲もない日記帳の「」と  
とか。

そして、由梨亜が食べ終わると、千紗は本題に入った。

「由梨亜、あのね、」に招待された女の子達いるでしょ？ そ  
の子達に言われたの。あたしと由梨亜を近付けさせないって」

そして、千紗はさつきの少女達との言い争いの内容をほとんど正  
確に、しっかりと伝えた。

もしその少女達が千紗の言つことを聞いたら、真つ蒼になつて逃  
げ出すこと間違いなしだろ？

何故なら、第一に由梨亜にそんなことを聞かれたら、今後社交界  
での彼女達に対する由梨亜の心証が悪くなるだらうし、第一に彼女  
達は、千紗のようにそこまで正確に会話の内容を復唱することは全  
くもつて必要のないことであるし、実践する機会すらないので、そ  
のことが自体に恐怖を覚えるだらうからである。

そして、それを聞いた由梨亜は、思わず笑つてしまつた。

「千紗……い、いくら何でも、て、天皇陛下と、物乞いや奴隸を…  
…同列に、並べるなんてつ……！ スケール大きい！ そんなの誰  
も思いつきやしないよ！ サツサが千紗！」

由梨亜は時間を掛けてようやくそこまで言つと、身体をくの字に  
曲げ、声を殺して大爆笑した。

「由梨亜……笑うか話すかどっちかにして……」

千紗のそう呆れ返つた意見は、千紗にしては珍しくしっかりした  
物で、周りからの賛成も得られそうだった。

「まあ、でも彼女達も言い過ぎね。半人やら野獸やら下等生物やら。  
それに、奴隸だなんて……一体何千年前の話よ。今のこの世の中に、  
奴隸なんている訳ないのにね」

「ん~。でもあたし、あいつらが『奴隸に生存権がある』って言つ

たことに驚いたな。だつて生存権つて、『健康で文化的な最低限の生活を営む権利』でしょ？ あの人達の、その前後の発言とは矛盾してると思うんだけどな。それに、人権はないのに生存権はあるつて……矛盾の塊じやない」

「まあ、知らなかつたんじやないかしら。あの人達は無知な貴族の典型例だからねえ。知らなくつても不思議じやないわ。あの人達、生存権をただの『生きる権利』とでも勘違いしてたんじやないから。でも……」

そういうと、由梨亜はクスッと笑つた。

「千紗が切れるなんて……よっぽど頭が悪い上に口も悪いのね。それに、『貴族』という身分でガチガチに固まっている、『偏屈婆あ』の予備軍よ」

そう断言すると、由梨亜はヒソヒソ声で千紗に話した。

「ねえ、千紗。相談したいことがあるの」

由梨亜のさつきとは打つて変わつて真剣な顔と口調に、千紗も半分笑つていた顔を引き締め、千紗も真剣に問い合わせ返した。

「何、由梨亜？」

「あのね……夏休みに入る一ヶ月くらい前、席替えがあつたでしょ？ その時、私の隣の席、藤咲香麻君になつたの、覚えてる？ それでね、話しかけられた時、笑いかけられた時……。胸が苦しくなつて、ドキドキしたの。ねえ、千紗。これつて、一体何？ すつごく、辛くて……」

「由梨亜……」

千紗は、思わず呆れ返つてしまつた。

由梨亜が『お嬢様』だということは、千紗も重々承知していたが、ここまで箱入りだつたとは。

「ねえ、千紗、教えて」

「由梨亜……それはねえ……貴女は香麻君のことが好きなのよ」

「そ、う……なの？」

「由梨亜、初恋つてしたことないの？ つて言つたが、たとえ初恋が

まだだつたとしても、よ？ そういうの、小説とかドラマとかアニメとか漫画とか……そういうので、知らなかつたの？」

千紗は、呆れてしまつた。

そして、

（まさか……そんな分かりきつたことを訊くなんて……）  
と思い、思わず溜息が出てしまつた。

「ええ。まだなの。と、言つよつは、恋つて物 好きつていつこ  
とが、よく分からぬのよ」

「そななんだ……。ところで、由梨亜」

千紗は、先程の重い溜息とは打つて変わつて、明るい口調で言つた。

「その、あたしがあげたアクセサリー、全部付けてくれたんだあ  
千紗は、感激したように、続けた。

「由梨亜、やつぱりお嬢様だからさ、アクセサリーとかも一杯ある  
でしょ？ それに、いくらでも気に入つた物はバンバン買うこと  
ができるし……だから、新しいドレスを買つたとしても、それに合  
わせてアクセサリーも買つたりすると思つたから、あたしの作った  
のなんて、付けないかと思つてたよ。精々が、持つて来るくらいで。  
それに、たとえ付けることがあつても、こうじう大きいのでは、絶  
対に付けないと思つてた。なのに……」

「もうつ！ 千紗つたら、馬鹿じゃないの？ 折角千紗が私の誕生  
日の為に、手作りで作つてくれたんだよ？ そんな大事な一生の宝  
物、私が付けない訳ないじゃない！ それに……」  
と言つと、千紗の方を見た。

そして、につこり笑つて言つた。

「千紗だつて、私が作ったの、付けてくれてるじゃない！」

「それこそ、その言葉そつくり返すよ！」

二人でひとしきり笑つた後、七時三十分が近づいてきたので、会  
場に戻つて行つたのだった……。

由梨亞は、とっても「機嫌」だった。

日記帳は先輩の悪戯だと思つていながらも、先輩に直接訊ねることはできなくて少し苛々していたが、自分が初恋と言う物を体験できたことが分かり、千紗に貰つた誕生日プレゼントのアクセサリーが気に入つたこともあり、その日はにこにこしつばなしだった。ある、耀太からの報告を聞くまでは。

その翌日、由梨亞が部活に行つて帰つてきた午後のことだつた。

「由梨亞、話がある。ちょっと来てくれないか」

そう耀太に言われ、由梨亞は客を迎える応接間へと向かつた。

由梨亞がそこでしばらく待つていると、鈴南が誰かを連れて來た。「失礼致します。どうぞ、こちらへ。由梨亞お嬢様がお待ちで」「ざいます」

「失礼します」

と、由梨亞と歳の近そうな少年が三人……。

由梨亞が呆気に取られていたと、最初に入つて來た、どこか気取つていてる少年が、取つて付けたような微笑を顔に浮かべ、挨拶した。「初めまして。僕は眞湖グループ第百三代総帥眞湖翔碁の三男、眞湖聰と申します。歳は十六です。貴女のような素晴らしい女性と知り逢えた僕はかなりの果報者でしょう。どうぞ僕のことをお忘れなきようお願ひします。そしてこれから宜しくお願ひ致します」

と、昨日の由梨亞の誕生日パーティーで一緒に踊つたので初対面ではないものの、たつたの一回目の由梨亞を口説き優雅に一礼し下がると、厳つく頑丈な身体付きの少年が挨拶した。

「初めまして。僕は蔡条グループ第百十四代総帥蔡条瑛彦の弟の三

男、蔡条護まもると言います。僕の一人の兄は子供のいない伯父の為に養子となり、一番上の兄は蔡条グループの跡取りとなりました。その為、僕がこのような晴れがましい栄誉に浴することとなり、とても光栄に存じます。歳は十五です。宜しくお願ひします」

見た目とは大変裏腹に、かなり優しい口調で（演技かも知れないが）自己紹介と自分の宣伝を行うと、サッと一礼し、今度は護とは対照的な、あまり筋肉もついておらず、瘦せていて、少し青白い顔で眼鏡を掛けた、学者タイプの少年が挨拶をした。

「初めまして。その、僕は紺城グループ第九十八代総帥、紺城智早ちはやの四男で、紺城早富さみやと申します。歳は、その、由梨亞さんと同い年で十三です。このような大役が、僕に務まるかどうかは分かりませんが、精一杯頑張るつもりでいるので、宜しくお願ひします」

そう早富が言い、頭を下げて一步下がり、由梨亞は他の二人と並んだ三人を、眺めながら、

（さつきから『果報者』やら、『晴れがましい栄誉に浴する』やら、『大役』やら……一体、何を言つてゐるのかしら……？）

と思い、由梨亞は自分の隣に立つてゐる耀太を見上げ、訊ねた。  
「お父様……この方達……は？　何故、今日家にいらっしゃるのでしょうか？」

「由梨亞、この方達は、由梨亞の婚約者候補だ」

「…………はいつ？」

裏返つた声で、由梨亞は言った。  
たつぶり、十秒間の沈黙だった。

「由梨亞、お前ももう中学生だ。婚約者を決めなくてはならない。今はまだ決めなくてもよい。だが最終的に、遅くとも大学に入学する時に決める。時間はまだたつぶりあるからな。但し、この中の三人から、絶対に選べ」

耀太はそう由梨亞に言つと、

「さあ、今日は対面だけだからな。今後は、毎週土曜日の午後か日曜日に来てくれ。それでは、ありがとう。また来週」

そう言つと、耀太は

「鈴南、聰殿、護殿、早富殿をお送りしてくれ」と言い、部屋を去り、聰、護、早富の三人は、

「それでは、由梨亞さん。また来週お会いしましょうとそれぞれ言い、鈴南に連れられて出て行つた。

皆が部屋からいなくなつた途端、由梨亞は近くのソファーに座り込んでしまつた。

（そんな……せつかく、初恋ができたつて言つのに……まあ、私は本条家の跡取り娘で、婚約者候補の存在がいるつてことを忘れていた私も悪かつたんだけど……）

そう思つと、もつやる氣がなくなつてしまつ。

（せめて、携帯端末で千紗に連絡とつてこのこと伝えないと……つて嗚呼！ 私、端末は内線用しか持つてないんだった！ 千紗に外線で連絡しようにも、鈴南とかが見張つてる中で、どうしたらんなことを言えるつていうの！？ 嘸呼、もつ……無理だよ……）

しかも、夏休み明けでもある、五日後の月曜日の一十四日にならなければ、部活すらない。

こうなつてしまつては家から出ることすらも怪しまれ、出られないので、千紗の家にも行けない。

我慢して、耐えるしかなかつた。

五日後、由梨亞は教室に行くと、真つ先に千紗に声を掛けた。

「ねえ、千紗。ちょっと……いいかな？」

「どうしたの？」 由梨亞

「ちょっと、ここだと話しくい話だから……夏休みに、いい？」

「うん、別にいいよ？」 で、どこで話せばいいかな？ 教室なんか論外だし……校庭だと、運動部とかが昼練しに来たり、遊んだりする人がいるし、食堂も……」

「だつたら、屋上とか……どう? 屋上の、東屋みたいになつて、縁で囲まれていて、でもベンチのないところ……」

「うん。わかつた。じゃあ、ついでにお昼屋上で食べない? お昼食べながら話すよつの内容じやなかつたら、食べ終わつてからでもいいし」

「ええ……そうね」

「じゃあ、あたし先生に許可取つてくるね」

「うん……お願い」

そう言つた由梨亜の姿は、頬りなく、儂げで、長く由梨亜といいる千紗には、何か思い悩んでいるといふことが分かつた。

千紗は珍しく眉根を寄せて考え、結局答えは出なかつたが、昼休みになれば分かることだ。

千紗は難しいことを考えるのを放棄し、とりあえず授業に集中することにした。

昼休み、二人は朝約束したように、屋上で食べていたが……一人とも無言で食べていた。

食べ終わつた後、千紗は由梨亜に言つた。

「ねえ、由梨亜。何、あたしに教室じゃあ言えないことって? 何のことなの? お弁当も食べ終わつたし、言つて?」

「うん……。あのね、千紗。五日前、あの私の誕生日パーティーの次の日、お父様が、十六歳で、眞湖家の三男の聰さん、十五歳の、蔡条家の会長の弟の息子さんで、一人のお兄さんがその伯父さんの養子となつた三男の護さん、十三歳で紺城家の四男の早富さんが……私の、ね……婚約者候補として、来たの。それで、高校を卒業してから大学に入る前の冬休みの間に、その三人の中から、婚約者を決めろつて。ほんと、私……」

そう言つと、由梨亜は涙ぐんだ。

ちなみに、この全世界では、基本的に新年を迎えると同時に進級することになつていて、地球連邦も同じだ。

「あ……ちょっと、いい？ 由梨亜」

「何……？ 千紗……」

「あの、さ……由梨亜、まさか三人と結婚するわけじゃないでしょ？」

「うん……そうだけぢ……？ 何当たり前のこと訊いてるの？」

「つてことはわざ……必ず一人は選ばれない訳でしょ？」

「うん」

「選ばれなかつたら、どうするの？」

「それは、ちゃんと男の跡継ぎがいる場合の女の子、または私みたいに女の子しかいなけれどその子に姉がいる子とか、とにかく跡継ぎじやない女の子と結婚するの。まあ、相手が一般庶民の漫画みたいな大恋愛もあるけど、確率としては、一パーセント未満ね。で、私みたいな跡継ぎ娘と婚約する場合、聰さん、護さん、早宮さんにとつて、私は『第一婚約者』なの。で、さつき言つた、跡継ぎじゃない女の子が『第二婚約者』。私が結婚した人の第一婚約者は結婚できないけど、将来にはいくつか方法はあるわ。まず、行かず後家になつて一生屋敷に残る道。だけど、その道を選ぶ人は非常に少ないわ。第一、特別な理由がない限り親兄弟が追い出すわね。余程その家に役立つような特殊能力を持つてたり、とても外にもお嫁に出したりできないうな人じやない限り」

由梨亜はそう言つて肩を竦めた。

「あと、自分の興味の高い物とか、自分に向いている分野を、専門学校とか大学とかで技術を手にいれて、庶民として一人暮らしづながら働くの。それと、自分の家より身分の高い家に仕えることね。私の家で働いている女性は、ほとんどそうよ。鈴南だつてそう。男性で働いている人は、特に次男が多いわね。何て言つたつて、長男に子供ができるよりもしものことがあれば、その後を継ぐのは次男だもの。他家にお婿に出したら、その結婚した人の子供がすつごい迷

惑を被るわ。だけど、他家に仕えさせればその家のとの縁もできるし、いざとなつたら仕事を辞めさせて家を継がせることもできる。

お婿に出すよりかなりお得よ。もしくは、男女両方ともだけど、一般庶民と結婚する場合もあるわ。確率的に多いのは、他家に使える、

一般庶民と結婚、独り立ちする、行かず後家の順番ね」

「へえ……そんなことできるんだあ」

「まあ、結婚の場合、九十九・九パーセント政略結婚なんだけどね」「はつ？」

千紗は、思わず訊き返してしまった。

貴族との結婚なら、政略結婚なはずだが、一般庶民との結婚なら、該当しないはずなのだ。

「一体、何故」。

「一般庶民と言つても、本当は違うの」

「……え？」

「一般庶民って言つても、それなりに力はあるけどまだ一代目、二代目の成り上がりとか、お金をがっぽり溜めて寄付も何もせず富豪と呼ばれる家、それに政治家……その人達も貴族と庶民の区分で見れば庶民に入るから、政略結婚で庶民と結婚なのよ。それに、たとえ独立立ちしても、結局働く所は、自分の親とか親戚とかの会社や、その会社と繋がりがある会社。そしていざ結婚するとなつても、その会社の有力者と結婚してその伴侶が自らの家を裏切らないように……もしその伴侶が裏切ろうとしたら、自らの生命を懸けてそれを止める……見張り役。それか敵対する会社、同じだけの力を持つた会社に……もしかしたら、将来自分達に危害を加えるかもしれない会社の人と、事実上の人質として結婚するわ」

由梨亜はそう言つと、悲しげに目を伏せた。

「それに、この人と結婚したいと思つて結婚する人は、ほとんどいない。私達は、そう言つ風に育てられてないもの。私が例外な訳で……。まあ、他にもそういう人はいるかもしれないけど、その結婚したいと思っている相手がその家の条件に合わない人だつたら、

絶対に認めないわ。何があつても阻止しようとする。まあ、その条件に合わない人と駆け落ちしたらひとまず諦めるけどね。でも……もし、子供が産めたら……最悪よ

「えつ……何で？」

（駆け落ちしたら諦めるのに、子供が産めたら最悪？ つまり、諦めなすこと？ 普通、逆なんじゃないの？）

千紗は、全く分からなかつた。

「子供が産まれたことは、戸籍を見れば分かるもの。どんなに隠そうとしても。役所の人間も、貴族には逆らえないでしょうしね。そして、どこにいるのか見つけ出したら、その子供は実の祖父母の命令によつて、親から誘拐される。そして、その両親は一度と子供に会えないまま一生どこかで働く。時にはその一人すら引き離すこともあるわ。でも……でもね、もし見つけられなくて捕まえられなかつたら……そして子供がある程度大きくなつたら、認めてくれるの。そして自らの娘、息子、孫として認められて、様々な便宜を図つてくれるわ」

「そりなんだ……でも、由梨亜は……」

「ええ。私には、できないわ」

そう言つた由梨亜の顔には、諦めの色が色濃くあつた。

「私には兄弟姉妹がいなし、父方の叔父さんや大伯父さんなんていないから、他に直系の跡継ぎはないのよ。この本条家の跡を継げるのは、この私、ただ一人だけ。たとえ駆け落ちしたとしても、捕まつて、家に閉じ込められて、一生、自由に外には出れなくなる

……」

由梨亜の疲れたような、諦めたような声を聞き、千紗は胸が痛くなつた。

「でも、諦めちゃ駄目！」

千紗は激しく、強く言い放つた。

「千、紗……？」

思わず呆気にとられる由梨亜を尻目に、千紗は立ち上がりて言つ

た。

「あたしは、人を好きになるつて、そういう物じゃないと思う！  
勝手に決められて、好きでもない奴と無理やり結婚させられて、『『後からいぐらでも好きになれる』だなんて勝手なお題田を、さもあ  
り得そぐに言い切つて……そんなの、生き物のすることじゃないよ  
！ そして、そんなことをさせる奴は、絶対に生き物の生き方を知  
らないし、知ろうともしない！ 少なくとも、普通の生き物の心な  
んか持つてない！ 由梨亞、諦めたら駄目だよ！ 絶対に！』」

「千紗……そんなことよりも……」

「何？！ そんなことって！？』

「お弁当箱」

「……オベントウバコ？」

千紗は氣勢を削がれ、ぽかんと間が抜けたように、オウム返しに  
言つてしまつた。

「お弁当先に食べ終わつて良かつたね。お弁当箱、膝から落ちて、  
転がつちゃつてるよ」

「ちよつ……ちよつと、由梨亞！ 気付いてるなら早く言つてよ…  
あ～あ、お弁当箱が砂まみれ……お母さんになんて言おつ……」  
その呆然とした声に、笑いを噛み殺しながら、苦笑するように、  
たしなめるように言つた。

「千紗、何かを乗つけてそのまま立つたらどうなる？ それは見事  
に従順に、重力従つて落下するでしょうが。それに入人の話に途中で  
割り込むだなんて、人としての礼儀に反するわ」

「あつ……そつか……」

「まったくもう。千紗ときたら。あつそつだ」

由梨亞は、なにやら鞄をゴソゴソと探つた。

「え～つと……あつた！ はい、千紗。遅れてごめんね。これ、も  
う書いてたんだけど、あの婚約者候補のことがあって、お父様と鈴  
南達の目が厳しかったから、外に出にくくなつて。ごめんね」

「そつか……ありがとう、由梨亞。でもさあ、この交換田記帳つて、

本当に先輩達の悪戯なのかなあ？」

「えつ？」

「だつてこれをやうになつてから、由梨亜が変な視線感じたり、婚約者候補がいきなり出てきたりしたんじょう？ 何の前触れも、予兆もなしに。それつて、変だよ。そんなの、いつだつていいのに。これは、偶然つて言うの？ もしかして、何かの力が働いているんじゃないのかな？」

「ま、まさか……ただの偶然よ。千紗らしくないわ。全然、科学的じゃないわよ」

「……だけど、きっと何かあると思う。だつて、これ、変だよ。それに……悪戯！」ときで、先輩達があたし達をつけるとは思えないし「うへん……そんなこと言われても、ねえ……じゃ、今日の部活の時、先輩に問い合わせてみましょ？ そうすれば、私の勘違いだつたって証明されるかも知れないし」

由梨亜が明るく言つた途端、女性の澄んだ声が……ただし、男のような口調で、二人の耳に届いた。

『よく、分かつた』

「えつ……」

「嘘……」

一人が驚いたのも、無理はない。

何故なら、その声は、千紗が持つていた日記帳の中から聞こえてきたのだから。

「日記帳が……喋つたのかしら……」

「ま、まさか……あり得ないよ……もしかして、先輩達……こんなのに、小型スピーカー付けてた、とか……？ あ、あと、盗聴器……？」

あまりの出来事に現実とは思えず、啞然呆然としている一人を余所に、交換日記帳は眩しい金色に輝いている。

『お前達の望みを叶えよ。さあ、行くのだ。自由な、千年前の世界へ……！ お前達の、真の姿を取り戻す為に……！』

( 千年前……確かに、その時身分同一化運動が起こって、成功して……一時的に……確かに百年間、身分の同一化運動に成功したから、世界は身分社会じゃなくて完全な学歴社会になつて……身分の面では、確かに……確かに、自由で…… )

そこまで、千紗が一瞬のうちに考えた途端、直視すれば失明してしまうかも知れないほどの、眩い光が駆け抜け……。

そして、その光がやつとのことで去り、目を瞑つたりしなくても見えるようになった屋上には、何と、由梨亞と千紗の姿が、跡形もなく消えていた。

しかも、その光に気付いた人物は、誰一人としていなかつた。

一人は空間と空間を繋いでいる、『何だかよく分からぬトンネル』にいた。

と言つても、正確には、二人がしっかりと手を握り合つたまま、矛盾しているとは思うが、無重力に似た足元の心許なさを感じたまま、下に向かつて落下しているのだが。

周りは一体何色と言つたらいいのか……それとも言葉で言い表せないのか……様々な色が輝き、けれど混ざつて汚い色にはならず、色が流れていると言う表現がぴつたりだ。

そんな中を下に降りていくと、下にしっかりと固定された色がいや、景色がある。

そして、そこに近づくほど、キーンとした音が、強くなり、強くなり……そして、様々な色が輝くトンネルから吐き出される瞬間、二人はあまりにも大きな、大きすぎる音によつて、気絶してしまつた。

気絶してしまつその瞬間の少し前、千紗の耳には、鈴を振るよ

うな、高く澄んだ、綺麗で不思議な声が聴こえて來た。

『何も、怯えることは御座いませんわ。貴女とその友の、乱れ絡ま

り合つた運命を、元に戻すだけなのですから……。貴女にとつては、とても、とても辛いことでは御座いますが、それが 貴女の身体で感じ、体験した、それだけが、眞実で御座います。元に戻るだけなのですから……落ち着かれて、全てを、御受け入れ下さいませ……』

(何言つてるの？ この人。あたしと由梨亞の絡まり合つた運命つて、一体……何？ 何なの？ 元に戻るつて？ 受け入れるつってたつて、何を受け入れればいいの？ もう……もう、訳分かんないよ！ つて言うか、何この敬語！ こんな敬語、普通は使わないでしょ！)

千紗は少々変なことを考えながらだつたが、由梨亞と千紗は、二人にとつては異世界としか言いようのない時代に、飛ばされていた。生活習慣は勿論、言語までもが違う時代へと。

「千紗……千紗！」

珍しい由梨亜の慌てているよつた、急かすような声が聞こえ、千紗はこの時代で目覚めた。

「由梨……亜？ ここって、一体……」

「分からないの。私もたった今日が覚めた所で……」

と、由梨亜は泣きそうな顔で言つた。

そこへ、ドアを開き、一人の女性が入つて來た。

「？」

「えっ？」

「何て言つたの？ 解る？ 由梨亜」

「いいえ。私にも、さっぱり……」

「 。 ? ? 」

「千紗、私、この女の人が何て言つているのか確實には答えられな  
いけど、大体の意味は解つたわ」

そう言つて溜息をついてから、由梨亜は言つた。

「『すみません。あの、何て言つたんですか？ もしかして言葉が  
解らないんですか？ 私にも、何て言つてるのかさっぱり解らない  
んですけど……』 つて」

そして、そこにいた女性は、また何やらよく解らない言葉を発し、  
いきなりドアを開けて、飛び出して行つた。

千紗は、まだ目覚めてからあまり時間が経っていない為、どこか  
ぼんやりとしていたが、由梨亜はそれよりも前に目が覚めていたの  
で、頭が少しつきりしていた為、何とかパニックになりそうな気  
持ちを抑えてから周りの様子を観察した。

そこは全面白い壁になつてている小さな部屋。

出入り口の所には水道があつて、手が洗えるようになつている。

他には、とつてもとつても古い、小さな冷蔵庫と思われる物、あ

とは、歴史の授業で習つた、だいたい千年ぐらい前まで使われていた、テレビと言つ情報を得る為の端末、二人の寝ている、二つのベッド……。

辺りは、薬臭いような、消毒液の臭いがして……。

そこまで考えた途端、直感的に、由梨亜にはここがどこだか分かつた。

「千紗、ここ病院よ」

「えつ？ でも病院の普通病棟つて昼間は階全部が一繋がりで、場合によつて隔壁装置を作動させる明るい場所でしょ？ ここは何だか暗い雰囲気だし、ここじゃあ治る病気も治らないよ」

「ええ。だから、ここはそんな装置もなくて、そんな分かりきつたことも分からぬ……大分昔の、時代。それも、何百年前、つて言う……」

「ここって、やつぱり……千年前の世界なのかな……」

そこまで言つた時、さつきの女性 そして、ここが病院だとすると、恐らく、看護師と思われる女性が、様々な人を連れて來た。その人達は十人ほどだった。

そして、恐らくその人達の母国語であるような、先程の女性とはまた違つてゐる言葉を喋つていつたが、ほとんど分からなかつた。だが、中に一人、言葉が少し解る人がいた。

「貴女は？」

と訊いて來たのだ。

彼は地球連邦の古代語を喋つていたが、千紗はその古代語で、喜んで答えた。

千紗と由梨亜は、中学校に入つてからの選択授業で、古代語を習つていたのだ。

だから、簡単な会話なら、できるようになつていて。

「あたし、貴方の言つていることが解るわ！ あたしは彩音千紗。

十三歳よ。彼女は本条由梨亜。十三歳」

「貴女は、彩音……千紗？ そちらは本条……由梨亜？ そして、

十三歳？ そして、何故 ？」

その後、その人が喋った言葉は、まだ古代語を習つて間もない二人にとって、少ししか意味の解らない物だった。

その一日後、一人がその病院らしき所で、図書室に行つた。

そこには様々な本があつたが、ほとんどが読めない物だった。やはり、少しなら意味の解る本はあつたが、まだ習つていない単語や文法が大量にあり、よく意味が解らなかつたが、大抵の発行年は一千百年代頃だった。

そして、その中から、千紗がある物を発見した。

「ねえ、由梨亜。これって……」

呆然としたような千紗の口調に、由梨亜は首を傾げながら言つた。

「どうしたの？」

由梨亜が駆け寄り、千紗の手に持つていた物を見た途端、啞然としてしまつた。

何と、あの日記帳が千紗の手に載つているのだ。

「な、何、これ……一体、何がどうなつているの？」

由梨亜がそう言つた途端、千紗の手の上にあつた日記帳から眩しい銀色の光が溢れ、千紗と由梨亜は思わず目を瞑つてしまつた。

そしてその光が去つた後、看護師がやって來た。

「あら、ここにいたの？」

(えつ?)

二人はとても驚いた。

今まで何を言つているのか解らなかつたのだが、今は何を言つているのか解るのだつた。

「もうそろそろ検査の時間だから戻りなさい……つて、二ホンゴは通じないんだつた。エイゴも初步的な物しか通じないし……えつと、私と」

と言い、右手の人差し指で自分を指すと、

「貴女達二人が」

と言い、左手の人差し指と中指で由梨亜と千紗を指し、

「一緒に行く」

と言つて、その三本の指をくつつけ、移動させた。

由梨亜と千紗は、

「分かりました」

と言つたが、相手が首を傾げたので地球連邦の古代語で言い直した。

すると、その看護師は、

「ほんと、何言つているんだか解らないわ。名前を言つた言葉とか、こつちに話しがけてくる時に喋つている言葉はエイゴだけど、名前は二ホンジンっぽいし……でも、一人で話している言葉は二ホンゴビ二ホンじやなくって全然聞き覚えもないし、意味も解らないし……と、独り言を言つた。

だが、千紗はその話の内容でもなく、先程の異常現象のことでもなく、別のことを考えていた。

(エイゴ……つて、何？ 二ホンゴ？ 二ホンジン？ 意味解らないよ。でも、あたし達が話しかけられて少し解つた言葉……あれは『エイゴ』だったのね。そして、彼女が話している言葉は『二ホンゴ』……)

そして、由梨亜と千紗は一緒に病室に向かつた。

あの、交換日記帳を抱えたまま……。

検査が終わつた後、二人はその交換日記帳を開いた。

自分達がこんな所に来た理由を知る為に。

その交換日記帳には、一人が書いた内容もなく、一人が期待したような内容もなかつた。

しかし、実際書かれていた内容は、読まなければ良かつたと思うほど、嫌な物だった。

『我ハコノノートニ閉ジ込メラレシ者ナリ  
面白半分ニフザケタ願イヲスル者ニ禍アレ呪アレ  
真剣ナ思イヲ抱エシ者ガコノノートヲ手ニスル時ニハ祝福ヲ  
我ハ知ツテイル  
コレヲ手ニシ我ガ祝福ヲ与エル存在トソノ者ガ望ムコトヲ  
故ニ我ハ一時的ナ物ナレドソレヲ授ケヨウ  
差別ノナイ世界ヲ  
ソシテ』

そこで、交換日記帳の文章は、途切れていった。  
と言うより、恐ろしいことに、血に汚れて見えなくなっていた。  
そしてページをめくると、そこには、ぽつりと、まるで切望する  
かのように続きがあった。

『我ハ……望ム  
其方達ノ真ノ幸セヲ  
我ハコノノートニ吸收サレタ生命  
ナレド未ダ消滅シテオラヌ生命ナリ  
ソノ生命ガ消工失セルヨウナ危険ヲ冒ソウトモ我ハ其方  
達ヲ護ロウ  
永遠ニ永久ニ』

ここは……恐らく、北の方なのか、山に近いのか もしかした

らその両方なのかも知れないが、あと三、四日後によつやく十月なのに、窓からは、紅葉した落葉樹が見える。

その樹を見るともなしに眺めながら、二人は考え込んでいた。

このノートに書かれていた内容を。

那一週間後、由梨亞と千紗がこの時代……つまり、千年前の時代に来た衝撃でできた打ち身、痣、捻挫、打撲などの怪我が治ると、修道院兼孤児院の、『香封畏院』に入れられた。

こここの時代では、小学校を卒業する十一歳で、小成人式と言う物を受ける。

それは、小学校を卒業して、中学校に入学してもやつていけるかどうかをテストする物で、その段階は、特級から八級と分かれ、その段階によつて扱いが違う。

例えば、特級ならばどの学校にも入れるが、その下に行くに連れて、学校の選択肢がどんどん減つていいくのだ。

つまり、下に行けば行くほど将来や進路の選択の幅が狭められてしまうという制度である。

なので、産まれ持つた身分は、社会では

「フン、そんなの何になるのさ」

と、粗雑に扱われるが、逆に有名な学校を卒業すると、

「ああ、あの学校の卒業生ね！」

と、随分大事に扱われ、場合によつては、様々なことに掛かる料金が優遇される場合もある。

また、会社などの就職も、かなり有利になる。

また、あまり有名でない学校の場合は、差別も何もない。

なので、学力でそこにいったという人だけではなく、もつと上に行けるような学力を持った人 そう、随分優遇されるような学校に行ける人でも、その特別扱いが嫌だと言つて、わざとレベルの低

い学校に入る人もいた。

そして、そういう学校にも入れなかつた人達は、優秀な学校に行けた人とは完璧に逆の扱いになる。

なので、身分による差別はないものの学力や学歴による差別があり、賢い人物が頭の悪い 賢い人に言わせれば、愚者に対する軽蔑の思いは、千年後の時代で、身分の高い人物が身分の低い人物に対し抱える軽蔑の思いと比べると、圧倒的にこちらの方がとても強いのだ。

由梨亜と千紗の場合は、こここの言葉が一切解らず（と思われていて）、喋れないので（これは本当）、この小成人式は受けられない。そして、この小成人式を受けられなければ、本当の成人式を受けることができない。

なので、大人になつても就職できない。

だから、このような修道院で、一生働いて生涯を終えることだろうと、思っていた。

さて、香封畏院に入つた由梨亜と千紗だったが、意外と人数がいて、百人ほどの規模の修道院だった。

だが……その修道院の過ごし方が、あまりにも過酷で、激しく辛い物なのだ。

何と、平日は睡眠時間が五時間ほどしかない、かなりのハードスケジュールだ。

だが、休日は自由時間があり、睡眠時間が六時間摂れ、しかも、自由時間に昼寝もできる予定だった。

そんな所で、二人は過ごし始めた。

そのおよそ一ヶ月後、驚くべきことが持ち上がるとも知らずに……。

「さあ、皆さん。働きなさい。吾らの守護者に視られても、恥ずかしくないよう！」

朝の祈祷がそういう言葉で締めくくられると、みんな一斉に席を立つた。

何があるのかと言うと、だいたい一週間後の十一月十八日はこの宗教が興った記念日で、その日の一日前から三日間、この香封畏院では、封香奏祭というお祭りがあるのだ。

ちなみに、香啓畏院と言う、男子専用の修道院の方は、啓香奏祭と言うお祭りとなる。

何ともファンタジーで、夢見がちで嘘にしか聞こえないが、何でも昔、この宗教の創始者が、悪人の集団を捕まえ、こらしめたそうだ。

その悪人達は、こらしめられて改心し、一度と他人に悪さをしないと誓い、その印としてその悪人の頭の一族に代々伝わる珠、『香封珠』と『香啓珠』を、創始者に渡した。

一度と、自分のような者に悪用されないようだ。

それは実に不可思議な珠で、香啓珠を持つ者が念じれば様々な天変地異が起こせる、不思議な、そして恐ろしい珠なのだそうだ。

……どうせ、嘘だらうけれど。

また、香封珠を持つ者が念じれば、逆に様々な天変地異を抑えることもできるそうだ。

……本つ當に信じられないと言うか、絶対確実に眉唾物だらう言い伝えだ。

そして、その創始者は、この雌雄の香封珠・香啓珠を、その悪人の望み通り、再び悪用されないよう呪術を施した箱に入れ、それを十重に囲み、普段は絶対にその箱を開くことはできなくしたらしい。たつた一日を除いて。

この日、十一月十八日は、創始者がこの雌雄の珠を封じた日。

そしてこの日、創始者のような呪力を持つていらない者、呪法をかけられない者でも、それなりの人数が集まり、強い祈りを捧げれば、それによって、箱は開くことになっている……らしい。

そして、香封畏院の最高巫女が、祈りが終わると今まで歩き、その箱を一つずつ開いて珠を取り出し、厳かに、一年にたつた一つの願いを唱え、信者達がそれを唱和する。

そして香封珠（たつた二つしかない為修道院も一つしかなく、女子の方に香封珠、男子の方に香啓珠が納められている）に祈りを捧げ、箱に戻しまた一年間の封印をする。

また、それとは別にその創始者を称える為の祭りもある。

そしてそれが行われる間、近くに住んでいる信者でない人達も来て、祭りを楽しむ。

信者でない人が来ても、それはこの宗教、香封啓教の宣伝になる

ので、喜んで迎え入れている。

だからこそ一ヶ月前から掃除や準備に様々な時間を取られ、平日も休日も区別が全くなない。

その為、一ヶ月前からは修道院に入っていない一般の信者達は礼拝には来ず、個人や学校などで、宗教の勉強に来る人もいない。

そして、何と睡眠時間がたつた四時間である。

本当に身体が保たない。

だから、休憩時間に椅子に座り込んで仮眠を取り、休憩終わりの鐘が鳴ると同時に目を覚まして掃除を再開するのだった。

勿論、それは十代から五十代の、掃除をする女性達もだった。

そしてもし鐘が鳴っても起きなかつたら、夜に祈祷書を写さなければいけなくなるのだ。

それは、とても大変な作業で、何より睡眠時間がなくなる。

だから、由梨亞も千紗も必死で起きて仕事をしていた。

本当は言葉の通じぬ異邦人に祈禱書を写させる訳がないのだが、二人はそんなことは想像できなかつたし、その気力もなかつた。

そして、一週間前になれば大分楽になつた。

今まで、普通の日……封香奏祭の一ヶ月以上前でも睡眠時間は五、六時間だったのに、一週間になると何と七時間睡眠になるのだった。

それは、ここしばらく寝足りなかつた由梨亞と千紗にとつては、まさに天国のようだつた。

まあ、油断して寝坊し過ぎるのも罰則が待ち構えていたけれど。そして、三日前になると、また予定が変わつた。

勿論、前日は封香奏祭の準備に明け暮れるけれど。

「ねえ……由梨亞。お願ひだから、教えてよ。あたし、そういう風に悲しそうな由梨亞の姿、もうこれ以上見たくない。あたし達、今まで隠し事なんかしなかつたじやん。それは、あたし達が出会つた五年生の時から、ずっと、ずっとそうだつたでしょ？……ねえ、何で？ 何でよ、由梨亞。お願ひだから、意地張なんいでさ……ねえ、由梨亞」

封香奏祭の五日ほど前、千紗は悲しげに、嘆願するように、そして、半分諦めたかのように、今夜も同じ問い合わせを口に出した。

由梨亞の答えも、毎回同じで、

「千紗、ごめんね。今は言えないけど、封香奏祭の日に分かるから……。だから、今は……。おやすみ、千紗」「……おやすみ、由梨亞」

そして、二人の会話は途絶えてしまつた。

今、この時代で言葉が解り合えるのは、お互いしか、いないといふのに……。

やはり今夜も同じ答えが返つて来た千紗は、ひびく哀しく苦しげな気持ちを味わっていた。

（どうして？ 何で由梨亜はあんな風になってしまったの？ 封香奏祭が近づいてから、落ち込んで、塞ぎ込んで、あたしとも話さなくなつて……一体、何が原因なの？ それが分かれば、あたしは全力でそれを阻止、排除するのに……！ なのに、由梨亜は何も言わなくて……何で！ 何で由梨亜はあたしに何も話してくれないの？ もう……訳分かんないよー。）

そして、また、今夜も同じことを思い、器用なことに、怒りを感じながら眠りについた。

千紗は布団に入つてから眠りにつくのが速く、今日も僅か一分ほどで眠つた。

その数分後、由梨亜は一段ベッドの上の段にある自分のベッドから降り、すぐ下の段で寝ている、千紗の顔を覗き込んだ。

そして、呟いた。

「千紗……『ごめんなさい』。私は貴女のこんな顔が見たくて、ここに来た訳でも、留まってる訳でもないのに……でも、もうそろそろしたら、貴女は戻れるから……だから、その時までは……『ごめんなさい』。本当に、『ごめんなさい』、千紗。あと、もう少しだから……」

そう言つと、由梨亜は床に垂れてきた涙を拭い自分のベッドに上つて行った。

一体、ここで何が起こるというのだろうか？

そして、二人は元の世の中に戻れるのだろうか？

今の時点では、まだ誰にも分からぬが、ただ、一つだけ言えることがある。

それは、この時代に、時を超えて来たその理由、そしてそこで何が起ころのが、封香奏祭で、もしくはその後で分かるといつことだ。

そして……一人はどうなるのかと、いつとも。

早朝の空氣の中に、香封畏院の鐘が鳴つた。

今日は、封香奏祭第一回田。

当日になつたら、少しはゆつくりできるかな……などと千紗は考えていたのだが、それは大間違いだった。

何故なら、今までみんなで作ったタオルやぬいぐるみ、クッシヨン、枕カバーなどの手芸品を大聖堂で売るのだが、またその量が半端でなく多い。

それと比例するように、売り子の人数も多い。

そして、簡単な手作りお菓子や、搾りたてのジュースを有料で出すのでキッチン担当もいて、更に給仕係もいるので、それぞれ交代してやつていた。

勿論、由梨亜と千紗は常にキッチンでお菓子及びジュース作り担当か、休憩だつたが。

けれども、それでも由梨亜は何も喋ろうとはせず、黙々と手を動かし、休憩時間も千紗のことを意図的に避けていたようだつた。

そして午前中が過ぎ、夕方になり、日が暮れると、封香奏祭に来た人々は、それぞれ客室に戻つたり、家に帰つたりして行つた。

そして、その後小聖堂で祈祷を行つた。

いつもは鐘と同時に祈りを捧げ始め、鐘と同時に終え、香封畏院の最高巫女……処女で最年長の女性から一言一言戴いてから部屋に戻つて行くのだが、今日は祈祷の最後に、最高巫女が長々と話し始めた。

この香封畏院の最高巫女は、御歳八十七歳となるが、肌には艶があり、背筋も伸び、どんなに高齢でも精々七十代ぐらいだろうと思われるほど若々しい方だ。

「皆の者、今日のお勤め、ご苦労であった。明日は、中聖堂にて、祈祷を、街の信者達と、合同で行つ。明日の、八時から九時頃に。全て、善きよしに。皆の者」

その声は、外見の若々しさから見るととても深く、落ち着いた声で、そこに立つて、話しているだけで、威厳が辺りに満ち溢っていた。

「全て、書きように。最高巫女様

皆で唱和した後、この香封農院で、処女で一番目に年長の御歳十九歳の副巫女が言った。

「皆の者、今年の願い事は、決まった。今年は、昨年出た意見、上でアンケートを採った結果、一番多かった意見、『地球の森林保護、二酸化炭素削減が、これまで以上進むよう』という物に決まった。

休みなさい。全て、書きように。皆の者」

「お休みなさいませ。全て、書きように。最高巫女様、副巫女様」  
そして、みんなで席を立ち、部屋へと戻つて行つた。

(森林保護？ 二酸化炭素削減？ この頃、まだそんなこと言つてたの？ 一番酷かつたのつて、確かに地球暦二千年代初め頃だつたはず……あつ、思い出した。確か、この頃つてそれまで使われてた化石燃料つていうのが、もうほとんど使われなくなつてきて、この時で言う、新エネルギー、エコなエネルギーつて奴が一般的になつてきた頃だつけ……だから、まだ地球温暖化問題があつて……その時には、今あたし達がいる時代には、人間は生きているかどうかよく分からないつて考え方方が一般的だつたんだよな……そう言えば、あともうしばらくしたら、地球は初めて他星の存在を知つて、しかもこっちの方が大分技術が後れていることを思い知らされて、大パニックに陥るんだよなあ……)

そう思い、布団に入りながら考え方をしていた千紗は苛立つたように寢返りを打つた。

(ああ、駄目。今まで布団に入つてまで考え方なんてしてなかつたから、分かんなかつたや。寝る直前に難しいこと考えると、眠れなくなるんだ……やばい。本気で寝れないかも……)

そう思つていた千紗は、上で起き上がるような気配がして、不思議に思った。

そして降りてきた由梨亞に、千紗は驚きながら声を掛けた。

「由梨亞。何やつてるの？ 今はもう十一時過ぎたんだよ？ それに、早く寝ないと、明日身体が保たないよ」

千紗の不思議そうな言葉に由梨亞はギクッとして固まり、ギクシヤクと千紗を振り返った。

「ち、千紗……び、びっくりさせないでよ。っていうか、それが久しぶりに言葉を交わす相手に対する言葉？」

「そりゃあ、由梨亞とはこの頃何も喋ってないけどさ……。でも、あたしが声を掛けられないような雰囲気を出してたのは、由梨亞じやん。おまけにあたしのこと意図的に避けまくってさ……。あたしは、ずっと、由梨亞と普通の会話がしたかったよ。だって、ここに入つて、封香奏祭が近づいてから、まともな会話なんて、誰とも、一度もしなかつたじやん。あたしは……ずっと、淋しかつたんだよ。周りの人とは、古代語じゃないと喋れないし……。あたしは古代語、まだ習いたてだから詳しい会話なんてできないし、元々そんな重要な科目でもなかつたし……。由梨亞としか、普通の会話はできないんだよ？ なのに……なのに、ずっと避け続けられて……。あたし、本当に淋しかつたんだからね。由梨亞は、本当に、何とも思わなかつたの？」

「私は……」

と、由梨亞は口を泳がせ、言葉を濁らせた。

「だから、そう誤魔化さないで。分かってる？ 由梨亞。そういう全部曖昧にするのは、貴族階級がいつもやつてることかも知れなわけです。あたしとの間ではやめて。そう誤魔化すぐらいなら、最初から何にも言わない方がマシだよ、由梨亞」

千紗にピシャリと言い放たれ、由梨亞は

「…………」めん。本当に、「めんね。千紗」と謝った。

「それにさ、由梨亞、封香奏祭の日にわかるって言ったよね？ 今日、封香奏祭一日田だけど、何もなかつたよね？」

「三日目に分かるわ。お願ひだから……待つて。そうすれば全部教えるから。まあ、私もこの前知ったばかりだからちゃんと伝えられるかどうかはいまいち不安だけど……でも待つて。全部分かるから。私達が、この千年前の世界に時を越えてまで来た理由。何でこうなつたのかも、全部。その後、千紗は元の時代に帰れると思つから、心配しないで」

由梨亜は、自覚症状もなしにうつかり失言をしてしまつたが、それを大人しく見過ごす可愛い千紗ではなかつた。

そういうことは、厳しく問い合わせるのが千紗流である。

「……『は』？」

「えつ？」

「今由梨亜、『千紗は』って言つたよね。由梨亜は元の時代に、帰れないって言つの？」

由梨亜は、思わず手で口を覆つてしまつた。

失言してしまつたと思っているのは、まず間違いなく確かだ。

千紗は、幼い頃から本条家の跡継ぎとして鍛えられてきた由梨亜が、思わずたじろぐぐらいの据わつた目をして、はつきりと言い切つた。

「あたしは嫌。あたしだけ帰つて由梨亜がこの時代に残るつて言うのなら、あたしも残る。あたし、由梨亜の居ない時代に帰つたつて全然意味ないもん。あいつが……並樹咲(なみきさき)（中流の貴族）が、前の学校で騒ぎ起こしたからうちの学校に……私立小学校から普通の公立小学校に来て、あたしが咲に意見したからつてあいつにいじめられて……・友達いなくなつちゃつたあたしにとつて、由梨亜しか友達がないんだから。だから……お願い、由梨亜」

「……大丈夫よ。千紗。私は、この時代に何か、残らないから

「……本当？」

「ええ。私は絶対に、必ず現代に戻るから。この時代で、一生を終わらせなんかしない」

「そつか……。そう言えば由梨亜。何しようとしてたの？」

「ああ。あのね、千紗の寝顔、見ようと思つて  
「はあ？」

千紗はあまりにも予想外の言葉に拍子抜けして、間抜けな声が思わず口を付いていた。

「毎晩見てるんだあ、実は。それから寝てるの。千紗って、眠りにつくの光速並みに速いしね。今日は寝てなくて驚いたよ」

「へ、へえ～」

かなり久し振りに和やかな雰囲気になつた二人に、突然鋭い声が掛けられた。

「ちよつとあんた達。何やつてんの？ 煩くて煩くて眠れやしない。せつかくの睡眠時間なのにそれをさらで短くされたら堪らないわよ……つてあんた達か。全く、言葉が通じないつてほんと不便ねえ。えつと……ハイゴで言つのメンドイからジェスチャーでいつか」

そう言つたのは、同窓の十代の少女だった。

「あんた達」

と言つて、由梨亜と千紗を指し、

「ベッドに戻つて

と言つて一段ベッドを指した。

二人は頷き、大人しく布団に入つた。

(一体……何なのかな。でも、由梨亜は封香奏祭最終日に教えてくれるつて言つてたし。だったら、色々考えないで、さっさと寝ちゃおう)

そして、すぐに眠りに落ちたのだった。

何とも暢氣なことだが、これが、千紗が千紗たる所以である。

そして、封香奏祭<sup>ほうこうさうさい</sup> 一田田が終わり、一日田<sup>いちだ</sup>が過ぎた。

一日田<sup>いちだ</sup>にやつた内容は、一田田とほとんど同じだ。

千紗は、由梨亜<sup>ゆりあ</sup>と約束した通り、由梨亜が落ち込んでいた理由や、隠していることなどについては触れず、笑顔で、今まで通りに由梨亜と接していた。

千紗は後からこのことを振り返った時、もつと早くに由梨亜と言い合つて仲直りしておけば良かったと思ったが、この時は、ただ、単純に、由梨亜と仲直りできて嬉しいと思つていた。

三田田<sup>みだ</sup>は、それまでやつていた、普通のお祭りのよつなことは一切やらず……と言つより、信者以外立ち入り禁止とし、一日中祈祷となつた。

朝早く、それまでバザーで使われていた大聖堂の片付けをし、片付け終わった頃、客室から信者達も集まつて來た。

そして、みんなで大聖堂の長椅子に腰掛けた。

六百人収容できる大きな聖堂であるにも拘らず、その実に半分以上もの席が埋まっている。

そして、周りの人達は、呪言を唱え始めた。

それは、こちらの言葉を理解できるようになつていた由梨亜と千紗にも、全く解らない異国の言葉、もしくは呪文だった。

だが、声の響きは、親が子を慈しむような、慈愛の想いに満ち溢れていて、聴いているだけで心も身体も温かくなつた。

そして、その呪言がしばらく続いた後、神器と呼ばれる、処女で三番目に年長の女性が就く物で、その名の通り、神託のよつな物を得る時の祈祷を行つた時、降臨して來た創始者の寄坐となる、御歳七十三歳となる女性が、最高巫女と副巫女と共に入ってきた。

最高巫女の両手には、二十センチ四方の箱が捧げ持たれている。

その中に入つている物は、あの『香封珠』だ。

「皆の者、祈りをやめ給えよ」

最高巫女の、八十七歳とは思えない豊かで深みのある、大きな声が大聖堂に響き渡った。

「これは、初めて見る者もいよ。これは、この宗教、香封啓教創始者、長手深芳様から賜つた神聖なる珠、他院に納められている、『香啓珠』と雌雄の珠である、『香封珠』である。今年もまた、様々なことがあつた。そして、今年は昨年出た意見、『香封珠に願い得る神聖なること、皆の想いを取り入れ給えよ』、と言う物を受け入れ、この香封畏院にいる者達から、何を願えばよいかを訊き、そして、最も多かった物にした。皆の者、心して、聞け」

そう言つと、最高巫女は一息つき、その『願い』を口にした。  
「昨年の物と似てあるが、違う物である。その願いを、皆の前で発表しよ。」

『この美しき星…… 地球。 吾等はこの星以外に棲む所はあらず。しかしこの地球、吾らが棲むには適さぬ環境になりつつある。もし棲むのに適さなくなつたのであらば、吾々は死に絶え、この星には死のみが立ち込めるであろう。今は改善に向かつて来ておるが、それでも、まだ良くなつてはおらず。それどころか、また、悪くならないとも限らぬ。吾らはそくならぬ為に、願う。森林がこれ以上減らず、それどころか増えるように。それに伴い二酸化炭素急増を抑え、減るように。この願いが叶えられれば、長手深芳様、貴女様は敬われ続けることと成るであろう。そして、深芳様を守護された神々、精靈達も敬われ続けることと成るであろう。故に、吾らは願う。吾らの未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ』

「吾等の未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ」

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶え得る力を持つ香封珠よ」

最高巫女が願いを口にし終えると、今度は副巫女が祈りを捧げる役目に就き、それを信者達が何度も復唱した。

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願

いを叶え得る力を持つ香封珠よ」

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶えうる力を持つ香封珠よ」

みんなが、長手深芳と香封珠に対して祈りを捧げている間、最高巫女は香封珠の入っている箱に手をかざし、口を僅かに動かし、無心に祈つていた。

すると、普段は（実際にやつたことはないが）叩いても落としてもうんともすんとも言わないはずの箱の鍵がカチリと開き、蓋が開いた。

すると最高巫女はその中から出て来た箱を取り出し、同じことを繰り返していった。

その間ずっと神器は床に跪き、最高巫女同様、口を僅かに動かし、無心に祈り続けていた。

そして、最終的に香封珠が最高巫女の手によつて取り出され、皆の視界に入るぐらい、高く高く掲げられた。

まるでそれが合図だつたかのように、皆の祈りがふつとやんだ。

その途端に、神器の口から、女性の神々しい声が大聖堂に響き渡り出した。

千紗は、千紗と同じ時代に生きる大多数の人間と同じように無神論者であり、科学的な根拠が何もない物を全然信じず宗教なんかとんでもないと思う人間だったが、この声を聞いた途端、神を感じなくとも、少しは超常現象を信じてもいいかと思つてしまつた。

それほどまでに、神器の声は普段の声とは全然違う、神々しい声に変わつていたのだつた。

『その願い、叶えよう。皆の言ひこと、この妾が承知した。近いうちに、その願い叶うであらう。しかし、努力を怠つてはならぬ。妾が願いを叶えるのではなく、妾が其方らを手伝つのである。このこと、しかと申し付けたぞよ』

神器は言葉を紡ぎ終えると、首がガクツと垂れ、意識が戻つた。

すると、最高巫女が話し始めた。

「皆の者、これにて今年の祈りの儀を終える。長手深芳様の仰せらるること、しかと心に留めよ。夕刻、香封珠の封印の儀を行う。それまで休むよ。」全て、善きよ。』『皆の者

「はい、今年も長手深芳様の御加護を。全て、善きよ。』『最高巫女様、副巫女様、神器様』

そして、人々は大聖堂を後にした。

今日は、封香奏祭最後の日で、また、長手深芳が香封珠・香啓珠を封印した日もある。

つまり、普通の人にとっては一日目、二日目がお祭りで、三日目は『なにやら得体の知れない、信者しか参加できないお祭り』と認識している。

しかし、信者達にとつては一日目、二日目が前夜祭であつて、三日目こそが本祭りなのだ。

そして、この日は最も清い日である為断食をする。

しかし……千紗のようによく動き回り、まさに『子供はよく食べよく眠る』の見本のような成長期の少女達には、かなり辛いのだった。

千紗は、グウグウ鳴るお腹を抱え、ベッドに横たわっていた。

理由は勿論、『動くとお腹が空く』からだ。

その時には、部屋には千紗以外誰も居なかつた。

他の八人の少女達のうち、真面目で将来ここに残りそうな五人が小聖堂にお祈りに、他の一人が食堂に忍び込みに行き、そこに巫女や規則に厳しい老女達が行かないようにあとの二人が見張りをしていた。

そして由梨亜は、千紗が気付いたら既に居なかつた。

最初はトイレにでも行つているのだろうと思つていたが、さすがに一時間もトイレに入つてゐる訳がなく、どこにいるのか全く分か

らない状態だった。

そこに、コンコンと扉が叩かれた。

千紗は起き上がると言え億劫だったので、寝たまま

「誰……？」鍵は開いてるわよ

と、扉の外の相手に、意味が通じないと承知で問い合わせた。すると、驚いたことに扉が開き、そこには由梨亜が立っていた。

「由梨亜……？」どうしたの？

「千紗、ちょっと来ててくれる？」

由梨亜の顔は強張り、少し蒼褪めているようだった。

「由梨亜、どうしたの？ 頬色悪いよ。少し寝たら？」

「いいえ。それどころじゃないの。私は、やらなくちゃいけないの。千紗、私達がこの世界に来た理由を話すわ。だから……来て」

「えっ？ でも、ここで話すと、迷惑が掛かるもの。それに、誰がいつ来

るか分からぬし……」「いいえ。ここで話すと、迷惑が掛かるもの。それに、誰がいつ来るか分からぬし……」

「そう……。じゃあ行くよ。本当は、お腹空いて、あんまり動きたくないんだけどね」「由梨亜はちょっと笑い、

「そういう所が、千紗らしいわ。私は……そういう千紗が、好きよ

「由梨亜……？」

千紗は、訝しげに答えた。

今まで、『千紗らしい』と言われたことはあっても、『やうじう

千紗が好き』とは、一度も言われたことがなかったからだ。

そして、由梨亜は理由を話すだけではなく、何かを起こすとも……直感的に分かった。

そして、由梨亜は

「うひちよ

と言い、千紗の手を取り、小走りで進み始めた。

## 第四章「仲違いと、そして 真実」3（前書き）

### 警告

今回、あまり直接的ではありませんが、近親相姦の表現があります。またこれ以降の話では、普通に近親相姦が行われ、兄妹で夫婦、または恋人になつていてるという表現も出て来ます。他にも、一夫多妻制や後宮などのハarem的な要素も出て来るので、そういう表現を生理的に受け付けられないという方は、これ以降の話は読まないで下さい。この前文で気分を悪くされた方がいらっしゃいましたら、申し訳ございません。

由梨亜は千紗の手を握り、スタスターと歩いて行った。千紗はどこに行くか分からなかつたが、由梨亜の緊張した雰囲気に圧され、訊けなかつた。

そしてしばらく歩き続けると、由梨亜がどこに向かつて歩いているのか分かつてきた。

何故なら、その道はここ一ヶ月ほどずっと通り続けた道……密室のある棟へと向かう道を通りていたのだから。（一体、何が起こるといふの……？ それに、あたしと由梨亜はどうなるの……？）

と、千紗は考え続けていた。

やがて、客室の中の使われなかつた部屋の一つに着いた。

由梨亜は扉を静かに開け、閉める時もできるだけ音を立てないように気をつけていた。

そんな由梨亜の様子にただならぬ物を感じ、千紗は由梨亜を見つめた。

千紗は、掠れた声で話しつけた。

「由梨亜……とうとう、教えてくれるんだね……」

「ええ……そう。私は……」

そこまで言つと、由梨亜は一息つき、真っ直ぐに千紗を見つめた。「千紗、落ち着いて聞いて欲しいの。そして、全て信じて欲しい……」

「…………うん。分かった」

千紗は、由梨亜の真剣な表情を見て、決心した。

由梨亜は、このような様子で冗談が言える人ではない。

だから、これから話すことが真実であると千紗は知つていたし、直感でも感じていた。

由梨亜は、それでもしばらく躊躇した後、思い切つて、千紗に告

げた。

「……私は……私は、この星の……地球連邦の人じゃないわ」  
千紗は、あまりのことに対する頭が真っ白になってしまった。

覚悟はしていたけれど、そこまでの物とは思いもしなかった。

「由梨、亜……？ ジョ、冗談じや……」

「勿論、冗談じやないわ。私がそんな冗談、言える訳ないわよ。まあ、私もこっちの時代に来て、初めて知ったんだけど……」

「で、でも……由梨亜のお父さんとお母さんは？ どうなの？」

「いいえ。違うわ。あの人は、実の親ではないわ。血が繋がらない……育ての親」

「でも、子供が産まれた記録は残ってるじゃん。それは？ そんなの、偽造しようがないよ」

千紗は必死で食い下がつた。

「ええ、身分の高い人達の出生記録を作るのはそういう記憶がある無理。けど身分の低い人なら遅れても大丈夫でしょう？ 理由だって、名前を決めるのに時間が掛かったと、母体が弱かつた為産まれるまでは油断が許されない状態だったと言えば済むことだしね」「千紗は『身分の高い』という所に引っかかったが、由梨亜の言う身分が高いというのは王族などだと思い直し、それを横に置いて言い返すことにした。

「でも……そんな、人の記憶って換えることなんてできる訳ないじゃない。そんなお話の世界だけでしょう？ そんな都合良くてきたら、世の中何も苦労はないよ」

「いいえ。一つだけ方法はあるわ。……千紗、『魔法』って、信じる？」

「魔法？ まさか、これ……？」

由梨亜は、これまでの記憶を辿るかのように遠い目をした。

「私達が産まれた家を変わったのも、それに伴つて周りの人の記憶もそれに沿つて変わったのも、出生記録が変わったのもここに来たのも、香封珠に願いを叶えさせたのも、全て魔法。それに、宇宙連

盟 この全宇宙の平和と共存を維持する団体の、事実上の長たる役割を持つ国、花鳶国が特許を持つている物は、魔法を使っているわよ。特に、過去を見る去解鏡は、科学技術なんかじやできない代物よ。魔法じやないとあり得ないわ」

由梨亜は重大なことをサラッと言つた為、千紗はそのことに気付くのに時間が掛かった。

だが、数秒後、気付いた千紗は、思わず唾を飲み込んだ。

「由梨亜……そんな、まさか、あたし達って……」

「そうよ。貴女の名前は本条千紗。名前ぐらいなら、後で変えましたと言えばいいのだから、そういうことはどうとでも繕えるのよ。そして、『彩音千紗』という人物は、本来なら、この世のどこにもいない（・・・・・）」

「どういづ、こと……？　どうにづ」と、由梨亜?「…」

思わず千紗は声を荒げた。

「千紗、静かに。つまり、いつにづことよ。『他の居住可能惑星Aで産まれた赤ん坊Bが、地球連邦の本条家に産まれた赤ん坊Cに成り代わり、本条由梨亜となる。赤ん坊Cは子供に恵まれなかつた夫婦Dに産まれた赤ん坊として、記憶を変えられ、彩音千紗となる。そして育ち、赤ん坊Bと赤ん坊Cは大きくなつてから出会い、親友となり今ここにいる』」

由梨亜の真剣な表情と、感情の全く窺えない声音に、千紗は由梨亜が本当のことと言つているのだと、何故かすとんと腑に落ちた。

「じゃあ、由梨亜は？　あたしが、本当はお父さんとお母さんの間に産まれた子供だということは分かつたし、信じる。だけど……だけど、由梨亜は？　一体、誰なの？　誰の子供に産めたの？」

「そうね、何から話せばいいのかしら？　……じゃあ、まず、私は誰なのかを話すね。私は……私は、宇宙連盟の長たる役割を担う花鳶国の王女、花雲恭富実樹よ」

「花鳶国つて、王族のみが日本州や中華州と同じ名前を漢字で表す

国で……確か……！」

千紗は、とんでもないことを思い出した。

そのことは、先生が、教職にある身とは思えないほど嫌悪感に満ちた顔で言つていたから、千紗の記憶に色濃く残つていた。

そして、だからこそ、由梨亞は地球連邦に来たのだと確信した。

「……そよ。花鳶国の王族の苗字は『花雲恭』。そしてね、花鳶国の王……花雲恭家の長には、常に六人の妻がいるの。前王の娘で最も高い王位継承権を持つ王女がなる后<sup>きさき</sup>。他国の王女がなる妃<sup>ひ</sup>。貴族の中で最も身分が高い戦祝・政財・宗賽大臣の誰かの娘や孫がなる妾<sup>めかけ</sup>。地封貴族<sup>ちほう</sup>って言う、土地を封じられている貴族の娘か官吏の娘がなる最貴<sup>さいき</sup>。後宮に勤めている侍女がなる最侍<sup>さいし</sup>。それなりの地位の一般庶民の娘がなる最女<sup>さいじょ</sup>」

由梨亞はずらずらと後宮の女性達の官名を挙げた。

「私は王の娘だけど、妾の娘。だけど、誰の子であろうと女であると、最初に産まれれば第一王位継承者となるの。そして私が産まれてほんの一時間後、妃の娘である異母妹<sup>おとうじ</sup>が産まれたわ。次の日には、後の息子である異母弟<sup>おとうじ</sup>も。順番から言うと私が王位を継ぐんだけど、一時間差の異母妹に変えるべきだと、妃や後見人の貴族が騒ぎ出してね。こっちの方が血筋は上だと。そつちはたかが妾の子ではないかと。そして、自分は妃だが元々他国の王族。この国の『因習』で自分は妃になつたが、自分は王女だつたと。外交関係上の問題となる前に、こつちに第一王位継承権を寄越せと」

由梨亞の顔は、どんどん険しくなる。

「しかも、彼女の性格は過激で、私はあの国にいたら消されていたでしょうね。第一、后と妾は何度も彼女に生命を狙われ、流産されかかつたらしいわ。あと、他の弟妹達のことだけど……」

由梨亞はそこまで言うと、一息をついて言った。

「私が産まれてハヶ月後に最女の長女、十ヵ月後には最貴の長男、一年一ヶ月後に最侍の長男、一年五ヶ月後に后の長女、一年八ヶ月後に妃の長男、一年後に妾の次女、一年一ヶ月後に最女の長男、二

年六ヶ月後に最侍の長女、二年八ヶ月後に最貴の次男、二年十一ヶ月後に後の次女、三年一ヶ月後に妃の次女、三年四ヶ月後に妾の長男が産まれた。だから上から行けば妾の長女、妃の長女、後の長男、最女の長女、最貴の長男、最侍の長男、后の長女、妃の長男、妾の次女、最女の長男、最侍の長女、最貴の次男、后的次女、妃の次女、妾の長男ね。さつき言った理由　あの人妃になつたせいで、私の本当の御父様と御母様は、私を地球連邦に送つたのよ。理由は他にあるでしょうけどね」

由梨亜は、少し寂しげに言った。

千紗はと言つて、あまりに沢山のことを一度に言われたせいで、少し混乱気味だ。

由梨亜はベッドの上に置いてあつた箱を取り上げ、歌うように、千紗には意味の解らない言葉を唱えながら、箱を開けていった。そして、出てきた物を見て、千紗は息を呑んでしまつた。

「それは……『香封珠』！」

「よく覚えてたわね、千紗。そういうえば思つたんだけど、千紗は記憶力がいいのに勉強ができないって嘆いてるのは、勉強を頑張るつてやる気が足りないんじやない？」

「由梨亜！　また話逸らさないでつ！」

また、千紗は声を荒げた。

「あ……またやつちやつた」

「でさ、由梨亜。由梨亜はどうやってそのこと知つたの？　由梨亜、こっちに来てから知つたつてことは、あつちでは知らなかつたつてことでしょう？」

「うん。封香奏祭の準備が始まつてからの朝の祈祷の時間に、情景が浮かんで來たの。それは、あの花鳶國の様子だつた。科学技術は地球連邦とは比べ物にならないくらい進んでいたのにも拘らず、自然が沢山あつてとても美しい星だつたわ。そして、最後に、私が産まれた時の様子、それで起こつた争い、何故私が地球連邦に来たのか、そして、元いた時代に戻る方法が分かつたのは、

封香奏祭の一週間前だつたわ」

「一週間前つて、丁度由梨亞があたしと話さなくなつた時……」

「ええ、そや。といひで、戻る方法は、実は三つあるのよ」

「み、三つ……？」

千紗は、少し動搖してしまつた。

何故なら、常識的に（？）考えて普通はあり得ない状況から戻る方法は、そんなに多くないと思ったからだ。

「一つ目は『富実樹と入れ替わつた少女を生贊として奉げ、その生命力を使い花鳶国へ戻れ』」

「…………あたし？ あたしを、生贊、に？ その……方法を使えば、あたし、死ぬの？」

「ええ。生命力を使うということはその生命を全て使い切るということだからね。ちなみに、それが一番いい方法らしいわ。だけど、私は絶対嫌。生贊なんて時代錯誤なこと、誰がするもんですか。それに、誰かを殺して自分が幸せになるなんてことやりたくないし。特に、それが私の親友の千紗だなんて。そして二つ目は、『何か強力な力を持つ物を、入れ替わつた少女を媒体として力を注ぎ込み、富実樹は花鳶国に戻れ。だが、媒体とされた少女はこの時代に残される。但し、媒体とされた衝撃に耐え切れず、寝たきりになつてしまふ可能性が高い』」

「その方法使つたら、あたし、この時代に取り残されて、しかも一生寝たきりになるかも知れないの？！」

千紗は、驚き過ぎて、かなりの大声で叫んでしまつてから慌てて口を押された。

「大声出さない。一応結界張つてるからあんまり洩れないけど、千紗は規格外よ。絶対に洩れるわ。で、話を戻すけど、私もこの二つの方法は使いたくない。千紗がこの時代に残るのは嫌だし、死ぬのも寝たきりになるのも嫌。だから、三つ目の方法を使いたいと思うの」

「三つ目の方法つて……？」

千紗は、ほんの少しだけ期待を混ぜて言った。

その様子に、由梨亜は微笑して、言った。

「あのね、三つ目の方法は、『富実樹と入れ替わった少女の一人で力を合わせ、強力な力のある物の媒体になり、負担を半分にする。そして富実樹は花鳶国に戻り、入れ替わった少女は現代の地球連邦に戻り、本当に産まれた家に戻る。周りの記憶も、最初からその少女がその家に産まれたという物になり、出生届もそれに合わせて変わる。但しその入れ替わった少女は、最初は富実樹のことを憶えているが少しずつ忘れていき、最終的には富実樹を完全に忘れる。しかし富実樹は覚えている。また、互いを信頼していなければこの方法は使えない。この方法は、互いを信頼していれば最も成功率が高いが、逆の場合成功率は最も低い』」

「つまり、この方法は場合によって最も成功率が高く、最も成功率が低い方法ってことね」

「そう。……千紗、どうする？ 千紗が嫌なら、私はここに残るわ。私は、見たことがない御父様御母様よりも、千紗の方が大事なの」「何言つてるの、由梨亜。そんなの認めないよ。由梨亜は花鳶国の王女で、第一王位継承者でしょ？ そんな由梨亜が戻らなかつたら、花鳶國のお父さんとお母さんがどんなに悲しむか分かる？ あたしは三つ目の方法を試すよ。由梨亜が戻れるのならどんなことでもやる。あたしは由梨亜を信じてるし、由梨亜もあたしを信じてるでしょう？だから今のあたし達にとって三つ目の方法が、一番成功率が高いってことだよ。もし失敗したとしても、由梨亜は戻れるよう祈るよ」

「千紗……」

由梨亜は涙で声を詰まらせた。

「ありがとう。三つ目の方法をやつてみよう。私は、絶対に千紗のこと忘れない」

千紗も、少しだけ瞳を涙で潤ませながらも、精一杯の晴れやかな笑みを浮かべた。

「あたしはどう足搔いても由梨亜のことを忘れるけど、それでも覚えていれる最後の瞬間<sup>とき</sup>はできる限り延ばす。約束するよ。あたしは由梨亜のことを忘れても、心の奥底に、由梨亜のことを……由梨亜と過ごした楽しい時間を刻み付けて、記憶じゃなくて感覚で、絶対に覚えてる」

「じゃあ、始めよっか」

「うん。由梨亜、絶対に、成功させよっね」

「勿論」

千紗と由梨亜は、不敵に微笑んだ。

まるで、今の自分達には、不可能なことはなことでも言つかのよ

うに。

まるで、自分達に残された最後の時間　　『彩音千紗』と『本条由梨亜』として過ごせる、最後の瞬間<sup>とき</sup>を、心に刻み付けるよつに。

二人は、最後の賭けに出た。

互いを想う気持ちのみで……。

「由梨亞、まづ、あたしはびりすればいい？」  
千紗は、真剣な顔をして由梨亞に問い合わせた。

「うん。まず、この香封珠の力を引き出す為には、呪言が必要なの。  
それを言つた後お願いをするんだけど、お願ひの方を聴いて繰り返  
して」

「うん、分かつた」

そう千紗が答えると、由梨亞は香封珠を両手で持ち、目を閉じて  
呪言を唱え始めた。

それは意味の解らない言葉で、千紗は少しボートとしていたが、  
由梨亞が見詰めているのに気付き、その後に言つた意味の解る言葉  
を必死で繰り返した。

「『富実樹の父である花雲恭峯慶、母である花雲恭由梨亞、富実樹  
を花鳶国へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さ』』」

「『富実樹の父である花雲恭峯慶、母である花雲恭由梨亞、富実樹  
を花鳶国へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さい』」

「『その証として、わたくし達の友情の徵を、ここに示します』」

「『その証として、わたくし達の友情の徵を、ここに示します』」

… つえ？

「あれ？ どうした？ 千紗」

「シリシって？ 何？」

「ああ、それは今から言つわ。……『その徵として、わたくし達の  
血を捧げます』」

「『その徵として、わたくし達の血を捧げます』……「う、血なの  
？」

「ええ。『』の力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし  
達にその御力を御貸し下さ』」

「『』の力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし達にそ

の御力を御貸し下さい』『

「それじゃあ、これで血を」

そう言つて由梨亜は、どこで手に入れたのか、今となつてはアンティーケに等しいほど古い短剣を取り出した。

勿論、千紗は見るのも触るのも初めてである。

由梨亜は、自分の右手で短剣を抜き、左手の人差し指にその刃を当てた。

そして、血が出ている左手をそのままにして、右手で千紗に短剣を渡し、それを千紗は同じように指に当てた。

「…………っ！」

思わず、千紗は顔を顰めた。

たかが左手の人差し指から少し血が出ているだけなのだが、それでも痛いのだ。

しかも、今この世の中では包丁にも安全装置が付けられ、百パーセントに近い確率で指が切れなくなっている為、刃物で指が切れるのは本当に初体験だつた。

そして、由梨亜はよく顔を少しも歪めないと感心した。

由梨亜は千紗の手を取り、二人の左手を、人差し指が付くように合わせた。

そして、混ざつて滴り落ちる血を香封珠に垂らした。

そうすると、香封珠は真っ赤なワインの色に輝き、滴り落ちる血を吸収した。

「あっ…………！」

と声を上げた由梨亜の回りを光が取り囲み、こちらの世界に来てから、ずっと解かれていた髪が、室内にも拘らず強く吹いている風に煽られ広がる。

そして、由梨亜の少し波打っていた髪が更に波打ち、フワフワと広がり、色は茶色から栗色へと変わり、その毛先が腰に届くぐらいの長さまで長く伸びた。

そして背が四センチほど伸び、顔立ちは変化し、由梨亜の面影は

少し残つたが、今までの由梨亞とは到底思えない外見となつた。

そして、光の乱舞がやみ、由梨亞は……いや、『花雲恭富実樹』

は目を開けた。

けれど、その目の色も、花鳶国王家の血筋特有の、桃色へと変貌を遂げていた。

そこに現れた女性を見ても、耀太も、瑠璃も、鈴南も、クラスメイト達も、部活の仲間達も、『由梨亞に似た女性』、『似ているけれど他人の空似』といった印象しか受けないぐらい、由梨亞は富実樹になつた途端、印象が変わつてしまつた。

長く付き合つてきた千紗でも、ぱっと見には別人に見えるほどだつた。

「ゆり、いいえ。貴女は……『富実樹』？」

「ええ、この姿の私は『富実樹』よ。そして千紗、貴女も産まれた時の本当の姿で育つっていたのならば、その姿になつていたはずの姿に変えなくちゃね」

『富実樹』はそう言つと、千紗に向かつて、手をかざし掛けようとしたが、その途中で、奇々怪々な音を聞き、ピタッと手を止めた。「ゆ、ふゆ、ふ、ふみ、ふ……」

それは、何とか富実樹のことを『富実樹』と呼ばうとして、どうしても『由梨亞』と呼んでしまつうなのを何とか抑えようとしている千紗の声だつた。

富実樹は呆れて、伸ばし掛けていた両手を腰に当つて言つた。

「千紗、呼びにくいなら、何も無理に富実樹と呼ばなくていいわよ。由梨亞つて呼んでいいわ」

それから、富実樹は千紗を眺めた。

「ここまで外見違うのに同じに思えるなんて、千紗つて凄いわ。私、そんな自信ないし」

富実樹のその呆れたよつた言葉に、千紗は少し唇を尖らせて言つた。

「だつ、だつて外見は変わつても、声の抑揚、顔の表情は全然変わ

つてないし、由梨亜の面影がちゃんと残ってるんだよ？ これで別人だと思えなんて……しかも目の前で変わったのに……無理があり過ぎるよ。少なくとも、あたしはそうは思わない

「だから、そこが凄いのよ。大抵の人は、見た目が変わったら別人だって思うんだもの」

そう言つと、富実樹は千紗の左手を取り、自分の左手と共に香封珠にくつつけた。

そうすると、不思議なことに、流れていた血が止まり、傷跡も癒えていた。

そして、今度は千紗の身体を光が取り囲んだ。

その光がやむと、千紗は香封珠からゆっくりと手を離し、部屋に備え付けてある洗面台の方にゆっくりと歩いて行つた。

そこに備え付けられている鏡を覗き込むと、そこには、千紗とよく似ているが、千紗ではない別人が映つていて。

今まで見てきた、自分の顔とは似てい。

それは認めるが、でも、違う。

まず、髪の色が墨を流したような黒から薄茶色へと変わり、顔立ちも、耀太や瑠璃と似た少し彫の浅い、色白でほつそりとした小顔へと変わっていた。

だが、よく見知った人物が見れば、

「髪染めた？」

「お化粧した？」

「プチ整形した？」

などと訊かれるほどしか変わっていなかつた。

「由梨亜、これつて……」

千紗がそう呟くと、いつの間にか斜め後ろから鏡を見つめていた富実樹が、自分の姿を苦笑しながら眺め、こう答えた。

「ええ。それが、貴女の本当の姿なのよ、千紗。私がこれから先、この姿で暮らすように、貴女もその姿で暮らすことになるわ

そう言つと、富実樹は

「千紗、続きを始めるわよ。私達は、これから『花雲恭富実樹』と  
して、『本条千紗』として、行動しなければならないから」

「うん、由梨亜」

一人は香封珠を取り上げ、二人の両手で包み込んだ。

すると、千紗の頭に富実樹の声が流れ込んだ。

『千紗、これから最後の呪言を唱えるから、それを合図が出てから  
口に出して唱えてね』

『うん。分かった』

『今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しく元いた場所へと戻  
し給えよ』。覚えた?』

『うん。分かった。あたし、記憶力は本気になれば凄いんだもの。  
言えるわ!』

『じゃあ、いくよ。三、二、一!』

『今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しくもといた場所へと  
戻し給えよ』つ!』

一人がそう叫んだ瞬間、香封珠が今までになく、直視したら目が  
瞑れてしまつかも知れないほど、金色と銀色が混じりあつた色に輝  
き、千紗は思わず目を瞑つてしまつた。

「千紗……」

富実樹の静かな声が聞こえ、千紗が目を開けると、そこはこの世  
界に来る時に通つた、あの様々な色が氾濫しているトンネルだつた。  
一つ違うのは、来る時は抗いようのない力で引っ張られていたは  
ずが、今は浮くようにして富実樹と一緒に立つてゐるということだ。  
そして、何にも引っ張られてなく、まるで無重力の中に立つてい  
るように、けれど、床の上に立つてゐるよう足元は安定してゐた。  
「何? 由梨亜。そういえばさ、本条由梨亜と彩音千紗の時は、彩  
音千紗の方が身長高かつたけどさ、花雲恭富実樹と本条千紗だつた  
ら、花雲恭富実樹の方が身長高いんだね」

「でも、千紗の身長は大して変わつてないわよ。私が大きくなつた  
だけ。つと、今度は千紗が話すらしたわね。……ねえ、千紗。ここ

つて何だと思う?」

「……? 分からない。由梨亞は分かるんじゃないの?」

「いいえ、分からないわ。ただ、一つだけ分かることがあるとすれば、ここは亜空間だということだけね。私達が生きている通常空間でもなく、異質な異空間でもない……』『亜空間』」

「由梨亞……」

「だからね、私、そういうことを知りうると思うの。地球連邦では、とっくの昔に魔法は存在を否定され、迫害されて細々と消えて逝ったわ。私達がさつきまでいたあの時代……あそここの時代が、『魔法』と言う名称を使わなくても、そう言う『力』をまだ信じている人達のいた、最期の時代なのよ。あの何十年後かには、そういう魔法を信仰する宗教は全てなくなっている。貴族制の、王権制の、復活とともに。だけど……花鳥国にはまだ魔法が残っているの。だから、私はそれを学ぶつもりよ。私は今の所、それが夢なの

「由梨亞……嬉しそう! 良かったあ……最後に由梨亞のそんな顔を見られて」

千紗は、本当に……本当に嬉しそうに、微笑んで、言った。

「千紗……私も、最後に千紗が嬉しそうなの見れて、本当に良かつた」

「でも、由梨亞……」

千紗は、先程とは対称的に、哀しそうに目を伏せて言った。

「これで、お別れなんだよね。もう……これから先、会えないかも知れないんだよね」

「大丈夫よ。私、王宮に閉じ籠るばかりの王族にはならないから。だから二コースで私のこと見れるかも知れないし、それに王族が各国を訪れるのも外交関係上あるでしょ? まあ、それで何かに巻き込まれて死んでしまつたとしても十四人も弟妹がいるんだもの。問題ないわ。まあ、私は地球連邦だけじゃなくて色々な国を訪れるつもりなんだけどね。そして地球連邦に行つた時つて、大抵有名な地方を訪ねるでしょ? それなら地球連邦五大経済地方のその三の位

置にいる日本州を訪ねても不思議じゃないから、私が日本を訪れる  
こともできるし、その時偶々会えるかも知れないじゃない！　だか  
ら、また会えるかも知れないよ！」

「……由梨亞。ありがとう。あと……あの、ね、由梨亞。これ」

と、不意に千紗が話し始めた。

富実樹は少々困惑しながら訊き返した。

「何？　千紗」

「これ、あたしがこの前あげた誕生日プレゼント。前、ここに通つて  
行つたでしよう？　で、その後病院で目覚めた時、あたし、これ握  
つてたの。返すタイミングが掴めなくて返せないでいたけど、これ  
で最後だし……だから、これ、返すね」

千紗はそう言い、富実樹にそれを手渡した。

「千紗……ありがとう。本当に……本当に……！」

「あたしは由梨亞の姿をニュースとかで確認できるかも知れないけ  
ど、由梨亞はもっと難しいでしょ？　それに、あたしの方は次第に  
由梨亞のことを忘れて、由梨亞は永遠にあたしのことを憶えている  
……だから、これを見てあたしを思い出して」

千紗がそう言い終えた途端、一つの大きく輝く光が降り、二人を  
包んだ。

「時間切れなのね……千紗、私、千紗に逢えて本当に良かつた  
……ありがとう！」

「それは、じつちの台詞だよ。由梨亞に逢えて本当に良かった。あ  
りがとう、由梨亞！　花雲恭富実樹としてのこれから的人生を、精  
一杯生きてね！……またね、由梨亞！」

「千紗も……千紗も、本条千紗としての人生、楽しく過ごしてよ！  
絶対に！……またね、千紗！」

その言葉を口にし終えた途端あまりにも眩し過ぎる、爆発したか  
のような光に包み込まれ、何も見えなくなり、また、何もかも分か  
らなくなつた。

しかし、最後の最後まで一人の胸の内に抱えていた想いは一緒だ

つた。  
互いに、ありがとう、出逢えて良かつたと感謝する気持ちを抱  
えて……。

## 第五章 「時と季節（ハル）を越えて……」 2（前編）

途中でいじめの表現があるので、苦手な方は「注意下せ」。

千紗が気付くと、そこには見慣れない天蓋があつた。

それ以前に、身体が柔らかな布団の上に横たわっていることに途惑いを感じた。

（一体……ここは、どこ……？ 確かあたし……千年前に、飛ばされて……色々あって……それで……。そうだ。香封畏院に入つたんだつた。そして……由梨亞と話さなくなつて……封香奏祭があつて……。それで、その、最後の日に……由梨亞はつ……！ 由梨亞が……本条由梨亞じゃなくて、花鳶國の王女様、花雲恭富実樹……で……あたしが、彩音千紗じゃなくつて、本条、千紗で……！ そうだ。由梨亞……由梨亞はつ……）

ゆつくりと身体を起こし、由梨亞を捜して辺りを見渡すと、鈴南がシーツの上に頭を乗せて眠つていたのに目が留まつた。

千紗は、少し焦つた。

鈴南は本条家に仕えている召し使いだが、本条家は上流貴族の家柄。

たかが召し使いといえども、普通、庶民は本条家の人の目に届く所には雇わない。

庶民は、庭の手入れや召し使いの身の回りの世話をしたり、屋敷を掃除する機械を手入れしたり、台所仕事をしたりする、本当の端者なのだ。

本条家の令嬢に仕えるならば、最低でも下流貴族の娘なのである。なのに、人前で寝てしまうなんて……それも、自分の仕えている人の前で寝てしまうなんて、とっても恥ずかしいことだ。

少なくとも、自分の知つている限り、鈴南はそう考える人物である。

一瞬、千紗は鈴南を起こすことを躊躇つたが、思い切つて起こすこととした。

「鈴南……起きてる?」

千紗がそう呼び掛けると、鈴南は一瞬ビクッと身体を震わせ起きた。

「お、お嬢様……お……お目覚めですか? これは、申し訳ありませんでした」

鈴南はそう恐縮して謝った後、

「千紗様、少々お待ち下さいませ。今、旦那様、奥方様、侍医をお呼びして参ります」

鈴南はそう言つて慌てて部屋を出て行つた。

余程恥ずかしかつたのだろうか、可哀想なことに、顔が真っ赤である。

千紗はその間に、鈴南に気を取られてあまり詳しく述べ見なかつた部屋を見渡した。

千紗は、自分の記憶の中にある由梨亞の部屋の記憶との部屋を照らし合わせたが、やはり、これは由梨亞の寝室だ。

今の千紗の状態から見て右側にある扉の向こうは由梨亞の居間のよくな所で、千紗が遊びに行くとその部屋でよく遊ぶ。

その更に奥にある扉の向こうは、勉強部屋のはずだ。

いつも、由梨亞の家に遊びに行くと、沢山の部屋が由梨亞一人の為にあることに、呆れ半分、羨望半分の思いを抱えていたことを、はつきりと思い出す。

(……良かつたあ……まだ、由梨亞との記憶を……彩音千紗としての、あたしの記憶を、失つてない……)

その時、鈴南が侍医と由梨亞（ではなく千紗）の父と母を引き連れて戻つて來た。

「千紗様、具合が悪い所はありますか?」

そう侍医が問い合わせてきて、千紗はようやく自分の身体がどうなう状態なのかを確認した。

大した痛みはないが……何だか、よく分からない。

「えつと、少し眩暈がするような……グラグラするような……変な

感じです」

千紗が正直に言つと、侍医はあつさつと言つた。

「それは、お腹が空かれたからでしょ。ですが、まだ消化のよい物を食して下さい。少しずつ元に戻つてこくでしょ。だから、それまでは我慢して下さー」

侍医は、由梨亜（ではなく千紗）の父と母に言った。

「薬を処方しておきますので朝と夕に飲ませて下さい。あと無理に起こして疲れさせないようにお願ひ致します。それでは鈴南殿、薬を調合してお渡ししますのでこちらへ」

侍医はそう言つと鈴南と一緒に部屋を出て行つた。

「千紗……

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の額にかかっている髪を搔き上げ、優しく、につこりと微笑んだ。

「千紗、貴女は一日、眠り続けていたのよ。夏休みが明けたその日に、貴女、一人で、屋上でお弁当を食べていたでしょう？　その時、貴女は倒れてしまつたのよ。貴女が倒れたと聞いて、本当にびっくりしたわ。心臓が止まつたのかと思ったのよ」

「千紗、お前は起き上がるようになつたが、まだ本調子ではない。無理せず寝ていなさい。なにか欲しい物があれば、言つてくれ。できる限りのことは叶えてやるから」

「いいえ。何もないです」

千紗がそう答えると、由梨亜（ではなく千紗）の父は

「そうか。では、何かあつたら鈴南に言へ」と寂しそうに言い、部屋を出て行つた。

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の枕元に座つた。

「千紗、もうしばらく眠つていなさい」

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗を愛おしそうに撫でて、子守唄を謡い始めた。

千紗は、

（十三歳になつたのに子守唄か……）

と少々呆れながらも、その手の感触を楽しんだ。

千紗の（実は養）父と（実は養）母は共働きで、幼い頃の記憶は、ほとんど保育所で遊んでいた記憶だ。

物心がついてから、（実は育ての）両親に甘えた記憶は少なく、親としての優しい手をほとんど知らないのだった。

しかも、千紗の（実は養）父が死んでからは、（実は養）母は家計を支える為に今まで以上忙しくなり、休みもほんの少ししか取れなくなつた。

そして、その手触りを楽しんでこるつむこと、千紗は、深い眠りへと引き込まれて行つたのだつた……。

千紗は三日も経つと、元通り元気になつた。

千紗は動き回れるようになると、屋敷中の絵や写真、今まで撮つた成長記録などを全て確かめたが、恐ろしいことに、全て由梨亞の代わりに幼い千紗が写つていた。

最初は記憶を探つても何もなかつたが、しばらく時間が経つうちに、その光景が浮かび上がり、その頃の、自分の本当の記憶が思い出にくくなり、千紗は鳥肌が立つのをためためぞと感じた。

「ど、して……」

そう、声が漏れるのを、抑えることができなかつた。

（あたしは……由梨亞の記憶を、少しずつ失つていくの？　だんだん？　少しずつ？　だつたら……いつそのこと、最初から、全部奪えれば良かったのに……！）

そう思つことを……抑えることが、できなかつた。

千紗は田舎めてから一週間後、学校へ行くことになつた。

そして学校へ行つた千紗が教室のドアを開けると、喜色満面の並木咲が振り返つた。

「あり、千紗様！」

そう言うと、驚異的な速さで千紗の前まで来て、その勢いに、思わず千紗は一步退いた。

「千紗様、お加減は宜しいですか？　あたくし、千紗様が学校に来られるようになつて本当に嬉しく思います！」

咲はそう嬉しそうに言つと、嫌そうに後ろを振り返つた。  
「おお、嫌だ。千紗様、ご覧下さいな。この清潔な学校に黴菌があります。お前達、何をして居るの？　すぐに追い出しなさい。千紗様にも、このあたくしにも、この黴菌と同じ空気を吸わせるおつもりつ？　お前達庶民とは違い、大貴族である千紗様はとても繊細なのですよつ？！」

その言葉に、千紗は由梨亜が転校してきたばかりの頃のことを思い出し、嫌な気分になつて眉を顰めた。

けれど、咲に一喝されたクラスメイト達は、咲に目を付けられるのが嫌なのか、続々と動き出した。

「おい、香並、立てよ」

「そうよ。第一、咲様と名前が一字も被つてるなんて、目立ちたがりにもほどがあるわ！」

みんなにいじめられている香並都樹は、優しく大人しい気性の少女である。

だが、そこが咲の瘤に障つたのか、都樹は咲にとつて、千紗以来である一年振りのいじめのターゲットになつていた。

都樹は、みんなに囲まれ、怯えていた。

「おい、何か言えよ」

「えーっ。黙秘権かよ」

「つづーか、香並にそんな権利なんてあんのかあ？」  
「って言つたか、香並に人権つてあつたつけ？」

「ないない、絶対ない！　って言つたか、香並つて、人間だつたつけ

か？」

「ああ、こいつは黴菌だ！」

「ええ、その通りです！ これからはみんなもそれを黴菌と呼びなさい！ それは人でもないし、名前もないのですから！ 力でもつて、このことを思い知らせなさい！」

咲の言葉にクラス全員で笑い、都樹の持ち物を全て都樹に向かって投げ付け、殴り蹴る。

その笑いには、咲は気付いていなかつたが、恐怖が滲み出していた。本当はいじめたくないけど、言い返したり、参加したりしなかつたら、自分がいじめられるから

自分だけはいじめられたくないし、人身御供が他にいるなら別に、それで

そういう思いが、このクラスを覆っていた。

しかも、このいじめは、傍観者という者が存在できない。

もし傍観していたのなら……例えば、みんなでいじめている人物を取り囲んでいる時、もし一人だけ取り囲まなかつたら、今度はその人がいじめられる。

もし全員でやらなかつたら、咲が教育委員会に泣き付き、全員、退学か停学となるだろう。

先生達も、怖いから言いなりだ。

千紗には、その思いが痛いほど分かる。

千紗も、一年前までいじめられた一人だつたから。

その思いを、まざまざと付けられた張本人だから。だが、だからと黙つて無視する訳にはいかない。

千紗は、都樹を庇うつもりだつた。

由梨亜が千紗を救つてくれたように、今度は千紗が。

「あんた達つ！ もう、好い加減やめなさいよつ！」

「千紗……様？」

咲は呆然としながら言つた。

恐らく、五年生の時に転校して來た『本条由梨亜』と、それまで

いじめられていた『彩音千紗』という存在が消え、五年生で転校して来た『本条千紗』という存在のみになつた為、咲が千紗をいじめていた事実はなくなり、勿論『本条家の令嬢』に咲がいじめを咎められることもなく、いじめが再発したのだろう。

その事実に苛ついた千紗は、途惑う咲を丸つ切り無視する。

「あんた達ねえ、そういう風に嫌々いじめるのって楽しい？ 本当は嫌なんだけどつて思つてるの、ものすつごく分かるよつ？ そうやつても、咲が喜ぶだけ！ もう、こんないじめなんてやめてつ！」

千紗はそう叫ぶと、都樹の所に行き、手を差し伸べた。

「大丈夫？ 都樹」

「すみません……ありがとうございます、千紗様」

「やめてよ、敬語なんて。他のみんなも」

千紗は、周りをグルッと見渡した。

「今後一切、いじめはやめて。もしあたしの田の畠かない所で咲がいじめいたら、すぐにあたしに言つて。……咲」

そう言つと、千紗は咲に向き直る。

「今後一切、いじめを禁じます。それがあたしの耳に入つたら、どんなことになるのか分かつてゐるわよね？ 本条グループには、そういうようなことをやれるだけの力はあるわよ」

千紗が脅しを掛けると、咲は顔を歪め立ち去つた。

「千紗様……本当に、ありがとうございます」

都樹が千紗に向かつてお礼を言つと、

「そんな大したことやつたつもりはないわ。だから、お礼なんて必要ないわよ」

「ええ。分かりました、千紗様」

「あ、そうだ。あたしのこと敬語で呼ばないでね。絶対に」

「そ、そんな……本条グループのご令嬢を……」

「だから、そういうことを気にしないでね！」

千紗が強引に押し切ると、都樹は顔を僅かに引き攣らせながらも、何とか言つた。

「は……う、うん！ ち、千紗、ちゃん！」

千紗は、嬉しそうに微笑んだ。

そしてそれを見た都樹も、ぎこちないながら微笑み返した。

その日、千紗は感覚的にはかなり久し振りに部活へと行った。

「あ～っ！ 大丈夫？ もう何ともないの？」

「あ、はい。ご心配をお掛けしました……」

「ううん、そんのは大丈夫よ。でね、その……夏休みにやつた、あの百不思議のことなんだけど……」

「やっぱり、悪戯ですか？」

千紗にズバツと切られ、かんな柏奈は絶句した。

「うん……そう。気付いてたの……。何かがっかり。からかいようないじゃない」

「当たり前じゃないですか、柏奈先輩」

千紗と同級生の子が、ガツと近寄って来た。

「ね、千紗。あたし達がやつた時に見付けた、この指輪。やっぱり、先輩の悪戯だつたんだ。で、千紗が学校休んでちょっと経つてから、先輩達がネタばらしつて言つて、冗談だつたつてばらしたの」

その言葉に、千紗は笑つて言つた。

「やっぱりそうか……なんか、怪しいって思つてたんだよねえ……。ね、あたし達が見付けたのつて、ほんとにその『指輪』だつた？」

「うん。そうだよ？ 何言つてんの？」 千紗

その言葉に、千紗の顔は笑つていたが、背筋に冷や汗が流れるのを抑えることはできなかつた。

「御久し振りに御目に掛かります、陛下。この度、わたくしを花鳶かおり国へ連れ戻して下さいましたこと、本にありがたく存じます」

「富実樹第一王女よ、大きくなられ、再びこの国に御戻りになられたこと、喜び申し上げます。これからは、この国の王女として、また跡継ぎの娘として、そして弟妹達の姉として振舞うよう、御願い致します」

そう言つたのは、一段高い所にある玉座の足元に控えている、一見しただけでかなりの大貴族だということが分かる男性である。

そして、その玉座に座つた威風堂々とした男性の足元に、略式ではあるが一国の国王に、そして自らの父に、公式な場で挨拶するのに相応しい礼をした、美しい少女がいた。

ここは花鳶国かおりの王宮、カサミアン宮の玉座の間。

男性の足元にいるのは、生後一ヶ月足らずでこの国を離れ、そして十三歳になつた今戻つて来た、花鳶国第一王女にして第一王位繼承者である、花雲恭富実樹。

そして、玉座に座つている男性は言つまでもなく、ここ花鳶国かおりの国王にして富実樹達十五人兄弟の父である、花雲恭峯慶。

そして、左右の長机に座つているのは、普段から王族との接触が許されている大臣級の貴族や官吏十数人と、庶民からの選挙で議会の委員になつたうちの代表五名。

そしてその短い対談が終わり、富実樹と峯慶は、一緒に後宮の峯慶の部屋の一つに行つた。

部屋に着いてから、峯慶は富実樹に向かつて尋ねた。

「富実樹……本当に、良かつたのか？ 戻つてきて。来年でも良かつたのだよ？ いくら向こうにいても、こちらに戻つて来るその時は、変わらなかつたのだから……」

「……そこには、仰らないで下さい。私も、後悔していますから

……

「では、何故そうしなかったのかな？私の娘よ」

峯慶が茶目つ氣を出してそう尋ねると、富実樹は少し唇を尖らせて答えた。

「あれ以上、千紗が<sup>ちさ</sup> 私と入れ替わった人が、眞実から押し出されているのに耐えられなかつたんです。それに、知らせてしまつたら、私も千紗も、どこかぎこちなくなつてしまつます。それだったら、告げたらすぐに戻る方が良かつたんです」

「そうか……それでは、お前はこれからこの国の地理歴史、王族としての立ち居振る舞い、言葉遣いその他諸々を学びなさい。丁度よい教師もいることだしな」

「御父様、丁度よい教師とは、どなたですか？」

「今呼んで来るから焦らないように。由梨亞妾<sup>ゆりあきや</sup> 富瑠美<sup>ふるみ</sup>を呼んで来なさい」

由梨亞妾

富実樹の母は、その『富瑠美』を呼びに行つた。

しばらくして、ノックの音がして、由梨亞妾と、その『富瑠美』だと思われる、富実樹と同じくらいの少女が入つて來た。

「失礼致しますわ。御父様」

(御父様……?)

富実樹は嫌な予感に駆られたが、見事にその予感が的中した。

「富実樹、これは深沙祇妃<sup>みさきひ</sup>の娘で第二王女、第一王位繼承者である富瑠美だ。つまりは、お前のすぐ下の異母妹<sup>いもうめい</sup>だよ」

そう紹介された富実樹の異母妹の富瑠美の髪は、富実樹と似てふわふわと波打つていたが、金糸に勝るとも劣らない見事な金髪で、目は富実樹と同じ桃色だが、色は富実樹よりも濃い色で、背は富実樹より少し小さい。

そして、髪の色、瞳の色、それに身長を見ないことにすれば、瓜二つであつた。

「御異母姉様<sup>おねえさま</sup>、御初に御目に叶いまして、わたくし、本当に嬉しう御座いますわ」

「貴女は……私の異母妹の……富瑠美様？」

富実樹はどこか呆然としながら問い掛けた。

だが

「それはいけませんわ。御異母姉様」

いきなり、富瑠美がきつぱりと言い返して來た。

「まず、一人称は『私』ではなく『わたくし』と仰って下さい。それにいくら母親が妃と妾ではあっても、第一王位繼承者、及び第一王女は貴女様で御座います。つまり、わたくしの異母姉に当たります。ですので、わたくしのことは富瑠美と御呼び下さいませ。それから、絶対に他の兄弟に様付けをしないで下さい。実の兄弟で、それも貴女様の方が格上であらせられるというのに、それは大変可笑しいことですわ。誰に何度も訊こつとも、誰もがそう返すばずに御座います」

「きなりどきつぱりと言われ、思わず目を白黒させていると、苦笑しながら峯慶が言った。

「富実樹、富瑠美はお前の異母妹ではあるが、お前を裏切る可能性の少なく、そして最も地理歴史儀礼祭典等に通じている。これから、お前は富瑠美について、様々なことを学びなさい」

「は、はい……分かりましたわ。御父様」

それから、

（どうして……富瑠美は、あの深沙祇妃の娘なのに……）

と不思議に思い富瑠美を見ていると、富瑠美は苦笑して答えた。

「御異母姉様、このことを不思議に思うのも、無理は御座いませんわ。わたくしは、御異母姉様とはほんの一時間差で産まれ落ちましたが、そのたつたの一時間で、わたくしは第一王位繼承者にはなれませんでした。それに、わたくしの御母様 深沙祇妃は失望して、御母様付きの侍女侍従共々、生後間もないわたくしを育児放棄してしまったのです。早い話が……そうですね、ボイコットですわ」

「ボイ、コット……？」

富実樹の問いに、富瑠美はあっさりと答えた。

「ええ。第一王位継承者とは言え、王位継承権を持つ子供が死んでしまつては堪りませんから、御父様が、わたくしを御母様から無理矢理取り上げて、由梨亞姫に預けたのですわ。そして名付けもして頂きました。ですから

「ちょ、ちょっと待つて。貴女の御母様……深沙祇妃は、名前も付けずにボイコットした訳？ それって大事じゃない！ 誰も、何も言わなかつたの？」

咄嗟のこと、富実樹は思わず敬語を使うのを忘れてしまつた。

だが、その途端……富瑠美の冷たゞい視線が、富実樹を射抜いた。

「それでは、後で言葉遣いの猛特訓をさせて頂くといふことで……その地を這うよづな低い言葉に、富実樹は思わず一步後退つてしまつた。

「まあ、そうですわね。それどころか、御母様の後見人は、皆それに便乗してしまつたわ。しなかつた方も、いるにはいましたけれど……。ですが、他の方々は、わたくしが第一王位継承者であること、そして阿實亞あみあじょ女に懷妊の兆しがあることから、御父様と由梨亞姫以外からは、本当に無視されましたわ」

「へ、へえ……」

思わず、富実樹は感心してしまつた。

「そうですね。こんなことを話している場合では御座いませんでした。それでは、早速授業の方を始めたいと思います。御異母姉様、授業のことですが、この国についてどのようなことを御存知ですか？」

「はい。えつと、この国が宇宙連盟の長的役割を持っていることや、地球連邦が他の星の存在を知らなかつた時の日本国との関係など、基本的なことしか……」

「そうですか。では、地理歴史から始めましょ。また、それらの合間に縫つて言葉遣いと儀礼作法を。それでは地理から始めましょ。こちらへ。あと、昼餐は御食事のマナーの練習です。やることは沢山ありますわ。それと、ことによつては他の弟妹達の力も借り

ますわよ」

「は、はい……」

さつやと歩き始めた富瑠美の後を慌てて追つて行ったが、富瑠美が滑るように歩いていたのに對し、富実樹はそれと逆だった。

そして部屋に残っていた富実樹の父母は、富実樹の

「どうしたらそういう風に歩けるの……？」

と言つ弱音を聞き、笑い出してしまつた。

峯慶はゆつたりと重々しく、由梨亞妾は軽やかに。

「まあ、なんて面白いこと……」

由梨亞妾が言つと、峯慶も言つた。

「ああ。いつも言つ子供達に育つとは、正直言つて、あの時は思つてもみなかつた……」

「そうですわね。本当に、予想も付かないことばかりで、面白い御座います。……そう言えば、陛下。富瑠美があの誓約書を書く」と、深沙祇妃は御承知なさいましたのか？」

「ああ、それか。勿論、氣が狂つたかのよつに騒ぎ出したよ。だが喚いている隙に富瑠美がさつさと署名して、それでことなきを得た。さすがは、富瑠美だ。其方が育てたことはあるな」

「……ええ。まあ、そのことは置いておくとして……それは、深沙祇妃は騒ぐでしょうね。富実樹に何もない限り、王座を狙わないといつ誓約書だなんて……」

「ああ……。そうだな」

峯慶は小さく笑みを洩らして言つたが、ふと、真顔になつて由梨亞妾に問い掛けた。

「話は変わるが、あの二人は、本当に自分の名前の意味を解つてくれるだろうか。我々が、心を込めて付けた名を……」

峯慶のその溜息のような言葉に、由梨亞妾が風のように咳いた。

「富実樹は、『富や名声を陰謀などによつて手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること』、樹木を見てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実つた果実を、单なる食糧としてみ

なし、感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここ今まで育つてき  
たその生命力と大地の恵みに感謝する心』を、富瑠美は『心を富ま  
せ、豊かな心を持つように、高貴さを表すラピスラズリ 瑠璃の  
ように気高い心を持ち、それでいて弱者を思いやる気持ちを持ち、  
宝石のように美しく、きらきらと光る美しさ、心を持つように』と、  
わたくしが付けた名のことですね?』

「ああ。……富実樹は解ってくれるかも知れないが、富瑠美は、真  
実解るとは思えないな。あの深沙祇妃の血を引いているのだから、  
やはり似る所はある。富瑠美は、物事を深く追求せずに、上辺だけ  
を飲み込んで行動することが多々あるからな……。富瑠美には、こ  
の意味が、解らないだろう。……さて、そろそろ行かなければ。処  
理しなければならない書類が山ほど残っている」

「いってらっしゃいませ、陛下。ですが、わたくしの記憶違いでな  
ければ貴方様は、書類の処理は、他の御兄弟と比べて、凄まじい速  
さでこなされていたと思いますが……」

由梨亜姫は、茶目つ氣たつぶりに含み笑いをし、華慶も同じよう  
に笑い返してきた。

どうやら、この夫婦は茶目つ氣がたつぶりとある、似た者夫婦の  
ようだ。

「それは、他の兄弟が少し遅くて、私が少し速かつたということだけだよ」

そう言つと華慶は部屋を出て執務室へと向かい、由梨亜姫は自分  
の部屋へと向かった。

## 第五章「時と季節（わたり）を超えて……」 3（後編）

今回の話で、第7部はよつやく中盤まで進みました。ここまで読んで下さって、ありがとうございます。

次話からは、少し時間が飛んで四年後になります。それぞれ、本来の居場所に戻った一人、特に富実樹（由梨里）の方が、どんな活躍を見せて、どんな選択をするかに焦点が当たることになります。富瑠美以外の富実樹の兄弟達も登場する予定ですので、お楽しみ頂けたらと思います。

この話はまだまだ続きますので、ビックリ直しくお願いします。

それから、四年近くの月日が流れた。  
現代に戻つて来ておよそ一年半後、千紗は高校も公立校へと、両親の反対を無理矢理押し切つて入学した。

そこは、大学への特に有名大学への進学率がとても高い学校で、しかも偏差値も平均が七十近くあるというとても頭のよい学校であり、いくらお嬢様でも簡単には入学できない、実力で伸し上がって来た学校なのだ。

なので、耀太も

「公立校……進学校……うん……」

と唸るしかなかつた。

進学校と言うことは跡取り娘が優秀であるということを証明できるが、私立ではなく公立、しかも男女共学という所が躊躇わせるのだつた。

だが、結局は千紗が勝利したのである。

しかし、三人の婚約者候補の問題があつた。

千紗はこの婚約者候補達と会いたくないから、高校も部活に入ろうと決めていた。

そしてどうせなら一番忙しい部活に入ろうと思い、体験入部した文化部（運動部だけは何があつても絶対に駄目だと言われたので）の中では、レベルが高く忙しそうだった吹奏楽部に入部し、ホルンを担当した。

そして、意外と千紗には才能があつたらしく、中学から続けていける人には及ばずとも、そうでない一年生の中では一番上手くなつた。三年生が引退した頃には、中学校から続いている人と並ぶぐらいまで上手くなつた。

そして一年生になり、全地球コンクールのコーラシア大陸大会で好成績を修め、しかしながら連邦大会には出場できずに先輩達は引

退して行つた。

先輩が引退した後、千紗が部長となり部活を引き継いだ。それでも耀太と瑠璃は婚約者候補を諦めず、しつこく誰が一番いいかを訊いて<sup>ほせよつ</sup>来た。

千紗は本条家の令嬢として相応しい身のこなし方を身に付けていつたが、それと同時に由梨亞のことを少しずつ忘れていく、一年経つた頃には完全に忘れた。

たまに訝然としないことや、寂しく感じることがあったが、小さなことだつた為、そのことすら忘れてしまつた。

富実樹は、一年間富瑠美達富実樹に好意的な弟妹達から時に厳しく、優しく、厳しく、厳しく、厳しく色々なことを教えてもらい、他の弟妹達に追い付くぐらいまでになつた。

そして、富実樹が戻つて来て一年後の年、<sup>ほせよつ</sup>峯慶は身体の調子を崩してしまつた。

長い間ベッドから降りられない身体になつてしまつたのだ。

なので、峯慶は譲位して病氣の治療に専念することになり、多数の反対があつたものの、第一王位繼承権を持つてゐる、この国に来てまだ一年と少しの富実樹が女王として王位に即くことになつた。富実樹はただ純粹に父を心配し、王位に即いたからには、他の弟妹達と力を合わせて國を護つて行こうと考えていた。

そして、富実樹が王位を継いで一年間が過ぎ、三年目が始まつて半年が経つた頃、この花鳥国では何かが起ころうとしていた。

そこでは、官封貴族と呼ばれてゐる、官位を封じられている貴族、官吏、成人した王族が大会議室で討論会を開いていた。

「陛下、地球連邦は陛下が御育ちになられた地でおられます。ですが、そのような些事に心を傾けるのではなく、寛大な御心を御持ちになられて下さいませ」

「だから、そういう意味ではありません。貴方は地球連邦を、武力を持つて従わせ宇宙連盟に加盟させ、宇宙連盟の長である花鳶国の言つことを聞かせようと仰いますが、わたくしはその方法が間違いだと言つているのです。武力ではなく話し合いを持って連盟に加盟させないといけません。武力を使つたら、必ず死者が出ます。それは、誰かの親であり、兄弟であり、子供であるのです。誰かが死んだら、誰かが悲します。そして、悲しみは恨みを呼び、そして、復讐へと発展する可能性が高くなります。そして、復讐はまた新たな悲しみと恨み、復讐を呼び、グルグルと回り続けます」

富実樹は、唇を引き結んでぐるりと辺りを見渡した。

「ですが、その原因となることを起こさなければそのようなことは起こらず、復讐自体なくなります。そして、そのようなことがあるのならば、どこかで断ち切らなくては国と国との関係が成り立ちませんわ。そして、一度亀裂が入つてしまつた関係は戻りがたい物です。だから、そのようなことを、他の方法があるにも拘らず行使することはなりませんわ。絶対に。それに、宇宙連盟の存在意義は、全宇宙の平和と共存を維持すること。武力などを使ってしまえば、その理念に真っ向から相反することになりますわ。何か反論は御座いますの？」

富実樹の呼び掛けに、富瑠美派の貴族は黙り込んだ。

反論しようにも、富実樹のあまりにも上手い弁舌に、上手く反論する術が見つからないのだ。

だがそんな状況の中で、富瑠美は何と富実樹の言葉遣いを注意しました。

「陛下、『だから』ではなく『ですから』と御言いになられなればなりませんわ。また、『ずっとグルグル回り続けます』も、できれば『半永久的に悲しみ、恨み、復讐と連鎖するのです』に直した方が宜しいかと。一年間の特訓が足りなかつたのかしら……？」

「いいえ、充分足りておりますわ！　ただ、熱心になるとつい……」「なるほど。では、熱心になつて言葉遣いをきちんとするよつ常に

御心掛け下さいませ。それではもう意見は出ないようなので、本日はこれでお開きということで宜しいですか？」

「富瑠美が立ち上がりつてそう言つと、皆が頷いた。

「それでは、明日の総票会で、この議題の結果を「  
総票会とは、一定年齢に達した王族、官封貴族、地封貴族、官吏、  
宗教家、学者が投票する物である。

富実樹がそう言い、討論会は終了となつた。

富実樹は早々と書類を自分の親族の貴族に預け、大会議室を立ち去つて行つた。

富実樹は自らの部屋へと戻り、長椅子の上に、バフンと倒れ込んだ。

「もう、嫌になつてきちゃうよ……」

「何が嫌になるのですか？ 富実樹御姉様。それと、言葉遣いをして頂かなければ」

「分かつておりますわ。ただの独り言です。それよりも些南美。<sup>さなみ</sup>どうかなさいましたの？」

富実樹を、十四歳の富実樹の妹で第五王女、峯慶の第九子である些南美が覗き込んだ。

些南美はくすくすと笑うと、富実樹に言った。

「富実樹御姉様、そのように寝転がるのはとても御行儀の悪いことで御座いますわよ。即刻やめて頂かなければ富瑠美御異母姉様の御所に参りますが、どう致しますか？」

「はいっ。起きますわっ！」

富実樹は跳ね起き、長椅子に座り直した。

「それで富実樹御姉様、今日で、のことについては最後の御前会議でしたが、何か御座いましたの？」

「ええ。わたくしは地球連邦を宇宙連盟に加盟させるのは大賛成で

す。地球連邦の方々はわたくし達よりも器用ですし、科学の発展にも繋がると思いますのよ。ですが、武力でそんなことをしてしまつたら、地球連邦から好意的な協力は得られにくいと思うのです。わたくしも、同じ立場でしたらそう考えると思います。ですから、できれば最初から武力を使うのではなく、まずは話し合いで加盟された方がよいと何度も言っているのですが、富瑠美派の貴族達の反対が激しくて、総票会でどうなるかは、最後の御前会議で大体分かると御父様は以前仰つておりましたが、わたくしには全く分かりませんでしたわ。それは、他の方も同じようです」

「そうなのですか。ですが、いつの世にも、国民全員から支持される完全無欠の王なんておりませんわ。もし反対意見が出たら可笑しいという物以外で反対意見が絶対に出ないのなら、そこは王の言うことが絶対で、王に反対することは諸悪の根源だと決め付ける国だけです。真に喜ばしいことながら、この国はそつでは御座いませんもの。反対に合ひのは仕方のないことですわ」

些南美は少し苦笑気味に言った。

「それよりもわたくしは、富瑠美御異母姉様がおうだいじん鳶大臣に御着任なされたことに、とても驚きましたわ」

ちなみに、鳶大臣とは花鳶国の大臣の一種で、その大臣には代々王の弟妹がなる。

そして、王が退位すれば鳶大臣も政から身を引き、鳶大臣が位を退けば王も退位するという慣習がある。

つまり、花鳶国の国王と鳶大臣は、いわゆる一蓮托生の間柄なのだ。

一年も前の話を言われ、今度は富実樹が苦笑気味に言った。

「ええ。大抵の方はそう思われるでしょうね。富瑠美は、あまり物事を深く考えずに表面を見て判断することは多いのですけれど、政治力と様々な方面に通ずる知識は、賞賛に値しますわ。まだこの国に来て四年のわたくしとは、まるで比べ物になりませんもの」

「それは、わたくしも認めますけれど……」

「些南美は少し唇を尖らせて言いました。

「わたくし、やはり富瑠美御異母姉様を鳶大臣に据えたのは、間違いだと思いますわ。幼い頃はわたくしと一緒に育ち、御母様のことを探つていらっしゃるとはいえ、何しろあの深沙祇妃の娘ですから。他にも、富瑠美御異母姉様に準ずる方はいらっしゃるでしょう」

富実樹は小さな溜息をつくと苦笑し、何も知らない子供に教えるように言つた。

「いいかしら？ 些南美。物事は……特に政治は、こちらの信じる物だけを推し進めては成り立ちませんわ。これは、わたくしと富瑠美のことでも言えることです。わたくしが十三でこの国に戻ったことで、自らが後見する深沙祇妃の子である、富瑠美が王位に即けなくなつてしまわれたのですもの。深沙祇妃の後見人達は、皆大損をしたと思われますわ」

富実樹はそう言つと、苦笑した。

「沙樹奈后は、息子がわたくしの夫となることに決まりましたし、何よりもこの国で生まれ育つた王族で御座いますし、御母様とも仲が宜しい方でいらっしゃいますから、このことは深く理解しております。ですが、深沙祇妃はそう簡単にはいきませんわ。元々は他の王族でいらっしゃいますし、ことは外交問題にまでも発展する懼れが御座います。そして、その不満を解消するには、深沙祇妃の子供のいずれかにそれなりの役職を与えるのが一番ですわ。丁度、富瑠美は政治面でも知識面でも才能に溢れておりますから、鳶大臣に就けただけのことです。それに、富瑠美がいなくても、他の誰かが富瑠美と同じことを言い出すでしょう。つまり、結果としてあまり変わりはありませんわ」

「ですが、富実樹御姉様……」

「些南美が反論しようとした時、扉が叩かれた。

「失礼致します、富実樹異母姉上」

そう言って、たつた今話題についていた沙樹奈后的長男で、第一王子であり峯慶の第三子、そして富実樹の婚約者である杜歩埜<sup>とふね</sup>が入つ

て來た。

「あら、杜歩埜。どうなされましたの？」

「またもや富瑠美異母姉上達を論破なされたと小耳に挟み、やつて來たのですが……」

そう言つて苦笑すると、

「どうやら、先客がいたようですね。さすが些南美、情報が速い」

「そんなことは御座いませんわ。わたくしは結果しか存じ上げませんでしたもの」

そう言つて、二人は互いの目を見つめ合い、くすくすと笑つた。

富実樹はそれを苦笑して見ていたが、長椅子から立ち上がり、「どうやら、わたくしは御邪魔なようですわね。それでは失礼致しますわ。久しぶりに、御母様に会つて参ります。どうぞ、わたくしの部屋での逢引きを御楽しみ下さいませ」

と言い、本当に部屋を出て行つてしまつた。

見る人が見れば、杜歩埜と些南美は相思相愛だということがはつきりしている。

だが、現実的に見て、一人が結婚できる確立はとても低い。

この国の王家は、近親婚で成り立つてゐる部分がある。

男王の場合、一人が嫌がらなければ まあ、滅多に嫌がることはないのだが 后は一番高い王位継承権を持つ妹がなり、女王の場合は一番高い王位継承権を持つ弟と結婚する。

男王の場合、確實に妹の子供が王籍に残るとは限らないが、女王の場合は血が色濃く保たれる。

しかし、それは王位に即くことができたら、の話。

それを叶える為には、富実樹と富瑠美がどうにかなつて王位を継ぐことができなくなり、更に阿実姫<sup>あみあじょ</sup>の長女で第三王女、峯慶の第四子の璃枝菜<sup>りえな</sup>と、沙樹奈后の長女で第四王女、峯慶の第七子の早理<sup>さり</sup>恵<sup>え</sup>がどうにかならなければならぬ。

そして、それはとても可能性が低い。

また、他の臣下達はそのことに気が付いていない。

二人は、互いに視線だけで満足するしかないのだった。

だが、杜歩埜が富実樹と結婚すれば、正式に認められなくても可能性がある。

それは、『総下』<sup>そうげ</sup>と言つ制度だ。

この国では、男王の場合、后、妃、妾<sup>めかけ</sup>の子供が三人、最貴<sup>さいき</sup>、最侍<sup>さいし</sup>、<sup>さいじょ</sup>最女の子供が一人産まれば、もうその妻達は妻としての役目は終わる。

総下とは、昔それに不満を持った王がいて、それを解消させる為に作られた制度だ。

だが、今はそのような意味合<sup>い</sup>いとは違う。

今は、まず貴賤を問わず総下になることを嫌がらなかつた二十一歳の娘達が年に一度集められ、王に目通りを許される。

そして、それは一生に一度の大チャンスだ。

王に目通りし、その娘達の中から王の気に入つた娘を年に一人から五人ほど選ぶ。

そして、選ばれた娘達は二十四歳の誕生日を迎えるまで王の総下として過<sup>ご</sup>すのだ。

二十四歳の誕生日を迎えた後は、大半はどこかの貴族の一一番田や三番田の妻になる。

つまり、女性としての箔が付き、玉の輿に乗れるところとなる。

そして、王位に即いたのが女王だとしても、その夫が総下達の相手をする。

それを利用すれば、富実樹が杜歩埜と結婚した後に、些南美は総下になれるのだ。

また、王や女王の夫が気に入った総下がいたら、もしくはその子を産んだら、その総下は一生後宮にいてよいということになる。

それまでのおよそ九年間、富実樹は些南美達の恋愛を見守るつもりだった。

たとえ自らの子供が王位に即けなくとも、総下の子供は後宮の侍

女や侍従となる慣例だから、血縁者の為に働かざるとしても、それでも愛する人の隣にいられるのなら満足だろうから。自分なら、そうだ。

今でも、夢の中で目覚めたら香<sup>こう</sup>麻<sup>ま</sup>が目の前にいた、と言つ夢を度々見ている。

あの日、最後に逢つた香<sup>こう</sup>麻<sup>ま</sup>は、少し照れ臭そうに笑っていたその笑顔が、夢の中で蘇る。

そして、いつもその時の自分は、中学生の由梨亞なのだ。  
諦めてはいる　だが、心の何処かで諦められない自分がいる…。

そのことで、富実樹の胸は張り裂けそうに痛んだ。

そのようなことを考えながら歩いていたら、いつの間にか母親の部屋の前まで来ていた。

「失礼致します、御父様、御母様」

今、**峯慶**は妾とその子供達の住まう階に当たる、一二十階にいる。なので、父に会いに行く時も、母に会いに行く時も、同じ階に行けばいいのだ。

「あら、**富実樹**。どうなさいましたの？」

「いいえ。何もなかつたのですけれど、御二人に御会いしたくて来てしまいましたわ」

富実樹はそう言つと、**峯慶**の足元のベッドに座つた。

「御父様、御久し振りで御座います」

「富実樹、御前は相変わらず元気だな。その元気を少し分けて欲しいくらいだよ」

**峯慶**は苦笑して、目を覗き込んだ。

「そんなことを言つて、本当は何か別の理由があるのではないか？」

「えつ？ 何がですか？」

富実樹はしらばつくれると、机の上に置いてあつたブズイと言つ、甘くて皮ごと食べられる一口大の果物を取り、口に運んだ。  
**由梨亞妾**はくすくすと笑うと、富実樹に向かつて言つた。

「富実樹、丸分かりで御座いますわよ。嘘を付く時に何かをするのは、富実樹の癖のようですからね」

「うつ」

富実樹は、軽くむせてしまつた。

「これ、富実樹。ここでむせたら大変になるぞ」

「は、は……い、御……父……様つ。ゴホゴホ」

**富実樹**は何とか飲み込むと、一息ついた。

「それで？ 富実樹。何がありましたの？ わたくし、気になりますわ」

**由梨亞妾**が、少女のように目をきらめさせて言つた。

「あ、あの……えつと、その……」

「富実樹、私も由梨亞妾も気になるのだから、さつさと語つて御終いなさい」

これまた峯慶も、まるで少年のように田をキラキラさせて言つた。歳を取つても、もう十六になる子供がいても、相も変わらず少年少女のような夫婦だ。

富実樹は言葉に詰まり、

「し、失礼致しますわ。わたくし、やはり戻りますわね」

そう言つと、慌てふためき、部屋を逃げるように『静々と』飛び

出して行つた。

それを見ていた峯慶と由梨亞妾は、思わず吹き出していた。  
「面白いこと。必死で隠そうとしても、わたくし達には分かっていることですね」

「ああ。しかも、それを解消するには杜歩埜とふねと結婚するしかならぬ。富実樹は地球連邦で育つた為、恐らく近親婚には嫌悪を抱いていることだろう。それを、この国の風習に合わせることになつて……可哀想なことをするな」

「ええ。わたくしはこの国で産まれ育つて来たのですから、王家の近親婚に嫌悪などを感じたことは御座いません。わたくしは深沙祇妃みさきひの、沙樹奈后さきなこうと紗羅瑳侍しゃらさじに向ける目に、他の方に向ける目とは違つて嫌悪が入り混じつていたことで、初めて近親婚を忌み嫌う方がおられるということに気付きましたから。沙樹奈后は陛下の異母妹いもくめですし、紗羅瑳侍は陛下の従姉みいとじであり三従姉みいとじですが、血の繋がりが御座いますもの。最初は信じられなかつたのですが、やはり富実樹は嫌悪感を抱いていることでしょう。近親婚をすれば異常が出る可能性がある為、『汚い』と禁じられている地球連邦で育つたのですから……」

二人は前王と妾めがけだが、この国の風習を変えることはできず、助言をしようとしても、女王である富実樹が隠そうとしているからには気付かないふりをしなくてはいけない。

二人は軽く、けれど、それに込められた意味はとても重い溜息をついた。

富実樹は先程の峯慶と由梨亞妾の態度について、頭の中で大癪癪を起こし、不満をぶちまけていた。

（全く、御父様と御母様ときたらっ！　私が杜歩埜と些南美さなみの恋愛を隠していることを分かつていてからさつさと吐きなさい、みたいに！　御父様にも御母様にも、絶対に分からないわ！　御父様は最初に産まれて、王位に即くことは分かり切っていたから色々危険はあつたけど、ちやほやされて女なんか選り取り見取りで、しかも自分の妾と大恋愛なんかしてつ！　御母様は戦祝大臣せゆめだいじんの孫に産まれて、しかも八歳の時に御父様との婚約も確定してつ！　しかも下手に他人に惚れないように屋敷の外には滅多に出ず、侍従なんかとも滅多に会わす！　そして御父様に会った途端に一目惚れなんかしてつ！）  
どすどすと、思わず強く足を踏み鳴らしてしまう。

（絶対あの一人には、私の香麻こうまへの、まるで身を斬られるかのように切なく心を絞られるかのように苦しい、何年も逢つてないのに慕い続けてしまうこの気持ち　杜歩埜も些南美も感じているこの気持ち、分からないわ！　杜歩埜達も、私と似たような境遇ね。互いに好き合って、結婚してもいいってぐらいに好きなのに、相手もそれぐらい好きだつて分かつてているのに、それでも想いを伝えることは許されず……私は叶わない恋だと知ってるし、もう逢えないから諦められる。だけど、もしここの侍従が官吏か貴族が香麻だつたら耐えられないわ。それが杜歩埜達の場合だと、毎日顔を見られるし目配せもできる。だけど、想いは伝えられない……。きっと、私よりも辛いはずだわ）

富実樹は、そこまで考えると、フウツと溜息をついた。

（何とかしてあげたいけど、私には無理……せめて私にできるのは、

私が杜歩埜と二十五歳で結婚した後、あの子を総下そうげにするしかないんだわ……）

「何とか、ならないかしら……」

富実樹は思わず口に出したが、実現不可能だと自分でも分かりきつていること、余計にその言葉は虚しく耳に、心に届いた。

一つ、大きな溜息をついた後、ふと、資料庫の一つに入つてみようと思つた。

いつも、自分の周りには人が居る。

そして、気の休まる時はない。

久し振りに一人になりたいのと、周りの人々が自分を見つけられるのか試す気持ちだった。

そして、一番近い資料庫へ入つた。

そのことで、自らの運命が再び変わろうとするとは、露程も知らずに。

ガツ チャ  
ギイーイ  
ガツ グツ ガツ チヤン

という、何とも不気味な音と共に、富実樹は資料庫に入った。この王宮では、トイレや風呂などの一部の例外を除いて、扉は全自动式になっているのに、この資料庫は、簡単な暗号のタッチパネルが付いている所だけが近代的と言える部分であり、扉は人力で開けなければならないのだ。

「何これ。ろくに掃除してないわね……。空調設備もないし。こんな埃っぽいとこ入ったの、あの交換日記帳を見つけた時以来よ……。そういえばここ、今現在必要ない書類を溜めておく所のうちの一つだけ。それにしても……うわ、何これ。九百六十四年前のサマヌ国の王朝交代劇の新王朝を認める許可？ こっちは花鳶國かおうこくの、九百

九十八年前の総下制度の許可？ 確かにこれは捨てるに捨てられる書類ね……。全然使わないけど。それにしても、こんな部屋があると三部屋あるつて言うのに、どれだけよ……」

確かに、富実樹の言う通りだ。

データを入れていい『キエシユ』自体には、混乱させないようにする為一種類ほどしかデータは入らないが、見失わない為縦一センチ、横五センチほどの大きさで、それを入れている箱は縦一メートル、横七十センチとなり、その中にはかなりの量が入る。

しかもその箱が天井に付くほどの棚となり、壁など見えず、さらには通路も人が擦れ違える程度の隙間しかない。

富実樹は、頭が痛くなつた。

「こんな量、バックアップの為とはいえ、よく取つて置くわね……ほんと、頭が痛くなるわ……」

そう思いながら、とりあえず一周することにした。

そして、最後に一番奥の片隅に行つた。

そこに行くと、不思議な紋様の描かれた円があつた。

「何、これ……？」

近づき、靴の先でその端を擦つてみたが、何も変化はない。もつとよく見ようと床にしゃがみこみ、その時、体勢を崩してしまい……その円の中に、両手を付いてしまつたのだ！

すると突風が富実樹を包み込み、富実樹を円の紋様の中に引きずり込んでしまつた。

富実樹は前にも似たような経験をしていたから、驚きはしたもののが恐れはしなかつた。

何故なら、そこは富実樹が現在の日本州から過去の日本国へ、過去の日本国から花鳥国に行つたその時に通つた、あの亜空間と同じだつたからだ。

そして、富実樹は半分忘れかけていた、地球連邦の古代語の声が

聞こえた。

『貴女は何を望みますか？』

(『貴女は、何を望みますか』、ですって……？ そんなこと、決まってているじゃないの！）

富実樹は理不尽なこととは知りながらも頭にきて、地球連邦の古代語で叫んでしまった。

「当たり前じゃない！ 千紗に会つことよ！」

その途端、身の丈が一メートルほどの、今の富実樹では、どんなに暑くても不可能な軽やかな服装をした女性が立っていた。

そして、何か意味不明の言葉で話しかけられた。

「…………」

それは意味が全く分からなかつた物だが、前にも聞いたことのあるような物だつた。

「いいえっ！ わたくしはまだ、できませんっ！ 御引き取り願いますっ！」

恐怖に駆られた富実樹がそう叫ぶと、わざわざの円の外側に座り込んでいた。

（嫌だ……何、これ。怖いっ。怖いよっ！）

富実樹は不安に駆られ、先程の悪戯心を忘れ、資料庫を飛び出していた。

（何……何なの？ これ、怖いっ！）

富実樹が部屋に戻ると、既に杜歩埜と些南美は居なかつた。

富実樹は誰の目もないのに、寝室のある、後宮の一十五階へと上がり寝てしまつた。

「富実樹はようやく気付いたか。しかし、乗り越えられなかつたようだな……」

「ええ。冷静に、もうどじつくり考えられれば意味は解つたでしょうね。わたくしとしては、仰っている意味が解り、それでもまだこの国に留まつてくれる方が宜しいのですが。それにしても峯慶様、

あの大きさと雰囲気はどつかと思ひますが。あれでは誰でも逃げ出しますわ」

由梨亜妾は、あれを仕掛けた峯慶に、文句のような物を言いながらも、刺激しないように、慎重に言葉を選んで言った。

それは、仕方がない。

峯慶は富実樹の望みを何よりも第一に考えているが、由梨亜妾は、十三年ぶりに再会した我が子とそう簡単に別れるつもりはなかつた。だから三年前、富実樹が王座に即く前にこのような仕掛けをした峯慶には、軽く恨みを抱いていた。

「それは仕方がない。そう簡単に國を離れてもらつては困る。慎重に考えてもらわねば。それにチャンスがない訳ではない。富実樹はあの時すぐには思い付かなかつたが、後で考え付けば……」

「ええ。そうですわね。ですが峯慶様、このように長い時間御起きになられていれば、体力も危うくなりますわ。御夕食の前で御座いますが、御眠りになられた方が宜しいのですが?」

「ああ、そうだな。娘の為とは言え、私は今日、少々無理をし過ぎた……」

そう言つとい、峯慶はストンと眠りに落ちていった。

## 第六章「四年後……」 2(後書き)

二従兄弟…親同士が再従兄弟、祖父母同士が従兄弟、曾祖父母同士が兄弟である者同士の関係。一組の高祖父母（曾祖父母の親）が共通している。自分から見て八親等で、続柄的に見て同世代。

富実樹は、眠りから目が覚めた。

窓から外を見ると、もう既に暗くなっている。

時計を見ると、既に午前零時。

この時間は、明日の為に皆が眠りに付いている時間であり、すなわち夕ご飯を食べ損ね、お風呂にも入り損ねたことを意味している。（あ～あ。お風呂は仕方ないとしても、夕ご飯くらいは食べたかったなあ……）

そのようなことを考えていると、猛烈にお腹が空いてきた。  
おまけに、盛大な音を立ててグウグウと鳴り出す。

（やつぱり、こうなつたら……）

「厨房に、忍び込むしかないわよ、ねえ……」

そう一言漏らすと、完璧に行く気になってしまった。

（よし、行くか）

富実樹は、今着ていたひらひらで豪華で裾を引きずる服を脱ぎ捨て、ちょっとした悪戯心とお忍びの為に盗んだ、料理と上級侍女の

お世話を下級侍女の女官服を着た。

久し振りの質素な服、直接脚に風を感じる膝下丈のスカートと、髪を一つに結んで垂らした髪型を楽しみながら、こつそりと部屋を抜け出した。

富実樹は最上階の一十五階にある自分の部屋を抜け出し、昇降機で一気に王族専用の厨房のある三階まで降りた。

三階で降りた後、静かに辺りを見回したが、さすが深夜のこと、誰も見当たらない。

明かりを点けると、もしかしたら起きているかも知れない人に見

られる可能性があるから、そのセンサーを切ろうとしたが、最初から切られていた。

(何なのかしら? もしかしたら、誰か厨房に忍び込んでる……?)  
富実樹は不安を抱きながら、こつそりと一番近い厨房の入り口まで行った。

近づいてみると、抑えているが、灯りを点けているかのように細い光が洩れている。

富実樹は一気に扉を開けると、

「そこにおられるのは誰で御座いましょうか?」ここは王族専用の厨房で御座います。ここに忍び込むのは、たかが侍女風情では

富実樹の言葉は、途中で途切れてしまった。

そこにいる人物は、王族の話し相手などをする上級侍女の女官服を身に纏っていたが……それを着ている人物は、あまりにも見知り過ぎた顔だった。

「え……」

「あ……」

「お、おね……!」

「し、静かに!」ここで声を上げてしまわれたら、見つかってしまいますが!」

富実樹が声を押し殺して、けれども鋭く注意をした上級侍女の女官服を着ている女性は、何と富瑠美ふるみだった。

富瑠美が何とか声を上げるのを抑え終わった時、富実樹は呆れたように言った。

「全く富瑠美、貴女と言つ人は……貴女はご飯普通に食べただよ? どうしてこんなところにいるのよ?」

富実樹の口調が王族貴族とは懸け離れた物になってしまったのは、言つまでもない。

「そ、そう仰る御異母姉様おねえさまこそ……何故、御夕食に来られなかつたのですか? そこまで御仕事が御忙しいとは、聞いておりませんけど……」

「寝ちゃつたからよつ！ 私はすんごく眠くて、寝ちゃつたのつ！ この頃あんま寝てなかつたからつー。それと今は言葉遣い注意しないでつ。私はいつも心の中ではこういう風な言葉遣いで物考えてんだからつ。他の人がいないんだから今はいいでしょつ」

「え、ええ、まあ……御異母姉様がそう仰るならば……」

富瑠美が勢いに押されて思わず言つと、富実樹がいきなり本題に入つた。

「で、富瑠美は何してた訳？」

「ええつと、その、御父様と由梨亜姫ゆりあひめに御食事を作ろつと思つたのですが……御異母姉様、助けて下せーーー。わたくし、一度も料理を作つたことがなくて……どうすればよいのか、全く分からないのですつ！」

富瑠美はそう言つと、富実樹にしがみ付いた。

富実樹は途惑いながらも、何とか富瑠美を落ち着かせて話し掛けた。

「ちょ、ちょっと待つて。ええつと、御父様も御母様も、ご飯を食べていないので？」

「ええ、そうです。ですけど、さすがにそれでは、御身体が保ちませんわ。今日は、朝からほとんど何も御口にしていないのです」

「確かに、それじゃあね……そうだ、私が作るわ。で、富瑠美はその補佐をお願い」

「ええ。ところで、何を御作りになるおつもりなのですか？」

「そうねえ……ちょっと待つてね」

そう言つと、台所を歩き回つた。

「……そうね、雑炊とお握りとゼリーを作りましょつ。私が雑炊とお握りを作るから、富瑠美はゼリーを作つて。ちょっと待つてね」と言つと、富実樹は厨房を駆け回り、カートに道具と材料を量つて持つてきた。

「それじゃあ、この端末に調理方法全部書いてあるから。この通りにゼリー作つてね。分かった？」

「わ、分かりましたわ……多分」

「じゃあ、分からなくなつたら訊いて。それじゃあ、活動開始！」

「は、はいっ！」

そして、二人はゼリーと雑炊とお握りを作り始めた。

最初は一人とも無言で作業をしていたが、富瑠美は沈黙に耐え切れず、口を開いた。

富瑠美は、深沙祇妃みさぎひ達が富瑠美が産まれた時にボイコットした為、  
峯慶みねけいの命令で、十歳までは深沙祇妃と比べて質素な由梨亞妾の元で育つた。

だが、それから今まで約六年間は、派手好きな深沙祇妃の元で育つた。

つまり、最初の人格・性格構成は由梨亞妾の元で、第一の人格・性格構成は深沙祇妃の元で行われることになる。

その為、優しい性格と気性の持ち主で質素を厭わない性格で、ながら、派手な物や豪華な物を見ても普通に見ている、もしくは好みということが矛盾せずに存在するようになつた。

富瑠美は朝起きる時には静かな音楽と優しい侍女の声で目が覚め、食事の時にはずっと楽団の生演奏が演奏され、鳶大臣おうだいじんとしての仕事中は高位の貴族官吏の声と侍従や侍女の声が聞こえ、また精神を集中させ、リラックスした気持ちで仕事に臨めるように音楽が鳴り、仕事がない時は侍女と喋つたりゲームをしたり、眠る時は穏やかな眠りに誘われるよう音楽が鳴り、またお風呂でも音楽が鳴り、富瑠美の身の周りでは音が絶えることはほとんどない。

だから富実樹と違い、このよつた沈黙には長時間耐えられないのだった。

「あの、御異母姉様」

「何？ 富瑠美。何か分からぬことでもあった？」

「いいえ。けれど、ただ、少し気になることがあって……」

富瑠美は、今まで言えなかつたことを口にした。

「貴女は、時々悲しそうな目をするでしょう？ 哀しく、懐かしそうな目をして……あれは何を、誰を思い出しているのですか？ わたくしはそれが気になるのです」

「ああ……あれば、ね。……千紗のことを思い出しているの」

「『千紗』？ それは、誰ですか？」

「私の……たつた一人だけの、何にも換えられない、とても大事な親友よ。大切な……大切な友達。そして、私の為に運命を狂わされてしまつた、可哀想な人」

「まさか、その方とは……」

富瑠美が富実樹の方を振り返ると、富実樹は料理をする手を止め、遠い目をしていた。

「彼女の名前は、本条千紗。<sup>ほんじょう</sup>私が本条由梨亞<sup>ゆりあ</sup>だつた時は彩音<sup>さいいん</sup>千紗だった人よ。私が本当は花雲恭富実樹で、千紗が本条千紗だということは、こちらに来るおよそ一週間前に知つたんだけど、それからは、千紗の顔がまともに見れなかつたわ。申し訳なさ過ぎて……」

富実樹は、そこまで言つと作業を再開し、富瑠美にも

「早くしないと終わらないわよ」

と注意した。

富瑠美が慌てて作業に入ると、富実樹の溜息が聞こえ、話が再開した。

「でもね、千紗はそれを知つても全然怒らなかつたし、取り乱しもしなかつたし、それどころか信頼してくれたのよ。自分の人生が大きく変わつてしまつたのに。千紗は、性格が大胆つていうか……その、大雑把なんだけど、正義感の強い子で、いじめられたりもしてた。でも、千紗はそんなことは気にしなくて……私に上流階級の貴族という身分がなければ、今でもいじめは続いてたわ。とにかくそんな性格の子で、私のせいで彩音千紗になつたことを知つても、『あたしは由梨亞と会えたし、悲しいことも起こつたけど、楽しいこ

とも一杯あつたから全然気にしないよ!』って、本気で言えるような子だった。それが分かつてたから、申し訳なくて……夢の中でも、地球連邦のお父様とお母様より、千紗が出てくる回数の方が多いのよ。それで、益々懐かしくなつて、申し訳なくて……ごめんなさい。つまらない話だつたでしょ?』

富実樹が申し訳なさそうに言つと、富瑠美は強く反発してきた。  
「そんなことは御座いませんわ! 普通の方でしたら、そのように思つるのは当然に御座います。御異母姉様が地球連邦の方々を懐かしく思われるのは、花鳥国側かおうこくとしては王としての心構えが成つていない、王として相応しくない、すぐにその御気持ちを御捨てになつて下さいませ、と思いますが、強い思い入れのある所なら無理は御座いません。王といえども、人で御座いますから!』

富瑠美はそう言つと、鍋にふやかしていたゼラチンを勢い良く入れ、搔き混ぜ始めた。

ところがあまりにも強く搔き混ぜた為、手が鍋に触れ、軽い火傷を負つてしまつた。

「…………つ!」

「どうしたの? 富瑠美』

富実樹は鍋の中に小魚を入れようとしていたが、それをやめて富瑠美の方に行つた。

「お、御異母姉様、手が御鍋に触れてしまつたら、熱くて痛くて……」

「あ、当たり前じゃない! ほら、よく見せて……やつぱり火傷してる

「『火傷』…………? これが、火傷なのですか? わたくし、初めてなります」

何だか嬉しそうな富瑠美の様子に、富実樹は頭を抑えて溜息をつき、さつさと水道まで連れて行つて手を水で流し始めた。

「このまま、ちょっと待つてて」と言つと、辺りを捜し始めた。

「あつたわ。薬箱。富瑠美、もつそろそろいいから水を止めてこつち来て」

と言つと、ガーゼを取り出し、火傷の痕を覆つた。

「とりあえずこれでいいわ。後でちゃんとやつてもらしなさい。これは応急処置だから」

「ええ。ありがとうございますわ、御異母姉様」「

そう言い、作業を再開し始めた。

そして、その間、富実樹は話をした。

地球連邦で育つてきた、今までのことを。

富実樹が学校で出会った上流階級及び富豪の傲慢さ、強引さ、身勝手さ。

それらの人達と、富実樹の違つこととか。

千紗と会つてから、富実樹の人生がどれほど変わつたこととか。

それから、今までのこととか。

今現在の、宇宙連盟が提唱している自由、権利と遠く懸け離れた地球連邦のあり方。

そして……過去に行つたこと。

富瑠美は息を呑み、それらの話を聞いていた。

なんて、悲しい話なのか。

なんて、地球連邦は荒れているのか。

『全宇宙共通連盟憲章』の権利の章の自由の項の一つに、恋愛と結婚の自由がある。

それは、互いに納得していなければ、絶対に結婚はできないという決まりだ。

だが、地球連邦では王族以外でも（王族では慣習となつていてることが多いので、王族はその枠から外れている）、互いの意思を無視して無理矢理結婚させるようなことが、今でも平然と行われているといつ。

確かに、それならば地球連邦が宇宙連盟に加盟するのを済るだろうし、富実樹が宇宙連盟に地球連邦を加盟させるのに躍起になつて

いるはずだ。

たとえ、それが富瑠美とやり方が違つていても。

そして、富実樹も話し合いで解決できないかも知れない、と思つてゐるに違ひない。

何故なら、富実樹は戦祝大臣せんじゅだいじんに軍備を密かに整えさせている、と言つ噂うわさがあるからだ。

それは、いざとなつたら武力を使つといふことで、それだけ、地球連邦の状態が異常だということだ。

富実樹が語り終える頃には、富実樹はお握りを握り終え、雑炊の下準備もだいたい終わり、富瑠美もゼリーを型に流し終えた物を冷蔵庫に入れていた。

時刻は、だいたい午前一時頃。

固まるのは、その一時間後ぐらいだ。

富実樹は、富瑠美の方を振り返つて言つた。

「後は固まるのを待つだけだから、お握り食べようと思つてるんだけど、富瑠美は？」

「ええ、わたくしも頂きますわ。やはり、慣れないことをいきなり行つと、疲れてしまう物なのですわね。御腹が空いてしまいましたわ」

富瑠美はそう言つと、富実樹の元へと歩み寄つた。

富実樹は、床の上に作ったお握り六個を乗せた皿を置き、手早くお茶まで淹れた。

その手際の良さに、富瑠美は感心しながら、「では、御異母姉様、頂きますわ」と言つて、お握りを食べ始めた。

それは、中に鮭の身をほぐした物が入つていて、塩味も丁度良く、海苔もぱりぱりとしていて本当に美味しい物だった。すると、富実樹は言つた。

「ねえ、富瑠美。さつき私の方が話したんだから、次は富瑠美の番よ」

と言つて話を促した。

そして、富瑠美は話し始めた。

物心付いた頃には、由梨亜姫の元で楽しく暮らしていたこと。

けれど、富瑠美の母が由梨亜姫ではなく深沙祇妃だという事を言  
い聞かされていたこと。

そして、何故由梨亜姫に育てられていたのかといふこと。

深沙祇妃に還されてからの生活、そして富実樹と初めて会った時  
のこと……。

それらを話し終える頃には、一時間近くが経つていた。

そして、冷蔵庫からゼリーの型を取り出して切り、それらを飾り  
付けカートに乗せた。

その時、富瑠美は不思議そうに言った。

「あの、御異母姉様。何故この王宮には厨房があり、ほとんどが手  
作りなのでしょう？ 全て機械任せの方が、人件費削減の面から見  
ても宜しいのではなくて？」

「まあ、確かにそうなんだけど……でも、機械と人の手で作られた  
物じゃあ全然味が違うのよ。大量生産を目指すスーパー やコンビニ  
ならそれでいいけど、こだわりを持つたお店は、そりやあ機械に任  
せる部分もあるけど、大抵の部分は手作りよ。勿論、普通の家もね。  
だってそっちの方が美味しいんだもの。わざわざお金の掛かる機械  
を買わなくてもいい訳だし、いざとなつたら機械を買うより安いス  
ーパー やコンビニで買えばいいのよ。そういう面でみればこれはか  
なり理に適ってるわよ。侍女や侍従が余ることもないし、私達は手  
作りの美味しいご飯が食べれるんだもの。これ以上のことはないわ  
よ。だからね、富瑠美。貴女の悪い癖は、物事を一面からしか見な  
い所にあるの。物事はその裏も考えなくっちゃ」

「え、ええ……納得致しましたわ」

富瑠美が圧倒されながらも、そう言つと、今度は富実樹が質問し  
てきた。

「でも、私にはこのカートの方が不思議よ。どんなに揺れても物が

落ちないし、中身もこぼれないもの。どうも、不思議でならないのよ。ねえ、富瑠美。これって、花鳶国で開発された技術よね」

「え、ええ……。それが何か？」

「これって、どっちの力でできるの？ 科学の力？ それとも、魔族の力 つまり、魔法？」

「これは、科学の力ですわ」

「そうなの？」

「ええ。これは花鳶国が発明元ですけれど、特許を取っている訳では御座いませんし、花鳶国と同じくらい技術が進んでいる国でも作られていますわ。魔族の力を利用して作られた物は、花鳶国が特許を取り、しかも首都のシャンクランにしか、工場がありません。それが見極めるコツですわ」

「へ~」

一人は、そう会話を交わしながら、薄暗い廊下を歩いて行つた。

そういつていて、由梨亞の部屋がある一十階に着いた。そして、互いに目線で喋らないように制止し合つと、峯慶のいる部屋の前まで行つた。

だが、驚いたことに薄く明かりが洩れている。  
どうやら、起きているようだ。

そこで、富実樹は一計を巡らせた。

「富瑠美、ちょっと声を出さないで見てもらつてもいいかしら？」  
「ええ……？」

富瑠美がそう言つと、富実樹は目を閉じ、何かを呟いた。  
すると、一瞬強い光が出て、富瑠美が目を開けると、そこには別人が立つていた。

背は、富実樹が富瑠美よりも大きかつたのが、富瑠美とだいたい同じくらいまで小さくなり、髪も背の中程まで短くなり、大分波打つていたのが少し波打つていてる程度になり、色も栗色から茶色へと変化した。

そしてその瞳の色は、薄桃色から縁がかつた黒色へと変化していった。

それは、昔いた花鳥国シユーリック大陸先住民　いわゆる魔族の身体的特徴と同じだ。

富瑠美は知らなかつたが、もし千紗がここにいたのなら驚くだろう。

何故なら、それは地球連邦の『本条由梨亞』が成長した姿なのだから。

「私の名前は……そうね、ユーリ・ウヘルナ・シェヴィにするわ。  
貴女も変えた方がいいわね」

そう言つと富実樹は富瑠美に手をかざし、髪の長さを肩甲骨ほどまで短くし、髪質も真つ直ぐに近いぐらいにまでに伸ばし、目の色

も、花鳶国の一般的な瞳の色である董色に変えた。

「うーん……そうね、貴女はリリイ・マシユリル・ウェルトね。それで、貴女は富実樹付きの中級侍女で、私は貴女の世話をする富実樹付きの下級侍女。いいわね？」

富実樹の問いに富瑠美は答えず、ただただ目を瞠つていた。

「御異母姉様……何故……」

「ふふ、私はこれぐらいの魔力なら使えるの。何でかしらね。由梨亞の時は使えなかつたのに、今は使えるのよ」

富実樹は悪戯っぽく笑うと、おどけて言つた。

「リリイ様。それでは、どうぞ先王陛下の御部屋に御入り下さいませ」

「はい。分かつておりますわ」

富瑠美もツンとすまして言つと、コンコン、と戸を叩いた。

「先王陛下、由梨亞妾様、御入り致しても宜しいでしょうか？」

富瑠美の問い合わせに、峯慶は答えなかつたが、由梨亞妾が出て来て訊ねてきた。

「こんばんは。何か御用で御座いますか？」

「はい。先王陛下と由梨亞妾様は、御食事を御取りになられないまま御就寝致しましたが、昨日は何も御召し上がりになられておりませんのを思い出しまして、それで、勝手ながら、簡単に御召し上がりになられるような物を御作り致しましたので、いかがかと……」

「御気遣い、ありがとう御座いますわ。どうぞ、御入り下さいませ」

そう言うと、由梨亞妾は一人を部屋に入れた。

「御名前を御伺い致しておりますせんでしたわね。何と仰るのでしうか？」

その質問にも、前もつて考えていた二人は動じなかつた。

「わたくしは、リリイ・マシユリル・ウェルトに御座います。陛下の中級侍女を致しております。コーリ、御挨拶なさいな」

富実樹は、控えめに自己紹介した。

「わたくしは、コーリ・ウェルナ・ショヴィと申します。陛下の下

級侍女を致しておりますと、リリイ様の御世話を致しておりますわ  
そして峯慶の前に出ると、峯慶は吹き出した。

「……？ どうなされましたの」

由梨亞妾が尋ねると、峯慶は田尻に笑いを残したまま答えた。

「……富実樹、富瑠美……下手な変装をして、ばれるぞ」

富実樹と富瑠美は、一人そろつてつまり、由梨亞妾は

「……あら、富実樹と富瑠美でしたの。それは気付きませんでしたわ」

と棒読みで、明らかにとっくに知っていたように言った。

富実樹は魔法を解いて元の姿に戻ると、拗ねたように言った。

「何故、御分かりになられてしまわれましたの？ 大分自信が御座いましたのに……」

「何故か？ 何、頼んでもいない食べ物の世話をする侍女が、二人の娘に面影があり声が同じ少女であれば、そう思わない方が可笑しい」

「……誤算でしたわ」

富実樹は心底悔しそうに呟くと、首を傾げて言った。

「それにしても、御父様は、千紗ちさと同じことを仰りますのね」

「千紗……？ ああ、富実樹と入れ替わった少女か」

「はい。彼女もわたくしと別れる前、わたくしが富実樹に変わった時、わたくしを『富実樹』と呼ぶのに多いに抵抗があつたようですわ。理由を訊くとこう仰いましたの。『外見は変わつても、声の抑揚、表情も顔の表情も全然変わってないし、由梨亞の面影がちゃんと残つてゐる。これで別人だと思えだなんて無理があり過ぎる』、と。それと同じことを仰つたので……」

富実樹はそう言つと、パン、と手を打つて言つた。

「さあ、召し上がりませんか？ これはわたくし達が腕によりを掛けた自信作で御座います。この雑炊とお握りはわたくしが、ゼリーは富瑠美が作りました。さあ、御召し上がり下さいませ。御母様も、御一緒に」

そうして、それらを皆で食べ始めた。

峯慶は雑炊を茶碗一杯分食べ、ゼリーも食べた。

由梨亞姫は峯慶に付き合いあまり食事を摂っていない為、雑炊とお握りを中心に食べた。

「これは美味しい。私は食欲がなかつたが、これは大丈夫だ。ありがとう、富実樹、富瑠美」

「御父様、御礼は御異母姉様だけに申し上げるべきですわ。もし御異母姉様が来て下さらなかつたら、わたくしは作れませんでしたもの。まあ、わたくしは御父様と由梨亞姫の為にお料理を致そうと思つて厨房へ下りていつたのですが、御異母姉様は何と……」

「ちよつ、富瑠美つ！ それ以上は駄目つ！」

「御異母姉様」

と、富瑠美は冷たい声で言つた。

「は、はい？」

富実樹がそう返事すると、富瑠美はこいつ答えた。

「話しが庶民的になつておいでです。御両親の前でそのような御振る舞い、断じて許せることには御座いませんわっ！」

富瑠美はそう叫ぶと、富実樹の元へ、迫力満点に近寄つた。

「わ、わ～つ！ 富瑠美、ストップ、ストップ！ 堪忍してつ！ お願ひつ！ 富瑠美つ！」

「それでは条件が御座います」

「じょ……条件？」

「そうですわねえ……まず、わたくしに、正式に、御謝り下さいませ。御父様、由梨亞姫、何か御座いますか？」

富瑠美がいきなり話題を振つたにも関わらず、二人は平然として答えた。

「そうだな……富瑠美が言い掛けたことの続きを話してもらおう。由梨亞姫は？」

「ええ。わたくしも大賛成に御座いますわ。さあ、御始め下さいませ」

そのあらきらとした瞳に見つめられて断ることのできる人が、どうぐらいいるだろ？  
それほどまでに期待の込められた瞳だった。

「うつ……」

富実樹は

（余計なことをつー）

と、恨みまくつの眼で富瑠美を睨んだが、あっさりと躲されてしまった。

「……申し訳御座いませんでした」

「もう少し

「……いいでしょ？」

「貴女が何も言わないのなら、わたくしは許しを乞ふませんわよ

「……御許し、下さいませ……」

「はい、宜しいですわ」

富瑠美がにっこりと笑つて言つと、富実樹はそっと溜息をつき、思つた。

（全く、この異母妹は……）

「それでは富瑠美、話しなさい」

峯慶がそう言つと、富瑠美は

「はい、御父様」

と言い、話を続けた。

「御異母姉様は、御夕食には来られませんでしたの。御眠りになられてしまわされたそうですわ。そして夜、御目が覚めてしまわれた御異母姉様は、御腹が御空きになられたそうで、何か御食べしようと厨房に忍び込まれに来たそうです。そこで、わたくしと鉢合せなさつたのですわ」

「それは、それは……クッ」

「ふふ、ふ……」

峯慶と由梨亜姫の、忍び笑いが部屋を覆い、富実樹は真っ赤にな

つた。

「お、御父様、御母様つ！　あ、あまり笑われると、恥ずかしいですわっ！」

富実樹は何とかそう言つと、雑炊をすすりだした。

そして、料理が片付くと、富実樹は皿をカートに乗せ言つた。

「さあ、わたくし達はそろそろ戻らなければ。さあ富瑠美、行きま  
すわよ。明日……いえ、もう、今日は総票会そうひょうかいですわ。今日で、全て  
が決まりますわね。わたくしは負ける気はありませんわよ、富瑠美」

「ええ、こちらこそ負けやしませんわ。こちらが勝つて見せます」

一人が密かに火花を散らしていると、由梨亞妾が苦笑して言つた。  
「けれど、総票会に参加する中で最も力を持つているのは王族では  
なく、一般の貴族、官吏、宗教家、学者に御座いますわよ。二人と  
も、それを御忘れなく」

その呼び掛けに、一人は目を瞠り、口々に

「そう致しますわ」

と答えた。

そして、富瑠美は首を傾げていつた。

「そう言えば、御父様と由梨亞妾は、どちらに投票なさるか御決め  
になりましたの？」

富瑠美のその問い掛けに、一人は顔を見合させ、峯慶が答えた。

「まだ、揺らいであるな。決定するのは明日、一人の最終論説を聞  
いてからだ」

「そうですか。それでは、失礼致しますわ。御休みなさいませ、御  
父様、由梨亞妾」

「御休みなさいませ、御父様、御母様」

二人がそう言い部屋を出て行こうとすると、峯慶が声を掛けた。

「富実樹、少しいいか？　富瑠美は先に行つて構わないから」

「はい。分かりましたわ」

富実樹と富瑠美が答え、富実樹が峯慶に向き合つと、峯慶は穏や  
かな目をして言つた。

「富実樹。それは懐かしく聞き覚えのある物だ。そして、それを選ぶのなら、今は失っている物を取り戻すだろうが、今持っている物は全て失うであろう……。考えるのだ、富実樹」

（御父様は、一体何を言つてゐるの……？）

と富実樹は首を傾げながらも答えた。

「分かりましたわ、御父様。それに、わたくしが今得ている物を捨てることはないでしょ。歳を取ればあり得るかも知れませんが。

御休みなさいませ」

「ああ、御休み……明日は、楽しみにしているぞ」

富実樹はそう言つと部屋を出た。

扉が閉まるごとに、珍しいこと、由梨亞姫が非難掛けた日付きで峯慶を睨んだ。

「峯慶様。何故、そのように解りやすいヒントを御与えになられてしまわれましたのか？ そのようなヒントを御与えになれば、富実樹は、わたくし達から……」

「ああ、そうだな」

その非難を、峯慶はあっさりと肯定した。

「峯慶様はまた、わたくしから富実樹を御奪いになられるおつもりですか？ わたくしは、もう我慢がなりません！ 今、はつきりと分かりましたわ。富実樹は手段があれば、地球連邦に戻りますっ！」

「マリミアン、落ち着きなさい」

峯慶のその落ち着いた、けれど厳しい声に、由梨亞姫は一拍おいてから息を呑んだ。

何故ならば、その名前は、由梨亞姫が峯慶に嫁いでから今までおよそ十七年間、一度も使われることのなかつた　由梨亞姫が産まれた時に付けられた本名だったのだ。

「あの子の道は、十六年前に……あの子を手放した時、我らの手から離れた。それに、其方にはまだ他にも子供がいる。再会して三年でまた失うのは悲しいだろうが、富実樹の幸せを考えるのだ。富実樹は、こちよりも地球連邦の方が安心できるだろつ。我らには止められない。それに、死ぬ訳ではない。富実樹がこの国に還つて来てくれただけでも、充分としようではないか」

由梨亜姫は、渋々ながらも頷いた。

「ええ……。嗚呼、あの時、富実樹を地球連邦に送らなければばつ！  
そうすれば、富実樹はつ！」

由梨亜姫のその悲痛な想いに、峯慶はそうなつていたであろう事実を静かに告げた。

「それでは、富実樹は死んでいただろつ。我々は、富実樹を殺されない為に地球連邦に送ったのだよ。事実其方も、何度も生命を脅かされていたではないか。そのことを……忘れるな」

由梨亜姫が唇を噛み、項垂れると、峯慶は優しく言つた。

「由梨亜姫、もう、眠ろつ。今日は、総票会だ」「…………はい」

由梨亜姫は、泣きそうな顔で頷いた。

## 第八章「あり得なかつたはずの凶行」 1

「御早う御座います、陛下。朝に御座いますわよ」

「ええ、もう起きておりますわ」

そう答えた富実樹の顔色はあまり良くなく、少し蒼褪めていた。だが、起こしに来た上級侍女はそれを緊張の為だと思い、その様子を無視して言った。

「まあ、今日は早う御座いますわね。陛下の従姉としても、嬉しく御座いますわ」

そう……上級侍女の彼女は、由梨亞妾の四歳年上の異母姉、シユメリアン・リシェル・スウェールの長女、ユリザ・シュメリアン・フェルスだ。

ちなみに彼女は二十歳で、他にも由梨亞妾の異母妹、シユリエル・ハミシェ・スウェールの十一歳の長女であるシリュイ・シユリエル・ヒューンと、同じく由梨亞妾の異母妹、アミエル・ハミシェ・スウェールの十一歳の長女であるマリア・アミエル・ウェリアムも、富実樹が即位したと同時に上級侍女として仕えている。

王族個人に仕える上級侍女は、その王族の従姉妹という慣習があるので、時たま再従姉妹が加わることもあるが、富実樹の上級侍女達は皆、従姉妹達であった。

「それでは、朝食室へ」

四人は朝食室でいつもより早い朝食を食べ、富実樹は最終論説の為の論文の推敲に入つた。

と言つてもこのような大きな物になると、重要なこと以外では大勢の前では発言しないし、話さない。

今回その文章を読み上げるのは、戦祝大臣 つまり、富実樹の

祖父だ。

ちなみに富瑠美の方では、深沙祇妃の後見人で、貴族の中で一番目に位の高い、政財大臣が文章を読み上げることになつてゐる。

富実樹が推敲を終える頃、コンコン、と扉が叩かれた。

「どうぞ」

富実樹が顔を上げずに答えると、カチヤツと音がして、人が入ってきた。

「陛下、推敲は御済みでしょうか」

それは、今年で六十六歳の戦祝大臣、ノワール・エリア・スウェールだった。

「もう少し御待ちいただけますか？ 戰祝大臣殿。あと少しで終わりますので」

そして約一分後、富実樹は顔を上げ、他に誰もいないのを確かめてから小声で訊いた。

「御祖父様、何か、おありますか？ 御祖父様が直接御取りに来られるはずでは……」

「ああ。……富実樹よ。重大も重大だ。大変な事件が起つた」

「何が、でしようか……？」

富実樹は嫌な予感を覚えて、慎重に訊き返した。

「先王陛下が、其方の父が、刺客に殺されかけた」

「う、そ……そんな、まさかっ……！ 御父様が、刺客に……。何故？ それよりも、御父様は？ 御容態はどうですの？」

富実樹は思わず立ち上がり、掴み掛からんばかりにノワールに詰め寄つた。

「そう近寄るでないつ。本當だ。私も聞いた時は耳を疑つた。だが眞実を信じなければ、全てが嘘にも真実にもなる。……先王陛下の御容態は、まだ何とも言えぬそつだが、午後の総票会にはとても参

加できぬそうだ。その遣り口だが、刺客は用意周到でな、先王陛下の中級侍女一人を魔術で操り、食事の中に毒を混入させたそうだ。しかもそれは遅効性で、一時間後にその毒が回り始めるらしい。そして毒味役だが、その中級侍女がやつたらしい。その侍女は今までも毒味役をやつていたので怪しまれなかつたそうだ。そして先王陛下に毒が回り始めた頃、拳銃で自殺したそうだ

「そ、そんな……。御祖父様、このことは他に……」

動搖して顔色を変える富実樹に、ノワールは落ち着かせようと強く富実樹の肩を押さえた。

「口止めはしておる。このことを知っているのは、私、由梨亞妻、侍医、先王陛下の上級侍女達のみだ。私がこれを伝えに来たのは、富実樹に事実を伝えると共に、誰にこのことを知らせてもよいのかということを相談しに来た。……富実樹、其方の意見は？」

「…………わたくしは沙樹奈后、深沙祇妃、莉未亞貴、紗羅瑳侍、阿実亞女に御報せした方がよいと存じますわ。信じられるかどうかは別として。勿論、彼女達には口止めをしておいて下さいませ。弟妹達のことですが……わたくしは、彼らに無闇に報せるのは、不安なのです。なので、年長者のみ 杜歩埜とふねと、富瑠美にのみ御報せ願えませんでしょうか？」

「鶯大臣殿下に……？」しかし、彼女はあの深沙祇妃の娘

「いいえ！ 彼女はわたくしの弟妹達の中で、最も信頼できる方なのです！ ……これから御話しすること、秘密にしてもらつても宜しいでしようか？」

富実樹の真剣な顔に、ノワールは思わず居住まいを正した。

「ええ……どうぞ」

「わたくしが富瑠美の他に信頼している方は、些南美さなんみや柚希夜ゆきや（第七王子、峯慶ほうけいの第十五子で十三歳の弟）など同母の弟妹と婚約者の杜歩埜、そして絶対に王位を継ぐことのない繼承権の低い異母弟妹達です。けれど、彼らは心変わりをして、どうせ自分が継ぐことはないのでからと裏切る不安があります。そして、些南美には絶対に

報せられませんわ。杜歩埜は仕方がないので外せませんけれど……

二人は……杜歩埜と些南美は、慕い合っているのです

「……今、何、と、仰い、まし、た、か？ それ、は……その、本、

当の……」

ノワールは、戦祝大臣というかなりの要職にあり、かなり腹芸や駆け引きに手馴れていて、滅多なことでは感情を露わにしない。だが、その彼でも度肝を抜かれるよつた、超衝撃的爆弾発言だつた。

何しろ、自分の孫娘が、その姉の婚約者である異母兄を……。

富実樹は、無情にもあつさりと肯定し、矢継ぎ早に言葉を重ねる。「本當ですか。下手に些南美に報せると、この國を混乱させて、边境の星に杜歩埜と共に逃避行をするかも知れないので。柚希夜の場合、何故一番下の弟に報せて他の年上の信頼する方に報せないのかと後で騒動が起きる可能性があります。そして、第一王位繼承権を持ち、更には鳶大臣の地位に就いている富瑠美は絶対に外せません。それに、彼女とわたくしは異母姉妹というだけでなく乳姉妹ですわ。彼女は深沙祇妃の娘とはいえ、由梨亜妾の手によって育てられました。ですから、わたくしのことは余程のことがない限り裏切るはずが御座いません。それに今回わたくしと意見が対立致しましたのも、鳶大臣は大抵、必ずこうしなければ駄目だということ以外は王と反対の意見のことが多いからですわ」

富実樹は、強い目をして言う。

「……ですが、わたくしの意見でしかありませんが、富瑠美は、御父様を暗殺しようとは絶対にしておりません。けれど、それをやつたのは富瑠美派の人物でしょう。そしてその人物はきっと、こちらがこのことを直ぐ様公表すると思つていてるでしょうね。御父様がわたくしを生かそうと地球連邦に御送りになられたのは、一部の方限定では御座いますが、周知の事実に御座います。その御父様が、御倒れになられた……つまりこちらの陣営が危ういと、こちらに下手に肩入れすると自分の身も危ういと思わせるには充分です。そして

それとした人物は、かなりの地位と人脈のある人物でしょう。こちらに全く気付かせずに後宮の中級侍女と接触することは、とても難しいことに御座います。高度な技術を持つ魔術師を雇えるほどの金持ちで、後宮にもその人物を連れて入り御父様の中級侍女とも接触できるほどの人脈と金脈の持ち主……それほどの持ち主ならば、大した理由もなしに取り調べることは不可能です。濡れ衣と、侮辱と言われます。けれど、手がない訳では御座いません。御祖父様「富実樹の強い言葉と視線に、ノワールは居住まいを正した。

「はい」

「黒幕の特定を御急ぎ下さいませ。御父様が暗殺されかかったとメディアに公表するのは明日に。毒が盛られたのは、今晚か明朝にするのです。その後、噂をばら撒いて下さいませ」

「それは、どのような……」

「それは、その黒幕の貴族が『どうもあの貴族は怪しい。先王陛下の暗殺を謀っていたのではないだろうか』という噂です。そうすればその人物は代替わりせざるを得ないでしょう。そのような噂に手を打てば、必ず、やはりそうかと噂が流れますから。それと、杜歩埜と富瑠美にはわたくしから御報せしておきますわ。御祖父様は、沙樹奈后達に御報せ下さいませ」

富実樹はきつぱり言い切ると、推敲した文章の入っているキエシユをノワールに渡し、

「それでは戦祝大臣殿、期待しておりますわ」

と、先程の会話が嘘かのように、至つて事務的でありながら威厳のある口調で言った。

「私もこちら側の案件が御通りになられること、祈っております。それでは失礼致します」

そう言うと、ノワールは部屋を出て行つた。

富実樹は小さな溜息をつくと、立ち上がりつて杜歩埜の元へと急いだ。

後宮の一十四階にある、杜歩埜の部屋を誰かが叩いた。

「どうぞ」

杜歩埜がそう言つと、彼の異母姉にして婚約者の、富実樹が入つて來た。

「御早う御座いますわ、杜歩埜」

「御、早う、御座い、ます……富実樹異母姉上」

彼は、途惑いながら答えた。

なにしろ、本当ならば、富実樹は本宮の執務室に居るはずだからだ。

「どう、なされたのでしょうか？」

「ええ、少し……」

富実樹は、そう言い淀むと、深呼吸をして切り出した。

「あの……大声を出さないで下さいませんか？ それと、これから話すことは魔力に賭けて他言無用で 些南美にも」

杜歩埜は目を瞠つた。

杜歩埜は、富実樹に魔族の力（魔族の力には人間離れした知力、体力、魔法を使えるという意味で魔力の種類がある）の魔力が宿っていることを知つてゐる数少ない人物だ。

ちなみに、これを知つてゐるのは峯慶、由梨亞妾、そして先日暴露した富瑠美だけだ。

そして、魔族の力を持つてゐる者が自らの持つ力に賭けて誓約しそれを破つた場合、その力の持ち主の力は失われ、破つた相手は最悪の場合、死に至る。

それほどまでに、拘束力のある誓約だつた。

富実樹が、そのようなことを好んでするはずがない。

杜歩埜はそれを分かつてゐるから、驚きながらも頷いた。

「はい……了承致します」

富実樹は息を吸い込むと、たつた一言だけ、告げた。

「御父様が、暗殺されかかつたわ

「え……」

あまりの「」ことに反応できないでいる杜歩埜に、富実樹は無情にも言い放った。

「本当のことには御座います。わたくしは忙しいのです。冗談を言つてゐる暇は御座いませんわ」

そう言つと、一息付き、続けた。

「御父様の御容態ははつきりとしておりません。去解鏡きょかせきょうを使用するにも、上手くいかないでしょう。それなりの時間の後には使用許可が戴けるかも知れませんが、その結果を報せる者が、その時間の間で黒幕の手の者に掏り替えられたり、買収されたりしておいででしたら言い逃れができますわ。なので、戦祝大臣殿に、去解鏡を明日中に御使用を御願い致しました」

「す、少し御待ち下さい、富実樹異母姉上。許可を戴くには、御時間が掛かりますよ？ そう、簡単におできになられるはずが……」

「ですが、できますわ」

「はつ……？」

「実はわたくし、去解鏡を創つてしましましたの。そして、それを戦祝大臣殿の御家に……」

その言葉に、杜歩埜は絶句した。

いくら、相手が自分の外祖父とはいえ

「ふ、富実樹異母姉上……何とも、大胆不敵と言つか、何と言つか……」

「けれど、そつとなく持たないので御安心を。……あと二年ほどしか持たないはずですわ」

そうにつっこり笑つて言つと、最後にこいつ付け足した。

「そうそう、この誓約は、今日限定と言つておつて。明日、発表する予定ですから」

「あ……はい」

「それでは、失礼致しますわ」

富実樹は見事に要點プラスアルファのみを伝え、部屋を出て行つた。

そして、その脚で本宮に戻るのかと思ひきや……。

富実樹は、何と後宮の一十五階まで上がつてしまつたのだ。

そして、『花雲恭富実樹』から『本条由梨亞』へと変わつた。

その上、下級侍女の服を着ると、厨房に一分ほど籠もり、出て來た時には、持ち運び用の小型カートに何かを乗せて出て來た。

第八章 「あり得なかつたはずの凶行」

1（後書き）

外祖父：母方の祖父。

## 第八章「あり得なかつたはずの凶行」 2

富瑠美は、本宮の富実樹の執務室から離れた所にある、富瑠美専用の執務室に居た。

何をやっていたかと言えば……何と、うたた寝をしていた。

富瑠美の方も文章の推敲が終わり、既に政財大臣の手にキエシユは渡っていた。

今日は仕事を入れてしまふと総票会そうひよあいに差し障るといふので、他に仕事は入れていなかつた。

なので、推敲が終われば暇である。

そしてぼんやりとして居ると、何時の間にかうたた寝をしていたという訳だ。

富実樹は、扉をノックすると、声を掛けた。

「鳶大臣殿下？ 御入りしても宜しいでしょつか？」

返事がない。

「もし、鳶大臣殿下？」

それでも、返事がない。

意を決して、勝手にロックを外し、入ることにした。

「失礼致しますわ」

富実樹が部屋に入った途端、

「…………」

富実樹は固まってしまった。

何と、あの富瑠美が寝ていたのだ。

富実樹はゆっくりと歩み寄ると、肩を揺らした。

「う、うーん……もう少しだけ……御願い致しますわ……ムニヤ」

「…………」

それでも、肩を揺らし続ける。

「駄目、ですわ……あと……あと、少しですか……」

「…………」

富実樹の頭で、何かがブチッといつた。

「富瑠美、呑気に御眠りになられている場合じや御座いませんわよ」

富実樹は富瑠美の耳元に顔を寄せ、低い声で言った。

その上、富瑠美の身体に手を回し、何とそのまま持ち上げたのだ！さすがにそこまでされれば、目が覚めない訳にはいかない。

「きやつ……あ、ら？ 御早う、御座います、わ。どう、致しましたの？」

富瑠美は寝惚け眼でぼんやりと呴いた。

だが、次第に目が覚めてきたのか、

「あら、ら……夢、では……！」

と言いつと、完璧に目が覚めたようで、慌てて富実樹の手から逃れると、そのままへたり込んでしまった。

「お、おね、おね……何、な、な……か、変わ、つて……」

あまりにも慌て過ぎたせいで、ろくに喋れていない。

富実樹は小さく溜息をつくと、富瑠美に向かつて言った。

「富瑠美、落ち着いて頂けませんか？ そして椅子に御座り下さい。御話はそれからです」

富実樹は、富瑠美を椅子に座らせ、簡単に作ったフルーツジュースを飲ませた。

そして富実樹は峯慶のこと、恐らく富瑠美派がやつたところを除き話した。

富瑠美はしつかりしているからこそ、一度憤るともう手が付けられない。

……もつ、誰も止められなくなる。

そして、下手をしたら富瑠美派の関わった全員を終身刑にする可能性がある。

そこまで気性の激しい富瑠美を、敢えて刺激するつもりはない。

だが話を聞き終わった富瑠美は拳を握り締め、唇を引き結び、目を怒らせ、般若のような形相になっていた。

それは、思わず富実樹が後退るほどだった。

「ふ、富瑠美、……顔が怖いですわ……」

「あら、それは申し訳御座いませんわ」

全然、申し訳なく聞こえない上に、声が怖い。

富実樹が気迫を呑まれ、何も喋れないうちに、富瑠美が口を開いた。

「御異母姉様。犯人は、御分かりになられて？」

「い、いいえ」

「そうですか……身内の恥を曝すようになりますが、わたくしは、鳶大臣派の方がおやりになられたことだと思いますの」

富実樹は、思わずはっと息を呑んだ。

それで、富瑠美には全て分かつたようで、フウ、と溜息をつくと、先程の表情とは打って変わり、意外なことに穏やかな目をして言った。

「やはり、そうでしたの……御父様の御生命を狙うなど、御異母姉様の陣営の人間があやりになられるとは思えませんもの。それに、そのことを御公表されて困るのは御異母姉様ですからね。……許せませんわ。犯人の特定を御急ぎ下さいませんか？」

「す、少し御待ち下さいませ。勿論これは私論で御座いますが……わたくしも戦祝大臣殿も、富瑠美と同じ意見です。富瑠美派の人間がおやりになられたことだと思いますわ。けれど、何一つ証拠が御座いません。去解鏡を使うといつても、許可が出るまで、時間が掛かりますわ。わたくしが勅命を下せばもっと速くできるかも知れませんが、それはそれで後に不穏分子を生み出す原因にもなりかねません。そして時間があれば、結果を伝える者を買収することが可能ですね」

「で、ですが……何か、方法は御座いませんの？ 何か……」

富実樹は少し詰ると、ヒソヒソ声で言った。

「あの……これは秘密にしておいて下さいませ。実は戦祝大臣殿の御家に去解鏡がありますの。今日、それを見て貰えるように御頼み致しましたわ。そして、わたくしは勅命を下しません。それに、去

解鏡の結果を発表するのは、戦祝大臣の管轄でもなく、政財大臣の管轄でもない宗賽大臣しゅさいだいじんの管轄です。宗賽大臣殿は特にどちら派と言つてはいけないので、買収の危険があります。なので、今夜買収させます。そして戦祝大臣殿には、御父様を暗殺しようとした方が……まだ、どなたなのは分かりませんが、その方が御父様の暗殺を謀つていたのではないか、という噂をばら撒くように指示しております。そしてこのことは他言無用に御座います。話は、以上です。

何か御質問は御座いますか？」

キツパリと言い切られると、富瑠美は何を言つていいのか分からなくなり、首を横に振るしかできなかつた。

本当は、訊きたいことが一杯あつたのだが。

だが、富実樹はそれを見るとこりと笑い、

「ありがとうございますね。それでは失礼致します」と言つと、カートの上に空になつたコップを乗せ、部屋を出て行つた。

廊下を出ると、政財大臣にばつたりと出会つた。  
富実樹は侍女らしく廊下の端に寄ると、頭を下げて通り過ぎるのを待つた。

だが、目の前で足を止められてしまつた。

「その者、面を上げよ」

貴族に、たかが下級侍女が逆らえるはずがない。ゆつくりと、顔を上げた。

「見慣れぬ顔だな。其方、名は何と申す」

「……わたくしは、ユーリと申します」

あつさりと名前だけを伝える富実樹に、政財大臣は不快な顔をした。

「私は、名を申せと言つたのだ。つまり、其方の身分と全ての名を申せ。この私の命令に従えぬと抜かすか」

……ここで従う、先王付きの後宮勤めの下級侍女などいるはずがない。

なので、それに則つたやり方で、富実樹は答えた。

「あの……わたくしは、貴方様を存じ上げませんの。御無礼なことと存じますが、貴方様は一体どなた様でいらっしゃいますのでしょうか？」

あまりの答えに、政財大臣は絶句した。

「何を……」

「ほんに御無礼なことと存じ上げます。ですが、わたくしは本宮勤めの侍女では御座いません。わたくしは、後宮の先王陛下の下級侍女に御座いますので……」

「なるほど、な。あの前陛下は、自らの娘に下級侍女をさせておったのか」

政財大臣のその勘違いに、富実樹は目を瞠り慌てて言い訳を捻り出した。

「いえ、わたくしの曾祖母は、陛下の曾御祖母様にあらせられる花<sup>か</sup>鳶国<sup>おうごく</sup>第百五十代国王陛下であらせられた、癒璃亞<sup>ゆりあ</sup>女王様の父君<sup>あ</sup>らせられた、花鳶国<sup>おうごく</sup>第百四十九代国王陛下、襍祥<sup>おざじょう</sup>王様の娘に御座いました。つまり、癒璃亞女王様の異母妹<sup>いもうとい</sup>ですから、先王陛下との血の繫がりはありますが、娘では御座いませんわ。わたくしと先王陛下は、三<sup>み</sup>従兄妹に当たります」

富実樹のその答えに、政財大臣は目を瞠り、頷いた。

「なるほど。私は、政財大臣のフオリューシェア・アメリカ・シャリクだ。私が、其方の身分を訊ねたのは、王家との血の繫がりがなければ、妻にしようと思ったのだが」

富実樹はギョッとして、そして思い出した。

貴族は、王家との血の繫がりがない侍女ならば娶ることができるのだ。

富実樹の祖父であるノワールも、確かに妻の内に元侍女がいたはずである。

「だが、そのようなことなら無理だな……そうだ、コーリとや」

「は、はい、何で御座いましょうか？」

「先王陛下は、どちらに投票するか、存じてあるか」「はつ？」

富実樹は、本氣で

(こいつって……正真正銘の、大馬鹿者？)

と思つた。

そのようなことは、訊かないのが礼儀である。

「い、いいえ……ですが、最終論論説で御決めになられると思いますわ」

「存じない、か……」

その口調に、違和感を覚えた富実樹は、フォリュシェアに訊き返した。

「あの、政財大臣様は、どちらに御投票なさるおつもりですか？」  
どちらに自分が組していようと、敵対する陣営の意見の方がいい  
と思った場合は、統計は匿名化されて集計されるということもあり、  
そちらに投票することができる。

……まあ、フォリュシェアの場合、代表者である為それはないだ  
ろうが。

「私が、か？ 勿論、鳶大臣殿下の方だ。陛下の御意見も、尊重すべき所はある。だが、現実問題として考えると、鳶大臣殿下の御意見の方が、やりやすいのだ。それに……」

フォリュシェアは、そこで一息付くと、続けた。

「私は、あの小娘の仰ることは、いまいち信用がならん！」

富実樹は、思わず腰を抜かしかけた。

「あの陛下は、まだこの国に来て間がない。だが、鳶大臣殿下は違う。まあ、陛下ももう少しすれば御分かりになられるようになるだろうが……何故戦祝大臣の方が、政財大臣よりも位が高いのか。何故、王家の妻が六人、子供が十五人必要なのか。何故、何人も王家の人間が宗教家になるのか。そのことが御分かりになられてこそ、私はようやく陛下を信頼できる。しかし、今はまだその段階ではな

「フォリュシェアははつきりきっぱり言い切ったが、そこに富実樹は、ただ敵対心を燃やしているのではなく、王として信用できるか否か、という響きを感じた。

「わたくしは、貴方様に嫁ぐことも、何もできません。それに、わたくしは鳶大臣殿下よりも陛下の方を信頼しておりますわ。ですが、敵方におられる貴方様が、陛下を信用する可能性があり、先王陛下をとても信頼していたということが分かりましたわ」

「な、何、を……」

フォリュシェアは慌てて言つたが、ヴェールに蔽われた人の心を読む訓練を長年積んでいた富実樹には、相手をたかが侍女だと油断している人の心を読むのは朝飯前だった。

「それでは失礼致しますわ。仕事がありますので。わたくしは貴方様と出会えて良かつたですわ。貴方様は、陛下の敵では御座いませんと分かりましたから」

それを言い残すと、富実樹は一礼をし、立ち去つていった。

その後姿を、フォリュシェアが見つめているとは思いもせぬ。

富実樹が遠ざかると、フォリュシェアは、ぽつりと呟いた。

「何と言えばいいのか……気の強そうな、娘であるな。あの娘が王家の血を引き継いでいるとは残念だ。私の好みであったのに……」

そう言うと、富瑠美の執務室をノックし、入つて行つた。

フォリュシェアはそこで、楽しげに『ユーリ』という下級侍女の話をしたが、それを聞いた富瑠美は、父が意識不明の重体であることを忘れ、大爆笑を堪えたり、真っ蒼になつたりするのを堪えるので大変だった。

総票会の開場はとても広く、また総票会のみに使われる所だった。席は、擂り鉢を半分に割つたような階段状で、目の前にある壇上を取り囲んでいた。

席は、下から言つと学者、普通の宗教家、修道院長クラスの宗教家、王族の宗教家、官吏、地封貴族、官封貴族、王族だつた。だが、司会として前に立つてゐる宗賛大臣と峯慶、由梨亞妾の席が空いていた。

何故宗賛大臣が司会かというと、戦祝大臣は富実樹を、政財大臣は富瑠美を擁護するので、他に空いている高位の者は彼だからだ。

「ただ今より『地球連邦の宇宙連盟加盟要求』についての総票会を開催致します。この案件について一つの御発案が御座いました。陛下の御発案である『いきなり武力行使をするのではなく、まず話し合いの場を設け言葉により説得する』と、鳶大臣殿下的御発案である『地球連邦がいつまで経つても連盟に加盟しようとしないのは、元々加盟する意思がないということがあるので、武力をもつて征する』に御座います。これからこの御発案を御擁護する最終論説を始めます。それでは政財大臣殿、鳶大臣殿下の御発案を御擁護致して下さい。」

そう宗賛大臣が言うと、フォリュシェアは最終論説を始めた。

「承りました。鳶大臣殿下の御意見を擁護致します。殿下は地球連邦を、武力を持つて征すると仰られましたが、これには理由が御座います。地球連邦が我らに発見されたことを告げられたのは、今からおよそ五百年前。当時地球連邦は百何十国にも分かれ、言語も様々な種類があり、技術も後れておりました。その当初の状態では、加盟できないのは分かります。ですが、五百年で御座います。地球連邦の技術はそれなりの力をつけて参りましたのに、連盟に加盟しようとしない。連盟に加盟した方が技術発展や貿易には有利である

のに「

政財大臣はそこで一息つき、決然と顔を上げ、強い語調で告げた。  
「ということは、全宇宙共通連盟憲章に違反したことが地球連邦では行われていいのではないでしようか。それならば陛下の御発案である話し合いには応じないでしようし、応じたとしても加盟は拒否するはずです。ということは、さすがに警告は致しますが、武力を持つて征圧し地球連邦の間違いを糺した方が、地球連邦の民にとてもよいことではないのでしょうか。それらの理由により、我らは地球連邦を連盟に加盟させた方がよいと存じます。繰り返しますが、これは我らの為でもあり、地球連邦の民の為でも御座います。どうか我らの意見を御理解頂き、我らに御投票を御願い致します」

フォリュシエアがそう弁論すると、司会である宗賛大臣が

「ありがとうございました。それでは戦祝大臣殿、陛下の御発案を御擁護して下さい」

と言い、ノワールの番になつた。

「承りました。陛下の御意見を擁護致します。陛下は話し合いの場を設け、言葉により説得すると仰られました。無論、武力で攻め入った方が、簡単に征圧でき、あつと言う間に連盟へ加盟させられることでしょう。花鳶國の民も、それがよいと、考えるかも知れませぬ。ですが、地球連邦の民は、どう思つでしょうか」

一言一言に重みを乗せたノワールの言葉に、大部分の人が、はつとした。

「大抵は、自らの国のことだけを考えることで、上手くいきます。ですが戦は違います。どんなに気を配つても、必ず死者は出ます。勝つた国の方は、『名誉の戦死である』『國の為に戦つた立派な英雄である』と褒め称えられます。ですが、それでもその遺族は悲しみます。自分の孫が、息子が、夫が、父が亡くなつた。悲しまないはずがありません。ですが戦勝国の方は、まだ『勝つた』という事実に慰められることでしよう。ですが、戦敗国はそのようなことに慰められることもなく、逆に、何故自分の孫が、息子が、夫が、父

が逝つてしまつたのだろう。何故、自分の知り合いだつたのだろうと悲しみに身を浸すこととなります。すると、その悲しみは同じだけの強さの憎しみへと変貌します

ノワールは小さく溜息をついて悲しそうに言つと、不意に顔を上げ、訴えるように言つた。

「武力をもつて征圧致しても、何度もテロに遭遇する可能性があります。表面上は取り繕つても、一気にその溜め込んだ物が爆発する惧れがあります。最終的には無理かも知れませんが、何度も加盟するよう働き掛けからではないと、地球連邦の民からの信用が得られないでしょう。それに、周辺諸国からも、『いきなり攻めるのはどうだらうか』と言われかねませぬ。我が国の体面を保つ為にも、そして加盟後の信用を得る為にも、まずは話し合いの場を設けた方がよいと存じます。どうか、御投票宜しく御願い致します」

ノワールの言葉に、辺りはしんとなつた。

政財大臣の言つたことは考えたことがあるが、戦祝大臣の言つたことは考えたこともなかつた　　という思いが満ち溢れ、静まり返つていた。

富実樹は、予想外の展開に、複雑な思いで見下ろしていた。  
何故なら、さすがにこれくらいのことなら誰かは考えているだろう、と思つていたのだ。

しかし、皆の反応は違つた。

この沈黙が、富実樹の期待と大幅にずれていたことを雄弁に物語つっていた。

宗賛大臣すらも、自らの役目を忘れ、呆然としていたのだ。

さすがに一分以上も沈黙が続くと時間の無駄なので、富実樹は軽く咳払いをした。

それにまた皆ははつとなり、それから少しざわめき立つた。

「え、えー、皆様、御静かに願います」

宗賛大臣がそう言つと、また辺りは静まり返つた。

「ただ今より、投票の決まり事を御説明致します」

その言葉に、列席していた若い貴族、官吏、宗教家、学者と、初めての富実樹、富瑠美、トフヤリエナ杜歩埜、璃枝菜、最貴の長男で第二王子、ふわげん峯慶の第五子である風絃が耳を澄ます。

「まず、どちらに投票するのかを御決め致しましたら、陛下の御意見を御支持なさるならば『薦』の字を目の前のパネルに御書き下さいませ。書き終わリましても、集計する為しばらく御待ち下さい」

宗費大臣がそう言つと、宗費大臣も直ちに印えられている席に付き書き始めた。

しばらくすると、辺りが少しづわめき出した。

そして、その中の多くの視線が、峯慶と由梨亞姫が座るはずだった席に向けられた。

一部の人はい理由を知つてゐるが、他の人には体調を崩したと伝えてある為、二人がいないことに心配はしているものの、不安には思つていはないようだつた。

だが、知つてゐる者は氣が狂いそうになるほど心配していて、富実樹もその一人だつた。

それを表に出したら氣付く者もいるだらうから、知つてゐる者は表には出せなかつた。

特にそれだけではなく、富実樹や富瑠美の周りの高官達はピリピリしつぱなしだ。

だが、学者や官吏、宗教家など、下の方は特に碎けた雰囲気になつてゐる。

の、だが……何と、その元凶のはずの、富実樹と富瑠美が……喋つて、いた。

普通なら厭味の報酬でもしてゐるのだらうと思うが、微かだが笑い声すら聞こえる。

絶対に、厭味など言つはずがない。

そんな視線に曝されている富実樹と富瑠美だが、そのことには気が配つていなかつた。

そして始まつてから五分後、恐るべき僅差の結果が表れた。その数、何と五十三票差。

負けた方の陣営だつた人は、その結果に顎を落としたのだった。

ドッ、と、拍手と歓声が富実樹の周りで上げられた。

ここは、カサミアン宮の本宮にある、大広間の一つだ。

「陛下、おめでとう御座います！ 私は……この歳にして……初めて感動と言う物を知つたような気が致しますっ！」

と言つたのは、どんなことにでもすぐに感動する、『感動癖』があるノワール戦祝大臣だ。

聞いた話によると、彼は少年の頃から感動すると、すぐ死ぬだの自殺するだの殺してくれだのと言つてはその手段を持ち出して来ることがあるそうだ。

彼を収めるのは、彼の長男である、マリミアンより六つ年上のシャーワイン・リシェル・スウェールと、次男でありマリミアンより一つ年上のシャーキヌ・カナージュ・スウェール、三男であるマリミアンの異母弟のシャーリン・ミシェル・スウェールである。

戦祝大臣であるノワールには、妻が五人いる。

そのうち貴族は第一妻と第二妻で、元総下は第三妻と第四妻、元侍女は第五妻である。

ただし、その元侍女は子供ができなかつた為、実質上は四人の妻である。

ちなみに官封貴族は第五妻、地封貴族は第三妻、官吏や学者は第一妻まで妻が持てる。

大抵の場合、その人数ギリギリまで持つことが多い。

おまけに、正式な妻にしなくても、愛人として王宮の元侍女を入れることがある。

由梨亜妾の兄弟で例えると、第一妻の子供がシャーワインとシユ

メリアン、第一妻の子供がシャーリヌと由梨亞姫、第三妻の子供がシュリエルとアミエル、第四妻の子供がシャーリンである。

この場に集つた皆は、富実樹に向かって拍手喝采をした。

それは照れ笑いがかわしながら、ノワールに声を掛けた。

「戦祝大臣殿、感激し過ぎです。わたくし達は勝ちましたが、これからが正念場ですわ」

大部分の人々が予想し得なかつたことだが、僅か五十三票差で勝つたのは富実樹だつた。

その結果を聞いたフォリュシェアは畠然呆然、全く使い物にならない置物になつた。

しかし、一部の他の人の反応に比べれば、まだ害がないと言えるであろう。

何故なら、高位の富瑠美派の貴族達は、ほとんど失神状態だつたのだ。

その中で、異彩を放つたのが富瑠美だつた。

彼女は堂々と富実樹に近付き、

「おめでとう御座います、陛下。わたくしは敗れてしまつましたが、これからのことにも全力を尽くしたいと愚考致します」

と言い、にっこりと微笑んだのだ。

そのことによつて、まだ立てていたフォリュシェアの身体は左斜め方向に向かつてゆつくりと傾ぎ、ドシン、と言う音と共に姿が搖き消された。

また、富瑠美派の貴族達のほとんどが、そのことによつて失神し、前代未聞のかなりの大騒動をもつてこの総票会は終了した。

そして、富実樹の勝利を祝う為、と言つ名田を持って、富実樹派の貴族と全ての王族、そして富瑠美派の主だった貴族がこの大広間に集められたのだった。

だが、取り敢えず揃つていたのはここまで、各自食事をしたり議論をしたりしていた。

そして、その中に富実樹と富瑠美の姿もあつた。

「本当に参りましたわ、御異母姉様。わたくし達の完敗に御座います」

富瑠美がそう言つたのは、大広間から出られるよつになつている露台の一つである。

そこは今、富実樹と富瑠美で貸し切り状態になつていた。

「いいえ。そう大したことはやつておりませんわ」

と、富実樹はいけしゃあしゃあと白々しくも言った。

「わたくしは、皆様が御考えになられていなかつた事実を示しただけに過ぎませんわ。もし勝因があるとすれば、それだけですわね」

富実樹がそう言つと、今度は瞳に強い光を燈し、富瑠美に向き直つた。

「富瑠美、わたくしに何があつたとしても、この案を御進めして貰えないでしようか?」

「御異母姉様……?」

富瑠美の訝しげな声には答えず、富実樹はなおも迫つた。

「御約束を、願えませんか? 勿論、この案を御進めしても拒否された場合、貴女の方の案に移られても構いません。ですが、最初は……御願い致します」

「お、御異母姉様、少し御待ち下さいませ。勿論、貴女に何かあつた場合でも、総票会で可決されたことは絶対に御座いますわ。総票会での決定を覆すことができる方法は少なく、この後に議会に掛けられて覆されるか、国民の署名活動だけに御座います。そうでない限り、喜んで守らせて頂きますとも」

富瑠美のその返答に、富実樹は肩の力を抜き、ほつとしたように呟いた。

「良かつたですわ……それでは、中に戻りませんこと? もう五月とはいえ、ここは北方の土地。まだまだ夕方は寒う御座いますから」

富実樹はそう言つと、富瑠美と共に中に戻つた。

（何を御考えなさつておられるのでしょうか……）

富瑠美はそう思つたが、富実樹が本当に考えていることまでには、想像が及ばなかつた。

それに、そのことは、峯慶と由梨亞姫以外には、分からぬに違ひなかつた。

この祝賀会は大規模な物ではなかつたのに、終わつたのは翌日の午前二時だつた。

それも最後は、富実樹達兄姉弟妹が力を合わせて説得して終わらせたのだった。

富実樹は、侍女達がベッドを整え、部屋を出て行くのを黙つて待つていた。

そして、それを侍女達は

(きつと御疲れなのでしょうね)

と思い、サッサと部屋を出て行つた。

その気配が感じられなくなつた頃、富実樹は着ていた夜着を脱ぎ捨てて女官服を身に纏うと、『本条由梨亞』に姿を変え、音もなく、誰にも見咎められずに部屋を出て行つた。

富実樹は先程いた本宮に戻つていた。

そして、目的があるように見える足取りで、特に人の少ない一画へと向かつていた。

そして、着いた場所は……そこは、あの資料庫であつた。  
何故そこにいるのかを説明できるのは、富実樹自身と峯慶、由梨亞妾のみだらう。

ガツチャ

ギイ／＼

ガツ グツ ガツチヤン

と、またもや不気味な音を立てて、資料庫の扉が開いた。

富実樹は、ある決心をし、そして今朝見た資料庫の夢を思い出していた。

しかし、それは前の日にこいつそり忍び込んだ時と違う所があつた。まず、視線が違う。

それに違和感を覚え、ふとキエシューの入っているケースに映つた自分を見ると、何と『由梨亞』になつっていたのだ。

富実樹の意識 자체は驚いたものの、身体はさつさと歩いて行った。そして、あの亞空間に通じる紋様の所まで来ると、千紗と一緒に千年前に行つた時、病院で見つけたあの交換日記帳から出た銀色の光と同じ光がその紋様から溢れ出て、その光を浴びた『由梨亜』は全く躊躇わず、その紋様の中に足を踏み入れていた。

そして、その中にいる女性と会い、その女性が言葉を口にした時……『由梨亜』には、彼女が何を言つているのか……そして、何語で喋っているのが解つたのだ。

彼女が示していたのは、地球連邦に還る方法 話していたのは、

日本語。

そこで、富実樹は目が覚めたのだった。

富実樹は目が覚めると、今見ていた夢は真実だと、直感的に分かった。

そしてそれが、自分が喉から手が出るほどに望んでいたことだということも知つていた。

だから、富実樹は決めたのだった。

総票会<sup>そうひょあい</sup>が、自分の……『花雲恭富実樹<sup>かうぎよゆう</sup>』としての、最後の仕事だと。

勿論、簡単に自分の生まれた国を捨ててもいいのかと問われると、言葉に詰まるだろう。

だが、富実樹は自分の出した考えは……最終論説で述べた自分の考えは、決してこの国の人達には理解してもらえない物だと感じ取つていた。

勿論、投票者は、僅差ではあつたが過半数を超えた。

だが、きっとそれは、富実樹の出した、他人には考え方もしなかつた『真新しい考え方<sup>ましんしにい考え方</sup>』に心を動かされたのが大半だろう。『地球連邦<sup>かきゅうれんぽう</sup>』と『花<sup>か</sup>鳶<sup>おう</sup>國<sup>こく</sup><sup>かおうこく</sup>』……そこに住む人達の考えは、全く違つていた。

そんな花鳶國では、富実樹という平和的な考えを持つた王などは、必要ない。

必要なのは、富瑠美のよくな考え方を持った勇ましいH。

富実樹は、心残りはあつたものの、この国の民にとつてはもう必要がなくなつた自分は、地球連邦に還つてもいいだろうと思つた。

それに、王としての責務は、自分などよりも富瑠美の方がよっぽど上手くやれるし、そもそも自分が十三になるまでは、そちらの方が、確定していた未来だったのだ。

心残りは、父の生死と、暗殺者の黒幕、そして杜歩埜とふやと些南美さなみの恋愛。

だが、地球連邦に還つても父の生死は知ることができないし、暗殺者の黒幕も同じである。

杜歩埜と些南美の恋愛に關しても、富瑠美が王位に即けば、その夫は杜歩埜となり、つまりは、些南美は総下そうげになれ、杜歩埜と一緒になる。

富実樹の心残りは時間が解決するであらう問題で、自分が口出しえきる問題でもない。

それらの解決を待つてから行くこともできるが、そうなると次の仕事が入つてしまつ。

一旦仕事の区切りがついた今日を逃すと、次の機会はいつになるか分からぬ。

だから今、富実樹は資料庫へと向かつたのだった。

富実樹は由梨亞の姿になると、あの紋様の所まで駆けて行き、一歩足を踏み入れた。

すると、一昨日のように突風が吹き抜け、あの亞空間に飛んだ。

そして、あの女性が現れると、地球連邦の古代語で

『貴女は何を望みますか？』

と訊ねてきた。

富実樹は、今度は激昂せずに、穏やかに地球連邦の古代語で答え

た。

「地球連邦に……還ることです」

すると、あの女性が、また問い合わせ重ねた。

それは、一昨日は意味の解らない物であつたが、今は、意味が解つた。

『その為に、貴女は全てを捨てられますか？ その覚悟があるのなら頷いて下さい。何か質問や希望があるのなら、仰って下さい。何か仰る時は、現代の言葉で構いません』

富実樹は静かに深呼吸すると、頷き、口を開いた。

「私は、地球連邦に戻りたいです。今まで、ここで得ていた物を全て捨て去つても。そして、地球連邦に戻つた時に欲しいことがあります。と言つより、変えて欲しいことが

『何でしょうか？』

「それは……あの、私と千紗を、双子にして下さい。そして、千紗だけは真実を……今までの偽りの記憶も、本当の記憶も、全て覚えているよつにして下さい」

『ふ……双、子？』

その女性は、呆気に取られたように咳いた。

だが、それに対し、富実樹は大真面目に答えた。

「ええ、そうです。今私が地球連邦に戻つても、戸籍はないですよね？ もし本条家に戻るとしたら、千紗は彩音家に戻ってしまう。千紗の本当の両親は、本条耀太と本条瑠璃なのに。けれど、これ以上関係ない人を巻き込む訳には行かないんです。なので、私と千紗が双子になれば……そうすれば、何もかもが解決するんです」

『……そう、ですか。では、どちらを「姉」とするのですか？』

「それは、産まれた順で 方で」

富実樹は、内緒話をする時のように、女性の耳元で咳いた。

『はい。承りました。富実樹……わたくしの血を継ぐ者よ』

『血を……継ぐ？ 貴女は……一体、何者なんですか？』

富実樹は混乱してしまった。

「この女性が、生きていた人間だということも、先祖だといつこと  
も。

『わたくしは、貴女の曾祖母。何故死んだばずのわたくしがここに  
いるかと言つと、わたくしの孫、峯慶に頼まれてのこと』  
(えつと、私の御父様の、御祖母様つて……あつ。もしかしたらこ  
の人は……)

「花雲恭、癒璃亞様…………？」

花雲恭癒璃亞とは、この花薦国(はなげんこく)の元女王で、魔族の力を全て持つ  
て産まれた前代未聞の人物であり、その時代はとても平和だったと  
いう、富実樹の曾祖母である。

『御名答。さすがですわ。さて、そろそろ行きましょうか？……  
そうそう、峯慶と、わたくしと同じ名を持つ由梨亜妻になら、伝言  
が残せますわよ』

「ええ、それでは、御父様には　と。御母様には　と御伝え下  
さい。それと……親不孝者で、すみませんと」

『はい。それでは、富実樹。貴女が地球連邦に行つても、元氣でい  
ますように』

「はい。……ありがとうございます、曾御祖母様。それでは……さ  
よづなり」

『さよづなり、富実樹』

癒璃亞は富実樹のことを暖かい田で見守り、亜空間を、真っ直ぐ  
に下に向かつて落ちていく富実樹　いや、もう由梨亜の身体にな  
つている富実樹のことを、ずっと見ていた。

そして、由梨亜の姿が消えた時……それと一緒に、癒璃亞の姿も  
消えていた。

由梨亜妾は、ふと目が覚めて、枕から顔を上げた。  
窓の外はまだ暗く、夜明けまではまだまだ遠い。

だが、嫌な予感が……ざわざわと、胸騒ぎがある。

由梨亜妾は微々たる魔力を持っているが、このこと自体は、別に珍しくない。

何故なら、花鳶国の人間で魔族の血が流れていない人間などほとんどいないからだ。

そして、由梨亜妾が使える魔法はないが、鋭い……鋭過ぎるほど

の勘を持つていた。

おまけに、その勘が外れたことは今まで一度もない。

だから、由梨亜妾は起き上がった。

由梨亜妾は鋭い勘は持っていたものの、その出来事を特定することができない。

だから、一番懸念していたこと　　峯慶に何かが起こったのでは

ないかと思ったのだ。

そして、由梨亜妾は峯慶の枕元に行つたものの、別に何もなかつた。

峯慶は穏やかな寝顔で、月光を浴びていた。

だが、その顔はよく見ると、汗が出てている。

毒を体外から出そうとする働きの為、高熱も出ている。

しかし……言い換えれば、特に変わった様子はない。

由梨亜妾は首を捻り、だが峯慶に何もなかつたことに安堵し……

眠ろうとその場を動いた瞬間、部屋に突風が駆け巡った。

由梨亜妾が驚き、その風の渦の中心を見詰めていると、その中から人が現れた。

「癒璃亜、女王様……」

由梨亜妾が呻くように呟くと、その人は穏やかな、慰めるような微笑を顔に浮かべた。

そのことで、由梨亜妾は何もかもを察し、その場に崩れてしまった。

そして、嗚咽を漏らし、その頬を涙が滑り落ちた。

そんな由梨亜妾の背中を、癒璃亜はそっと撫でた。

「それでは……癒璃亞女王様がここにいらっしゃるとこついとせ、つまり、富実樹はもう、地球連邦へ……！」

『はい。そうですね。そして、貴方に伝言を預かつております』

「伝言……？」

『はい。峯慶、田を御覚ましなさい』

癒璃亞のその言葉に、峯慶は田を開けた。

だが、それは癒璃亞の力を持つて一時的にしたこと……癒璃亞が術を解くか、一定の時間が過ぎれば、また眠りに落ちてしまう。

由梨亜姫はそのことを知っていた為、手早く峯慶に今の状態を説明し、癒璃亞からの伝言を聞く体勢に入つた。

『由梨亜姫には、

「御母様、御免なさい。わたくしは御母様の気持ちを知っていたのに、それに答えることはできません。どうぞ御許し下さいませ」と。峯慶には、

「御父様、わたくしのせいで毒殺されかかってしまい、本当に申し訳ありませんでした。犯人を捕まえる前に去ってしまいます、御祖父様に指示し、どのようにすればよいかを託しました。わたくしの代わりに、全てやつて貰います」

と。そして、一人に、

「親不孝者ですみません」との伝言でした

癒璃亞の伝言に、由梨亜姫はそつと田を開じて涙を流し、峯慶は静かに聞いていた。

そして、その伝言を言い終わると、癒璃亞はいつ言った。

『さて、わたくしはこれで役目を終えました。逝かせて貰つても宜しいですか？』

その問いに、峯慶は頼み事をした。

「もし……もし、まだこの世にいらっしゃつても宜しいのならば、どうか、富実樹に憑いていてもらえないでしょうか」

『富実樹に……？』しかし、あの子は

「はい。だからこそ憑いていて欲しいのです。もし大臣の座を得ている者が暴走したら、そのことを伝えて欲しいのです。あの子の護りとなつて欲しい……守護靈として」

『守護靈ですか……いいでしょ。富実樹には、確か守護靈が憑いていませんでしたから。地球連邦に行くのは少し骨ですが、やってみましょう』

『嗚呼……ありがとうございます、御祖母、様』

峯慶はそう言つと、ガクッと頭を垂れ、眠りに付いた。

由梨亜妾はその突然のことに田を丸くしていつたが、峯慶の身体を元通りにベッドに横たえると、癒璃亜に向き直つた。

『癒璃亜女王様、どうぞ御願い致します。どうか……富実樹を、御護り下さいませ』

『由梨亜妾、其方は、このことに不満ですね』

『ゆ……癒璃亜、様……！』

由梨亜妾は、狼狽えた。

自分の心の眞実を見事に言い当てられたからだつた。

由梨亜妾は、富実樹のことを田に入れても痛くないと思つてゐるが、それは峯慶の前でも露わにしてはいけない感情だつた。

富実樹は未成年だが、既に被保護者ではなく、この国の国民全ての保護者なのだ。

だから、そんな富実樹に占有物のように接することは、断じて許されない。

だが、そんな由梨亜妾に、癒璃亜は笑つて答えた。

『その気持ちは、母ならば誰にでも共通する想いです。わたくしにも息子が二人、娘が一人いますが、後を継いだ簾聯も、鳶大臣になつた糸原も、他国の王子に嫁いだ梨美亜も、手放したくないほど可愛がっていましたから。そのことを思うと、貴女と富実樹を引き離したのは、可哀想なことでした』

『いいえ、わたくしは、富実樹のことを手放したくないと、一生傍にいて欲しいと思っています。ですが、それはわたくしの自儘な考

えでした。富実樹は、わたくし達よりも、地球連邦の友の方方が大事なのです。仕方ありません。ですが、それとわたくしがあの子を愛するのとでは、全くもって話が違いますわ。ですから、今までこの国に留まってくれたことに、感謝したいと思います』

『そうですか……それでは、わたくしは富実樹の所に参ります。御

元氣で、由梨亜妾』

「はい。癒璃亜女王様も、どうか御元氣で」

違う字ながら、同じ読みの名を持つ実体と幽体の二人 同じ花雲恭の名を持つ一人は、しばらく見詰め合い、そして癒璃亜は消えた。

由梨亜妾は、そつと涙を流しながら、眠りに戻った。

明日から、富実樹女王が消えたことで様々な懸案が出て来ることは、確実なことだったから。

由梨亜妾にとって血の繋がらない娘、鳶大臣である富瑠美のことも考え、眠りについた。

翌朝、とても慌てた顔をした、由梨亞妾の上級侍女であり従姉でもある、リーシュ・マリヌ・キルテットが慌てた様子で起こしに来た。

「由梨亞妾様……御起き下さいませつ。一大事で御座いますつ！」  
 「どうしたのです……？」リーシュ。総票会の結果ならば、昨晩聞きましたよ？ それとも、峯慶様に、何か御座いましたか？」

「いいえつ。違いますつ！ その……それが……」

リーシュは大分躊躇つた後、喉の奥から絞り出すような声で告げた。

「陛下が……富実樹様が、行方不明になられましたつ！」

その言葉に、由梨亞妾の顔から、音を立てて血の気が退いた。

「富実、樹が……富実樹が、行方不明……？」

「はい。今日になってから祝賀会は御開きになつたのですが、その後、陛下の上級侍女達の証言によると、御部屋まで御戻りになられ、夜着にも御着替えになられたそうですが、ベッドには寝た形跡が御座いませんでした。もしこれが誘拐ならばそれを直して行つたのかも知れませんが……もしかしたら、御覚悟の上の御失踪かと」

リーシュの言葉に、由梨亞妾は間髪を容れずに叫んだ。

「そんなはずは御座いません！ これからなのですよ？ 地球連邦に、連盟に加盟させる為に話し合いをすると提案したのは富実樹なのですよ？ それなのに、それをやり遂げずに失踪するなど……わたくし達の元からいなくなるはずが御座いません！ リーシュ、ミリュア、富瑠美<sup>ふるみ</sup>と話し合う必要があります。すぐに富瑠美をわたくしの部屋に御呼び下さいませつ！ ルーシュ、アルアはわたくしの着替えを手伝つて！」

「はい」

ちなみに、このミリュア・ルリアン・トーチェとルーシュ・クリ

ル・フュートとアルア・ルザート・ジョートは、由梨亞妻の従姉妹達で、上級侍女である。

その由梨亞妻は、誰が見ても本当のことを見ついているとは思わないような様子だった。

そして準備は整い、僅か三十分後には富瑠美と対峙していた。

「そんな……まさか、御異母姉様<sup>おねえさま</sup>がいなくなられるなんて……」

顔を押さえて呻いた富瑠美に、由梨亞妻は慰めるように言った。  
「富瑠美、それは今言うべきことでは御座いませんわ。早急に手を打たねばなりません。貴女は鳶大臣<sup>おうだいじん</sup>であり、第一王位繼承者。ここで貴女が動かなければ、皆が付いて行けませんわ」

そんな由梨亞妻に、富瑠美は疲れたような笑みを浮かべて答えた。  
「由梨亞妻、わたくしは、自らの意思で、御異母姉様は出て行かれただのだと思いますわ。何故かと言つて、あの祝賀会で御異母姉様はわたくしにこう仰いましたの。

『もし、わたくしに何かあったとしても、この案を御進めして貰えないでしようか』

と。つまり、いなくなる決意をしていたのではないでしょうか。あの御異母姉様が、このような重要なことを置いて出て行くとはとても考えられないのですが、あの御様子からすると、御自分で出て行つたのではないかと思つてしまつたのです。残念ながら、この後宮には防犯カメラは存在しません。そんな物、設置する意味が御座いませんでしたから。ですが、本宮の人気がよく出入りする場所にはあります。至急、それを確認してもらいましょう。そして、去解鏡<sup>きょかげきょう</sup>の申請を致します。由梨亞妻、御異母姉様は、絶対にわたくしが探し出して見せますわっ！」

富瑠美はそう宣言すると、部屋を颯爽と出て行った。

恐らく本宮に行き、鳶大臣の権限で昨夜の全ての防犯カメラを見

て、その一方で峯慶の暗殺者を視るよりも大事な、第一級緊急事項として去解鏡の使用を申請するのだろう。

由梨亜妾はそんな富瑠美の姿に由梨亜妾は苦笑し、思った。

(富瑠美つたら……何て可愛いのかしら。素直で、純真で……残念ですが、富実樹は防犯カメラに映つていないわ。あの癒璃亜女王様が憑いていて下さったのですもの。それに、去解鏡は人の質問に答えるだけ。富実樹が夜どこに行つたかという質問には、寝室に行つたということしか映し出さないでしようし……正しい質問の仕方としては、富実樹は最後に花鳥園のどこに行くのを望んだのか、もしくは、『本条由梨亜』が花雲恭癒璃亞女王様と会ったのは何故か、という質問でないとね……けれど、眞実の断片を知らない人では、そのような質問は思い浮かばないでしょう。……富実樹)

由梨亜妾は、窓から空を見上げた。

空は、今日も高く青く澄んでいた。

(富実樹、貴女はこの空と通じる所にはもういない。けれど、時空を隔てた宇宙の果てに、あの子は元氣でいる……。わたくしは、それだけで充分です。あと、峯慶様が御無事でおられるならば……わたくしは、それだけでいいです。神様、この世に、もし神がそのような名でなくとも、わたくしの願いを叶えてくれる力を持つ方がいらっしゃるのなら、峯慶様の御生命を御助け下さいませ。どうか、御願い致します……)

由梨亜妾は一心に祈り、願い、願い続けた。

「由梨亜妾様……」

由梨亜妾は祈り続けていたが、その声でふと現実に引き戻された。だが、目を上げた先には、富実樹の上級侍女がいた。

「あら……？ 貴女は、シリュイでは御座いませんか。どうなされましたの？」

そう、由梨亜妾に、富実樹の侍女が会いに来たのである。

由梨亜妾と富実樹は親子だが、今の富実樹は王である。

だから、生活する階が違つてくる為、本人同士ならばともかく、

侍女が会いに来るなんてことはほとんどないものである。

「由梨亜妾様、富瑠美様からの伝言に御座います。分かつたことが御座いますので、本宮に御越し下さいませとのことで」

「由梨亜妾はシリュイの言葉が終わる前に立ち上がり、

「リーシュ、ミリコア！ わたくしと共に本宮へ来て下さい！」

ルーシュ、アルアはここで待機し、連絡係となつて下さい…」

「はいっ」

「仰せのままに」

「承りましたわ」

「それでは早速参りましよう」

「ええ。ありがとうございます御座いました、シリュイ。それではリーシュ、ミリコア。参りましょ、うー！」

「はいっー！」

三人は、驚異的な速さで歩き去つていった。

シリュイは唖然として伯母の姿を見送っていたが、自分の役目を思い出し、慌てて部屋を出た。

次の日、由梨亜妾は暗い顔付きだった。

富実樹のことは何も分かつていないし、防犯カメラも去解鏡も、何の役にも立たなかつた。

そして、峯慶は未だ意識不明である。

だが、それは分かつていたことなので、それが原因ではない別の……重要なことだった。

「ゆり……マリミアン様、御荷物は全てまとめ終わりました

それを言つたリーシュの顔も暗いが、それよりも重大なことがある。

由梨亜妾はもう、妾めがけではなくなつた。

ただの、マリミアン・カナージュ・スウェールに戻つたのだ。

その理由は公表するわけにはいかず、表向きは、『ノワール・エリア・スウェールが体調を崩してしまい、心細くなり、無理とは承知しながらも由梨亞妾の帰還を求め、それに富瑠美が同意した』となっているが、本当は『決して大きな声では言えないような大罪をノワール・エリア・スウェールが犯してしまった。よつて、戦祝大臣の地位を剥奪、長男のシャーウイン・リシェル・スウェールにその座を譲る。また花雲恭由梨亞の妾の地位剥奪と王宮からの追放、王籍からの削除、また花雲恭由梨亞の侍女侍従の王宮追放をする』という物である。

つまり、由梨亞妾が花雲恭由梨亞でなくなると同時に、上級侍女のリーシュ、ミリコア、ルーシュ、アルアだけではなく、その下の階級にある、総下そうげの血を つまり、王族の血を引く侍女も侍従も、王宮から出されるのだ。

「失礼致します、御母様……」

由梨亞妾 いや、マリミアンはその声に顔を上げた。  
すると、目の前には富瑠美、杜歩埜とふや、些南美さなみ、柚希夜ゆきやがいた。

「貴方、達……」「

「ゆ……マリミアン様、本当に、行かれてしまうのですか？」

富瑠美のその不安げな声に、マリミアンは悲しげな微笑みを浮かべて答えた。

「富瑠美、貴女にも分かっているでしょう？ それが、決定したことですわ」

「御母様っ！」

些南美は耐え切れずにマリミアンに抱き付き、涙を流した。

「本当に……本当に、御別れなのですねっ……」

「ええ。わたくしは一人で行きます。富瑠美、杜歩埜、些南美、柚希夜。貴方達は、ここで幸せになりなさい。まあ、柚希夜は成人したらここを出るでしょうけれど……

「はい、母上……」

王族は、王やその伴侶、そして鳶大臣になる以外に、この王宮に

留まる術はない。

なので、個々の才能に応じて運動の世界に行つたり、科学研究・学者の分野に行つたり、芸能・芸術方面に行つたり、商売人や官吏になつたり、宗教の世界に入つたりする。

柚希夜は教師という職に興味があつたので、成人したら、柚希夜は城を出ることになるだろう。

その時だった。

ノックの音がしたかと思うと、いきなり扉が開いた。

「失礼致しますわ、マリミアン」

そう、居丈高に言い、深沙祇妃みさぎひが入つて來た。

だが、その姿を見て些南美と柚希夜が抑え切れずに

「うつ」

と声を漏らし、顔を歪めてしまった。

何故なら、これから王宮を出る為、質素な服装をしているマリミアンに対する當て付けのように、年齢に似合わない豪華なふわふわのドレスを身に纏い、それには様々なずつしりとした刺繡ダイヤモンドを施した拳句レースをふんだんに巻き付け、透明と黄色と青の金剛石を無数に縫い付け、髪は豪奢に最近の流行に則つてアイロンで細い巻きを大量に作り、それを幾つかの束に纏め、それぞれの束に金糸銀糸を大量に編み込み、珊瑚コラル、翡翠ジェイド、瑠璃ラビスラスリなどの宝石を埋め込んだティアラを被り、ネックレスは、粒を丁寧に揃えた涙型の真っ白な真珠パールと、綺麗に澄んだ翠玉エメラルドをそれ一連ずつ首に掛け、ブレスレットには大粒の水晶クォーツと淡い色の青玉サファイア、指輪には大粒な紅玉ルビーと桃色をした金剛石ダイヤモンドを嵌めていたのだ。

いや、よくよく見ると、ドレスには様々な色の小粒の宝石が、もつと大量に付いているようだ。

今この世の中、人工でない本物の宝石など金持ちにしか手に入らないのに、全て天然物で、おまけに大粒であり、厭味な宝石の展覧会である。

これからどこかのパーティーに行くのかと突つ込みたくなるような

格好でもあり、そしてそのパーティーでも浮くことと間違いなしの恰好である。

そして何よりも、既に四十代になっている『オバサン』のする格好ではない。

「御機嫌よう、マリミアン。貴女、王宮から立ち去ることになったのですってね。嫁いだ女性は、滅多に実家へ長期滞在できぬのに、御帰りになられるのですって？ それは大変御喜ばしいことに御座いますわね。戦祝大臣が御倒れになつたことは残念でしたが」

深沙祇妃は真実を知っているのに、相変わらず図々しい物言いだ。あまりなことに、富瑠美の頭のどこかがブチッという大きな音を立てて吹っ飛んだ。

「小母様、邪魔ですから何処かへ行つて下さりませんこと？ わたくし達は御母様との御別れを悲しんでいるのですから。そして、姉が行方不明になつたことも悲しく思つてているのですから。部外者の小母様なんかに、邪魔されたくは御座いませんのよ」

そのあまりな言葉に、深沙祇妃は絶句し、次いで、見る見るうちに頭に血が上つた。

「あ、貴女という娘は！ わたくしといふ母を持ちながら、よくもそんなことを……！」

「生憎ですが、貴女がわたくしを産んだ者でも、わたくしを育てて下さったのは由梨亜姫です。血が繋がつていない？ それが何です。由梨亜姫がわたくしを育てて下さったのは、深沙祇妃、貴女がわたくしを育てるなどを拒否なさつたからでしょう。貴女がこのことについて文句を言つ資格は御座いません。……まあ、ここから出て行きなさい」

富瑠美はそう言つと、煩そうに深沙祇妃を部屋から追い払つた。

その様子を杜歩埜、些南美、柚希夜は睡然として、マコミアンは静かに見守つていた。

「富瑠美、御願いがあるのですが……」  
不意に、マリミアンが言つた。

「何でしょうか？」

「些南美が成人したら……その頃には、貴女と杜歩埜は結婚しているでしょう?」

「はい。それが、何か?」

富瑠美も杜歩埜も、それを全く変に思つていなかった。

それは、富瑠美がこの国の王族として産まれたことと、富実樹が還つてくるまでは、富瑠美は杜歩埜と結婚して王位に即くことが決まつていたからだ。

「それならば、些南美を総下にして欲しいのです。それが、富実樹の願いでもあります」

富瑠美は目を瞠つて絶句し、杜歩埜と些南美は居心地悪そうに身動きした。

一般的に、『総下』とは口蔭者であり、仮にも王家の姫君がなりたいと思つ物ではないと知つてゐる富瑠美は、呆然と口を開いた。

「何故……総下、などに……」

「些南美と杜歩埜が両想いだからですわ。どうか、御願い致します」  
大事な異母妹の一人である些南美を、そんな者にはしたくないと  
は思つたが、真剣なマコミアンの表情と、杜歩埜と些南美の懇願す  
るような表情に、ゆつくりと頷いた。

「……分かりましたわ。それくらいならば、容易いことです。元々  
些南美には婚約者がおりませんし、官吏になる気も市井で働く意思  
もありません。些南美は宗教家になるという意思を示しておりまし  
たので、何の問題も御座いませんわ」

「富瑠美御異母姉様……」

杜歩埜と些南美は椅子から立ち上ると、その場に膝を付いた。

「ありがとうございます、富瑠美御異母姉様。この御恩は決して忘  
れませんわ」

「私もです。本当に、ありがとうございます」

「いいえ。でも、貴方達がそのことを何年も秘密にしておいたこと  
は、とても驚きましたわ」

「大したことでは御座いませんわ。ただ『賢い異母兄を慕う純粹な異母妹』と『異母妹の面倒見のよい優しい異母兄』を演じていただけですわ」

その場にいた皆がクスッと笑つたその瞬間、リーシュが部屋に入つてきた。

「マリミアン様、そろそろ、時間で御座います」

「まあ……もうそんな時間。それでは富瑠美、杜歩埜、些南美、柚希夜……幸せになりなさい。それが、わたくしの願いです。それと……どうか、峯慶様を 貴方達の父を、宜しく頼みます。それでは、さよなら」

「御母様……さよなら」

「私は、絶対に忘れません。御元氣で、母上」

「きつと……また会つて見せます。その時までは、さよならですわね」

「さよなら……御元氣で」

多種多様の別れの言葉を耳にし、マリミアンは部屋を出て行つた。マリミアンが部屋を出て行くと、些南美が長椅子に座り込んだ。

「御母様……」

些南美の目から、涙が零れ落ちた。

そんな些南美の姿を、誰も慰めることができなかつた。

何故なら、彼らも同じように打ちのめされていたからだ。

特に富瑠美は、視線を床に落とし、涙を必死で堪えていた。

(御異母姉様も、御父様も、マリミアン様もいなくなつてしまつた)

……御異母姉様には、何も手掛かりがない。御父様は昏睡状態。マリミアン様は、王宮追放……そして、わたくしが王位へ……。まるで、呪われているようですね。御願いです。御願いですから、御異母姉様……戻つて来て下さいっ！)

だが、そんな富瑠美の生命を賭けるかのよつた必死の願いは……  
決して、叶えられることがなかつた。

「千紗（ちさ）！ ジャあ、また明日部活でねつ！」

「うんつ！ 藍南（あいな）、尚鈴（しょうこ）、素香（そとか）つ！ ジャあねつ！」

そう言い、千紗はその四人と別れた。

彼女達は千紗の部活の仲間であり、副部長が素香、金管樂器の代表的な役割を担っている金管セクションが尚鈴、木管樂器の代表的な役割を担っているコンサートミストレルが藍南で、他に副部長に睦月（むつき）、もう一人の金管セクションに涼斗（りょうと）、コンサートマスターに奏谷（そうや）がいる。

嶺郷高校吹奏樂部の幹部は、この七人で形成されていた。

その中ではこの上げた女子四人男子三人とプラス一名で仲のよいグループを作っている。

八人は、他の部員が苦笑するほど仲が良かつた。

この日は、女子四人でカラオケに行って来た所だった。

（遅くなっちゃったな……うつわ、もう五時三十分になる～！ 休みの日の門限六時なのにつ！）

千紗は慌てて走っていたが、声を掛けられて足を止めた。

「おい、千紗！」

「睦月（つ）！ どうしたの？ こんな時間に……」

「それはこっちの台詞（だいし）だよ。千紗つて門限厳しいだろ？ 倆車（ある

からさ）。近くまで乗つけてくよ」

「ありがとう！ 睦月（つ）！ 嘴呼（くちあ）ふ、これで救われた……」

「何だよ、そこまで悲觀（ひくん）することないだろ？？」

その言葉に、千紗は気まずそうな顔をする。

「実は今日逃げて来ちゃったんだよね。それで、机の上に『門限までには帰ります』ってメモ置いて来ちゃったからさ。『サボつただけならまだしも自ら示したことすら破るとは何事か！

お前は本条（ほじょう）家のの人間としての自覚（じかつ）はあるのか！』

つてお父様に怒鳴られるに決まつてるもん

千紗は肩を竦めて言つと、睦月の車に乗り、家まで帰つて行つた。  
そして家に帰るとやはり、耀太の怒鳴り声が屋敷を揺るがした。

「お前という娘は！ 今日は聰殿さち殿、護殿まもる殿、早富殿さみ富殿が来てくれると前々から言つておいただろ？ が！ 彼らに無駄足を踏ませてしまつた私の世間体はどうなると言うのだつ！」

その延々と続きそうな耀太の言葉を、煩そうに千紗は途中で遮つた。

「んなもん知らないし。第一前々つて何。言われたの昨日だよ？ しかも夜。あたしはもう友達と約束してたんだから。先に約束した方が大事だつて、最初に約束したことは守らなくてはならないって言つてたのはどこの誰だつたつけ？ お父様じやないの？」

「うつ……うぐつ……」

確かに、言つた覚えがあるので言い返せない。

「あたしは最初の約束を守つて遊びに行つたの。お父様の言つことには逆らつてない。それに、お父様はあの人達に会えつて言わなかつたでしょ？ 『明日は婚約者候補達が来る』としか言つてないもん。それにあたし、メモ残したよ？ 六時までに帰るつて。あたしはちゃんとそれを守つた。あたしはお父様に怒られるようなことは何一つやつてないわ。なのに怒るの？」

正論過ぎて……反論も何もできない。

だが、立ち去ろうとする千紗に、耀太は思い切つて声を掛けた。

「千紗、お前は明日の午後、何も予定はないか？」

「……ないけど」

「それでは、応接室に来い」

「……分かつたわ。でも、午前は部活あるから駄目だからね」

そう言い置くと、千紗は部屋へと行つた。

千紗の姿が見えなくなると、耀太は大きな溜息をついた。

「何故……小学校の頃は、もっと言つことを聞く、素直な子だつたのに……」

当たり前だ。

それは、千紗ではなく由梨亞ゆりあだったのだから。  
だが、それを知らない耀太は、嘆いていた。

「一体、どこで育て方を間違つたというのだ……」

千紗は、ベッドの上に倒れ込むと、溜息をついた。  
(何でお父様はあんなに頑固なの？ 昔は優しかつ、た？ あれ？  
何か違う……？)

千紗は今までに何度も感じていた違和感を覚えた。  
今までには気にせずに通り過ぎていたのだが、今は無性に気になつた。

『千紗、『ご飯よ』。そろそろ降りてきなさい』

『はい、お母さんっ！』

今まで一度もなかつたことだが、記憶の底からそんな会話が飛び上がってきた。

普通は、自分が勝手に考え出したのか、話の中にでも出て来たのかと思うが、妙な胸騒ぎがした。

これは他人事ではない、自分のことだと……そう、直感的に感じた。

だからと書いて、どうにかできる物でもない。

妙な胸騒ぎに鼓動が速くなるのを感じ、千紗は起き上がり呼吸を整えようとした。

その時、いきなり自分の部屋の一つから、オルゴールの音が聞こえてきたのだ。

隣の部屋と言つても、今ここ近くには千紗以外人がいない。  
だから、聞こえたのだった。

(一体、何だろう……まさか、あたしの部屋に勝手に入つてくれるわけないしね)

と思いながら千紗はその部屋に行つた。

すると、部屋の隅に置いてある本棚の上のオルゴールが勝手に開いていた。

それは六年生の時の誕生日プレゼントとして、手作りの特注品として頼んだ物だった。

それは千紗のイメージとは全く違う、纖細で可憐な、基調が青の可愛らしい物だった。

その中には、赤系の色のビーズで作られたブレスレットとネックレスが入っていた。

何故、そんな物を持つているのか分からぬ。

だが、とても大切な物だということは分かつていた。

ふと、そのアクセサリーを手に取つた千紗の脳裏に、声と顔が浮かび上がってきた。

『うわあ。千紗、ありがとう…。丁度着るドレスが青いんだよね』

そう言つて微笑んだ、明るく澄んだ声の持ち主……柔らかく波打つた茶色い髪に、縁がかった黒の瞳の美少女 そう、本条由梨亜の顔が浮かび上がってきた。

(これ……由梨亜っ！ あたしの…… 親友っ！)

そして、それに答えるかのように、自分の、今とは少し違う、幼い声が聞こえた。

『何言つてんの！ お礼を言つのはあたしの方だよ…。赤はあたしの色つて言われるし……本当にありがとう…。』

(あたし達は、彩音千紗と、本条由梨亜……そして、今は本条千紗と、花雲恭富実樹！)

千紗の脳裏に、偽りの記憶ではなく、本当の記憶が雪崩れ込んで来た。

(……あたしは、由梨亜のことを見失つた……だけど、今思い出せた……由梨亜！)

千紗の胸に喜びが湧き出て、気付けば、頬を涙が伝つていた。

千紗は微笑むと涙拭い、そのオルゴールを閉めると、部屋を出

て行つた。

(今大事なのは婚約者候補をどうにかすること。あの賢い由梨亞でさえもてこずつた問題だし、すぐに上手くいくとは思わないけど、あたしはあいつらとは結婚しない。絶対に)

千紗の決意は固く、どんなに重い物でも動かせる梃子でも、絶対に動かない物だった。

「……」

由梨亞は、途惑つたかのように小さく呟いた。

シャンクランと日本州では時差があり、日本州が午後七時の時、シャンクランでは午前三時である。

つまり、日本州の方が十六時間進んでいるのである。

由梨亞は寝ていないが、それでもまだ日が昇る前と日が沈んだばかりでは違う。

おまけにシャンクランの五月は日本州の三月の気候と同じであり、日本州の五月の気候はシャンクランの六月の気候と同じである。さすがに、そのせいで一瞬くらつと来たが、何とか立て直して自分の服装を見直した。

由梨亞は、つこさつきまでカサミアン宮の中級侍女の女官服を着ていたはずだが、今は七分丈の白いパンツに淡い水色のティーシャツと上着を着て、そして千紗に貰つたアクセサリーを付けている。(何だか、便利だか便利じゃないのかよく分からぬわねえ……この魔力つて)

と首を傾げて、辺りを見渡した。

そこは、由梨亞の通つていた中学校の校門の前だつた。

由梨亞はそつと溜息をつくと、ふと自分が荷物の入つた鞄を……それも大きい鞄と小さい鞄を持っているのに気が付き、近くの公園まで行つて中身を開けてみた。

大きい方には着替えや洗面用具など、しばらく暮らしていく分に必要そうな道具類が入っており、小さい方には財布や身分証明書など、盗まれたら大変な重要な物が入っていた。

（これがあれば、当分は困らないで暮らせるわ。けど、ずっととは無理……じゃあ、ある程度情報を仕入れてから家に帰ろう。……それまでは、千紗には秘密にしてよう。もうそろそろ千紗の記憶も戻つてるだろうし、いきなり行つて驚かせた方が面白いもの）

由梨亜はそう覚悟を決めると、お腹が空いてくるのが分かつた。（……そう言えば、あの祝賀会では大して食べれなかつたんだつた。あともうしばらくすればこつちではタコ飯の時間になるから、コンビニでちょっと買ってこつと）

由梨亜はそう決めると、近くにあるコンビニに向かつて行つた。

（うわー。しばらく来てないと、こんなに商品つて変わるもんなんだー。あ、私のお気に入りのパンなくなつて！ あつでもこのパン美味しそうつ！ どれにしよう。迷っちゃう。そういうえば、千紗と一緒に初めてコンビニに行つた時もはしゃいで、千紗に呆れられたつけ）

そんなことを思いながら由梨亜が品物を選んでいると、

「いらっしゃいませー」

という声がして、由梨亜が振り返ると一人の少女が入つて來た所だった。

すると、二人の少女が笑い喋りながらこちらに向かつてきた。

（うわー。大荷物抱えてここに居たら、邪魔かも……？）

と由梨亜が思つた瞬間、案の定一人が由梨亜をまじまじと見詰めてきた。

「あの……邪魔、でしたか……？」

と由梨亜が恐る恐る訊ねると、一人は首を横に振つたが、穴が開

くせど見詰めてくる。

「あの、間違つてたら『めんなさい』。貴女つてもしかして……千紗の親戚か何か？」

と、一人の少女が言い、由梨亞は思考停止した。  
(そんなに私と千紗つて……似てるかしら……?)

由梨亞の沈黙を別の意味に取つたのか、その少女が謝つてきた。  
「やっぱり、人違ひだつたのね。『めんなさい』」

由梨亞の頭は、そこでようやく通常活動を始めた。

「あ、あの……千紗つて、本条千紗のことですか……?」

「うん。そうだけど?」

「それなら、私と千紗は血が繋がつています。でも……そんなに似てますか……?」

「そつくりだよ。千紗がもっと大人びて、髪形と髪の色を変えて目の色も違つてたら、実の姉妹つて言われても納得するぐらい似てるよ。つまりは、顔立ちが似てるつてこと、かな? あと、どつか雰囲気も似てるよね」

「……あの、つていうことは、千紗のことをよく知つてるんですね?」

「そりやあそうよ。だつて同じ高校の同じ部活、同じ幹部の、周りが苦笑いするぐらいとっても仲良しの四人組だもん」

……自分で分かつていれば、世話はない。

だが、その得意げな口調を無視して、由梨亞は急いた口調で言つた。

「じゃあ、買い物を済ませたら、千紗の話を訊かせて貰えませんか? 私、ついさつき戻つて来たばかりで、三年間と半年ぐらい千紗に会つてないんです。だから、貴女達の知つている千紗の話を訊かせて貰えればと……」

「うん、いいよ。貴女と千紗の関係を教えてくれればだけど」

「ええ。それぐらいのことなら」

「じゃあ、決定ね。それじゃあ、ちょっと待つててね。買い物済ま

せるから』

『ええ』

由梨亜はにっこりと笑った。

(つまくいけば、明日にも千紗に会えるかも知れない。……)  
そう思えば、楽しくなった。

「へへ。そうだつたんだあ。でも、千紗があんなに頭のいい高校に入るだなんて思つてもみなかつたな。やつぱり千紗、頭いいんだよ」「何言つてんの？ 千紗、日本州の中でも常に上位百位の中に入つてるのよ。部活もやつてていつ勉強してんだか。本人に訊くと『効率良くやれば誰でも簡単にできるよ』つて言つし。ほんと、凄いんだからつ！」

「へへ。ありがと。こんなに詳しく教えてもらつて……」

「いいつて。あたし達にとつてもいい暇つぶしだつたし。だつて千紗の家、すつゞい門限厳しいんだよ。あたし達は、まだ遊び足りないのに……」

「ね、由梨亜。貴女は、千紗からみたら何なの？ 血が繋がつてゐつて言つてたよね？」

と、素香が言つた。

『私？ 私は、千紗の双子よ』

一人が絶句するのを面白く見ながら、由梨亜は嘘とも真実とも言えることを口にした。

『やつぱりびつくりされちゃつた。私達つて一卵性の双子だから、普通の姉妹並みにしか似てないのよね。だから、誰に話しても驚かれちゃうの』

『い、いや……それ、論点が違う……』

何とか藍南が喉を振り絞つていつたが、由梨亜には全く意味が通じなかつた。

「えっ？ どこが違うの？」

（こりや、言つても無駄だ……）

（さすが千紗の姉妹。呆け方が似てるつていうか、天然だつていうか……あたし達が驚くのは、こゝんな楚々としたお嬢様風……つていうか、ほんとのお嬢様なんだけど……とにかくこんな人と元気と無茶無鉄砲の代名詞みたいなお嬢様とは到底思えない千紗が同じ環境で育つただなんて信じらんないつていうことで……双子の中では二卵性よりは一卵性の方が多いから珍しいかも知れないけど、あり得ない訳ではなくて……つて何考えてんだ、あたし。つていうかつ！ どうしたら同じ環境でこんな違ひが出る訳つ？！）

と、一人が思つていると、由梨亜がすまなそうに言つた。  
「あの、ごめんなさい。私、ちょっと用事があるから……別れてもいい？」

「あつ、ううん。あたし達ももう戻らなこときつこから。それじゃ、

じゃあね、由梨亜」

「じゃあねつ！」

「ええ。また会えるといいわね

そう言つと、三人は別れた。

そして、由梨亜は小さなホテルのような所に行つた。

そこは、よく家に居辛くて出てきた中高生達や、お金のない大学生が泊まつていて、公認の家出場所にもなつてゐる。

つまり、自分の娘や息子が家出をして戻つて来なかつたら、そこに行けば九十パーセントに近い確率でいるという訳だ。

まあ、その家出と言つのも、むしゃくしゃして家を出て来たもの、他に行く所がないといつて泊まるということの方が多いが。

由梨亜はそこで軽い食事を摂り、眠りについた。  
辺りは、静けさと闇だけが蔽つていた。

千紗は、寝返りを打つと、溜息をついた。

由梨亜のことを思い出してから胸騒ぎがする。

そして、千紗は起き上ると呟いた。

「やだ、どうして眠れないんだろ……明日、行かなきゃならないのに……」

そして起き上ると、千紗は勉強部屋へ行った。

「どうせ寝られないんなら、勉強したほうがいいよね。それに、明日は午前中から部活だし」

千紗は勉強を始めたが、それもあまり手に付かなかつた。

「あ～あ。もうやだ……」

しかし、いくら胸騒ぎがしても、人の身体は眠らないといけないよになつてゐる。

それが、特にしふとい千紗ならば尚更だ。

翌日の朝、千紗は気が付いたら机の上にもたれて眠つていた。

「千紗様……千紗様、起きて下さい」

「あ……おはよ、鈴南<sup>すずな</sup>」

「おはようございます、お嬢様。旦那様からですが、一時までに応接室に来いとのことです」

「ありがと」

そう言つと、千紗はダイニングに向かつた。

耀太がそう言つのなら、朝は恐らく一人だろつ。

「お父様？ 来たけど」

千紗がそう言つて中に入ると、そこには既に耀太と聰、護、早宮が来ていた。

千紗は、内心ゲッと思つのを抑えられなかつた。

（何でこの三人がここにいる訳？！ 確か週に一度だよね？ 昨日來たばつかじや！）

「千紗、お前が何と言おうと、この三人がお前の婚約者候補だ。期限もあと一年半。今のうちに決めておいたほうが楽だぞ」

耀太のその勝手な言い分に、千紗は頭に来たが黙つていた。すると、益々図に乗つてまくし立てた。

「お前は何かと言つと逃げようとするからな。時間がある内に捕まえておかねばならん」

千紗は小さく溜息をつくと、耀太を真正面から見据えて言つた。

「お父様。あたしはこの人達とは婚約者にならない。第一、人には結婚する人を選ぶ自由があるのよ。この三人の中から選べなんて、地球連邦の憲法に違反することになる」

「それは大丈夫だ。候補が一人だけなら問題だが、三人いるからな。違憲ではない」

いわゆるグレーゾーンの理論を胸を張つて言つ耀太に、千紗は怒りを堪えて、努めて冷静な口調で言つた。

「だけど、あたしに他に好きな人がいるとしたら？」

「はっ？」

「千紗さん、今、何と言つたのです」

「そ……そんな暴言、見逃せませんよ？」

「虚偽偽りを言うのにも、ほどがあるという物です」

「嘘じやないけど。あたしにはちゃんと好きで、付き合つてる人がいるんだから」

「ち……千紗つ！　お、お前という娘は……まだ選ばないのは許す。だが、この三人以外と付き合うのは断じて許さんつ！　即刻別れろつ！　さもないと、その彼に不利なことが起るぞ…」

「不利なことって？」

「うう、つまりその……例えば、彼の親が勤めている会社を経営難にするとかだなつ」

「公務員だつたら？　強大な力を持つ敵対会社だつたら？　何も考えてないね。このままじゃ埒が明かないから彼呼んで来るわ。ちょっと待つてて」

と千紗は言うと、耀太にねだつても「絶対買わんつ！」と言われたので部活と両立という涙ぐましい努力の元、バイトをして溜めたお金で買つた携帯端末で、ある一人の人物を呼び出した。

するとその十分後、その彼がやつてきた。

「いらっしゃい。」ごめんね、こんなことに巻き込んじゃつて……」

「いひつて。俺は千紗のことが好きだし、千紗の気の強さのことも分かつてるしな」

「やっぱあんたの方が、お父様よりあたしのことによく分かつてる気がする」

と千紗は言つと、応接室に彼を連れて行つた。

「お父様、聰さん、護さん、早富さん。戻つたよ  
千紗はそう言つと、彼を中に入れれた。

「じゃあ、中に入つて」

「失礼します」

そして、二人が椅子に落ち着くと、耀太はこちらを睨むよつこじて言つた。

「お前は……誰だ」

「俺は睦月むつきと言います。そういつ莊傲睦月です」

「それで？ お前は千紗と付き合つているのか」

「当たり前でしょう？ でなかつたら、一体何の為にここまで来たつて言うんですか」

睦月と耀太の間で、密かに火花が散つた。

「ああっ。ちょっと二人とも落ち着いて……つてかそいつ！ お父様に味方しようとしてんだか混ざりたいんだか分かんないけどとにかく混ざんないつ！ そこ、こつそり逃げないつ！ そつちはサッサと退くつ！ 邪魔つ！！」

と千紗に怒鳴られた、味方しようとした謙と逃げ出そうとした早苗と固まつて動かなかつた聰は、並んで壁際に立たされた。まるで悪戯を見つかり、罰として廊下に立たされている小学生のようだつた。

そんなてんてこ舞いの中でも、睦月と耀太の舌戦は繰り広げられている。

千紗は軽く呻いて額を押さえると、部屋を出て行つた。

そして玄関ホールに辿り着くと、大きな大きな溜息をついた。

「は～あ、何か疲れた……」

そして玄関を出て庭に行き、深呼吸を繰り返した。

「ほんつと、生き返る……しばらくここにいていいよね……」

「全く千紗つたら、何でそんな死んでるの？ 千紗でもそんな顔するんだあ」

「…………えつ？」

「千紗つたら、もう私のことを忘れたの？ たつたの四年足らずで？」

「…………まさかね。空耳だよ、空耳。昨日由梨亞のことを思い出したからそれで由梨亞の声が聴こえるんだよね。きっとそれだよ。あたしちょつと疲れてるし」

「空耳だと思うんなら、後ろ見てみたら？ 千紗」

確かに人の気配を感じ、千紗は意を決して後ろを振り返つた。すると、由梨亞の姿が見えた。

「夢、じゃ……ないの？」

「勿論よ。私は還つて來たの。私は花鶯國には不要な人間だつてこと分かつたし、千紗に逢いたかつたし。だから……ね」

「で、でも……由梨亜、髪の毛が……」

「ええ、そうよ。私、髪が長かつたじゃない？ それで、富実樹の時もずっと髪が長かつたの。だからね、ちょっと短くしてみたかつたんだ」

「ちょっと短くつて……短くし過ぎ……由梨亜」

千紗のその眩きに構わず、由梨亜は千紗に宣言した。

「さあ。じゃあ乗り込むわよ。千紗」

「の……乗り込むって、どこに？」

「鈍いわねえ、千紗。今この状況で言つたら、お父様の所しかないじゃないの」

由梨亜は悪戯を思いついた子供のよつて元気こくと笑つた。

「だから、私が言つているのはそのようなことではない！」

「ではどんなことだと？ 第一本人の気持ちを無視するこのやり方、大昔ならともかく今のこの世の中やつたら時代錯誤としか言いようがないですよ。それに、恥ずかしくないんですか？」

「……何だと？」

「可哀想ですねえ、千紗みたいな氣の強い娘を持つて。娘の言いなりになる父親だなんて、恥ずかしくて外に出られませんねえ」

「き、貴様！ 言いたいことを言わせておけば！」

「これはどうも。貴様と呼ぶということは、俺を親しい間柄の対等な者、もしくは少し田下の者、それから上の相手として認めているということでしょう？ 本来『貴様』とはそういう意味です。極端に相手を貶める意味合いは、本来含んでおりませんが？」

……さすがは、進学校に通つてゐることはある のか？

睦月は頭脳をフル回転し、素晴らしい舌戦を繰り広げていた。

「～～つの、こ～～と言えばああ言ひ揚げ足取りめつ！」

「何だつて？ 僕は単なる事実を述べただけに過ぎませんが。反論できないのはそちらの責任でしょう？」

またもや壯絶な火花が散る。

この繰り返しが、既に十分以上続いていた。

まあ、やつている本人達は時間を気にしていないからいい。

可哀想なのはこの婚約者候補達三人で……永遠とも思えるような時間を感じていた。

（も、もう……お願ひですから、誰か止めて下せ～……）

というのが、三人の共通した思いだった。

「だ……旦那様つ！ 大変ですっ！」

その時、召し使い達が駆け込んで来た。

「何だ？ 何事だ」

と腰を浮かせた耀太に、混乱した召し使い達は必死の説明を試みるが、パニックに陥っている為、何を言つているのか分からぬ。

「みんな邪魔！ あつち行つて！ あつ、でも鈴南、すずな苓華、れいか陵多、りょうた、  
章平は残つてつ！」

と千紗が大声で指示を出すと、ようやく辺りは静まってきた。  
だがそのお蔭で、皆ここにいるはずのない姿を目にすることになつた。

（ま、まさか……）

（嘘……あり得ないだろ、これつ！）

（ど……どうして、どうしてあの人がここにつ？！）

その中で平然としているのは、千紗と由梨亞だけだった。

「お父様。お久しぶりです」

由梨亞のその声に、耀太は目を丸くして答えた。

「ゆ……由梨亞、か？」

「ええ。そうよ？」

「本当に……由梨亞なのか」

「見れば分かるでしょう？ まさか、四年も経つてないのに忘れたんじやないでしょうね？」

「で、でも……由梨亜の髪は、そんな短くは……」

そう、耀太が絶句したのには、由梨亜が現れたのと他に、もう一つ理由があった。

それは由梨亜の髪が、肩に付くか付かないかまでバッサリと切らしてしまっていたからだ。

いわゆる、ショートカットである。

「ええ。家出した時はそつだつたわ。だけど、邪魔だつたから切ったのよ。」

（家、出……？　由梨亜が富実樹になつたのを、家出……）記憶を探つてみると、確かにその記憶はある。

それに、自分は家出に協力していたようだ。

微妙な寒気が背筋を這つたが、不気味な感じよりも呆れや脱力感の方が勝つた。

千紗は変な所で考え込んでしまつたが、由梨亜と耀太の言い争い（？）は続いている。

「邪魔とは……邪魔つて……何故、邪魔に……邪魔……私は……」既に耀太の言動は支離滅裂だった。

「あら、だつて長いと働きにくいのでしょうか？」  
「は……働く、く？」

「ええ。生きていく為にはお金が必要不可欠だもの。幸い、地球連邦に近いレイリア国は義務教育は四歳から十一歳だからね。全体の十分の一の人がその初等教育だけで働くから、そこに行けば働けたわよ。勿論偽名を使って、だけどね。ああ、だけどその後の中等教育から通信制とか定時制の学校があるから、勉強は続けてたわよ」耀太は、由梨亜の言葉の後半を聞き取れなかつたらしい。

前半の言葉を繰り返し呟いていた。

「……そんな……本条家の娘が……貴族の娘が……家出をしただけならともかく、生計を立てる為に働く……？　それも、他星に行つ

て……偽名まで使って……？」

「だって、偽名を使わなくちゃ、お父様達に見つかっちゃうかも知れないじゃない」

「そ、それも、さうか……って、違うー。私はそんな話をしたいんじゃないじゃないつ！　ええい、忌々しいつ！」

「ところで、言いたいことがあるんだけど。いい？」

「ああ、言ひてみる」

「私は地球連邦には戻ってきたけど、ただじゃあ家には戻らないわよ」

「どうこうこと？　由梨亞。今家にいるじやん」

「いや、あの……千紗、そういう意味じゃなくて、ここでは暮らさんいわよってことよ」

「ああ、なるほど。そういうことか」

千紗はすんなりと納得したが、耀太はそういうはない。

警戒しながら言つた。

「では、その条件とは何だ。言ひてみろ」

「それでは遠慮なく」

と由梨亞は楽しげに言つと、悪戯っぽい笑みを浮かべて言つた。

「千紗とこの莊傲睦月君が付き合つのを、認める」と

「そ、それならば、お前は家に戻るんだな？」

「ええ。勿論」

「それでは、千紗と睦月とやらが付き合つのを認める」

「ええっ！　そんなあ」

とは、皆から忘れ去られていた婚約者候補達三人の中の一人、聰である。

「何か、文句もあるのか？　私の決めたことに

と、凄味を持たせて耀太は言つた。

「い、いえ……何も」

「さうか」

さすがに、まだ年若く未熟な聰は、耀太に逆らえなかつた。

「それじゃあ、絶対に認めてくれるのね？お父様」

「ああ。それに今までお前だけが私の子供だつたが、次女の由梨亞が戻つて来た。由梨亞、お前はこの中の誰かを今すぐ婚約者と決める。お前に拒否権はない。そつだらう？」

（次女……つてことは、あたし長女なの？つまり、あたしが家を継ぐつ？！）

唖然とする千紗を尻目に、話はどんどん進んで行く。

「いいえ。そんな、とんでもない。私、家出する時に置き手紙にこう書いたわよ？『藤咲香麻と付き合つのを認めてくれなければ、この家には一度と戻つてきません』って。だから、私が付き合つのを認めてくれなれば、もう一度家出するわ」

「なつ……！ そんなこと、聞いてないぞ……！」

「でも、確かに書いたわよ。多分、まだそれ取つてあるでしょう？ 出してみれば分かることだわ。それに、もしそれを認めてもらえたかったら、最初の約束を破つたということで一番田の約束は無効となり、私は千紗と睦月君を連れて家出するわ。お父様、貴方が選べる道は一つよ。私が香麻と付き合つとのと千紗が睦月君と付き合うのを認めるか、それを認めず私達を家出させるのか。あつ、そうそう、次の家出場所は花鳶国にしようかしら。遠いところだけど、確かあそこはそういう人権に対しては、すつごい厳しい国だったわよねえ？」

「うつ……うべ……」

耀太は何も言い返せなかつた。

もしこの二人を抑えようとすれば必ず「コテンパンにやられてしまうだらうし、由梨亞がここまで自信たつぱりに言つからじは、既に花鳶国に飛ぶ準備はできているはずだ。

「世間体を気にしてこの二人と結婚させようとしても、逆に私達がいなくなつたら、もつと世間体は悪くなるわよ？ 田先のことだけ考えてやるのか、後々のことまで考えてやるのか……」

由梨亞の問い掛けに、耀太は深い溜息をついた。

そんなほんとんど選択権のない「二者択一」など、答えは決まっている。

耀太は聴、護、早宮の方を向くと、

「すまないっ！」

と大声で言い、頭を下げる。

「そ、そんな……では、我らは一体何の為に、今までここに來ていたというのですか？　この中の誰か一人が選ばれるのはまだいい。それは三分の一の確率ですからね、諦めるとしましよう。ですが、こんな粗野な庶民と付きあわせるだなんてっ！　娘は親の言うことを聞かなければならぬのですから、命令すれば済むことでしょうっ！　何故、命令しないのです？」

護が激昂して言つと、

「そ……そうですよ。我々は……父に、本条家とのよいパイプ役になるよう、命じられて、来ているんですよ？　なのに、そんなことを言われても……困ります。迷惑、ですよ」

震える声で、早宮までもが抗議した。

そして、とうとう聴が地雷を踏んだ。

「ええ。それに、そんな野蛮人のどこがいいのです？　そんなのより、僕の方が相応しい。貴女は野蛮人ではないのだから。半人でも獣でもない、純潔で純血のお嬢様なのですから。そんな人ではない『物』の血が貴族の家系に　　それも大貴族の、百何十代と続く本条家の中に入るなど、同じ貴族として到底許せることではありませんよ、千紗さん、それに由梨亞さん」

ブツッという音と共に、千紗の頭の血管が切れた。

「上つ等じやないの眞湖聴。<sup>まうみ</sup>よくもここまであたしを切れさせてくれたわね。野蛮人？　純潔で純血？　あたしが貴族なのは否定しないけど、あたしを流れている血の中にあんたの言う野蛮人の血が入つていてることも否定しないわ。それにあたしは小学校の途中から高校までその野蛮人が沢山通つてる公立学校に通つてる。そのあたしが純潔？　穢れてないって？　だつたらそこに通つてる人や教える人は野蛮人でも半人でも獣でもないってことになるでしょ？　だ

からあたしは、貴族の身分を鼻に掛けた貴族の連中が嫌いなのよ。あたしが好きになるとしたらそういうことを鼻に掛けない貴族か、貴族じゃない人達。そして、あたしは睦月が好きになつた。何か文句でも？」

誰も、何も言い返せなかつた。

もしも『全宇宙図太さ大会』という物があつたとして、そこで一位を取るような人でないと言い返せない氣迫が、その言葉には満ちていた。

そして、更にそこに追い討ちを掛けるように由梨亜がのんびりと言つた。

「逆らわない方がいいわよ。そんなことしたら、千紗本氣で切れちゃうから」

(今まで本気じやなかつたのか?!)

と、婚約者候補達三人は胸中で呟き　いや、喚き散らした。

それでも何も喋らない三人に対し、千紗は冷酷に言い放つた。

「分かつたんなら、帰つて。そして、一度とここに来ないで」

その言葉に逆らえる人が、この宇宙にいるのかどうか。

三人は、すごすこと引き返す他がなかつた。

そしてその三人がいなくなると、千紗は満面の笑みで由梨亜を振り返り、言つた。

「お帰り……お帰りなさい、由梨亜っ！」

「ええ……ただいま、千紗！」

## 終章「そして、一人は……」

「由梨亞、そういえば、どうしてこいつに還ってきたのか、詳しい理由訊いてなかつたよね？」

「何で？」

由梨亞が戻つてきた次の日、千紗は庭で訊いた。

「ええ。あのね、私は今、 irgendして千紗と普通に喋つてるでしょ？」

「うん。それが？」

「そのこと自体が、花鳶国じゃ……その中でも、王族、貴族とかでは信じられないことなの」

「はあつ？」

千紗が目を瞠つて裏返つた声を上げると、由梨亞はくすくすと笑い、冗談めかして言った。

「びっくりでしょ。私は力サミアン宮で、王族としての言葉遣いや儀礼作法やらを色々叩き込まれたわ。異母妹の富瑠美や私の婚約者で異母弟の杜歩埜、あと妹の些南美とか、弟の柚希夜とか、とっても私に親切な弟妹達から教えて貰つたんだけど、その中でこういう風には喋らなかつたわ。どんなに仲のいい兄弟でも、『～』で御座いますわ』とか『～ではないでしょ』とか『～ですわ』とか、女性だったら『わたくしが～』とか、男性だったら『私が～』とか、ほんつとうに舌噛みそうになる言葉遣いなの。それが窮屈だったのが理由の一つ。あと、私達地球連邦の考え方と、花鳶国考え方がすつゞい違つてたのも。私達が普通つて思う考え方とは、花鳶国じゃ平和的な考え方、消極的な考え方なの。私が花鳶国に来てからそういうことは感じ取つてたけど……あのね、花鳶国にはどうしても意見が纏まらなくつて一つに割れちゃつた場合、総票会つていうのが行われるの」

「総票会？ 何？ それ」

千紗は、眉を寄せて首を傾げる。

由梨亞は少し眉根を寄せてから、千紗の為に、わざわざ噛み碎い

た説明をした。

「総票会っていうのは、最終的にどちらの意見を支持するかっていうのを決める場で……まあ、普通の選挙を小規模にしたような感じね。けど、それに投票できるのは十五歳以上の王族、宗教家、貴族、官吏、学者だけ。その前には色々意見交換とかあるんだけど、その大人数が全部揃うのは総票会が最初で最後。そこで最終論説を行つて、最終的にどちらかに投票するの。そして……三日前ね、『地球連邦を宇宙連盟に加盟させる為、武力か話し合いか』というテーマの総票会があつたわ。だけど、そこで私が示した考えは、他の誰も考え付かなかつた考え方だつたの」

「どういうことを言つたの？」由梨亜は

「『もし戦争が起つたとしたら、必ず戦死者が出る。そしてその身内は嘆き悲しむことになる。まだ戦勝国は勝つたという事実に慰められるが、戦敗国は違う。必ず憎しみが襲い掛かってくる。だからそういうことの前に、できれば話し合いで解決すべきだ』って」

由梨亜はそれを言つてから、少し顔を顰める。

その時のこと、そしてその意見を言つた時の周囲の反応を、思い出しながら知れない。

けれど、千紗はそれが分からなかつたのか、怪訝そうに首を傾げ、唇を尖らせた。

「まあ、それは……普通じゃん。頭がいい人なら、想像力が豊かな人なら、誰でも考え付くでしょ？」

千紗の疑問に、由梨亜は静かに首を振り、しんみりと告げた。

「だけど、花鳶国では違うのよ。花鳶国の辿つて来た歴史上には、戦争に負けるという史実がほとんどないから。だから、花鳶国で必要とされるのは、富瑠美みたいな考え方を持つた王なのよ。私はあの総票会では勝つたけど、それはきっと、みんなが目新しい考え方に入られただけのことだわ。私は、あの国には必要ない。それに千紗に逢いたかつたし、香麻こうまにも逢いたかつたし、何より戻る方法が見付かつたんだもの。戻らない人がいたら、そっちの方が可笑しい

わよ。千紗もそう思つでしょ？」

由梨亜が肩を竦めて訊ねると、千紗は笑い、由梨亜と同じようこ  
元の肩を竦めてみせた。

「だね。でも、由梨亜のお陰であたしは、元の記憶を取り戻せて良  
かつたよ。そういうえばさ、由梨亜。一体いつの間に、香麻と付き合  
うだの何だのつていう話になつたの？　あたし何にも聞いてなかつ  
たから、すつゝぐびくくりしたよ」

「ああ、そういうれば、すつかり忘れちゃつてたわね」

千紗は、思いつきりずつこけた。

その突然の動作に、由梨亜は思わず目を瞠る。

「だ、大丈夫？　千紗」

千紗はしばらぐ呻いていたが、キッと由梨亜を睨み付けるように見  
上げ、うつすらと目に涙を滲ませながら叫んだ。

「由梨亜！　忘れちゃつてたはいくら何でもないでしょつー！」

千紗に怒鳴り付けられた由梨亜は、首を竦めた。

「う、ごめん……でもね、私が香麻に告白したの、過去に行つた、  
丁度あの日なの。お父様に婚約者候補達のことを聞かされて、あの  
時、ちょっと自棄になつちゃつててね。それで朝、もう振られても  
いいつて思つて、決死の覚悟で香麻を呼び出して告白したら、受け  
てもらえたのよ。とつても……とつても、嬉しかつたわ」

「へ～え。そうだったんだあ。良かつたね、由梨亜」

「ええ。だから、本当はあの時、屋上で言つつもりだつたの。だけ  
ど、言つ前に過去に飛ばされるし、そこで本当の出生を知つて、も  
う地球連邦に戻れないつて……香麻にも、もう一度と逢えないつて  
知るし。……本当は、もう諦めてたの。でも、こうして戻つて  
来ることができたし……正直言つて、嬉しいわ。花鳶国の家族を、  
見捨てた、つてことには、なるんだけど……でも、それでも、戻つ  
て来て、良かつたつて……そう思つ」

しんみりと言つた由梨亜に、千紗は少し気まずげな表情をした後  
で、わざと笑い飛ばすよつに、由梨亜の背中を一回はたいた。

「まあ、『終わり良ければ全てよし』って言つし、今がいいんだからいいんだよ、きっと！ 花鳶國の人達には気の毒だけど、由梨亞

は、じつの方がいいんでしょ？ だったら、それで間違いはないよ。由梨亞が家族でも、全部を義理立てする必要なんかないもん」

千紗はそう言つと、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「……それにしても、由梨亞、あんな状況でよく香麻に告白したよね。信じられない。あの、清楚で優雅なお嬢様が、わ」

その言葉に、由梨亞が頬を膨らませた。

「べ、別に、いいじゃないの。告白くらい。個人の勝手でしょ？ それとも何？ 私が香麻に告白して付き合つことになつたこと、一度も千紗に言つてなかつたからって僻んでるの？」

由梨亞がふざけて喧嘩腰で言つと、千紗は苦笑して両手を上げた。「僻んでなんかないよ、由梨亞。だけど、ちょっとは拗ねたくなつたけど。でもまあ、しうがなつては分かつてるよ？ 確かにあの状況じゃあ、そんなことは言えないしさ。あたし、あの時はもう、何が何だか分からなかつたもん」

千紗はそう言うと、芝生の上に寝つ転がつた。

「う～ん。気持ち～い！」

「そう言えば千紗

「何？」由梨亞

「私、嶺郷<sup>れいじょう</sup>高校に途中入学しようと思つんだあ

「へ～。嶺郷高校つて……へつ？ 嶺郷高校？ あたしの通つてる、あの嶺郷高校？」

「そうよ。他にあるつていうの？」

「な……何でつ？」

千紗が思わず大声を出すと、由梨亞にケロリと言つ返されてしまつた。

「だつて千紗も香麻もいるし、吹奏樂強いし、何てつたつてその吹奏樂に香麻がいるんだもの！ それに千紗、私がいなくなつてから、結構テストとかの順位上がつたでしょ？」

「うん……まあ」

千紗は『彩音千紗』から『本条千紗』に戻った時に受けた、耀太と家庭教師の容赦ない猛攻を思い出し、思わず言葉を濁らせてしまつた。

「だからね、千紗と競つてみたいの」

「……つてか由梨亜、その口調だともしかして……」

「もしかしなくても吹奏楽に入るわよ」

「な……何でつ！ つてか、由梨亜楽器吹けんの？」

千紗は、思わず盛大に顔を引き攣らせた。

「勿論。私、本当は吹奏楽部に入りたかったの知ってるわよね？」

「うん」

「それで、私が花鳶国の御父様に訊いてみたら、別に楽器吹いてもいいって言われたから、今までトランペット吹いてたの。勿論ちゃんと先生付けて貰つてね。だから、それなりの実力はあるはずよ」「そつか。何か、王女様らしくないなあ。王女様つて言つと、ピアノとかフルートとか……でもさ、由梨亜。途中入学の試験は七月だよ？ 夏休み中。あと二ヶ月もないんだから、勉強頑張なんないとつ！ 言つとくけど、うちの学校、結構難しいからね」

「分かつてるわよ。私は、ここにずっといるつもりだもん。受かるように頑張るわよ」

由梨亜が肩を竦めると、千紗はふと思いついたように由梨亜に詰め寄つた。

「でもさ、よくやつてくれたよね、由梨亜。あたしが長女つて。責任押し付けないでよ」

千紗は凄味を効かせて言つたが、由梨亜はあっさりと答えてしまつた。

「あら、でも産まれた早さは、千紗の方が先よ。私は千紗よりも後に産まれたもの」

そういうと、由梨亜は強制的に会話を終わらせ、そつと田を開じた。

地球連邦は宇宙連盟に加盟していない為、あまり他国の情報が流れてくれてこない。

だが、しばらぐすれば、必ず富瑠美の即位という情報が流れてくるだろう。

由梨亜は、空を見上げた。

青く、澄み切った空。

それは、花鳶国と同じ色でありながら、違つ空。

由梨亜も芝生に寝つ転がると、高い高い空を見詰めた。

ここでは今、途中入学テスト以外に気掛かりなことは何もない。

『富実樹』とは、大違이다。

平和な、平和な国 それが、今の地球連邦。

花鳶国が連盟に加盟するよう働き掛けてくるのも、まだ先のことだろう。

由梨亜は、横の千紗を見た。

すると、穏やかな寝顔を浮かべて眠っていた。

由梨亜は小さく笑うと、自分もそっと目を閉じた。

まだ、この国は平和でいられるだろう。

そして……自分も。

(続)

## 終章「そして、一人は……」（後書き）

「ここまで読んで頂き、本当にありがとうございました!」『時と宇宙を越えて』の第2部は、この完結となります。この後、しばらく時間が飛んで第3部が始まる予定ですので、どうぞこれからの方も宜しくお願いします!

そこには、十名ほどの人がいた。

「御決断下さいませ、陛下」

「ですが……もう少し御願い致します。そうすれば、変わるかも知れません」

「そう仰つて、既に一年が経とうとしておりますぞ、陛下。どうか、御決断を。第一、陛下は鳶大臣おとだいじんであらせられた時、こちらの意見を提示した張本人では御座いませぬか」

「ですが……」

富瑠美の、躊躇つような、迷つような聲音に、自信たっぷりの声が答えた。

「我らがかの国へと通達してから、既に一年が経ちます。しかし、彼らは未だに返事を致しておりません。新戦祝大臣せせんしゅだいじんと成られたシャー・ウイン・リシェル・スウェールも準備を進めており、新兵器も開発を重ね、充分に力を發揮できます。ですから陛下、御許可を。御許可を頂けるのでしたら、私は、貴女の願いを一つだけ叶えて差し上げましよう。　陛下、これは取り引きに御座います」

宗賽大臣しゆさいだいじん、シユールの言葉に、富瑠美はガタツと立ち上がった。

新兵器の開発は、寝耳に水の話らしい。

「それが……それが御前の思惑なのですか！　宗賽大臣しゆさいだいじんっ！」

眦をきつくする富瑠美に、シユールは嘲笑した。

「思惑とはまた、人聞きの悪い。私は元々、富実樹先王陛下が御提案なされた方ではなく、陛下が御提案なされた方の支持者だったということですよ。事実、総票会で私は、陛下の方に票を入れましたし」

「陛下。貴女は、もう引き返せませぬぞ。拒否などをするにも、既に時が経ち過ぎております。残念ながら、それは御気付にならなかつた陛下の御怠慢そうひよあいとでも言つべき物に御座います。御諦め下さ

いませ」

追い打ちのように官僚が声を掛けると、富瑠美は拳を震わせて吐き捨てた。

「もう、いいつ！ どうせ、わたくしは飾り物の王。先王陛下ほどの実行力も決断力もありませんつ！ どうせ飾り物なのだから、わたくしに断らず、御前達で好きになされば宜しいでしようつ！」

富瑠美はそう言い捨てて部屋を出て行き、部屋に残った面々はほくそ笑んだ。

……計画が、動き出した。

一年前から、練りに練られた計画が。

「さて、と。陛下を黙らせたことだし……次は、地球連邦の反応が楽しみであるな？」

「はつ。仰せの通りに御座います」

その場には、新戦祝大臣のシャーワインも、新政財大臣のウォルトもない。

だからこそ、このように本来なら三番目の地位にあるシユールが一番権力を握っている。

彼を止められる人物は、今の所唯一人 先々王に当たる花雲恭<sup>かうぎよ</sup>峰慶<sup>ほうけい</sup>だけであったが、彼は植物状態で、一年ほど前に暗殺されかかってから、一度も目を開けたことはない。

その為、既に王宮ではなく国立病院にいた。

他にまだ生きている王族で、王や鳶大臣を勤めたことのあるつまり、政の経験が豊富な人物は、もう、誰もいない。

「どう料理しようかな？ 地球連邦の民を」

独り呟いたシユールの言葉に、誰もが頭を垂れた。

今、この王宮では、彼の言つことが絶対だった。

## 第一章「婚約式」 1

「由梨亞<sup>ゆりあ</sup>ー！」

「バン！ という音と共に、千紗<sup>ちさ</sup>が部屋の中に走り込んで来た。

「ちょっと千紗っ！ そんなドレス着てまで走らないの？ いつもの服でなら走り回つても何も問題ないけど、ドレスで走られたら抜けちゃうわよ。今日は婚約式だつていうのに」

由梨亞が溜息をついた先には、走つて来たというのが丸分かりの様子の千紗がいた。

「え～。でも、何でドレスつて弱いの？」

「天然纖維を使つてるからでしょうがっ！ 化学纖維は丈夫だけどこれは弱いんだからねっ！ 千紗と違つて！」

すると、よろよろとしたノックと共に、扉が開いた。

「ち、千紗、様……！ は、速いですよう。つ、疲れましたあ」

千紗付きの召し使い、苓華<sup>れいか</sup>が、せいぜいと喘ぎながら言った。

「それは苓華が遅いのよ。あたしは普通だから」

「千紗と苓華を比べたら可哀想よ。何てつたつて、苓華は千紗と違つて生粋のお嬢様だもの」

「由梨亞、一応、あたしもお嬢様なんだけど。んでもつて、由梨亞の双子の姉ですが」

「ですが、千紗様はあまり姉といった雰囲気はありませんねえ。逆に由梨亞様の方が姉らしいです。この際、由梨亞様が跡取りになつてはいかがです？」

と、由梨亞付きの召し使い、鈴南<sup>すずな</sup>が言った。

「何？ 鈴南。あんたあたしに喧嘩売つてんの？」

「とんでもありません。第一、私が千紗様に喧嘩を売つても勝てる訳ないです」

「まあ、そうだけどわ……」

「とにかく千紗！ その格好で暴れない」と一 いいわね？」

「はい……」

千紗はしょんぼりと頃垂れた。

二人は、この冬休みが明けたらレイメア国立大学の一年生になる。

そこは国立大学だが、将来社長や総帥、またそれに近い職に就くであろう人の為の経営学部がある。

「お願いだから、せめて経営学部に入ってくれっ！」

という必死の耀太の嘆願で、一人はレイメア大学の経営学部に入学したのだつた。

そして、二人は今日一月三日、婚約式を執り行おうとしている。勿論千紗の相手は莊傲睦月<sup>そうきょう むづき</sup>だし、由梨亞の相手は藤咲香麻<sup>ふじさき こうま</sup>である。その時、扉が開いた。

「二人とも、そんなに騒ぐなよ。外にいる俺らにも丸聞こえだぞ」

「あっ、睦月っ！」

「あっ、香麻っ！」

「やあ、二人とも」

「つてか、そんなにあたし騒いでないよ、睦月」

千紗は唇を尖らせて言つたが、睦月は首を横に振つた。

「いいや、充分聞こえてたぞ。なつ、香麻」

「ああ、睦月。由梨亞は、そんなに聞こえてなかつたけどな、俺にとつては」

「香麻……」

「ちょっとそこ……一人だけの世界に行かないつ！ サッセと現実に立ち戻る！」

「チエツ。折角いい雰囲気になつたのに……」

「いい雰囲気つて……由梨亞」

すると、いきなり扉が開いた。

「おやおや、もうみんな揃つてしまつていたの？」

「お母様っ！」

と、千紗が言った。

「ゴホン。私の存在も、忘れてもらつては困るな」

「あ、お父様もいたんだ」

その素つ氣ない由梨亞の言葉に、耀太は脱力しかけた。

「いたんだ……いたんだって……」

「まあまあ貴方。いいじやないですか。私の方が先に入つたんですから」

「まあ、そうだが……」

「でもお父様、一体いつ東京から戻つて來たんですか？」

そう、耀太と瑠璃は、昨日天皇に呼ばれて、昼に出て行つたのだった。

勿論そう時間は掛からず、皇居と屋敷は一時間もしないで往復できる距離である。

だが、今の時間は朝の十時。

一人が起きたのは七時だが、それから今まで二人が帰つてきた様子はなかつた。

しかし、耀太と瑠璃は礼装である。

一体、いつ着替えたのであるうか。

「ああ、家に着いたのはつい五分前だよ」

「はあつ？」

「どういふこと？」

「東京を出る時に着替えて置いたんだよ。天皇陛下も我らの事情を理解して頂けたのでね。それで他の方よりも早く出られてのだよ」

「でもね、お父様」

「何だい？」千紗

「あたし達の婚約式、十一時からでしょっ！ そこまでしなくてもいいじやない！」

「ああ、そなだが、婚約式の前にできるだけ長く娘に会つて置きたい父の気持ち、分かるだろ？」「ううん

「全然分からないわ

と、身も蓋もない千紗と由梨亞の言葉に、睦月と香麻が反論した。

「いや、俺は分かるぞ」

「俺もだ」

「何? 瞳月、香麻。あたし達を見捨てる気?」

「お父様についちゃうの？」

千紗と由梨亞の非難に、一人は苦笑し顔を見合わせた。

千紗、由梨里、じゅりのほ、だな

男でないと分かれないもんなんだよな

でも、それで男女を分けるのって口笑しよね

日系車上

二十一 第一 和這に文でての感想 一物にかいの

卷之三

全蜀王志

「は、何でお父様もお母様も阿修羅も冷蔵庫も然ぬ?」

「あたし達、そんなに変かなあ

千紗は自分の着ているドレスを見下ろすと、溜息をついた。

ちなみに、千紗は濃い藤紫という色のイヴニングドレスを

田舎町は同じテナントの「レジデンス」を複数棟持つた。

「……………」

ああ 特に千鶴の方が可愛い

何言つて久が瞬月 由梨亞のほしか町愛いそ

卷之三

「國學」之說，實為近來新興之學術。

「圖書館工作研究」

「何言つてんだよ、香麻に鈴南さんつ！ 絶対に千紗の方が可愛いつ！」な、苓華さん

「はい！ その通りです」

「ああっ、もうみんな言い争いやめてってばっ…」

由梨亜のその一言で、ようやく静かになつた。

「もひ、私達はただ感想を聞いただけなんだよ？　なのにそんな言い争いしなくていいじゃんっ！　全くもう。これじゃあ落ち着けないよ」

「……ねえ、由梨亜」

「何？　千紗」

「由梨亜は緊張してないの？」

「くつ？」

由梨亜のその間が抜けたような返事に、千紗だけではなく周りの皆も溜息をついた。

「みんなが色々言つてんのは、緊張してるから。だつて、あと一時間もないんだよ？　婚約式まで」

「あ～……そういえば」

「全くもひ、一体何の為にあたし達がこ～んなドレス着てると思つてんのよ」

千紗は近くの椅子に座り込んでしまつた。

「あ～、そうだ。忘れてたわ」

と、急に瑠璃が言つた。

「えつ？　何？　お母様」

「ほら、貴方」

「し、しかしだな……お前が言つてくれ」

「嫌よ。それに、貴方が言つたんじゃない。『私が言つから、安心しろ』って」

「うつ……分かつた。千紗、由梨亜、睦月君、香麻君、婚約式が終わつたら……そうだな、私の部屋の近くにある、私的な時に使う応接室に来てくれないか」

「ええ」

「……？　うん」

「はい」

「……何ですか？」

千紗と由梨亜と香麻が比較的あっさりと頷いたのにも拘らず、睦月は訊ねた。

「それは、ここでは言えぬ。分かつたな」「……はい」

その様子を眺めていた千紗は、ふと笑った。

一年ほど前、由梨亜が地球連邦に戻ってきてからは、ずっと平和だった。

由梨亜からは、宇宙連盟加盟の働き掛けが絶対に花鳥国からあるという話は聞いていたが、今の所、そのような話はニュースで流れていらない。

まだ、大丈夫であろう。

千紗は、何故婚約式の後に耀太に呼ばれたのかは分からない。だが、天皇から何か重要なことが言われたのだろうということは想像がつく。

(由梨亜は……何か分かるかな?)

と思い由梨亜の方を見ると、俯いていた。

(何か考へてんのかな?)

そつと由梨亜の顔を覗き込むと、千紗ははっと息を呑んだ。

由梨亜の顔は蒼白で、思い詰めているようだつたからだ。

(一体、どうしたんだろ……何かあったのかな? 聞きたいけど……でも、そろそろ婚約式の方の準備に行かなくちゃなんないし……大丈夫かな? 由梨亜)

「由梨亜……ちょっと、大丈夫?」

小声で千紗が訊くと、由梨亜ははっと顔を上げた。

「大丈夫よ。ただ、一年前までいた国に関係あるんじゃないかなって……心当たりが、ね」

「由梨亜……?」

千紗が眉を顰めると、由梨亜はちょっと笑つて言った。

「大丈夫。本当に、大丈夫だから」

その時、耀太が言った。

「さて、そろそろ行くか。睦月君、香麻君、それでは、また」

「はい」

耀太と瑠璃は、来客の対応をする為、部屋を出て行った。

部屋には、千紗、由梨亜、睦月、香麻、苓華、鈴南が残された。

「それでは、私達も向かった方がいいですね。千紗様、由梨亜様は私について来て下さい。睦月さん、香麻さんは苓華さんに付いて行って下さい」

「はい」

「ええ」

「うん」

「分かった」

六人は、それぞれ動き出した。

「じゃあまたね、睦月、香麻」

「ああ、そつちこそ」

そう言い交わすと、六人は部屋を出て行つた。

「あ……疲れたあ  
千紗、情けないわよ。たかがあれだけの長さの式とパーティーで、  
ばてるなんて」

「パーティーの長さはいいんだよ、長さは……ハア」

千紗が情けない溜息をつきまくる理由は簡単である。

千紗は毎年最低でも六回はパーティーに出ていて、今更それで疲れるということはない。

そして、親戚達も今まで婚約者候補だった三人から結婚相手を選ぶものとしていて、特に相手の身分にも文句がなかつたので、パーティーでも微妙な厭味や軽い妬みとしか取れないような言葉しか口にしてこなかつた。

その中以外から選ぶということは、その人達の考え方がないことだつたのだ。

睦月と香麻を耀太が認めたということもあり、今更

「認める訳にはいきませんっ！ 即刻別れなさい！」

と言う訳にもいかず……といつので、もうパーティーでは厭味が物凄かつたのだ。

例えば、このような物があつた。

「まあまあ、千紗さんがあんなに男っぽい人との婚約するとは思いませんでしたねえ」

「あら、男っぽいというより……まあ、あれですわね？ つまり、野生的、というか？」

「ええ。それに千紗さん、ちょっとだけ、思慮不足ではありません？」

「お家を継がれる方ですねえ」

「長女という自覚が、跡取り娘だという自覚はありますか？」

「せめてねえ……どちらかだけで、良かつたんだけど」

「まあ、いわゆる ではありますか?」

「彼女は、声を出さずに脣で『我儘』と言つた。

「まあ、言い得て妙、ですわね」

「それにも……あの由梨亞さん<sup>ゆりあ</sup>が家出したのにも驚きましたね  
『ええ。行方を完璧に眩ましてこの本条家<sup>ほやく</sup>にも足跡が掴めなかつた  
だなんて、凄いですね』」

「戻ってきたのは良かつたんですけど……」

「でも、あれでしよう? 他星にまで行つて、おまけに働いてただ  
なんて」

「しかも……実の父親を騙して引っ掛け、婚約者候補達を退けた  
つて」

「まあ……どうせでも、貴女達姉妹は、貴族とはちょっと違つようですねえ」

とまあ、婚約式に詫び<sup>わび</sup>ようとではない厭味を次々に連発したの  
だ。

しかも、その言い相手は全部千紗であった。

(由梨亞……睦月……香麻……誰でもいいから、助けて……)

と思いながら、適当な相槌を打ちそのままパーティーを過ぎ<sup>はな</sup>していた  
のだった。

式自体は一時頃に終わり、その後から七時までパーティーだった  
のだが、その内の半分以上を厭味で潰されてしまい、由梨亞と話す  
時間が全くなかった。

おまけに厭味を言っていた時間帯は一度お昼とかぶつてもいた  
ので、正直食べた気はしなかつたし、食べる量もいつもと比べたら  
驚異的に少なかつた。

もし由梨亞か睦月か香麻がいたら直ぐにその場から連れて行つて  
くれただろうが、由梨亞は耀太や瑠璃<sup>るり</sup>と共に、あまり親しいとは言  
えないような客の接待に当たつていたし、睦月と香麻は貴族との交  
流が全くなかつたので、本条家に親しい人達の接待に当たつていた。  
だから、千紗を救うのは到底無理な話だったのだ。

そしてパーティーが終わり、着替え終わった千紗は心置きなく伸びていたのだった。

「これからもあんな調子でパーティーやるんだつたら逃げよつかな……それにしてもさ、由梨亜。何であんなきつついドレス着て平氣でいられるの？ しかもあんな長時間。あたし、あんなに長くドレス着たことないよ」

「だつて花鳶国かおうくにでは、王族とか貴族だつたら、いつもあんな感じよ？ 下手したら、あれよりもっと豪華だつたかも」

「へ~。つまりは、慣れ？」

「ええ。そんな感じよ」

「凄いなあ……あたしなんて、ドレスはいつもパーティー以外着たくないもん」

千紗はそう言つと、ぱつと立ち上がつた。

「そう言えばさ、何かお父様に呼ばれてなかつたつけ？」

「あつ、そういえばそうだね。じゃあ、行こつか」

と、二人が部屋を出よつとした瞬間、扉が叩かれた。

「……？ どうぞ」

すると、そこには睦月と香麻がいた。

「おお、そつちももう着替え終わつてたか。早いな」

「だつて、あ～んなきつついの着てらんないよ。いいよねえ、男子は。そう思わない？ 睦月」

「いやあ、分かんないや」

「……そつか」

「そういえば、どうして一人ともひつちに来たの？」

「ああ、一人を誘つてひつて、睦月がさ。俺はどうちでも良かつたんだけどねえ~」

「ばつ……！ お前も賛成したじやないか！」

「だけど提案したのはそつちだよ」

「ここでもまた言い争いが始まろうとしていたので、千紗が慌ててストップを掛けた。

「ここで言い争わないでっ。そつとお父様のとこ行かなきゃならないから出で！」

千紗はそう一人を急き立てて部屋を出た。

すると、由梨亜が何かを思い付いたかのように手を叩いた。

「あつ、そうだ」

「何？」由梨亜

「ねえ、三人とも、競走しない？」

「えつ？」

「はつ？」

「はいつ？」

三人は、固まってしまった。

「だつから、競走よ、競走。誰がお父様の所まで速く行けるかを競うのつ！」

「いいねえ、面白そつ！　さつすが由梨亜つ！」

「ああ、俺も賛成だ。楽しそうだしな」

「ありがと、千紗、睦月」

三人がそう喜んでいる中で、香麻だけが少し慌てている様子だった。

「あ、あの……ちょっとま　　」

精一杯、というような、喉から絞り出した声で香麻が言つたが、誰も気付かなかつた。

いや、故意に無視した。

「じゃあさ、罰ゲームとかもつけよつよ！　そつちの方が断然面白いよつ！」

「いいわねえ。じゃあ、一位の人は一位の人の言つことを聞いて、三位の人は二位の人の言つことを聞いて、四位の人は三位の人の言うことを聞くのは？　言つことを聞くのは一回限定で」

「面白そつ！　でもさ、それじゃあ一位の人以外はみんな同じじやないのかなあ」

「うへん……そつ言われればそつよねえ……」

千紗と由梨亜と睦月が真剣に考え込んでいると、香麻がまたもや言った。

「あつ……あのさつ、俺、これやるの」

「ちょっと黙れよ、香麻。なあ、お前だけ仲間外れってのは……承知しねえぞ？」

睦月が小声で言い、香麻は口を噤む羽目になつたが千紗と由梨亜は何も言わない。

婚約者にさえ無視されるとほ、何とも可哀想な香麻であった。

「あつ、そうだ。こんなのはほどつだ？」

と、不意に睦月が言った。

「何？ 睦月」

「由梨亜が言つたのに付け加えるみたいな感じなんだけど、二位の奴は一位の奴の言つことを聞く、三位の奴は一位と二位の奴の言つことを聞く、四位の奴は一位と二位と三位の奴の言つことを聞くのは？ 勿論、一回だけ。そうすれば、下の順位になるほどリスクはでかくなるぞ」

「うつわ、睦月す」いつ！ 頭いいねえ

「まあな」

睦月は、少し自慢げに胸を反らした。

「それじゃあ、これでいい人は手を上げてっ！」

と由梨亜が言つと、香麻を除く三人が手を上げた。

「よつし、決まりね！ それじゃあ、全員一列に並んで！ ……行くよ。スタート！」

千紗の元気な声が響き、全員が一度に走り出した……かのように見えた。

事実、千紗と由梨亜と睦月はほとんど横に並んでいる。

だが、香麻はそれよりも三歩ほど遅れていた。

どうやら、香麻はこの三人より足が遅いようだ。

けれど、だからと言つて香麻が遅いと言う訳ではない。

香麻はこの年代の百メートルの記録の平均より、一秒速いのだ。

だが、この三人はその標準よりも一、二秒速い。結果、香麻が遅く見えるのだった。

ダダダダダダダダ、という、凄まじい音がした。

「んつ……？ 何事だ？」

耀太は、思わず目を見開いた。

その音は、しばらく経つてもやまない。

「むつ……？」

さすがに、耀太は狼狽えてきた。

「何が起こっている？ ……おい、沙羅<sup>さら</sup>？ いるか？ 零斗<sup>れいと</sup>？ ……誰か？ 誰か、いないのか？」

耀太が狼狽えて問う言葉に誰も答えなかつたが、そのダダダダという音は更に大きくなり、しかもこちらに近づいてきているようだ。

「一体……」

耀太が立ち上がり扉を凝視していると、いきなりガツと開いた。

そのことに、耀太は目を丸くした。

家の扉は基本的に自動で開くが、万が一の為に常日頃から手動でも開くようになっている。

……しかも、今の動きは紛れもなく手動で開けられた物だった。あまりにも勢い良く扉が開けられたものだから、扉の開く限界まで開き、壁にゴン、という音を立ててぶつかり跳ね返った。

そのせいで壁には小さなへこみができ、二人の人物が部屋に駆け込んだ後、三番目に入ろうとしていた人物に扉が激突した。

「フグッ」

奇妙な音と共に床に沈没したのは、睦月であった。

「よつしやあ！ ち、千紗に、勝つたあ～！！」

「由……由梨、亞……は、速い、よお……チエツ、あたし……一位、か……ま、前は……あたしの方、速かつたのに……」

「ふうんだ。たまには私が勝つてもいいでしょ？」「お、俺を……無視しないでくれ…………っ！」

悲痛な悲鳴を上げた睦月は、どうやらぶつけたらしい額を押され、座つて呻いていた。

「全くもつ、大丈夫？ 睦月」

由梨亞が呆れ返ったように言つと、睦月が怨めしそうに睨んで來た。

「……これが大丈夫に見えるか…………っ！」

「見えない」

身も蓋もなくズバリと言つたのは千紗である。

「千紗……ちよつとは遠慮しようよ」

「だつて、由梨亞が勢い良くドアを開けたのが原因でしょ？ あたしには何の罪もないよ」

「千紗……ちよつとは氣にして、くれ…………」

その時、睦月は半分ほど開いた扉の前に座り込んでいた。

それが、更なる災難を招くとも思わずには。

コンコン、とノックの音がした。

「失礼致しま……すつ？！」

どうやらお茶の用意を持ってきた、耀太付きの召し使い、沙羅が開けた扉が睦月にぶつかつた。

しかも、頭に直撃した。

「ちよつ……睦月、大丈夫なの？ そんなにぶつけて」

「……痛い……ウウッ」

「す、すみませんっ！ 睦月さん」

沙羅は慌てて中に入ると扉を軽く押し戻し、無意識にだろうが、またもや少し開いた状態にすると、睦月の前にしゃがみ込んだ。

しかし、悪いことは重なると言つべきか、一度あることは三度あるというべきか またもや扉が、由梨亞が最初に開けたのに優るとも劣らない素晴らしい勢いで開き 睦月の背中に扉が直撃して睦月が倒れ、その前にいた沙羅も引っ繰り返り、更に沙羅にぶつか

られた千紗が後ろによろめいて、それを踏みとどまろうとして横に動いた結果由梨亞にぶつかり、その由梨亞は綺麗に真後ろに倒れ、そこには耀太がいて、その耀太はテーブルの角に身体を打ち付け、ソファーに倒れ込み、そこで視線を扉に戻すと、扉は何事もなかつたかのように限界まで開き、更に睦月の上に香麻が倒れ込んでいた。全員、苦痛と疲労で一言も発していない。

その中でも氣の毒なのが耀太で、変な所を打ち付けたらしく顔を苦痛で歪ませている。

そして、最初に言葉を発したのは睦月だった。

「お、前、ら、な……俺を……どれだけ、痛めつけてると、思つてんだよ……！」

由梨亞、沙羅、香麻への非難になつたことは、言つまでもない。「いたたつ……でも、睦月、全員何かしらされたつてのは、一緒だよ。あたしと由梨亞と沙羅は倒れるだけで済んだけどさ……香麻は疲れて倒れてるし、睦月は見ての通りだし、お父様なんか……変なところぶつけてるし……」

その千紗の言葉に全員が見てみると、耀太はフラフラしながらも何とか立ち上がり、息を大きく吸い込んだ。

「ゲツ」「ウツ」

千紗と由梨亞がそう奇妙な音を残し逃げ出そうとしたが、耀太はそれを許さなかつた。

「……私は、確かに来いと言つた。だが……しかしつ。走つて来いとは一言も言つてない！ 何故走つて来るつ！ そして、何故ぶつかりにぶつかりぶつかりまくつて全員将棋倒しとなるのだつ！ これから大事な話をしようとする時に、そんなにふざけたいかー！！別に、ふざけてた訳じや……」

「何だと？ 千紗。では、訊く。何故ここまで走つて來た？」

「競走」

長い、沈黙が降りた。

「…………はつ？」

耀太が搾り出すように声を出すと、由梨亞は唇を尖らせて言つた。  
「だから、競走よ、お父様。私達は罰ゲームありの競争をしてきた  
の。それで私は一位だから何もなしで、千紗は一位だから私の言う  
ことを聞いて、睦月は三位だから私と千紗の言うことを聞いて、香  
麻は四位だから私と千紗と睦月の言うことを聞くの。そういうルー  
ルで競走したのよ。で、そうしたらこつなつた訳」

「お、お前ら…………一度と、この屋敷で走るなあ～！」

その耀太の怒号に、千紗と由梨亞は平然と言い返した。

「無理よ、そんなの」

「そうそう。絶対に無理」

「何だとう？」

「だつて、約束に遅れそつな時とかどうしても急がなきやいけない  
つて時、どうしても走るでしょ？ だからね、あたし達に走るなつ  
てのが無理なのよ」

「だが……無意味に走るなあ！」

「だ、か、ら！ そんなの約束できないよ！ それよりもお父様、

何か話すことあつたんじやない？」

「それを邪魔したのは……お前達じゃないかあ！ わざと私に話  
させろ！！！」

「はいはい。つてことだから沙羅、ちょっとあつち行つてて貰つて  
いい？」

「は……はい、由梨亞お嬢様」

沙羅はそう言つと、ようよるとお茶を机に並べて出て行つた。

「ふう……さ、睦月、香麻、さつさと起きて」

千紗はそう言つと、一人を引き上げた。

「…………つたく、重いねえ」

「…………つたりめえだる…… チェッ、まだ、頭がフラフラしてやがる

……」

「全くもう、情けないんだからあ。わ、立つて立つて！」

「ほひほら、せつせと座るー。」

由梨亜がそう急き立て、よつやく全員ソファーに座った。

「……さて、時間がないからな、せつせと本題に入るぞ。」

「時間がない?」

「お前ら……今何時だと思つていい? 八時だぞ、八時。近所迷惑だとは思わんのか。一応防音はされてはいるが、お前達のその大声では……」

「……すみません」

「別に香麻は謝らなくともいいんじゃない? ビジセ提案したのは由梨亜だし、それに賛成したのはあたしと睦月だし」

「……そうなのかつ! 千紗」

「うん……そうだけど?」

「なつ……」

耀太は、頭を抱えてソファーに沈み込んだ。

「お……お父様？」

千紗が耀太の顔を覗き込むと、耀太は呻くように言つた。

「……私はてっきり、千紗が提案したものだと……変なことを仕出かすのは、いつも千紗の方だから……」

「どっちでも大した違いはないわ。さ、お父様。さつぞと話して下さい」

「ああ……私は昨日、天皇陛下に呼ばれ、皇居まで行つた。このことは知つてあるな?」

「はい」

「その時、陛下は決して公表できないとても重要なことを口になされた」

「それは……」

「この国……地球連邦と、花薦国かおひらくについてだ」

その言葉に、皆はつと息を呑んだ。

そして、その中でも特に由梨亞は、拳を固く握り締め、唇を噛み締め俯いていた。

何を言われるのか……ついに花薦国が行動を起<sup>おこ</sup>さうとしているのが分かつたからだ。

「花薦国は、地球連邦に宇宙連盟へ加盟するようのこと、イギリスのオレアン四世陛下に働き掛けて來たそうだ。だが、それは即断できないと仰つた。……それもそのはずだろう。何しろ地球連邦は、昔の国の単位で分けるという考え方が一般的で、一応イギリスが首都となっているが、それでも、オレアン四世陛下には、地球連邦に対しての独裁権は全くないのだからな」

耀太はそう言つと、深い溜息をついた。

「だからおよそ一年前に、それぞれの地域の議会の上級議員を呼び寄せた大会議を行つたそうだ。だがその結果は割れに割れ、結局は

まだ加盟には早いという結果に落ち着き、それを花鳶国に伝えたそ  
うだ。そして連盟に加盟するのに好意的だつた地域の代表は、花鳶  
国単品で説得に来るのではなく、『宇宙連盟』で来てくれば、否  
定的な地域も賛成してくれるだろうと言つたそつだ。そして一年。  
花鳶国は、こちらが予想もしていなかつたことを打ち出して來た。  
それは、この国の存亡に關わることだ

そういうと、耀太はグルッと見渡した。

「皆、衝撃的な内容となるが、どうか心して聞いて欲しい」

「……分かりました。お父様」

そう答えたのは、千紗だつた。

千紗は由梨亞から聞いていたので、それほど驚くといつたことは  
なかつた。

これから花鳶国が行おうとしていることには、あまり想像が及ば  
なかつたものの。

しかし、睦月と香<sup>むづき</sup>麻<sup>いづま</sup>にとつてはそんな簡単な問題ではない。

なにしろそんな話があつたことすら、彼ら庶民はもとより貴族も  
知らないことだつたからだ。

そして地球連邦の混乱期が治まつてから今までの数百年間、地球  
連邦はずつと平和であつた。

戦争や争い事など、様々な混乱事は既に過去の遺物であつたのだ。  
そして情報公開制度により、『特別な事情』のない限り情報は公  
表されるようになつてゐる。

だから、その争いの火種が一年も前からあつたこと、そしてそん  
なことが公表されていなかつたということに衝撃を覚えたのだった。  
そして、『地球連邦の存亡に關わる問題』と言われたことで、言  
葉を發せないほど打ちのめされた。

由梨亞の方はと言えば、次に耀太が何を言うのかも既に予想が付  
いていたので、その悲しみによつて、言葉を失つていた。

「それは……『花鳶国が、地球連邦を攻めて來る』、ということだ  
重々しい耀太の言葉に、全員言葉を失つた。

さすがの千紗でさえも、少しは予想していたとはいえ改めて耀太の口から断言されると、やはりショックで顔色を失っていた。

そして、耀太を除いた全員が蒼ざめていた。

千紗がふと横を見ると、由梨亞が俯いていた。

その顔は思い詰めていて、まるで自分を責めているようだ。

「ちょっと由梨亞、来て」

「……うん」

由梨亞の声には、やはり力がない。

まだ誰も無氣力状態なのをいいことに、自分達の部屋まで連れて行つた。

「どういふこと? 由梨亞」

千紗はきつい声で由梨亞に言った。

「どういふ……って?」

「とぼけないでよ。何で花鳶国が攻めてくるの。まだ一回しか言ってきてないのに。それも話し合いと言えるかどうかも微妙みたいな話し方だつたし。ねえ、由梨亞が言つてたことと違うよね? 由梨亞の異母妹の富瑠美は、由梨亞が感じてた通りの人じやないんじやないの?」

「違うわ! 富瑠美は……そんな人なんかじやないつ! それに、王というのは国の統括者ではなく、象徴的な存在……まずは大臣が主導権を握つてゐるのよ。それを考えると戦祝大臣せんしゅだいじんか政財大臣せいざいだいじんのどちらか……でも、その二人もやっぱりそんな人じやないと思う

「何故?」

「……貴女には教えられないわ。きっと、理解できないでしちゃうから……」

「だから、あたしには、話せないつて言ひの?」

千紗の強い口調に、由梨亞は目を逸らして小さく頷いた。

その途端、由梨亞の左頬がピシヤリと鳴つた。

由梨亞が顔を上げると、千紗は悲しみとも怒りとも言えるような表情を顔に浮かべていた。

「千、紗……？」

「あたしは……もう嫌。前に由梨亜があたしに隠し事した時……覚えてるよね？」由梨亜

「忘れる訳……ないわ。あの時のことは……」

由梨亜は、千紗から田を逸らしながら言つた。

「だつたら、覚えてるよね。あたしは別に、由梨亜があたしに隠したことには恨んでない。あたしも、あんな状況だつたらそうするから。だけど、それが原因で口聞かなくなつて……結局仲直りしたけど、すぐに由梨亜は花鳶国に行つちゃつて……ひつちに戻ってきてから、すつごい後悔した。何でさつさと仲直りしなかつたんだろうって。最初つから、無理にでも訊き出しておけば良かったって。……人に知られたくない傷は、みんな持つてると思う。あたしはそんなこと話して欲しくないし、無理に訊こうとも思わない。けど、そうじやないのは隠して欲しくないの。由梨亜が今あたしに言えないって言ったのがそういう物だつたら、訊こうとは思わない。だけど……そうじないのなら、もう隠さないで……お願ひ、由梨亜」

「千紗……」

由梨亜は、少し考え込むと、驚くほど真剣な眼差しで言つた。

「私が今から言つこと、笑わない？ 疑つたりしない？ 私が言わないのは、千紗が信じてくれるかどうか自信がないから。千紗にとっては嘘にしか感じられないかも知れないと、私にとつては、それが真実。それを疑われたら、何も話せなくなるわ。……勿論、私は人間だから嘘をつくし、誤魔化しもする。冗談も言う。だけど、そうじやないのに、そういうことにとられたら……私は、千紗を信じることが難しくなるわ。……ねえ、千紗。誓える？ 今から言うことを、最初は信じられなくて、呆然としてもいい。だけど、絶対に信じるつて」

由梨亜の問いに、千紗は即答した。

「誓うよ。絶対に。さすがに全部信じるのは、あたしは無理。そんな人もいるかも知れないけど、あたしはそこまで真っ白じゃないか

らね。だけど、もし由梨亞が最初にそう言つてくれるなら……あたしは、なるべく信じる。ううん、絶対に、由梨亞が言つこと、信じる。だから由梨亞も、悪用しないでね。そしたら絶対、由梨亞のこと信じらんなくなるから」

「ええ。分かつたわ。あの……ね、馬鹿にしないで聞いて欲しいんだけど……まず、戦祝大臣の方からね。あの人は、富実樹と血の繫がりがあるの。今の戦祝大臣は、母方の伯父様なのよ。だから、裏切る可能性が、とっても低い。そして政財大臣の方なんだけど……あのね、彼は、富実樹と何の繫がりもないし、逆に先代の政財大臣は、富実樹のことをほとんど信用してなかつたわ。だけど、今の政財大臣は絶対に裏切らないって、言い切れる。あのね……」じめん、千紗。こんなこと言ひうと、変に思ひと思ひけど……今の花鳶国の王様は誰か、分かるよね?」

「そりやあ勿論。花雲恭富瑠美かううるみ、でしょ? 富実樹の異母妹。王女時代は鳶大臣おうだいじん。そして第二王女。花雲恭峯慶まやぎょうけいと花雲恭深沙祇みさきの娘。

花雲恭峯慶の第二子で、妃の娘

「ええ。その通りよ。その前の王は?」

「花雲恭富実樹。第一王女。花雲恭峯慶と花雲恭由梨亞の娘。花雲恭峯慶の第一子で、妾めかけの娘

「その前の王は?」

「花雲恭峯慶。第一王子。花雲恭篠聯とうれんと花雲恭沙羅狭しゃらさの息子。花雲恭篠聯の第一子で、后の息子

「その前は?」

「花雲恭篠聯。えつと、第一王子で……花雲恭、斑都はんと? と、花雲恭癒璃亞ゆりあの、第一子」

千紗は、内心いつまで続くのだらうと思ひながら答えた。

「その前は?」

「……えつと、その前は花雲恭癒璃亞。由梨亞とか由梨亞妾ゆりあじめの名前と同じ読みをするけど、違う字を書く女王様で、その統治していた時代から、既に賢帝と呼ばれていた名君……」

「ええ。詳しく述べと、花雲恭癒璃亞は第一王女で、王女時代は第一王位継承者だったが、異母兄が病氣で亡くなつた為、すぐ下の異母弟である花雲恭斑都と結婚し、王位を継ぐ。花雲恭襖祥と花雲恭早莉阿の娘。花雲恭襖祥の第二子で、最女の娘。今でも賢帝、名君の名を欲しい儘にし、おまけに当時からも名高かつた女王。そして魔族の力を全て得ていた、前代未聞の人」

「でも、それが何の関係があるの？ あたしには、全然……」

由梨亞は軽く目を瞑ると、千紗を見詰めて言った。

「その癒璃亞女王……富実樹の曾祖母が、今冥界にいるのではなく、この現世にいると言つたら？ もう、何十年も前に死んだ女王が。そして、その人が私に花鳶国の情報を渡しているって言つたら？」

千紗は、後半の台詞が耳に入らなかつたかのように呆然と呟いた。

「……えつ？ つ、つまり……幽靈って、やつ？」

「まあ、幽靈って言つて……何て言つて……まあ、視た方が早いわね」

「み……視えるの？！」

「ええ。ただ……明日の夜を待つて頂戴。私には、そこまでの力がないから……」

「由梨、亞……？」

千紗は全く訳が分からずに呆然としていたが、そこに睦月と香麻

が入つて來た。

「お前ら、さつさと部屋出てくなよ。まだ話は終わつてなかつたんだぞ」

「香麻……」

いつもよりぶつきらぼうに言つた香麻を、睦月がたしなめた。

「少し遠慮しろよ。千紗の心臓にはぶつとい鉄パイプが生えてるから心配ないけどな、由梨亞のことを考えろよ。あんな状態なの、ほつとける訳ないだろうが」

「睦月……」

千紗の地を這うような低い声に、睦月は何とも場違いに朗らかで

明るい声で返事をした。

「何だあ？ 千紗」

「ほんつきであたしを怒らせたいのね、莊傲睦月。喜んで乗つて差し上げるわ。真剣勝負よ」

「なつ……！」

睦月が慌てて逃げようとしたが、香麻によつて扉が塞がれてしまつた。

「お、おい、香麻つ！」

「自業自得だ、睦月。諦めてお縄に付け」

「ちょつ……それ意味違つて！ 正しい言葉使えよつ！ つてい

うかそこ退け、退けつ！」

「もう遅いわよ、睦月。心臓に毛が生えてるつていうだけでも腹立たしく思うのに……それをよりにもよつて鉄パイプだなんて……。ねえ、睦月。こゝれゝはゝ。殴られても仕方ないつて、思わないかな？ あたしだつたら、そう思うんだけどなあ？ それにその台詞は、仮にも婚約者に対する適切な言葉つて言えるのかどうか、よく分からんんだけど？ さあ、睦月。覚悟は、決めたよ、ねえ？」

千紗の優しい、けれど恐ろしい声に、睦月は生睡を飲み込んだ。

その後起こつた出来事は……言つまでもない。

しかし、そのあまりの酷さに、それを見た召し使い達は極一部の胆力のある者を除き皆倒し、生き残った召し使い達はその世話を明け暮れ、主人夫婦もあまりのことに倒れてしまつたという。

この日の婚約パーティーに参加した人達はあまりに大人数だった為、誰もこの屋敷に泊まらず、そして誰も残つていなかつたことが、唯一幸いだつたと言えるであらつ……。

「全く、馬鹿じゃないですか？」

鈴南の言葉に、睦月はウツと呻いた。

だが、それでも鈴南は容赦しない。

「あんなに落ち着いてない千紗様を、気付いていない訳がないのに、わざと怒らせるなんて……一種の天才ですねえ」

一見褒め言葉にも聞こえそうだが、単なる皮肉である。

それも、最大級の。

「ほんと、見た時は呆れましたよ、ええ。本気で。あれを見て私と苓華が卒倒しなかったのは、あの千紗様と由梨亞様がお産まれになつた時から付き合っているからです。全くもつ、好い加減にして欲しいものです。貴方様は仮にも千紗様の婚約者。将来はこの本条家を担つてもらうお方なのですから」

「まあまあ、鈴南さん。そこら辺にして置いて下さいよ。もう充分お説教してるじゃないですか。本当は関係ない俺も怒られるのは、割が合わないですよ」

香麻のその台詞に、鈴南がジロツと睨んだ。

「関係がない？ ほほう、この人の暴言を止めもせず、喧嘩も止めもせず……それで、関係がないと？ 確かに、見事なまでに、関係がないですねえ、香麻さん？ 本当にねえ」

「うつ……だつて鈴南さん、じゃあ逆に訊きますが、睦月の暴言を止めるだけならともかく、あの千紗を止めれますか？ 俺には無理ですよ、ええ、千パーセント無理ですね、本気で」

香麻の言い分に言い返す言葉が見つかなかつたのか、鈴南はフン、と顔を背けた。

「ほらほら、いい歳して拗ねないのよ、鈴南」

おつとりと、鈴南と共に睦月の手当てをしてくる、鈴南の先輩である召し使い、唱奈が言った。

と言つても、唱奈は四十一歳、鈴南は四十歳なのだが。

その後、しばらく静かだつたが、睦月の手当てが終わる頃、苓華が入つて來た。

「あの、皆さん。ちょっとといいでですか？」

「ええ、どうぞ。苓華。丁度この千紗様の導火線となつた超大迷惑男の手当ては終わつた所ですし。そちらも、千紗様の手当ては終わりましたか？」

「ええ。何しろ仕掛けたのは千紗様の方ですし、実力が違い過ぎますからね。特に大きな怪我はなかつたです」

苓華はチラ、と睦月を意味あり氣な日付で見ると、視線を鈴南と唱奈に戻した。

睦月が、

（俺つてもしかして……いや、もしかしなくとも、苓華さんに馬鹿にされてる……？）

と思つたのは、言ひうまでもない。

「それで、何の用なのかしら？」苓華

「はい、唱奈さん。旦那様からですが、睦月さんと香麻さんに、明日の午後、今日と同じ部屋まで来て欲しいとのことでした。さつきのお話の続きをみたいです」

苓華がそう言うと、香麻が手を挙げた。

「あ～、ちょっとといいかな？」苓華さん

「はい。何でしようか？」

「なんで、午後からなんだ？ 午前中、何か予定でも？」

「ええ。午前中は大事な商談があるそつなんです。なので、午後からと

「ああ、なるほど。ありがとう、苓華さん」

「んっ？ どうかしたのか？」香麻

睦月がそう訊ねると、香麻は笑つて言つた。

「あ、教えてなかつたつけ？ 明日の午前中、あの新しくできたアウトレットに遊びに行かないかって、藍南あいなと尚鉛しょうじと素香もとかと涼斗りょうとと奏そうう

谷に今朝誘われたんだよ。これから大学入っちゃうから、今の内に遊んどいた方がいいんじゃないかなってさ」

「へえ、いいんじゃねえか？ ジャア、あとで千紗と由梨亜に言いに行くか」

「ああ」

この時、まだ一人は知らなかつた。

本当に、遊べる時は『今の内』しか、ないことを。

その入学式は……決して一週間後に、来ない」とを。

そして、二人は後に後悔することとなる。

先程、耀太から聞いた話を、自らの少し離れた未来と位置づけてしまつたことを。

自らの、本当に近い未来として考えることができなかつたことを……。

「ンンン、とこ「ノックの音と共に、睦月と香麻が入ってきた。

「おい、千紗、由梨亜。ちょっとといいか？」

「うん……何の用？」

「ああ。明日の午前中、あの新しくできたアウトレットに遊びに行かないかって、藍南と尚鉢と素香と涼斗と奏谷に誘われたんだよ、今朝。どうせ、入学式までもうちょっとだからさ、今の内に遊んどいた方がいいんじゃないかなってさ。どうだ？」

「『今の内』、ねえ……」

由梨亜がそう呟いたが、千紗はそれを無視した。

「いいんじやないかな？ 少なくとも、あたしは行きたいな。でもさあ、こういふのはもつと早く言つてよ」

千紗の珍しくも真っ当な非難に、香麻は軽く頭を下げた。

「ああ、ごめん。由梨亜はどう思つ？」

「ええ。いいんじやない？ 確かに、『今の内』だもんねえ……」

由梨亜は意味深に言つたが、それには誰も気が付かなかつた。

「ああ、分かつた。じゃ、俺らは涼斗と奏谷に連絡すっから、そつちは藍南と尚鉢と素香に連絡して？」

「うん。分かつた。じゃあ陸月、香麻、また明日ね」

「ああ。また明日」

「じゃあな」

「またね」

四人はそう言つて、陸月と香麻は部屋を出て行つた。

一人が出て行くと、千紗は由梨亜を振り返つて言つた。

「じゃあさ、由梨亜。あたしが藍南と尚鉢に電話するから、由梨亜は素香に電話して貰つてもいい？」

「ええ。分かつたわ」

二人はそれぞれ三人に電話をすると、三人とも即答で

「やつた！ 滅茶苦茶久しぶりだもん！ すっごく嬉しい！ じゃあ、明日ね！」

とはしゃいだ楽しげな声で言つたのだつた。

ちなみに、涼斗と奏谷も似たような反応だつたといつ。

「うつわ～！ ちょっと見てよ素香… これ可愛い？ 素香に絶対似合つて～！」

「ほんとだ～！ ちょっと可愛い～！ あつじやあれ、これは尚鉢に似合つんじゃない？ 尚鉢、こいつの好きでしょ？」

「うんうん！ ありがと、素香…」

「ちょっと来て！ 由梨亜、千紗… こいつのどうかなあ？」

「あつ、いいんじゃない？ 藍南」

「うん、すつごい似合つてるわ」

「それじゃあ、千紗はあれど？ 由梨亜はそっちの…」

「うつわあ～！ すつご～！ 藍南つてやつぱりゴーディネーター

としての才能あるわねえ！ ほんと感心するわ

「ふふ、ありがと、由梨亞。それにしても、どうしようかなあ……」

「結構可愛いの沢山あるから、すつごい迷っちゃう…」

「うんうん！ だからって全部買つてるとお金なくなっちゃうんだけどねえ……」

「な～に言つてんの？ 千紗。あんた達はお嬢様でしょ？ お小遣いぐらい沢山貰つてるでしょうが！ それに、買つて欲しい物はいくらでも買つてくれるでしょ？ いいよねえ……あたしなんか、バリツバリの庶民だから！」

「ねえちょっと！ そういう『お金持ち』の偏見、やめて貰える？ そりゃあ私達のお父様はお金持ちだけど、お小遣いのこととかお金の無駄遣いとか、めっちゃ厳しいんだから！」

「そうそう。この前なんて、『お前達にはもう沢山服があるんだから、これ以上買わなくともいいだろ』って言つて、すつごい気に入つた服だったのに買つてくれなかつたんだよ！」

「え～！ 信じらんない！ 交渉とか何もしなかつたの？ 例えば、お小遣いを来月分減らすとか、前借りだとか……」

「したけど、『駄目な物は駄目だ！』だつてさ」

「だつたら、あたしの方がよっぽど恵まれてるよ」

「アハハ！」

「あつ、ねえ、藍南、由梨亞、千紗！ もうそろそろ時間になるよお！ さつさと決めないと！」

「あ、ほんとだあ！ ありがと、尚鉛…」

「どういたしまして！」

……実際に、賑やかで楽しそうである。

九人は、少し遠出をして買い物をしていた。

今は、女子五人組の方はアクセサリーや服などが売つている наркоで思いつ切りはしゃいでいて、男子四人組の方は早々に付いていけなくなり、一足先にゲームセンターで遊んでいた。

「つたく、女のあの勢いには、付いて行けねえよ……」

「全くだな」

「だけど、今は男四人で平和に遊べてるから、いいんじゃないのか？」

「ああ、同感だな。だけど、あいつらが合流してたら、絶対二つ  
ちは付き合わせられるぞ」

その時、睦月の携帯端末が鳴った。

掛けた相手は千紗のようだ。

そして一十秒ほど話すと、睦月は難しそうな、変な顔をしてこちらを見た。

「あと十分ぐらいしたら、五人もこっちに来るみたいだぞ」

「ゲッ……」

「んじゃ、今の内に休んどくか」

「賛成だな」

「俺もだ」

247

四人の予想通り、千紗と由梨亜と藍南と尚鉢と素香が合流すると、  
思いつ切りはしゃいで遊び回り、四人はへトへトにさせられた。

「なあ、千紗。俺らもう、限界なんだけど……」

「お願ひだから、ちょっと休ませてもらえねえか……？」

その男達の嘆願に、千紗は思いつ切り馬鹿にしたような目で見て、  
言った。

「あんた達って、ほんとに男？ 全然体力ないじゃん」

「うつ……」

「すみません……」

「でも、女の方がこういうでは力があるっていうか……」

「男はそういうのに付いていけるようになつてないっていうか……」

「あつきたあ。あんた達、男なのにそんな泣き言言つていいの

？ 名が廢るよ」

「そりそり。あたし達は普通よ、普通。それに付いて行けてないあ

んた達は、ほんっと情けないわ」

「まあまあ、千紗、尚鉢、藍南。ちょっと落ち着いてよ」

「そりや。それについての時代も、女の方が力ないけど、こういう時のパワフルさはいつも女の方が勝ってるんだから。まあ、物にもよるけどね」

「ひつどーい！ 素香、由梨亞ー、あたし達を見捨てる気いー！」

「うーん……でもさ、時計見てよ

「ハッ？」

由梨亞の声で皆が時計を見ると、時刻は十一時三十分だった。

「そろそろお昼にしない？ 十一時過ぎると沢山人来ちゃって席なくなっちゃうもん」

「まあ、そういうだけ……」

それでも渋る藍南と尚鉢に、千紗が元気良く言った。

「それじゃあ、多数決採る！ 今からお昼食べに行くのに賛成の人、手を挙げて！」

結果、七対一で、お昼を食べに行くことになった。

そして昼食を終えると、九人はそれぞれ帰ることになった。

千紗、由梨亞、睦月、香麻の四人は、急いで本条家の屋敷に行つた。

耀太から、昨日の話の続きを聞く為に。

「たつだいまあ、お父様」

「ただいま。ちゃんとした今日は走らないで来たわよ？ お父様」「プツ……それが今言つことかよ、千紗、由梨亜」

「ああ、同感だな」

多種多様な言い方に、耀太は苦笑すると四人を座らせた。

「さあ、さつさと座りなさい。今日はお茶も何も出さないぞ。どうせ昼は食べてきて、お腹一杯だろ？？」

「うん」

「だから、すぐに本題に入るぞ。……花鳶国はおよそ一週間前、地球連邦の王族や皇族、議会に向かい、通信文書で宣戦布告した。その送り主の名は、花鳶国の王、花雲恭富瑠美陛下かおひらみだった」

その言葉に、由梨亜ははつと息を呑んだ。

（やつぱり……誰かに押し切られた？ でも、富瑠美を動かせるようなほどの力を持つ人は、三ヶ月前の報告では誰もいなかつたはずなのに……！ 今の花鳶国では、御祖父様も政財大臣殿せいざいだいじんも代替わりをして、恐らく、今花鳶国で一番権力を持っているのは宗賛大臣殿……）

由梨亜は、小さく顔を歪めた。

（でも、彼は権力に何の興味もなくて、世襲制の大臣家に産まれて、長男だったから王宮に仕えて大臣もやってるけど、いつも、ただ神に仕えられるほどの力があれば、それで充分だと……そういうすつごい宗教的で穏やかな考えを持つて、しかも明言して、花鳶國の中では滅多にいない超貴重で希少価値の高い重要人物なのに……。だから、彼は多分違う。だけど、他に誰が伯父様と政財大臣殿と宗賛大臣殿を動かせるって言うの……？！ 分からない……分からなによつ！）

由梨亜がそう考えていると、耀太が話を進めた。

「彼女は、じう述べていた。……ここ、それの『写しがある』  
耀太はそう呟つと、端末を起動させ、そこにその文書の『写し』を映し出した。

そこに書いてあったことを要約すると、じう述べてあった。

『わたくし達花鳶国の、宇宙連盟加盟への再三の問い合わせに全く何も返答がないとはどうじうことで御座いましょうか。連盟に加盟したくないのであれば、そう仰れば宜しいのです。わたくし達は必ず御認めになられると思い申し上げたのでは御座いません。勿論、御断りにならることも考えてはあります。ですが、わたくし達は何度も何度もそちらに問い合わせました。そして、何も御返事がない場合は、武力を持つて征する可能性があるとも申し上げました。けれど、今までの一年間、何の御返事もないままに過ぎ去っていました。ただわたくし達が言われた言葉は、

「今は即答できかねます。地球連邦の総意がなければ、このことに返答はできません。ここイギリスが首都となつておりますが、私は何の独裁権もありませんので、今回は御引取り願います」

とだけ。花鳶国の国民の不満は高まりに高まっています。そして、幾ら何でも一年間何の動きも見せぬままで「検討中」などと仰せられても、こちらは疑わざるを得ません。よつて、花鳶国は宇宙連盟の長としてではなく、ただ花鳶国一国として、地球連邦に宣戦布告致します。この文書が届く頃には、こちらの準備は既に始まっているでしよう。花鳶国が地球連邦に攻め込むのは時間の問題となります。それでは、これから始まるであろう戦いの、条約制定の時に御会い致しましょう。皆様の御幸運を御祈り申し上げております』

読み終わった四人の顔は、蒼かつた。

信じられない内容に、睦月と香麻は顔を引き攣らせ、千紗は心を

むつき

こうま

落ち着かせようとしているのか、胸に手を当てて軽く喘ぎ、由梨亞は瞑想するかのように目を閉じ、何を思つているのか全く読めなかつた。

「戦争が、既に確定事項だつたなんて……拒否権がないだなんて、思いもしなかつたな……」

「ああ……戦争が起こるとすれば、この国は滅茶苦茶になつちまつ……俺らの入学式が延期になるどころの話ぢやない。下手をすれば、この国の指導者の存在とか、政治家とか、みんないなくなるぞ」

「ああ。だから、私達が天皇陛下に呼ばれたのだよ、睦月君、香麻君。そして、いざという時になつたらこの國の大勢の人達を守る為に、天皇陛下達は、既に意志を固めている。だから、関係ない人達と、そうでない人達を、引き離すことになつた。勿論ほんとう我が本条家は『関係がある』方だ。睦月君、香麻君、君達は、その『どちらでもない、微妙な立場』となる。好きな方を、決めておいてくれ」

その言葉に、睦月と香麻は顔を見合わせる。

耀太は、追い打ちを掛けるように言葉を重ねた。

「日本州は小さな州だ。花鳶國も狙いにくいだろ。だから、もし私達に付くとしたら、二度とこの地を訪れる可能性がなくなることも、覚悟しておいてほしい。勿論、全ての王族や貴族や政治家達が行く訳ではない。それでは、戦争が終わつても、この國は立ち行かなくなる。だが、本条家は無理であろう。もし付いてくるならば……死を、覚悟して欲しい。生半可な気持ちで来るならば、この國に残つた方がマジだ」

「そう、ですか……でも、死なない可能性もあるんですね?」

「ああ。どれほどかは、言えぬがな」

耀太の不吉な言葉にも拘らず、睦月も香麻も力強く頷いた。

「じゃあ、俺は一緒に行きます。俺は、由梨亞が好きなんです。だから、護つてやりたいと思つていて。それに、もう俺と由梨亞は婚約している。だから、半分は本条家の間となつています。それを理由にすれば、家族を説得できます」

「俺もです。俺は父さんも母さんもいないから、心配してくれるのは兄貴と妹だけ。けど、その二人はきっと説得できます。だから、一緒に行きます」

その言葉に、耀太は息を呑み、ホウツ、と溜息をついて言った。  
「分かつた。ならば、君達は一緒についてくるがいい。……だが、くれぐれも無茶な真似はしないでくれ。そうしたら、私は君達の家族に顔が向けられない」

「……お父様っ！ 本当に、いいのっ？」

千紗のその悲鳴に、睦月は穏やかに微笑んで言った。

「千紗……。お前は、本条家の跡取りだ。だから、もしその要求が来たら、突っぱねることは無理だろ？ だから、俺は行くんだ。もし止められるのなら止める。止められなくつても、少しでも長い間は千紗と一緒にいたいしな。香麻も、そうだろ？」

「ああ。由梨亞も千紗も、色々と無茶をするからな。止められるのなら、止めてみせるよ」

睦月と香麻の意気込みに、千紗と由梨亞は畳然としたが、釘を刺すのは忘れなかつた。

「でも……本当に、その時が来たら、止めないでよ。私達は、その為に行くんだから。それに……その時が来て私達が死んでも、香麻も睦月も日本州に還つてね。それだけは、約束して頂戴。あの……昨日の約束を、これで一つ使うわ。私の分だけで、香麻と睦月にね」

由梨亞の、その眞面目なのかふざけているのだから分からない言葉に、睦月と香麻の顔は一瞬緩んだ。

「……ああ。約束、する」

その顔とは対照的に、絞り出すような声で一人が約束すると、由梨亞は溜息をついた。

(香麻と睦月は、一緒に来て欲しくなかつたな……御母様とか富瑠美とか、身近にいた人が私に会えば、ばれちゃうかも知れないし。もし、他の王族だつたら……例えば、今鶯大臣になつていて、御父様の十一番目の子供で紗羅瑳侍の娘、第六王女の麻箕華まみかか何かだと、

絶対にばれない。麻簞華は兄弟の中でも頭いいけど、私の持つてゐる力を知らないから。そして……もしされたら、私はきっと花鳶国に連れ戻されて、王位を再び継がされることになるわ）

由梨亜は、横目でちらりと千紗を窺つた。

（千紗はそのことを知つてるから、問題ない。お父様とお母様はそれを知つたら茫然自失になるだろうけど……あの二人は事情を知らない上に、茫然自失になるほど根性なしでもないから、絶対に止められるわ。そうすると、一人の生命が危ないのよね……いざとなつたら、二人を千紗ごと置いてきぼりにするしかないわ……）

由梨亜がそう考えている内に、話は進んでいた。

「さて、これで話は終わった。四人とも、好きにしていいぞ」

耀太のその言葉にはつと我に返ると、千紗がそつと由梨亜の腕を引いた。

「由梨亜……ちょっと、出よ？」

「うん……分かつた」

由梨亜はそつと、千紗に引きずられるようにして部屋を出た。

(一体、千紗はどこまで行く気なの……？)

由梨亜はそう思い、隣をスタッタと歩いて行く千紗の顔をチラツと見た。

一人は、外の道を歩いていた。

だが、由梨亜は一体どこに行くか知らなかつた。

ただ、千紗に付いて行くだけで精一杯だつた。

「あ、あの、や……ど、ど！」

由梨亜はそこまで言い掛けてしまつた。

千紗が睨んで来たからだ。

由梨亜が言うのをやめると、千紗はふつと笑い視線を完全に前に向けた。

(つたぐ、千紗つたら……ほんとに、どこまで行くのよ……)

今、由梨亜は嫌な予感に襲われていた。

(この道、通つてるつて……もしかして……いや、もしかしなくても……いや、でも……やっぱり……あそこかも……)

やはり、由梨亜の予感が当たつた。

着いたのは、近くの臨海公園だつた。

千紗と由梨亜は、小学生の頃よくここで遊んでいた。

二人が初めて会つたのも……ここだつた。

「千紗……

「……うん？」

千紗は、海の方をじっと見詰めていた。

「どうして、私を連れて來たの？　ここに」

「……あのね、由梨亜。これから、地球連邦は花鳶国と戦うでしょ

？」

「ええ。もう、宣戦布告されたみたいだから……」

「ねえ、由梨亜。地球連邦が花鳶国と戦つて、勝算はどうぐらいだ

と思つ?」

「それ、は」

由梨亜は言葉に詰まつた。

(千紗は……どこまで知つてゐるの? 私が、覚悟してこることを。  
だけど……それなら、私は )

「由梨亜。正直に、答えて。あたしは、ほんとに勝算は少ないと思う。由梨亜。花鳶国元女王としての考えは?」

「……じゃあ、言つよ。私は……詳しきはよく分からぬけど、多分、良くて十パーセント。悪くて……一パーセント未満。それぐらい、今はすつゝ無謀な状態。ただ……地球連邦の人達は……勝算は最低でも三十パーセントはあるはずだつて思つてゐるはずよ。地球連邦の隠してゐる力は、絶対それぐらいの力を持つてゐるはずだつて。そして、花鳶国はそれに不意打ちを食らうはずだつて、信じてる」

由梨亜は、瞳を閉じて吐き捨てた。

「けど、花鳶国はその情報を得られる。そして、仮にその情報が僅かにしか得られなくても、花鳶国の力の方が強いわ。中央諸国なら知つてゐることも、地球連邦は知らないつていうことは沢山あるの。おまけに、花鳶国が他国に隠してることも沢山ある。そこからみると、地球連邦の勝算は、絶望的に低いわ」

「そつか……じゃあ、地球連邦が負けたら、ここに花鳶国の人人が来るんだよね」

千紗の確認するような、そして妙に穏やかな口調に、由梨亜は氣付いた。

(そんな……千紗は、全部気付いてたつていつの……?)

だから、答えることが……できなかつた。

「やつぱり……そつなんだね。もしここに王族が来たとすれば……

由梨亜のこと、花雲恭富実樹かづきよつぶみきだつて氣付く人、いるんでしよう?

それで、もし気付かれたら……由梨亜はあたし達に黙つて、花鳶国に戻るつもりでしよう? そうすれば、富瑠美ふるみは富実樹に王位を戻

す。そして、富実樹なら地球連邦に対して悪いようにはしない

つまり地球連邦は、宇宙連盟に加盟する以外の無茶な要求は、あまり呑まないことができる……。そういうことなんでしょう？ 由梨亜。

貴女は、人身御供になろうとしている。……違う？

「……ええ。そうよ。ただし、ばれたらね」

由梨亜は、そっと溜息をついた。

そう、ばれたら、なのだ。

もしばれなければ、由梨亜はずつと地球連邦にいられる。

千紗と、香麻<sup>ひづま</sup>と、父と、母と、沢山の友達と。

だけど、ばれたら……由梨亜は富実樹になるしかない。

それ以外、何一つ道は残っていない。

地球連邦が、花鳶国と戦う以外に何一つ道が残っていないのと同じように。

「もしばれなきや、私はここにいれるわ。私はここにずっといたいから、ばれないように努力する。だけど、もしばれたとしたら……」

由梨亜は、千紗の背中を真っ直ぐに見詰めて言った。

「その時の覚悟は、私にはあるわ。だから……止めようとはしないで。誰に止められようと、その覚悟は揺るがないわ。止めても無駄なの。だから、このことは誰にも言わないでくれると嬉しい。特に、香麻と睦月<sup>むつき</sup>には。お父様とお母様にも言わないで欲しいけど……でも、香麻と睦月の方なんかは、それこそ力に物を言わせて無理矢理止める気がするのよ……ううん、気がするだけじゃないわ。本気でする。だから、もしばれた時はお願ひ。一人を止めて頂戴。これは、千紗にしか頼めないことだから」

由梨亜がそう言い終わると、千紗は振り返り、穏やかに微笑みながら言った。

「嫌」

……由梨亜の、思考が止まった。

(な、に……？ 千紗、今何て言ったの……？)

「…………な、んて、言つ」

「だから、聞こえなかつた？『い・や』」

千紗は、由梨亜の語尾に被せるようになすかさず言つた。

……やはり、由梨亜の聞き間違いではなかつたようだ。

「…………ど、して」

「ん~？ 嫌だから」

「…………だ……から、理由、は」

由梨亜は、途切れ途切れにしか言葉を発せなかつたが、千紗はくすりと笑い、実に滑らかに、楽しそうに言つた。

「だつてさ。由梨亜、ほんとは嫌なんでしょ？ 花鳶国に戻るの。だつて、こゝには由梨亜が愛する、香麻がいる。そして、あたしとか藍南とか、尚鈴とか、素香とか、睦月とか涼斗とか、奏谷とか、あと他にも沢山の友達 親友がいる。お父様も、お母様も。なのに、どうして由梨亜が花鳶国に戻りたがつてゐなんて思えるの？」

「千紗」

由梨亜の声に、軽く肯定するような感情が思わず混じつてしまつた。

そのことに気付いたのか、千紗は真剣な口調で言つた。

「由梨亜は、ほんとは戻るのが嫌。そして、あたしは由梨亜に行つてほしくない。だつたら、止めるのが一番いい方法なんだよ？ 由梨亜。睦月と香麻には、富実樹のことは絶対に言わない。つていうか、それこそ絶対に言えない。だつてあの一人、一体何仕出かつか分かつたもんじゃないもん。だけど、もし止めるのなら一人の力を借りるよ。だつて、あたしはずつと由梨亜と一緒にいたいもん」

「…………」

由梨亜は、何て言つたらいいのか全く分からなかつた。

だが、何とか言葉を捻り出して言つた。

「…………その、千紗……されこれを訊く為に……ここの為だけに、わざわざこゝまで……来たの？」

「うへん……もう一つだけあるんだけど……こい？」

「……いいも何も、この状況で私に拒否権なんてないと思つんだけ  
ど……？」

由梨亜の少し呆れたような、脱力したような声に、千紗は軽く笑  
つて答えた。

「あたしが訊きたいのは、由梨亜の　うつみ、富実樹の曾お祖母  
さんの、癒璃亜女王のことなんだ」

「曾御祖母様の……？」

「うん。今夜、その癒璃亜女王に会うんだよね」

「ええ。今夜、花鳶国から曾御祖母様が戻つて来るから」

「じゃあさ、その人に訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ええ。勿論よ。その前に私に報告があると思うけど……何しろ、  
曾御祖母様にお会いするの三ヶ月ぶりだから」

「……そうなの？」

千紗の口調には、純粹に驚いたような響きがあつた。

そんなに長い間会つてないとは、思つていなかつたようだ。

「だつて、あんまり長い間花鳶国にいても目新しい情報が入るとも  
限らないけど、あまり短くても大して情報が入らないもの。だから  
三ヶ月交代みたいな感じで、地球連邦と花鳶国を行き来しているの  
よ」

「ふうん……。じゃあ、あたしの訊きたいことはみんな訊き終わつ  
たし、戻る？」

千紗の珍しくも真つ当な問いに、由梨亜は笑つて答えた。

「折角ここまで来たのに、遊ばないで帰るの？ 勿体ないわよ。遊  
んで行きましょ？」

「うん！」

千紗の元気な答えに、由梨亜は頬が綻ぶのを抑えることができな  
かつた。

千紗が元気だと、嬉しいと　自分で元気になる、嬉しくなる。  
結局、二人はいつもそうだ。

心の奥底で……繋がっている。

その夜、千紗はこっそり由梨亜の部屋を訪ねた。

「由梨亜……来たよ？」

「いらっしゃい、千紗」

今の時刻は真夜中の午前一時。

夜更かしをしていない限り、いつもなら起きていらない時間である。千紗と由梨亜は双子ということになっているが、さすがに部屋は離れている。

さて、千紗は由梨亜の部屋に入つたが、しばらく何もせずにベッドの上に腰掛けっていた。

由梨亜も、千紗とは少し離れた場所に腰かけてぼんやりしていた。五分が過ぎ、十分が過ぎた頃……部屋の空気が、揺らいだ。

由梨亜が立ち上がり、虚空を見詰め、それを見た千紗もはっとして立ち上がり、由梨亜の様子をじっと見守った。

そして……由梨亜が口を開いた。

「お久しぶりです、曾御祖母様」

由梨亜の口調はいつもより少しあはいるものの、『富実樹』だった頃よりは大分碎けた口調で、何もない所に声を掛けた。すると、その由梨亜の視線の先が揺らぎ……二十代前半ほどの姿をした、軽く波打つた漆黒の髪に、目が覚めるような、とても濃い紫色、貝紫、ロイヤルパープルと言われる高貴な色、王者の色と呼ばれる紫色の瞳をした女性が、目の前に浮いていた。

いきなり現れた上に妙に立体的で、だけど宙にも浮いているということで、千紗の思考は完全停止した。

(な、に……誰？ 愈璃亜女王ってのは、分かつて、けど……でも……こんないきなりつて……この心がついていかないんですけど……)

そのことだけが、千紗の頭をグルグルグルグルグルグルグル

回っていた。

『ええ。お久し振りですね、富実樹。全然変わっていないようで、安心しました』

(うつわ……すつごい丁寧な喋り方……)

そう千紗は思つたが、これでもまだ砕けている方である。

「曾御祖母様、紹介致します。この方は本条千紗。今は、私の双子の姉となつてゐる方です。そして、私の無一の親友ですわ」

『ええ。千紗さん、初めまして。わたくしは富実樹の曾祖母の花雲恭癒璃亜と申します。どうぞ宜しくお願ひ致します』

『えつ、あつ、はい。こちらこそ宜しくお願ひします……』

千紗は反射で頭を下げていた。

そして、その頃にはようやく頭が動き始めた。

「あの、あたし、訊きたいことがあるんですけど、いいですか？」

『ええ。どうぞ』

「えつと……癒璃亜様つて、元々花鳶国の女王様だったんですよね？」

『ええ。第百五十代花鳶国国王でしたが』

「それなら、このことはい存知のはずでしょ？」

千紗はそう言つと、今までずっと隠し持つていた物を差し出した。それを見た癒璃亜は、顔色を変えた。

『これつ……！ 何故……何故、これを貴女が……！』

千紗が持つていた物は、片手より一回りほど大きい、四角い小さな黒いケースだった。

「これは、だいたい半年ぐらい前にあたしが発見した物です。これが何なのか、由梨亜は知らなかつたみたいでした。本当に、何の心当たりもなかつたみたいですから。そうだよね、由梨亜」

『えつとお、ま、待つて、ちょっと待つてねえ……ええつと

うーん……うーん……あつ！ 思い出したわ！

そう言えば、こんなのがあったわね……確かにこれが何なのか、私は全く分からなかつたわ。……今も、全然分からなければ

由梨亜は、半年ほど前にこれを見せられていた。

と言つても、

『ねえ、由梨亜。今日これ見つけたんだけどさ、何だか分かる?』

『つうん、分からないわ。でも、どこで見つけたの?』

『えへ、つとね……うん、すぐそこの庭の植え込みの陰つていうか、とにかく樹とか草とかに隠れてよく見えないと』

『ふうん……一応お父様に訊いといたら?』

『いいよ。ただあたしが気になつただけだから。じゃあこれ、捨てとくように苓華れいかに言つとくね』

『ええ』

といつた物で、特に何の変哲もない、じく在り来りの日常的な会話だった。

由梨亜も、それを見てもすぐには思い出せず、思い出すのにもかなりの時間を要した。

「それ……捨てなかつたんだ」

「うん。実はこれね、庭で見つけたんじゃないんだ」

「そ……そつなの?」

途惑つたように田を瞬く由梨亜に、千紗は申し訳なさそうに首を竦めた。

「嘘付いてごめん。これ、家の客室の中で見つけたの。メモも、一緒にあつた。それを由梨亜に言わないままにしたのは悪いと思つ。だけどそのメモは、花鳶国に関係する物だったから。だから、由梨亜には言わない方がいいと思って。で、由梨亜はこれを知らなかつた。だつたら、そのメモを見せて不安にさせることはないと思って、今まで隠してたの」

『せうだつたのですか。ですが、それは花鳶国に対する立派な武器となります。今まで、よく隠して置きましたね。本当に立派です。これはもしかしたら、地球連邦が勝てるかもしません。勿論、これを利用したらの話ですが』

『そつなんですか? そこまでとは思わなかつたな……それでは癪

璃亞様、これを利用した場合、勝算は何パーセントぐらいですか？

『恐らく……六十パーセントぐらいではないでしょうか』

「あ、あのー 曽御祖母様！！」

由梨亞が、勇気を振り絞ったかのように声を出した。

『何ですか？ 富実樹』

「えつと……その、これって、一体何なんですか？！ 私だけ、話に付いてけないって言つか……とにかく、置いてきぼりにしないで下さいっ！」

『ああ、ごめんなさい、富実樹。わたくし、富実樹がこれを知らないことをつい忘れてしましたわ』

「右に同じ」

千紗はそう言つと、由梨亞に向かつて一枚の紙を渡した。

それは、植物の纖維で作られた物で、由梨亞は破れないようにそつと受け取つた。

「これ……！ ……何だ。そういうこと……」

由梨亞の、半分納得したような、半分脱力したような声を聞き、千紗は苦笑した。

「やつぱり、これだけで分かつたか……。さすが、花鳶国の王様をやつてただけあるね」

その千紗に対し、由梨亞はきつぱり過ぎるほどきつぱりと言ひ放つた。

「ええ。これが分からなかつたら、花鳶国の王たる資格はないわ。ところで曾御祖母様、そろそろ花鳶国のことについて伺いたいのですが……」

『随分と面白い情報が得られましたわよ。これをどうするかは、貴女達次第です』

「それでは、お聞かせ願えますか。曾御祖母様」

『宜しいでしよう。それでは……』

その後、一時間ほど由梨亞の部屋の明かりは点きつ放しだつた。

「ちょっとマリミアンさん！ こっち来て下さい！ 早く行きましょ  
うよお～！ あたし、生で初めて見るんですから～！ これを見逃すだなんて、勿体ないですってばあ！」

「少し待つていなさい、レイシャ。まだ帳簿付けが終わってないわ。もう少しで終わるから……」

マリミアンはそう彼女に言い返した。

マリミアン・カナージュ・スウェール。

それは彼女の名前だったが、ここではただ、マリミアン・カナージュとしか名乗つていない。

マリミアンの異母兄は、花鳶国<sup>かおうじく</sup>の貴族の中でトップの位の戦祝大臣<sup>せんじゅたいじん</sup>である。

またこの大臣職は世襲制である為、官封貴族の『スウェール家』とは、この国の国民にとつて有名過ぎるほど有名な家であった。だからマリミアンが本当の苗字を名乗ることは、スウェール家の世間体にとつても、この国の貴族に対する目にとっても、何よりもリミアンの為にも良くない。

なのでマリミアンは今、夫に先立たれた未亡人の庶民として生活していた。

そして、マリミアンがいる所は、花鳶国<sup>かおうじく</sup>の首都、シャンクランではない。

その首都がある、リイウォン大陸でもない。

そのリイウォン大陸は北半球に属していて、その北半球にはもう一つ、シユーリック大陸という大陸があるが、そこにもいない。

マリミアンがいるのは、南半球唯一の大陸、ルーシャック大陸の地方である。

とはいってもそれなりに活氣のある、国内便限定とはいえた空港まである街ではあるが。

そこはスウェール家とそれなりの縁がある、地封貴族の治める土地だった。

だから、マリミアンはその貴族に融通してもらつて、家と店が一つになった中古の物件を譲り受けたのだ。

そうして、一年。

マリミアンは刺繡や縫い物などが得意なので、そういう物を自分で作り、店先やインターネットの通販で売っていた。商売は順調で、その商品はとても高い値が付けられることもしばしばあった。

「…………ちよつとマコミアンわん… 何消えよーとしてるんですかあ？」

「ほら、わざわざ来て下わーー！」  
いつそりと一階の自室に戻りつとじこったマコミアンは、早速捕まってしまった。

「わ、私……遠慮したいのですけれど……」

「何言つてんですか！ こんなのが生で一生に一度見れるかど～か分かんないですよお？ 」へんな田舎まで、滅多に来る訳ないじやないですか。ほら、早く！」

「ちよ……レイシャ、ですから、わたく……私、そういうのは……」

「ほらほらー 興味がないだなんて、言わせませんよ～」  
レイシャのその言葉に、マリミアンは口を噤んだ。

（本当は見慣れている訳ですし……それに顔を見られて、あの方にわたくしの正体があちらに御分かりになられてしまわれるのも、本当はいけないことであつて……）

マリミアンの理性がそれを叫んでいるが、レイシャの勢いに全て飲み込まれてしまう。

元々押しの強い性格でないことが災いし、日常生活の面では、全てレイシャ達大学生の同居人が主導権を握っていた。

「あ～！ やつと来た、レイシャ！」

「お待たせ～！ マリミアンさん引っ張つて来んの大変だつたんだから、場所取るの大変だつたって言わせないわよ！ マレイ、ミア、

「コリアー！」

そう呼ばれた女性達は、皆十九歳から二十歳の大学生だった。

彼女達は、マリミアンと共に働き生活をしていて離れた所に実家のある、つまりはマリミアンの所で下宿をしている扱いでもある女性達である。

ちなみに、このコリアーという女性の名前が呼ばれる度に、マリミアンは少し反応してしまつのであった。

「あつ！ 来たよ！ ほらほらー。あー、やっぱり本物はちょっと渋いけどかっこいい小父様！」

「ほんとー！ ちょっと遠くて、よく見えないのが残念……」

「ねえ、ニア。貴女どっちの方が好み？」

「え？ どっちでやつぱり、シャーワイン様かウォルト様？」

「当つたり前でしょ！ だつてあのシユールって……ねえ？」

「そうそう。まだシャーワイン様とウォルト様はまだオジサン世代だし滅茶苦茶カッコイイからキャアキャア言つことできるけどさ……あのシユールって……もうオジサン通り越してお爺ちゃんでしょお？」

「しかも、あんまり見栄えしないしねえ」

そう、今日ここには、戦祝大臣のシャーワイン、政財大臣のウォルト、宗賛大臣しゅきたいじんのシユールが来ているのだった。

彼らは、広場に造られた演台の上に乗つて、手を振つていた。三人の目的は、自らの姿を見せることで戦争に賛成してもらい、技術、人共に協力してもらう為だった。

そして、これが終わつた後、戦争に対する説明会が講堂で開かれることになつていた。

マリミアンは、ほぼ一年ぶりに生で見る異母兄の姿に目頭が熱くなつた。

(シャーワイン御異母兄様おにこさま……御元気そうで、良かつたですわ……ですが、この国の実権は全て、宗賛大臣が握つていて……嗚呼、この国はどうなるのでしょうか。軍隊の管轄は戦祝省……つまり、シャ

—ワイン御異母兄様の下にあります。シャーワイン御異母兄様は、一体どこまで宗賛大臣に抵抗できるのか……嗚呼、家族に……わたしの血の繋がっている兄弟に会いたい。わたくしの子供達に……富瑠美達も含めた、仲の良かつた子供達に会いたい。そして……  
（峯慶様に、御逢いしたい……！）

いつの間にか、マリミアンは堅く拳を握り締めていた。

（峯慶様……まさか、峯慶様とまで御別れするなんて、全く思いもしませんでしたわ……それに、峯慶様は今も意識不明……峯慶様、どうか、貴方だけでいい。貴方だけでいいですから……どつか、御元気になられて下さいませ……！　そして、御逢いしたい……いいえ、それはわたくしの我儘。峯慶様には、宗賛大臣を御止め戴いて、富瑠美を……陛下を御助け頂かねばならないのですから……峯慶様！　どうか一刻でも早く、御目覚め下さいませ……！）

マリミアンは自分の考えでぼんやりとしていたので、ゴリアから声を掛けられたのに気付かなかつた。

「マリミアンさん……マリミアンさん？　…………ちょっと……マリミアンさん！　聞いて下さいってば……！」  
「……あ、あら、「めんなさい、ゴリア。どうかしたの？」  
「マリミアンさん、マリミアンさんって、シャーワイン様やウォルト様と、ほとんど同じ世代ですかね？？」  
「え、ええ……やつだけど？」  
「だつたら、シャーワイン様とウォルト様、どつちが好みですか？」  
「…………えつ？」

意表を突かれたマリミアンが、思わず目を瞬かせると、

「レイシャとあたしはウォルト様の方がかつこいって言つてゐるのに、マレイとミアはシャーワイン様の方がかつこいって言つて譲らないんですよ。それで、同じ世代のマリミアン様なら、どつちが好みかなあって」

「ああ、やうこうこと」

マリミアンはくすりと笑つた。

つまりは、マリミアンが好みだつた方がよりかつこいいという訳だ。

「私は、どちらともそれほど好みではないわ。私の中で最高なのは、今は亡き夫ですもの」

さらりとマリミアンは言つてのけたが、途端に四人が不満そうな顔になつて振り返つた。

「え～っ！ ジャあ、どつちかつて言つと、どつちですか？ それだけは答えて下さい！」

「ん～、そうねえ……二人ともあの方とは似てないけど……どちらかと言つと、シャーワイン 様の方かしらね？」

マリミアンは危つく『御異母兄様』を付けそつになり、言葉を飲み込んだ。

だが、四人はそれに気付いていなかつたようだ。

「やつたあ！ や～つぱりシャーワイン様の方がかっこいいのよー！」

「え～！ マリミアンさん、ひど～い！」

「えつ？ でも、私がシャーワイン様の方が好みだつて言つたのは、シャーワイン様が、私の夫のお義兄<sup>じきゆう</sup>さんに似てゐるから言つたのよ？ だから、あまりかつこよさでは決めていないわ。といふか、かつこよさではどつちもどつちでしよう」

（ええ。わたくしは、嘘なんて吐いていないわ。わたくしの夫……つまり峯慶様のお義兄様の一人は、シャーワイン御異母兄様ですものね……）

「え～っ！ そんなあつー！」

「ほらほら、前を向きなさい。もうそろそろ移動してしまいますよ？」

マリミアンが注意を促すと、四人は一齊にザツと振り向き、歓声を上げた。

「きや～っ！ シャーワイン様あ！ 頑張つて下さい！」

「ちょっと何言つてんのー ウォルト様あ！ シャーワイン様に負けないで頑張つてえ～！！」

「ウォルト様、かつこいい～～～！」

「シャーワイン様の方が、かつこいいですよお～～！」

マリミアンは苦笑しながら、真っ直ぐシャーワインを見上げた。辺りは歓声を上げたりする人が多いのでそれなりに煩いのだが、その中でも特に四人の声は響いたらしい。

シャーワインとウォルトがこっちを振り返り、手を振つて来た。  
「んきや～～～～～～～！」

……凄まじい、悲鳴が上がつた。

あまりの声の大きさに、マリミアンは思わず耳を塞いでしまつた。それが目に留つたのだろう、マコミアンとシャーワインの目が合つた。

シャーワインは微かに目を瞠り、それで何とか抑えたようだ。

マリミアンはそんな異母兄の姿に仄かに微笑み、首の辺りで指を立て、小さく振つた。

それは、マリミアンが小さな時から氣に入つてゐる仕種で、シャーワインならば気付いてくれるはずの仕種でもあつた。

シャーワインはそれを見たからだろう、やはりそつかとの確信を深めたようで、にっこりと笑つて視線を他に移した。

そして、その微笑みを目にしたのだろう、マレイとマフは、更に「ギャ～～～～～～～！」

と意味不明な叫び声を発した。

そして、彼らが講堂に移動すると、マコミアンは声を掛けた。

「さ、そろそろ戻るわよ？」

「え～～まだ、後ろ姿が……」

「もう顔は見えないでしょ～～。まあ……貴女達はここにいてもいいけど、私はお店に戻るわね」

マコミアンはわざわざ戻つて、店に戻つて行つた。

「戦祝大臣殿……戦祝大臣殿？ どうかなされましたか？」

「あ、いえ……少し気を抜いていただけですから、御気になさらず、  
政財大臣殿」

「まあ、確かにあの人出は今まで以上でしたからね……それに、あの少女達の悲鳴は……」

ウォルトは苦笑した。

あそこには沢山の人がいたが、その中でも凄まじい悲鳴を上げていた四人の女性のことは、よく覚えていた。

「私達のことを見ようとして沢山の人が集まるのはよく分かりますが……それでも、そこまで悲鳴を上げられるとは、思いもしませんでしたね」

「ええ。そう言えば戦祝大臣殿、覚えておいでですか？ あの少女達の後ろに、我らと同年代であろう女性が御立ちになられていたのを」

「ええ、勿論です。恐らくあの女性は、あの少女達の誰かの母親ではないでしょうか？ それか、近所の顔見知りの女性だとか」

誤魔化そうと、敢えて曖昧なことを言ったシャーワインだつたが、ウォルトはそれに乗せられなかつた。

「ああ……なるほど。戦祝大臣殿はそう御考えになられたのですね」「……？ ということは、政財大臣殿は、違うことを御思ひになられたのでしょうか？」

シャーワインが警戒しながら言うと、

「ええ。あの女性には、些南美王女殿下の面影が窺えました。先王陛下とも、僅かでしたが似ておいででしたね」

そのウォルトの鋭い観察眼に、シャーワインはすぐには声が出なかつた。

「……さすが政財大臣殿ですね。鋭い観察眼です。ほんの僅かしか

御覧になられていない御婦人の御顔を憶えておいでで、おまけにあまり見知つてはいらつしやらない人物との類似点まで見出すとは。貴殿の五人の奥方達が、揃いも揃つて美女揃いで、おまけに顔立ちも似通つてゐることもあるのですかな」

その鋭い反撃に、ウォルトはサラリと言い返した。

「何の。第五妻まで持てるというのに、第二妻までしか持たない貴方の方が、素晴らしい觀察眼を御持ちでいらっしゃいますよ。審美眼と言い換てもよいかも知れませんね。私の妻は確かに美しいですが、それだけに争いが絶えなくて。いつの世も、女の争いほど大変な物はありませんよ。貴方の家は、平和そうで羨ましい」  
またもや、シャーワインは詰まつた。

確かに、シャーワインには妻がたつたの一人だけだ。

第一妻の方が貴族の娘で、第二妻が、何と普通の庶民の娘だった。勿論、庶民の娘を娶る貴族がいない訳ではない。

だが、それは身分の低い貴族がほとんどで、その中でも第四妻や第五妻が大抵である。

しかも、大貴族なのに第一妻までしか娶らないというのも、大変珍しかつたりする。  
つまり、シャーワインは貴族の中では珍獸中の珍獸だつたりするのだ。

「ええ。無駄に大勢の妻を娶るよりも、数は少ないながらも、眞実愛している女性を娶る方が私の主義に沿っていますからね」

「ほほう、それでは話を戻しますが、貴方はあの女性が似ていたと、御思ひですかな？」

「いえ、私はそこまでじっくりと御顔を拝見してはおりませんでしたからね。そこまではよく分かりませんな」

と、和やかに、あまり和やかとは言えないような話をしていた二人の元に、闖入者が入り込んで来た。

「おやおや、御若い人はよいですね。あれほどの人混みを潜り抜けてもまだ、話をする余裕があるのでから。私のように七十年代にも

なつてくると、そこまでの余裕は失われてきておりましてな

「何を仰られるのでしょうか。貴方は今現役で働いていらっしゃる大臣の中では最高齢でいらっしゃるではありませんか。まだまだ現役で御働きになられますよ、宗賛大臣殿」

その言葉に、シユールは皺の浮いた顔に笑みを浮かべる。

「ふふ、やはり御若い人に励まされると元気が出ますね。ありがとうございます御座います」

「おや、それをいうのなら、私達もやはり若くはありませんよ。私はもう四十代の後半ですし、戦祝大臣殿も既に五十代に入っていますから」

ウォルトの言葉に、シユールは苦笑した。

「そうですか……つまりは、私達は皆年寄り、という訳ですね」

「……ですが、宗賛大臣殿、何かあつたのですか？ 無駄に御喋りをする為に、貴方が来るとは思えませんし」

「ええ。確かに、私はそのような性格ではありませんね。それでは、戦祝大臣殿、政財大臣殿。明日の八時三十分に、ここを出発するようです。そして、ここでの地封貴族との対談を致します」

「そうですか。宗賛大臣殿、わざわざありがとうございました」

「ありがとうございます。宗賛大臣殿、ゆっくりと御休み下さい。それこそ、私達は年寄りなのですから」

「ええ。そちらこそ」

そう言つと、シユールは部屋を出て行つた。

この三人では、シャーウィンとウォルトで、仕切られていふことはいえ、結局は続いている一つの部屋を、シユールで一つの部屋を使つていた。

その理由は、シユールの方が一人とは歳が離れているので会話もしにくいだろうし、雰囲気も気まずくなるだろうということ、シャーウィンとウォルトが続き部屋の方が気楽だし、お金も掛からないから、ということになつてゐる。

だが本当の理由は、戦費に使う分の費用を捻り出す為と、シュー

ルが今王宮と政治を牛耳っているので、それに配慮をした結果である。

シャーウィンが、ほんの少し溜息をつくと、ウォルトがくすりと笑つて言つた。

「それで、戦祝大臣殿？ 先程の女性について、私の考えを述べても宜しいでしようか？」

「おや、まだ終わつていなかつたのですか……ええ、どうぞ」

軽く辟易して言つと、

「それでは申しますが、戦祝大臣殿。あの女性は……貴方の異母妹である花雲恭由梨亞様、マリミアン・カナージュ・スウェール様では御座いませんか？ そうすれば、富実樹先王陛下や些南美王女殿下の面影が微かにあるのも、納得がいきます。生憎、私は何年も前に、遠目ながらも御顔を拝見致しただけに過ぎませんからね」

「……まさか。我が異母妹、マリミアンはシャンクランの屋敷にあります。もし異母妹が屋敷を出てこんな国外にいるとなれば、現在当主である私の耳に入つていない方が可笑しい」

（……政財大臣……！ どこまで鋭いのだろうか、この男はっ！ だが……まさか、マリミアンがこれを見に来るのは思わなかつたな。いいや、大方、あの同居人の少女達に引き摺り込まれたのだろう。昔から、御転婆かと思えば妙に自己主張が少なかつたりして……特に、当時王子であらせられた峯慶王と初めて御会い致した時から、本当に大人しくなつてしまつて……）

シャーウィンは内心穏やかではなかつたが、それを何とか誤魔化して見せた。

今はただの官封貴族という地位にあるマリミアンだが、元はと言えば先々代国王の妻、妾。

今は除籍されているものの、かつては花雲恭由梨亞、由梨亞妾の名を得ていた人物である。

そんなマリミアンが、いくら強く希望しそれを渋々ながらも強引に認めさせたとはいえ、庶民として働いていると知られれば、国内

では貴族全体が呆れられ、軽蔑されかねない。

貴族の中でも、スウェーリ家もこんなものか、零落れた家に成り下がつたものだ、と言われかねない。

国外では、花鳶國<sup>かおうこく</sup>王家は、何故かつての王の妻を（国内外共に、マリミアンが王籍から除籍されていると発表していない為）、離婚もしていないのに庶民と同等に扱うのか、と言われかねない。

つまり、どの面から見ても、何もいいことはないのである。

「ほほう……そこまで貴方が仰るのであれば、そのなのでしょうな」ウォルトはうつすらと笑い、呟くように言った。

「ええ。 そうですとも。 私の異母妹は四人おりますが、マリミアン以外は全て貴族の家に嫁いであります。 そして、いずれも決して御金に困らないだけの身代を持つ家柄です。 マリミアンは現在スウェーリ家におりますが、勿論困ることなどありません。 なので、わざわざこんな僻地にまで赴き、働く意味がありません。 恐らく、他人の空似か……可能性としては低いと思いますが、政財大臣殿の見間違いかと思います」

シャーワインは声に力を込め、確信を持つて言った。

その次の日の夜、シャーワインは眼らずにしきりと寝返りを打つていた。

（あいつめ……あいつめ！ あんな顔をして……よくも抜け抜けと…）

普段はそんな言葉遣いをしないのに、その頭はシャーワインの知り得る最上級の汚い言葉で一杯だった。

そうでもしないと気が休まらないし、それでもまだまだ不充分なくらいだったからだ。

本当は、大声で喚きたい気分だった。

（あいつめ……あいつめ…！）

シャーワインの脳裏に、シユールの顔と、今日の午前中に行つて  
いた演説が蘇つて来た。

(畜生……畜生！ 何で、あいつがあんなことを言つのだ？！ 自  
分が……自分がやつたくせに！…)

今日の午前中、三人は地封貴族に会つた後、公会堂に向かつた。  
そして、そこで一人ずつの演説を行つたのだ。

順番は、シャーワイン、ウォルト、シユールだつた。

自分の演説が終わり、ウォルトの演説も、シャーワインにとつて  
問題なく終わつた。

問題だつたのは、シユールの演説だつた。

シャーワインが絶句した場面が、彼の脳裏に焼き付いていた。

「つまり、昨年ですね。その年、峯慶王が暗殺者の毒に御倒れにな  
られ、先王陛下も行方不明にならせられました。この国にとつて、  
凶事が重なつた悪夢の年と言えましょう。そして、そんな先王陛下  
が御提案なされ、峯慶王が後押しなされた案件が、『地球連邦の宇  
宙連盟への加盟』であつたのです。先王陛下は戦をできるだけ回避  
したいと御考えであらせられたので、今回の結果をもしも御知りにな  
つたとしたら、御悲しみになられるでしょう。ですが、これはそ  
の御一人の願いなのです。それに御協力下されば、きっとまだ御眠  
りにならっている峯慶王も、御喜びになるでしょう。皆様、峯慶王  
が御無事に御目覚めになられるよう、先王陛下が御無事に見付から  
れるよう、御祈り下さい。そして、この度の戦に、どうぞ御協力を、  
御願い致します」

そう、シユールは言つたのだ！

自分が、峯慶に毒を盛る手配を整えたのに！

そして、その当時戦祝大臣だつたノワールと政財大臣だつたフオ  
リュシエアに濡れ衣を被せ、終身刑を負わせたくせに！  
去解鏡の結果を捺じ曲げるという、人として信じがたい悪事をや  
つたくせに！

(よくもそこまで……！ 確かに、私の義弟おとうじと姪の悲願は『地球連

邦の宇宙連盟への加盟』だつた。だが、それを利用し自らの野心を叶えようと/orしている御前に、そんなことを言う資格など、ない！  
だが……私には、そんなことを言う権利さえ、ない……。私がそんなことを言えば、戦祝大臣の地位剥奪、戦祝大臣の地位は私の息子、レイウォン・ミシュー・スウェールに譲ることになる。今でさえも、宗賽大臣とは親子ほどに歳が離れていて逆らうことも難しいといふのに……これが更に離れてしまつたら、逆らうことなど事実上不可能に近い。宗賽大臣ではなくても、あまりにも若過ぎる大臣にすんなりと従う貴族や官吏などいる訳がない。それに……政財大臣殿は、宗賽大臣に、気付いていらつしやらない！）

そう、確かに前戦祝大臣のノワールと前政財大臣のフォリュシェアは、真実を知つたが為に濡れ衣を着せられた。

だが、シャーワインは投獄される前のノワールと少しだけ言葉を交わす時間があつた。

そこで、シャーワインは『去解鏡を見る』と言われた。  
家のどこに去解鏡が隠してあるか、どのような質問をすれば、正しい答えが引き出されるかも言われた。

そして……投獄された次の日の、まだ日も昇つていかない早朝に視ること、そして視終わつたらただちに去解鏡を壊し、処分することも。

シャーワインは、たつた独りでそれを行い、そして涙を流しながら去解鏡を壊した。

（父上と政財大臣殿は、無実だったのだ。だから、あの投獄は、冤罪……！）

だが、シャーワインはそれを公表しなかつた　いいや、公表できなかつた。

真実を明らかにするのは簡単だ。

生放送の記者会見でも聞き、そこで言えばいい。

だが、それを聞いた国民は、宗賽大臣の圧政に苦しむことになる。去解鏡でシャーワインは、その為の根回しまでとつゝの昔に済ん

でいることを、知っていた。

だから、公表できなかつたし、誰にも話すことができなかつた。  
そして、去解鏡を処分していたので、家宅捜索で新たな罪を認め  
るようなことにはならなかつた。

その一方、ウォルトは何も知らない。

本当に、ノワールとフォリュシェアが罪を犯したと、信じ切つ  
いた。

そして、國の為に自分の一切を捧げることによって、父の贖罪を  
しようとしていた。

(本当は……貴方の父は、何も罪を犯していないのにー。)

だから、シャーウィンはそんなウォルトの姿を見る度に、腹立た  
しいような、苛々するような、真実を語りたいような気分に襲われ  
る。

本当は、ノワールもフォリュシェアも、悪くはないのだから。

悪いのは、宗賛大臣、シユールなのだから……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7986x/>

---

時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

2011年11月24日14時51分発行